第三種郵便物認可

女學世界

第一巻第三號

口繪

小松大宮妃殿下
英國新皇后陛下
慈安達克の銅像
雪の松島
蒲田梅園
跡見女學校
大坂高等女學校
才媛の書畫
雛兒




季節向新柄流行品を取揃へ階上階下總體に陳列致有之
候御休息室をも取設け置候間御慰に御子様方御連れ遊
ばされ緩々御遊覧なし下され度奉願上候
地方よりの御注文に對してはくわしき御案内書有之候間御一報次第御送り可申上候
東京日本橋駿河町
大阪高麗橋二丁目
三井呉服店
東京電話本局
特五一一五
一二一七
一八六〇
大阪電話
特四七三
一六五〇

女學世界第參號目次

口繪寫眞（アートペーパと普通石版十二頁）

寫眞石版

盛と消息文……（書四葉）……多田親愛筆 坂正臣筆

梅、椿、水仙、蒲公英……（畫四葉）……野口小蘋筆

論說……一

歐米女子大學の形勢……成瀨仁藏

家庭……九

一家の經濟……塚本はま子

家庭敎育談……平尾光子

哺乳兒の急性胃腸加答兒豫防法……某學校醫

春の庖廚……春江女史

傳記……三四

惹安達克……（下）……中内文學士

王昭君……久保文學士

學術……四八

姙婦の衞生……石原笠軒

日本名蹟雜話……（つゞき）……喜田文學士

空氣の話……（つゞき）……岡田光子

鼠の話……藤堂忠次郞

技藝……七七

割烹科……（つゞき）……高橋章臣

造花科……（つゞき）……伏見藤三郞

裁縫科……（つゞき）……金子錫子

書法の話……坂正臣

書法指南……（つゞき）……野口小蘋

文苑……九九

和歌……（三十六首）……（和歌界諸名家の作）

仝……（二十五首）……（東京女學館生徒歌會）

和文……（三篇）

▲税所敦子刀自の歌文（佐々木信綱）▲旅の命毛（中村秋香）▲鶯（鴨井福子）

講義……一〇九

土佐日記講義……（つゞき）……塩井文學士

百人一首講義……（つゞき）……大町文學士

漢文評釋……（節婦）……久保文學士

小　說……………………………一二一
菜摘川…(上)…………………依田學海
お伽噺……………………………一三〇
獨乙添乳物語…(譯　切)……………なにがし
雜　錄……………………………一三四
漫言……………………………水原未瑳子
英國女皇……………………………石澤文學士
女子校服の改良案……………………弘田醫學博士
結婚雜談……………………………淺田空花
朝鮮婦人……………………………木村睡虎
愛と嫉妬……………………………上村左川
社會と家庭……………………………日東生
社　交……………………………一六六
交際の心得…(つゞき)……………水原翠香
流　行
內裡雛……………………………記者
令孃向春衣裳…(三井好み)
新流行の初衣…(大丸好み)
娯　樂……………………………一六九
雛祭り……………………………木村小舟
餠つり……………………………記者
才媛詞藻……………………………一七一
第二回懸賞文披露
◎和歌(春興、幼稚園)
▲天賞(服部かつみ子、武田こさみ子)▲地賞(淺井雅子、靑木京子)
▲人賞(澤よし子、蘆賀きくの)外に秀逸若干首
◎文章(題隨意)
▲甲賞(平田うの江)▲乙賞(鈴木すゞ子)▲丙賞(山里ゆき子)外に秀逸三篇
◎新體詩(題隨意)
▲甲賞(亞鈴子)▲乙賞(匹婦)▲丙賞(よし子)
館告…(第三回懸賞文募集廣告)……………一九四
學　事……………………………一九五
跡見女學校參觀記……………記者
女子大學校主旨規則……………記者
雜　報……………………………二〇二
▲福澤翁の逝去▲伊藤圭介翁の逝去▲英女皇の御臨終▲和蘭女皇の御婚儀▲女子大學の入學志願者▲女子職業學校の榮譽▲二大學校の設置案▲上野東照宮の獻畫式▲新刊寄書▲次號豫告

石井研堂君編
有名畫伯挿繪

毎月刊行 理科十二ヶ月

本編は新凧船に次ぐものにして其面白きこと又一層なり請ふ愛讀を賜へ

第二月發兌 雪達磨

三月 花の錦
四月 汐干狩
五月 植物園
六月 昆蟲網
七月 游泳臺
八月 富士詣
九月 二百十日
十月 銃獵者
十一月 幻燈會
十二月 歸省錄
一月 新風船 既刊

洋裝菊判 美本

造化の寳庫を開き、天工の妙理を發し、殊に二十世紀の少年少女の理科思想を鼓吹せんが爲めに、眼前の實例を骨子とし、平易の文章と精巧の繪畫とを筋肉とし、右の十二題の中に、其月其月に關する動植物理科等の初歩を記述する者即ちこれなり。實に未曾有の珍書破天荒の新案といふべし。希くは續々購讀を賜へ。

毎月一回發行全部拾二冊完結

定價 一冊金拾錢〇拾二冊金壹圓拾錢〇郵税一冊四錢宛

(甲の一)

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

日用百科全書全部完成廣告

大田豐南君著

（卷頭寫眞銅版八頁挿入）

製本既成

全壹册　洋裝菊判 三百貳拾頁

正價金貳拾錢
郵稅金六錢

諸藝指南

水練馬術 劍術銃術 柔術弓術

第壹編發刊以來江湖諸彥の喝采を博し多きは二十版少なきも再版の榮を得たる日用百科全書は今や本編を以て全部完成して大方諸君の高需に應ぜんとす其あらゆる藝術事項を網羅して齊家の處世の指針たるは世既に定評のあるあり希くは續々御愛購あらんことを

日用百科全書全部總目次

第壹編	和洋禮式	第拾八版
第貳編	茶の湯と生花	第拾五版
第參編	實用料理法	第拾七版
第四編	家政案內	第拾貳版
第五編	琴曲獨稽古	第貳版
第六編	衣服と流行	第貳版
第七編	裁縫と編物	第拾六版
第八編	住居と園藝	第六版
第貳拾六編	致富要訣	第三版
第貳拾七編	畫法自在	第六版
第貳拾八編	工業大意	第貳版
第貳拾九編	農業大意	第壹版
第三拾編	內外遊戲法	第五版
第三拾壹編	商家書簡文	第壹版
第參拾貳編	陸海軍人書翰文	第參版
第三拾三編	農工書翰文	第壹版

（甲の二）

新體詩日記紀行文美文及び短歌

佐々木信綱君編

竹柏園集

第一編
洋裝袖珍紙數五百ページ
正價金卅五錢
郵税六錢

心の強き人弱き人、清き人、さま／＼の人相あつまりて、竹柏會といふ歌文の會は組み立てられぬ。會員の中には、學生あり、博士あり、畫工ありピヤノひく人あり、專ら詩の神に生涯を獻ぐるあり、詩歌には縁遠き職をとれる學士あり、良家の夫人令孃あり、山深き里の僧侶あり、廣き林檎畠の主人あり、山水の景勝をめでゝ旅より旅に暮らせるあり、かつ耕しかつ歌ふ農夫あり、敵に向ひて獅子の如く猛く筆を執りては小羊の如く素直なる水兵あり、かゝる人々相あつまりて、月毎の研究會春毎の大會に相つどひ相語り、若しくは消息の贈答に歌文を研究せること既に數年。いま其會員の短歌新體詩日記紀行文スケッチの類をあつめて毎年二回世に公にせんとす。こゝに明治三十四年一月を期して其第一編を出しぬ。載するところ短歌數百首新體詩美文一百數十篇なり。素より一小冊子に過ぎずと雖も、あるは心なやめる人の友と爲り、あるはさびしき旅窓の好侶伴たるべきか。

東久世伯爵序
高崎男爵序
福羽子爵序
近衛公爵序
東久世伯爵序

小中村博士序文
佐々木信綱君著

◎歌の栞

全壹冊總皮本綴千六百頁
正價壹圓廿錢目方四百匁

福本子爵序文
佐々木信綱君著

◎詠歌自在

全壹冊總クロース金文字
正價金壹圓郵税金拾四錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(甲の四)



小松宮御息所頼子殿下



雪の松島



英國新皇后アレキサンドラ陛下



英國ヨーク公夫人と其侍女

華族女學校學監 帝國婦人協會々長 下田歌子女史著

婦女必携寶鑑

家庭文庫

和裝上製紙數一冊二百五十頁

定價 一冊金三十五錢●三冊前金壹圓●六冊前金壹圓九拾錢●全部十二冊前金三圓六十錢●郵稅一冊金六錢

全部目次

(詳細は總目錄に就て御覧あれ)

☞ 全部十

- 第壹編 ● 十一版 女子書翰文
- 第貳編 ● 四版 女子普通禮式
- 第三編 ● 再版 詠歌の栞
- 第四編 ● 四版 料理手引草
- 第五編 ● 四版 婦女家庭訓
- 第六編 ● 三版 母親の心得
- 第七編 ● 三版 家事要訣
- 第八編 ● 再版 女子手藝要訣

女子書翰文は巻頭先つ我國女子の書翰法を定め雅に失せず俗に流れす弊を改め正を示す○禮式は古今東西の宜を制し○詠歌の栞は作例書式に付き必要なる者を示し○料理は實用を主とし其衛生と經濟に注意し○家庭訓は母たる人の衛生と幼兒の發育方を示し○母の守るべき德義と責務を述べ○要訣は衣服取扱方及室内清潔等を詳述し○手藝は養桑裁縫編物等を示し○文典は煩雜を避け最も女子日常の要に

二冊完成 ☞

第九編 新版 女子普通文典
第拾編 新版 女子作文の栞
第拾壹編 新版 女子遊嬉の栞
第拾貳編 新版 泰西所見 家庭教育

供し○作文の栞は種々の題を採り作文を自在に習得せしめ○遊戯の栞は其體育に智育に益多くして害の少きものを撰び○家庭教育は泰西の風俗を明にして交際上の必要に供す。以上を十二冊とす

方今女學に關するの書其數少なからずと雖も能く新舊の常理を折衷して家庭教育の上に適合するもの甚た些少なるを遺憾とす玆に於て此文庫を出版せり本書は華族女學校學監にして學東西を究め遠く歐米に巡遊して一種超凡の新智識と新卓見とを以て今現に子弟教育の道に従事せらるゝ下田先生の編述に成るものなれば他の空論談の書と異り上下を通して一般社會の家庭上に適用するは勿論なり今や全部十二冊完成を告ぐ如何に在來の家庭書類と其趣を異にせるかを驗せられよ。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(乙の三)

(乙の四)

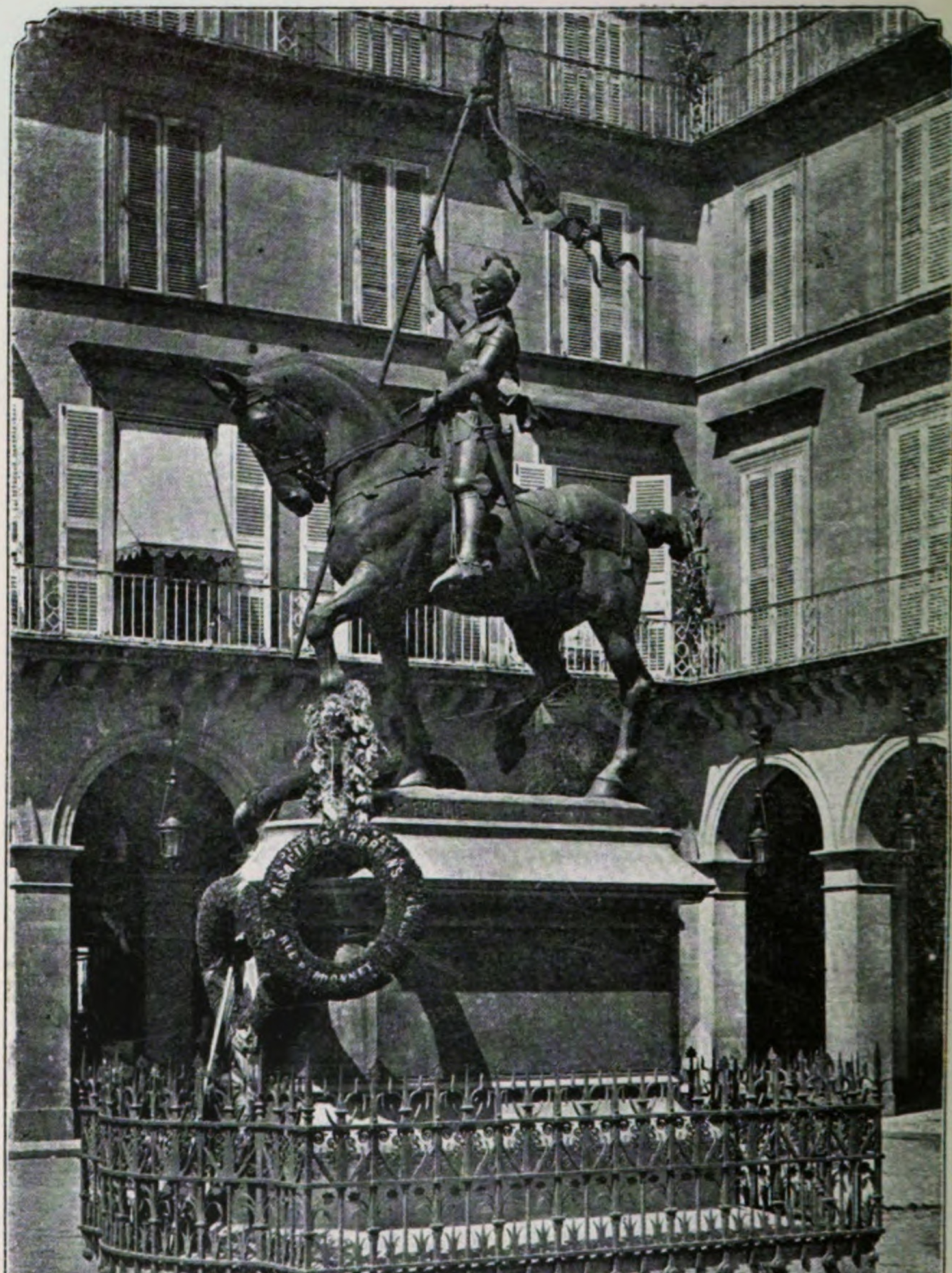
再版出來報告

左記の各書籍は一時品切の爲め高需に背き居候處今回何れも再版出來仕候間續々御購讀被成下度又々品切に相成候ては遺憾に付此段御報申上候

- 五版 書翰文大成 全壹冊金壹圓 目方四百匁
- 四版 倫理學 全壹冊上製五拾錢郵稅拾錢 並製卅五錢郵稅八錢
- 四版 肥料學 全壹冊上製五拾錢郵稅拾錢 並製卅五錢郵稅八錢
- 五版 法律汎論 全壹冊上製五拾錢郵稅拾錢 並製卅五錢郵稅八錢
- 三版 邦語英文典 全壹冊上製五拾錢郵稅拾錢 並製卅五錢郵稅八錢
- 十四版 花紅葉 全壹冊金參拾錢 郵稅六錢
- 十二版 源平盛衰記 全壹冊金六拾錢 郵稅拾六錢
- 七版 櫻井驛 全壹冊金拾五錢 郵稅六錢
- 十六版 裁縫と編物 全壹冊金貳拾錢 郵稅六錢
- 三版 致富要訣 全壹冊金貳拾錢 郵稅六錢
- 十版 西洋料理法 全壹冊金貳拾錢 郵稅六錢
- 六版 住居と園藝 全壹冊金貳拾錢 郵稅六錢

- 六版 記事論說文範 全壹冊金貳拾錢 郵稅六錢
- 十二版 家政案內 全壹冊金貳拾錢 郵稅六錢
- 十一版 實用料理法 全壹冊金貳拾錢 郵稅六錢
- 九版 帝國史畧 全壹冊金壹圓五拾錢 郵稅貳拾錢
- 七版 累卵の東洋 全壹冊金拾八錢 郵稅貳錢
- 五版 三韓征伐 全壹冊金八錢 郵稅四錢
- 十七版 大江山 全壹冊金五錢 郵稅四錢
- 三版 經濟研究法 全壹冊金壹圓 郵稅拾四錢
- 十版 作文資料 全壹冊金拾五錢 郵稅四錢
- 二版 トラスト 全壹冊金參拾錢 郵稅四錢
- 六版 ナショナル第一讀本 並製全壹冊金拾五錢 郵稅四錢
- 三版 陸海軍人書翰文 全壹冊金貳拾錢 郵稅六錢

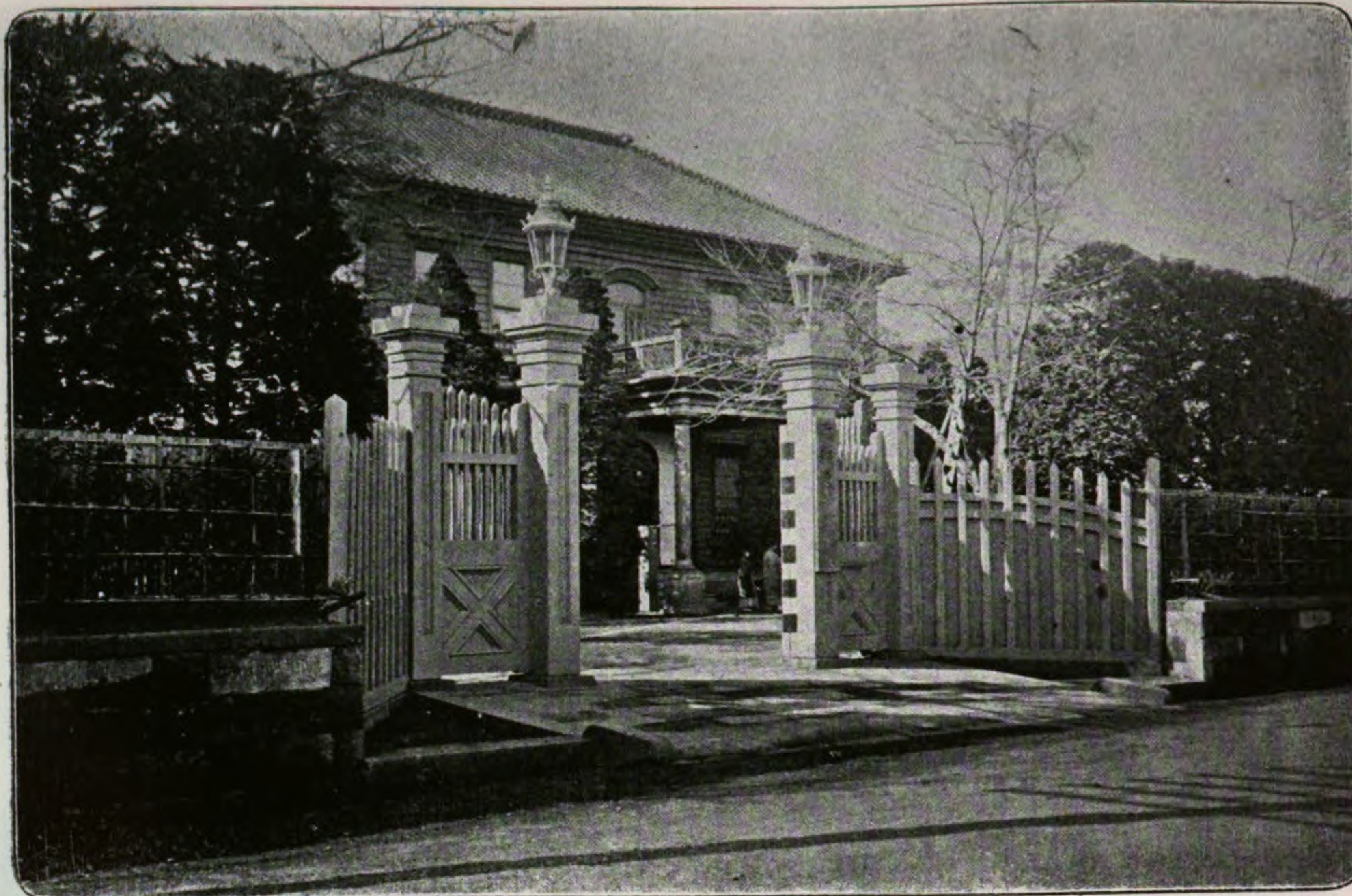
發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館



惹安達克の銅像



蒲田の梅園



跡見女學校

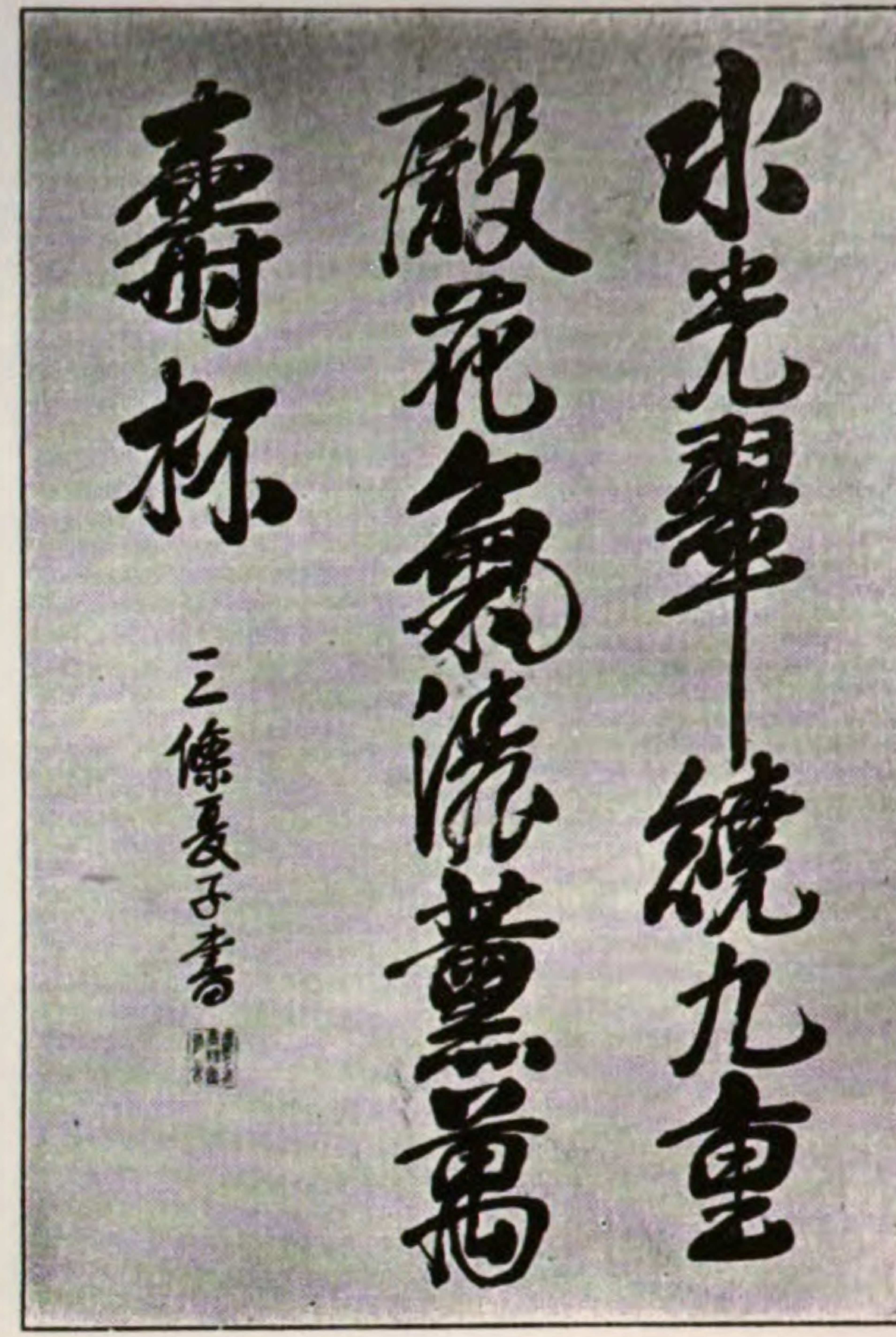


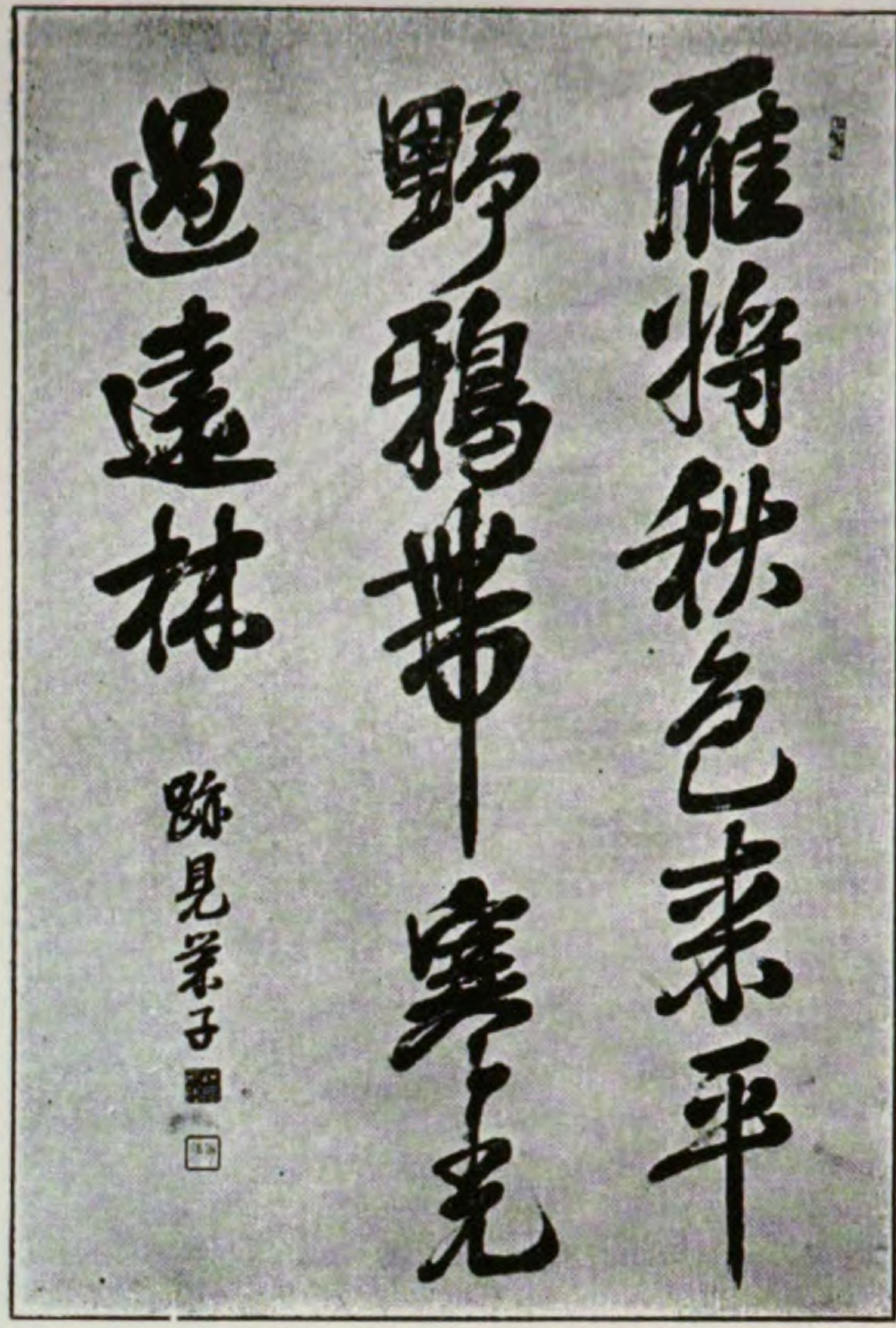
跡見女學校生徒及卒業生

跡見女學校製品其一






水光翠繞九重殿
花氣濃薫萬壽杯
三條夏子書


雁將秋色來平
野鴉帶寒光
過遠林
跡見榮子



大阪市高等女學校本科卒業生



雛見

東洋戰爭實記

《第十九編第二十編》

博文館編輯局編纂

北清戰史

上編……一月中出版
下編……二月中出版

◎寫眞銅版口繪十六頁海陸將校及地圖挿入

全二冊洋裝紙數 一冊三百五十頁餘
正價一冊金三十錢
郵税一冊二錢

東亞の一角に起りて忽ち全世界を震動したる北清の戰亂も十九世紀の終末と共に一段を告げんとす、而して其戰亂や、世界最多の人口を有する清國が東西八大强國を敵として戰へるもの、太沽の砲臺攻擊より天津停車塲の激戰、天津城の攻擊、偖は北倉楊村の戰鬪に續いて、終に北京總攻擊の激戰となり、光緒帝の西安蒙塵に至るまで近世稀有の大戰を演じ、其間北京籠城の大苦戰シーモア救援隊の大困難、或は滿洲に於ける露軍の蹂躪、保安府山海關に於ける連合軍の占領等に加ふるに、文明各國軍隊が行へる總ての虐殺姦淫掠奪等の暴行は、日本軍隊の勇武節制仁愛等の名聲と相俟て、疑もなく帝國を世界の第一等國と爲せり、此等戰爭の顚末は東洋戰爭實記に於て略ぼ之を敍述せしも、事實は得るに隨ふて排列し、前後錯綜通覽に便ならず、故に今特に其發端より最後の外交談判始末まで、前後一貫詳細編述し、以て北清戰史と爲し、東洋戰爭實記第十九編及二十編と爲さんと欲す故に此兩編は發行規定を變更し、毎號口繪寫眞及紙數とも平時の三冊分を一冊と爲し、一、二兩月各一冊づゝ發行し、殊に口繪寫眞は最も材料を精選し本文と相俟て坐ながら戰地に臨むの感あらしめんと欲す、從來戰爭實記の愛讀者諸君は勿論、苟くも北清戰亂の始末を知らんと欲する諸君は必ず各一本を購讀せられんことを請ふ

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

(丙の一)

每月曜日發行
四六判四倍大

太平洋

每月一回色刷特別口繪を添ふべし

口繪寫眞銅版風景風俗每號（一頁）挿入

太平洋の大改良（博文館發行）

是れ昨年一月一日を以て、其第一號を發刊したる本邦唯一の週刊新聞なり、其論旨の眞摯精透、無偏無黨なる、其記事の精確明暢にして、一週間細大の時事を、能く秩序的統計的に記述して、首尾本末の一目瞭然たるより、意外の好評を博して、日刊諸新聞紙を讀む者も讀まざる者も、共に一部を購讀せざる能はざるの要紙となれり。歐米各國には由來週刊の新聞雜誌盛に行はれ互に美を競ひ豐を爭ひて、巨萬の部數を發刊し、一は以て娛樂に供し一は以て一週内の事蹟を系統的に明知せしむ。本邦未だ他に此種の物あるを見ず、蓋一缺點なり。仍て一層江湖の厚意に酬はんが爲に、既に今春の初刊よりして、一大改良を加へ、大に字數を增加して、每號四六判四倍大の廿四ページとなし、紙質は**寫眞銅版**を挿入し、以て時事人物、一切最精良の舶來品を選びて、幾多の近の出來事を、精緻なる寫眞と許多の繪畫とによりて瞭知せしむ。時世の進步に從ひ、事端の繁多なるより、人々皆時事を耳にする每に併て直ちに其狀態人物を目睹せんと欲するは常狀なり。本館茲に見るあり、斷然此擧に出づ。乃ち如何に僻遠遐陬の地に在る人と雖も、事ある每に、總ての境を踐み、總ての人に接するの感あるべく、是れ我邦新聞ありて以來、未だ曾て有らざる所、其如何の精彩を放つべきかは、今茲に喋々するを要せず。其他紙面の增加に伴ふて、各欄を擴張し並に新設すべく、其概要左の如し。

各欄要目

時論	講談落語	
週報	文苑	
小說	雜錄	

太平洋定價

前金 一冊		金六錢
三ヶ月分	十三冊	金七十五錢
半ヶ年分	二十六冊	金壹圓四拾錢
一ヶ年分	五十二冊	金貳圓七拾錢
郵稅壹冊		金壹錢

●見本應需

見本を望まるゝ方は郵券四錢送付あらば送呈す見本は號數の指定に應じ難きも可成近刊の者を發送すべし

（丙の二）

新刊豫告

饗庭篁村君著（三月上旬發行）

旅硯

洋裝全壹冊◎正價郵税未定

本書目次

月ヶ瀬紀行　二日の旅　さきがけ
水戸の觀梅　おきつ藻　はこね草
布施詣　荒川堤の櫻　雨夜の月
新西遊記　紅葉狩

發兌元　東京　博文館

竹柏會は、我國風なる短歌、及新體詩美文等を研究せんとて、佐々木信綱氏主任となり、東久世伯萬里小路伯等幹事となりて、起せる會なり。竹柏會は、あまねく會員を募集し、歌文の添削質疑に應し、又歌會を催ほし會誌を頒つ、入會を希望せらるゝ諸氏は、郵券二錢を投ぜられよ。速に規則書を呈送すべくなむ。

東京神田小川町一番地　竹柏會

舊正御祝儀として

粹珍圖書大安賣

- ●日本婚禮式大全　減價金五十錢
- ●男女生殖器新論　減價金六十錢
- ●男女情交 新選枕草紙　減價金卅六錢
- ●造化秘事 男女交合論　減價金二十錢
- ●男女交合 懷妊新論　減價金二十錢
- ●快樂秘密 女殺し　減價金十六錢
- ●男女交合 快樂秘密論　減價金二十錢
- ●花の栞り 八々必勝法　減價金廿六錢
- ●艶文自在 [illegible]　減價金廿六錢
- ●艶雲嬌雨 閨房餘戲　減價金十六錢
- ●男女交合 無上之快樂　減價金十六錢
- ●女に惚らるゝ法　減價金廿六錢

舊正御祝儀として郵税無料其上五十錢以上一割引一圓以上一割半引二圓以上二割引とす郵券代用は一割增

●發賣元　大坂松屋町鈴屋町北入　粹友社書店

（丙の三）

中學世界定期增刊
第四卷第參號

英才詞苑春の卷廣告

(二月十五日發行)

新年初刊を以て天下に募集したる懸賞當選文の披露として、中學世界本年第一季增刊『英才詞苑春の卷』は出でたり、應募の投稿は無慮數千通に及び、今回は本誌記者の外 大町桂月 江見水蔭 中内蝶二 岸上質軒氏等選評の勞を執られたり、新春の青年文壇に旗幟を翻すは果して誰なりしぞ、受賞者は全篇を通じて五十名に近く、其他秀逸のもの數百篇を取れり、種目は小說、論文、叙事文、抒情文、英文、書簡文、新體詩、漢詩、和歌、俳句にして、暢達の文、卓拔の想知名家を凌駕せんとす、而して本號は又右の懸賞披露の外に更に紙上に光彩を添へんが爲めに左の大附錄を添ふ、

山中鹿之助

文學士 大町桂月

是大町桂月氏が、去る頃出雲國簸川中學に教鞭を執りし際、遍く彼地の山川を跋涉して尼子氏の遺趾を弔ひ、其臣山中鹿之助が偉業を追懷し、大に渠が眞面目を描破せるものにして、篇を分つこと三、全篇通じて十數章となし紙數殆んど百頁、尼子の興廢より、其の鹿之助一代の偉業との關係を、氏が獨得の警拔なる筆に詳叙し論評せるものにして、鑑識超凡、英雄の面目紙上に躍如たり、

發兌元 東京本町 博文館

(四の四)



野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆

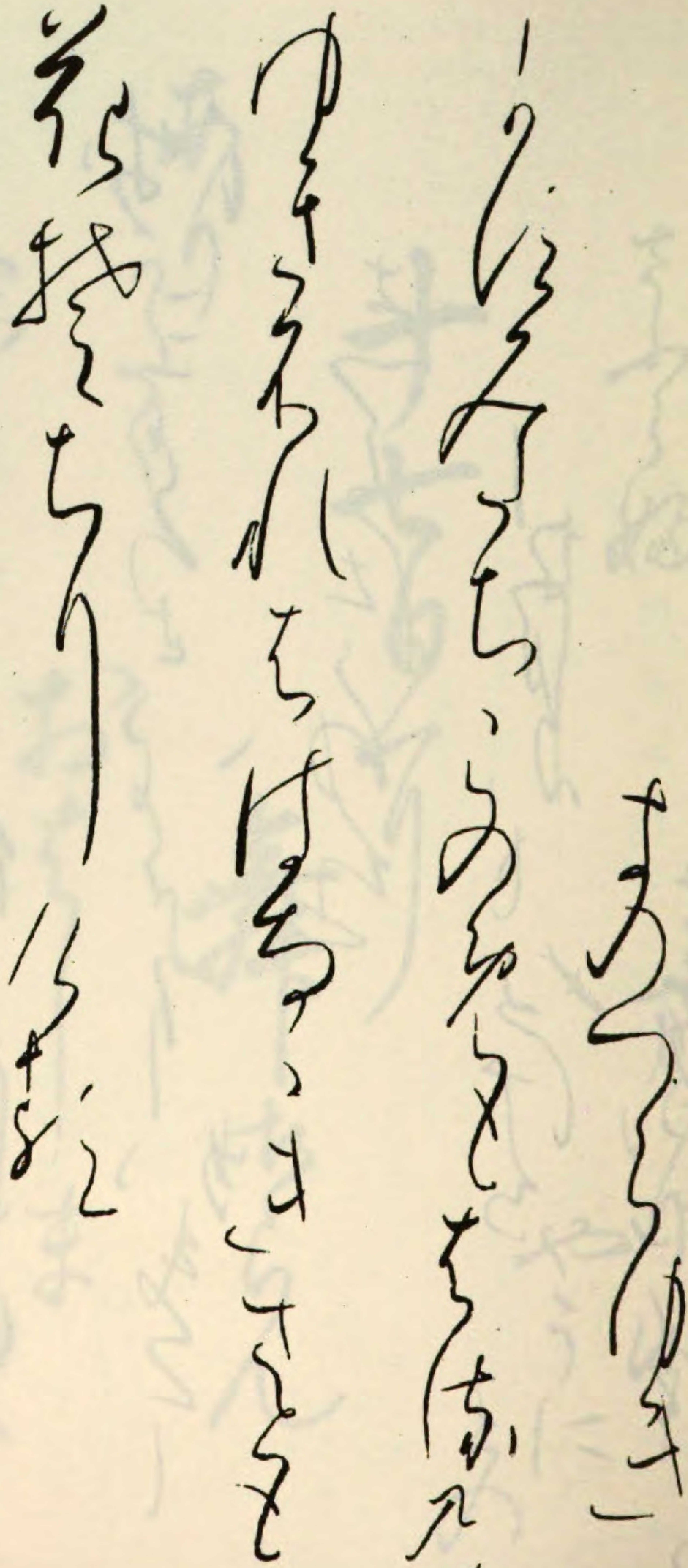




野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆





多田親愛先生筆

僧正遍昭

あさみとりいとよりかけてし
らつゆをたまにも
ぬける
春のやなきか

坂正臣先生筆

天氣さふかぬよし

一月りはやうによめ

十七日より舞はらん

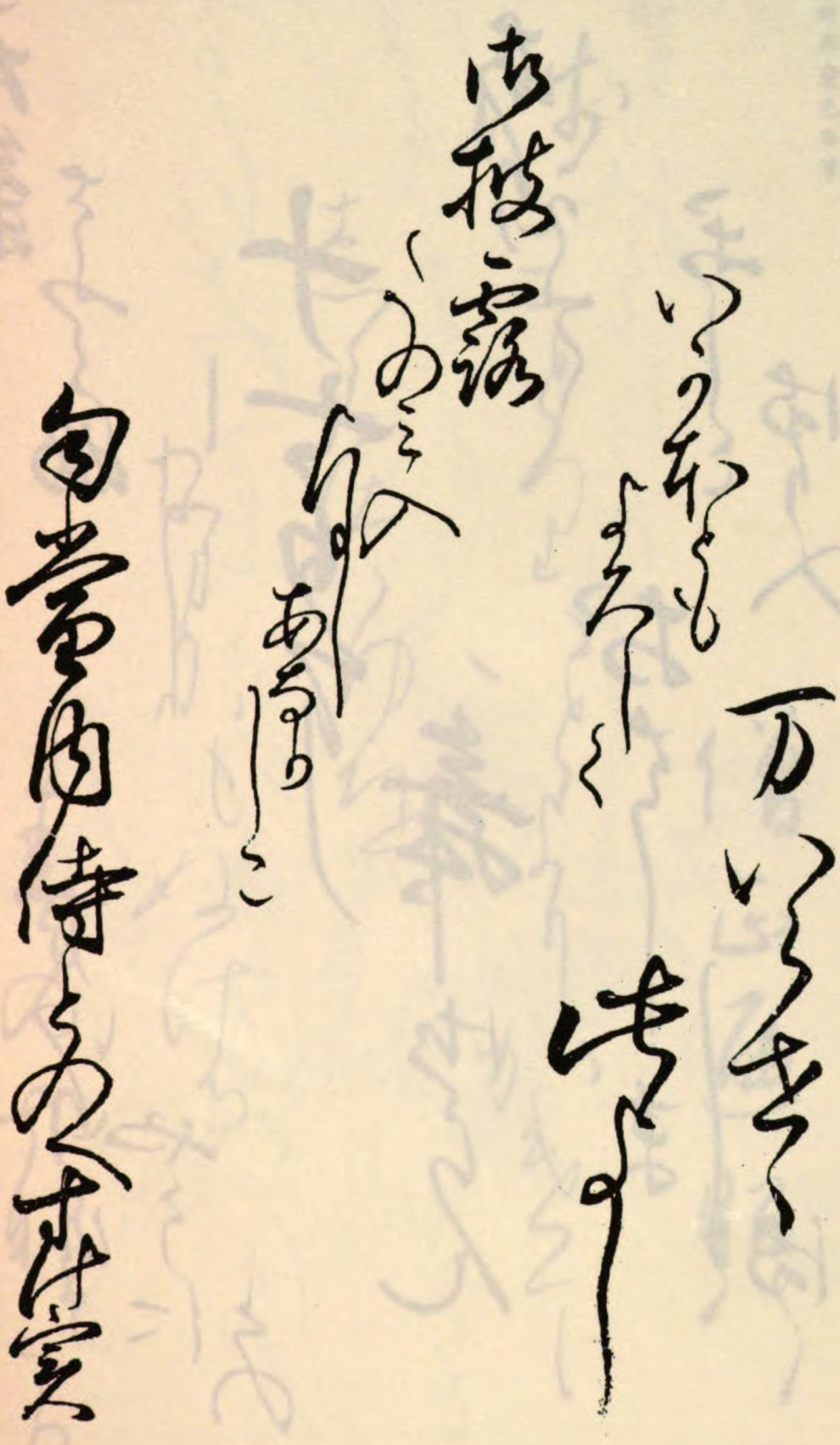
ありうく

おもしまし

ありしこ

侍り人

侍く



右臨九條關白輔實公朿



第七卷第三號　三月五日發行

口繪

○皇太子殿下○英國先女皇ウイクトリア陛下英國新帝エドワード七世陛下英國皇太子ヨーク公陛下(以上アートペーパー)○佛國畫家ミユニエ筆數詢○香港市街の風景○目黒の雪景○親不知の奇勝○海軍少佐一條公爵○陸軍少佐鷹司公爵○寺崎廣業富岡永洗兩氏筆美人○天の橋立の全景○故理學博士伊藤圭介翁○獨逸文界の二明星○蓬萊山農物○故川上子爵と其邸宅○橋本雅邦翁○川越衛家衛員○故福澤諭吉翁○獨逸伯林ウイクトリア公園外の瀑布○芝罘港

憲政の一大危機
支那保全と滿洲處分……肥塚龍
ローマ字變革論……理學士神保小虎
萬國議會……大學教授松波仁一郎
帝國主義と社會政策……法學士桑田熊三
廿世紀に於いて日本國民の爲すべき事業……加藤政之助
貴族院内の人物……人物月旦
法律時評……數項
經濟時評……數項
宗教時評……文學士龍山學人
教育時評……文學士大町桂月
海賊村……怒濤庵主人
丸の内……内田不知庵
富籤……遲塚麗水
梅花雜集……服部撫風
女波男波……文學士中内蝶二
清朝興衰の關鍵……内藤湖南

菅公の左遷に就て……文學士本多辰次郎
熊本籠城……陸軍少將別役成義君談
鎮西遊記……文學士久保天隨
芝罘港……坪谷水哉
續將棋雜話……幸田露伴
文字談……藤澤南岳
秋のかたみの一草……中村秋香
噴水と美術的製作……吉岡芳陵
家庭と肺病……石原笠軒
商業世界……祖山鍾三
工業世界……工學士金子篤壽
農業世界……農學士上野英三郎
科學世界……理學士市村塘
○社會事情○海外事情○輿論一斑○海内事情○海内彙報あり

定價（一册金三拾錢○半ヶ年分(增刊共八册)金二圓二拾錢○一ヶ年分(增刊共十六册)金四圓二拾錢○郵稅一册三錢

(丁の二)

大日本女學會機關雜誌

をんな

月刊 第壹號（再版出來せり）

定價金十五錢

全國無遞送料

論說 ●梨本宮妃殿下の御肖像●近衛公爵令夫人染筆（新選女百人一首歌かるた）●結婚の方法につきて鳩山春子●外國人の腦裏に映ずる日本婦人安井哲子●勤儉貯蓄論博士天野爲之●女子敎育一般三輪田眞佐子●漢書解題丸井圭次郎●美術一般紀淑雄●本邦女子服裝の沿革下田歌子●公德の養成博士穗積陳重●女子の務佐方鎭子 **學藝** ●理科學大意島村瀧太郎●科問答朝夷六郎●源語研究法梅澤和軒●作文批評今泉定介●作歌批評大口鯛二 **修身** **齊家** ●看病後閑菊野子●製烹石井泰次郎●泰西禮法津田梅子 **世務** ●經濟談伊藤秋南●法律談岡戶論介 **詞藻** ●福さがし湖山人●歌御會始御前披講の歌●同十二段下及十六女官詠進歌●會員詞藻 **雜錄** 床の間飾心得伯爵松浦詮●通俗地理談喜田貞吉 **時事** **譚草** 丑太郎の德稚松生●二十世紀の列國大勢 **彙報** ●內外重要事項數十件（二號以下每月二十五日發行）

發行所 東京市麹町區土手三番町廿八 **大日本女學會**

大賣捌所 東京市神田表神保町三 **東京堂**

女醫學生募集

女子醫學研究ノ不便弊害ヲ救ハンガ爲メニ本校ヲ創立シ昨年十二月ヨリ授業ヲ開始セリ志望ノ姉妹ハ此際入學スルヲ便宜トス●規則ハ郵券參錢

東京麹町區飯田町四丁目九番地 **東京女醫學校**

速記法 自宅獨習生 募集

二ヶ月卒業 月謝三十錢

○規則入用者は郵券二錢を投ずべし

東京市下谷區徒町三丁目九拾五番地 **速記學專修所**

見よ見よ 廣告の廣告 讀め讀め

新聞紙に廣告するは僅かに一新聞一部の人の注意を惹くに過ぎず、本館發行の六大雜誌は總て內外を通して、數十萬の讀者を有せり、故に之に廣告する時は **數十萬の眼** に觸れ且つ永く保存せらるゝにより其 **效驗の偉大** なることは日々新聞紙に廣告するに勝ること遠し六雜誌の **廣告料** は其効力に比し尤も廉價なれば陸續御掲載あらんことを希望候

東京本町三丁目 電話本局三〇三 **博文館廣告部**

本會は講義錄を毎月二回づゝ頒布し中學の全學科目を懇切速成に通信教授す◎講義は簡明平易何人も解し得

大日本普通學講習會

會長 從二位 子爵 交野時萬

講習會員募集

▶學科 修身講話。倫理。日本歷史。地理學。國語。漢文。作文。算術。代數學。幾何學。三角法。物理學。化學。博物學。生理衞生學。英語。文學史。法學一班。通俗經濟學。習字學

▶講師 法學士。石川岩吉。林茂琪。須藤一郎。文學士。西村豊。大原吉田理學士。高橋龍雄。永井德學士。丸山正彦。小松定市。三木五百枝。宮本理學士。眞崎文學士。鳥山健。谷口豊九郎

▶要領 講習期は十五ヶ月にて卒業し證書を授く。質問に應答す。講習錄一冊百三十頁以上。入會金廿錢。會費一ヶ月三十五錢。全期分四圓七十錢。目下入會の便也。

▶詳細の規則は郵券貳錢を送れ

▶東京市神田區仲猿樂町九番地 大日本普通學講習會

(すゐ三)

女學世界

明治三十四年三月五日發行

第壹卷 第參號

紀元二千五百六十一年 西暦一千九百一年（辛丑）

論說

歐米女子大學の形勢

女子大學創立者 成瀨仁藏

左の一篇は將に開校せられんとする女子大學創立者として教育社界に名聲嘖々たる成瀨仁藏氏か特に本誌の爲めに語りしものを記者の筆記せるものなり

蓋世の文豪ユーゴー颺言して曰く、十九世紀は女子の世紀なりと、寔に前世紀に於て女子教育は非常の速力を以て非常に發達せり、其發達せる事實は一面に於ては教育か高尚になりしとにして他の一面に於ては普及せるとなり、斯の結果はやがて社會に發露して今日は女子教育

が非常に文明の要素を爲すに至りぬ、依て今日文化發達の淵源は敎育にあり、其敎育の淵源は女子敎育にあり、故に社會文化の進運を謀らんと欲せば先づ女子敎育を發達完美せしめざるべからずと云ふに至れり、而して女子敎育の程度を計ると云へるとは其女子の高等敎育を見て定むることゝなれり。

今日各國の高等敎育を論ずるものは、其國內に女子大學は幾多ありや、女子の爲めに高等敎育の門戶を開きしや、將た亦た女子の敎育は男子と同等とすべきやに着眼論及し是等を以て看過すべからざる重要問題と爲せり、今日の女子敎育の大勢を觀察するには、先づ各國の女子大學の形勢は如何なりしや而して其結果如何を考究するは太だ大切なるとなり今ま女子の高等敎育を類別すれば

第一、男子の大學を女子の爲に其門戶を開放せしもの

第二、男女共有の大學を設立せるもの

第三、男女の大學に附屬せる女子大學

第四、純粹の女子大學

第一に屬するものは素と男子の大學なりしを女子の爲めに門戶を開放せるものにして、瑞典、

丁抹、芬蘭、阿蘭陀、白耳義、那威、西班牙、葡萄牙、瑞西、伊太利、露西亞、獨逸、佛蘭西、亞米利加は即ち是なり。獨逸は女子の高等教育に於ては素と保守主義なりしも、女子に大學教育を要するの氣運進み大勢迫るを見て一昨年始めて伯林大學を開放せしに忽ち三百人の入學者を得たり。佛蘭西は千八百六十八年に女子の爲に大學醫學部を開放せるに、當時未だ一般に女子大學の氣運盛んならざりしを以て入學者僅に三人なりしも千八百九十五年に至りては九十五人を得たり、佛蘭西は今日にては十五ヶ所に四分科乃ち文、理、法、醫の各大學ありて皆な共に女子の入學を許せり、以上は乃ち第一に屬するものなり、第二に屬するものは米國に於て頗る隆盛にして全洲に二百幾十あり就中有名なるものはカナダ大學、クインス大學、ダルハウス大學、ツリニチー大學、セントヒルダス大學、マッギル大學なり、其第三の男子の大學に附屬せるものにはコーネル大學、コロンビヤ大學、ハーバート大學あり、此種に屬するものは英國に多く見る所なり、第四の純粹大學も米國に於ては昨年に至りて大に增加せり、其著名なるものを擧ぐれば乃ちバザー、スミス、ウエスレー、ブリンマーの諸大學なり。

英國のガルトン大學は其創始に方りては僅に五人の生徒を見、米國のスミス大學は今より二十五年前に設立せしものなるか當時生徒僅に十四人なりき、斯の如く其創始に方りて生徒の

少數なりしは孰れも皆な當時の輿論が反對せしを以てなり、而れども亦た何れも皆な昨年に至りて急に盛大と爲れり、現今英國の如きは女子大學の生徒二千七百〇一人にして米國は五萬に垂んとせる勢ひなり、要するに昨年は最も女子高等教育の盛況を呈せし年なりき、本年は二十世紀の最初なるかユーゴーの謂へるが如く十九世紀は女子の世紀なりとせば、二十世紀は女子教育の著しく發達する世紀なりと予は信ずるなり。

今日世界教育の大勢を觀察すれば女子教育の程度は益々高尙となれり、是れ果して社會の爲に憂ふべきとなるか、將た祝すべきとなるかは隨分或部分にての問題となり居るとなるが、この問題を消滅せしむるには女子大學か如何なる結果を社會に與ふるかを調査すれば足れり

今より二十五年前頃に方りては世界各國ともに女子教育に就ては大に疑惑を有せしなり、殊に大學教育は社會の爲に決して祝すべきものにあらず其弊害の必らず百出すべしと杞憂せる學者あり、其要點は

第一、女德を汚損すること

第二、女子の身體を衰弱せしむること

にして此女子の身體を衰弱せしむる結果は延て其子孫を衰弱せしめ更に國民を衰弱せしむ

るに至るとせり、予は曾て英國の古書林にて種々の書籍を購ひしに、中に女子教育に就て奇怪なることを云へるあり、即ち女子に高等教育を與ふるは女子をして神に對して罪人と成らしむるものなりとあり、又た米國ボストンのクラーク氏の著書には女子に高等教育を授くるは是れ女子をして身體の健康を害せしむるものなりとて種々の統計と證據とを例擧して殷んに女子の高等教育を非難せり、當時は未だ文化發達せず從つて女子の高等教育を要せざりしを以て斯かる非難も生ぜしものにしてスミス抔の起りし時も囂々として反對の聲强かりしなり、而れども今日の如く幾萬の卒業生を出すに至り而して此の卒業生は如何なる人に嫁し如何なる家庭を作り如何に子女を教育し將た社會に如何なる影響を與へしかを見るに及びて今日は非難するもの殆ど跡を絶つに至りぬ、斯く非難の跡を絶つに至りし所以は世上の杞憂せるが如く高等教育を受けしものは男子らしく爲るかと云ふに決して然らずして太だ女子らしくなり吾人の所謂女徳が甚だ發達せるにあり、論者或は米國の風俗を見て非難するものあるも這は其觀察の唯だ一部の弊害のみに及べるが爲めなり、彼國にありても高等教育を受けざるものは擧動粗暴にして萬事に對して善良なる判斷を缺げり、之れに反して高等教育を受けしものは修身齊家に於て幸福なるを見るのみならず其一般社會に對しても頗る善良な

る行爲を見るなり、是れ獨り予の觀察のみにあらずミチガン大學總理アンゼン氏は千八百八十四年に揚言して云く『女子の高等教育に就ては之れに反對せし人の豫期せし弊害は一も生せざりき』と、コーネル大學のモーゼス、タイラー氏云く『予の觀察より判定すれば男女をして同一に學ばしむるは大に學校の品位を高め嚴肅、優美にして浮躁、粗暴を醫するの益あり、而して女子は通常同級生中に於て優等の地位を占め其健康も男子に勝れり』と、昨年我國に漫遊せるスタンホード大學のジョルダン氏云く『今日米國に於ける女子大學の形勢は其主義平穩にして鞏固なる女性を作るにあり、理想の女學生は健全なる身體と明透なる頭腦とを供へて能く世間の實務に堪へ信仰の念強く愛國心深く同胞に對して仁愛の性に滿つる婦人とならしむるに在り、左れば斯の如き大學教育を終りし婦人は其母に優りて能く時間の利用を解し能く女性の任務をも知り而して其力に於ては如何なる女性の任務にも堪へざるの憂ひなし、其智に於ても又能く幾多の人物、行爲の價値を判するに足るものなり』と、予も體育に就ては歐米に於て實際に觀察せるに、大學に於ける女子は此に入らざるものに比して一層强健なるを親しく見たり、又た大學生徒か結婚後に於て如何なる健康なりしや、其生みし子は如何なりしやを調査せし學者も少からざりしか其結果は皆な教育なきものより健康なりき、如何にして此健

康を得しやと云ふに體育を盛んにせしを以てなり即ち體育に伴ふ智育を進めしを以て斯く好結果を示せしなり女子大學は其創始に於て非常の反對ありしにも關らず昨年に至りて一般に好况を呈し反對論者の杞憂せし弊害は一も見ざるに至れり予は歐米に於て慥められたる經驗に鑒みて女子に高等教育を授くる結果は國民の健康を進め國民の德育を進めしことを斷言するは決して過言にあらずと信ず。

其他高等教育の進歩せし結果として國家に及ぼせし利益は實に莫大なるものあり即ち一般に教育思想の普及せしこと是なり米國の如きは家庭の不和若くは一身上の境遇より獨身となれる婦人の多くは皆な小學教師として子女薰陶の任に當り居れり然るに我國に在りては斯かる境遇にあるものは稍もすれば身を花街狹斜に投じて賤陋恥づべきことを爲し居れるを見るは社會の爲め其人の爲めに悲むべきことならずや予は深く信ず歐米各國に於て今日の如く教育事業を熾んならしめたる原因は女子教育の力に賴りしものにして女子教育を熾んにせる結果は國家の文明を進め國家の元氣を振興せしことを而して更に女子教育に由りて社會に慈善事業は勃興せり乃ち孤育院の如き盲啞院の如き白痴院の如き將た宗教傳播の如き若くは家庭の文學などよりして一般社會を教育して國家社會に湧起する弊害を芟除せしこと頗る

大なるものあるは殆ど枚擧するに遑あらざるなり。

予は終りに臨みて更に一言せんとす、世上若し女子に授くるに高等教育を以てするを不可と爲すあらば更に其人に反問して謂はん國民中に高等教育に其品性を涵養せられたるもの多くあるを喜ぶや否やと、女子を單に柔軟性として觀察し唯だ家庭に於て男子の内助たるに過ぎざるものとせば即ち止む、苟も一個の國民として解せば乃ち如何、國民中に意氣精神ともに高潔にして修養深きもの多きは國家の上より達觀して喜ぶべき現象ならずや、國家は教育高き人の手に抱き上げられたる國民の益々多からんことを希望するは恐くは何人も首肯する所ならん乎。



家庭



一家の經濟

塚本はま子

家庭の整理をなすに、最とも大切なる事は、家事經濟に關することなり。もし一家の經濟成りたゝざる時は、親子夫婦兄弟のあひだに不和を生じやすく、又家族の衛生を守り、兒女の教育を施すことも、相當の家格を保ち、おのおのが體面を汚さぬほどの交際もなし難きに至るべし。さればまことに、古人が衣食足りて後禮節を知るといひしも理りある詞にて、經濟豊ならざれば、たとへ心には思ひながらも、朋友知己はいふまでもなく、親戚緣者への義理をも缺き、禮儀をも失ふこと珍しからず。遂には國家に對する義務も滞りがちとなり、社會公共の事業をさへに、打ちすつるに至るべし。これらは尙ほ赦すべきふしなきにしもあらねど、果ては公金費消、收賄などいへる、聞くも忌まはしき名さへ名譽ある紳士の負ふに至ることあるは、まことに苦々しくも、歎かはしき次第にて、公德の頽廢がこゝに至らしめしものとはいへ、また一家經濟のゆたかならざるによれる罪とおもはざるべからず。さればかく赦しがたき罪すら、一家の經濟が成りたゝずして犯すものなりとせば、家事整理の任にあたる主婦は、よく朝夕經濟の點に心をつけ、家長を助けてかゝる不都合の生ぜざるやう、注意すべきなり。

一家經濟の要旨は、勤勉にしてよく生産の増加を計り、節儉にして奢侈をいましめ、浪費を禁ずるにあり。もとより一家の生計を立つるには、入るを量りて出づるを制するにあるべきなれども、若し家族増加その他の原因によりて、その收入だけにては、生活上必要なる經費すら、支辨するに足らざれば、務めて生産の増加を計り、收入の額を増して、生活上必要なる衣食はもとより、その他の費用をも取り賄ひ得るやう、工夫すべ

きなり。若し強ひて支出を收入より少なからしめんがため、生計の度を下げ、健康を保つべき費用すら、減らすに至らば、一時生計は成りたち、經濟上其處置を得たらんが如く見ゆれども、爲に家族の健康を害ひて、生產を增すべき力をも削ぎ、醫藥の費用などをも要し、一家の經濟としては、差引き大なる損ならん。ことに一國は一家の集まれるものなれば、一家の人々健康ならんには、一國の人民も健康にして、その元氣も盛なるべく、これに反して一家の健康をそこなはゞ、一國民の元氣は衰へ、體力も亦十分ならざるに至るべし。ことに文明肉食の民とともに、勝を世界の競爭場裏にあらそはんとする、わが國人に在りては、富の貴きはいふまでもなけれども、そが基なる國民の體力、元氣はひとしほ大切なれば、一家に於てもたゞ收入の高を數へ、その內にて支拂ひ得べきたけの支出を辨ずるに止まらで、進みて生產を殖し生活上必要なる經費は十分に支出し、猶その幾分を餘して貯蓄し、不時の災害、あるひは疾病等のために、備へんこと必要ならん。

わが國民の如きは、もとより長く鎖國の氣樂なる境界に生活したりし上、數百年來、封建の制度行はれ、四民の上位に置かれし武士の如きは、祖先の勳功に由りて世襲の俸祿をそが君侯より受け、子孫は敢て生活のために奔走するの必要なく、ひたすら武藝を磨き、武士道を立て、事あらん時君侯の馬前に、花々しく討死するの覺悟を專一としたりしかば、一家經濟の如何の如きは、捨てゝ顧みざるもの多く、たゞ顧みられざりしのみならで、こをもて潔ぎ限りと自もし、人も思ひたりしかば、何さま上の好める道、下これにならはざるはなしといふ諺の如く、農業工藝に從事する輩にても、少しく氣慨ありといはるゝ者は、みなこの武士魂のみ慕ひたるが多かりしときく。さればかく生計の爲に心配する必要もなく、經濟のために意をそゝぐを名譽とせざりし、ながき習慣は、假令現今の狀勢よりは、その考の誤なりしを知るといへども、腦裏に染みし昔咄は、明治の敎育も取り去ること難きにや、一般にわが國人は、經濟の思想幼稚にして貯蓄の念少く、所謂宵越しの錢はもた

ぬといへる、江戸ッ子氣性を尊むの傾あるが如く、目前の急を救ひ、急場の難義を助くるが如き義俠の美談には富めりといへど、大金を投じて永遠なる公共の利益を計れるが如きは、比較的少しといふにあらずや。目前の義俠もとより悦ぶべくたふとむべしといへども、かくてのみは、一家の經濟を立て、一國の經濟を維持せんこと覺束なき心地せらる。さればまづ主婦は一家の經濟に於て、必要にして少しも削減すまじき經費と、節約し得る經費とを區別し、これが豫算をたて、月々もしくは年々、幾分なりとも貯蓄をなし得るやう試み、生産增殖を務めて。その足らざるを補ひ、貯蓄せる金額は、その道々の人々によりて運轉せられ、或は國家的事業の資本ともなり、民間必要なる生業の基ともなるべし。今次に一家經濟に就きて、必要なる心得を述べん。

◎經費の豫算　主婦は次の順序によりて經費の豫算を立つべし。

（イ）生存費、衞生費　何れも家族の健康を保つべき、必要なる費目にして、この内には賄費、衣服費、家屋購入費、又は家賃地代、修繕費及び衞生に關する醫療其の他の費用、及び生活上必要なる雜費、雜品費の類を含む。

（ロ）義務費　諸税金その他協議費、公衆衞生等に關する費用を主なるものとし、若し負債ある者ならば、其償却費も亦このうちに入るべし。

（ハ）研究費　或は營業資本　學者は勿論、其他の職業を執る者にても、おのが職業を爲す爲に、多少の費用を要せざるはなし、これ等は何れも必要にして進歩の階梯ともいふべきものなれば、必ず支出すべきものなり。營業の資本も又、商工其の他職業によりては、必要にして如何に商略に富み、工藝に堪能なりとも、資本少なき時は十分に手廣くし、生産の增加を計り難きものなれば、資本の十分なるべきやう、常に心がくべきなり。

（ニ）子女弟妹等の教育費　教育すべき子女あり、弟妹などある者は、義務としても決して、其の教育を廢すべからず。さればその爲に要する費用は、生計

の度に於て許すかぎりは支出すべきものとす。
この四箇條の費目は、人として世に存在する以上は、必ずしも負擔すべきものなれば、奢侈濫費に流れざる限りは、少しも削減すべきにあらず。されども人は、これのみにては滿足すべきものならねば、もしこれ等の費用にして、義務を缺かざるまでに辨じ得られなば、次の如き費目を加へ、不時の用にも備へ、又一家の平和と快樂とをも併せたもつべし。
（ホ）貯蓄、保險費　金錢の入用は常に同じからずして、時には疾病、天災其の他の事がらにて、臨時に費用を要する事もあれば、事なき日も亦、不時の入用あらんことを考へ、收入の十分の一以上は、貯蓄すべき必要あり。保險も亦、臨時の災害を平生に負擔し、又は一定期限の後、一時に或金額を受取るべき爲に、常に少額づゝ、積み立つる法なれば、人に依らず獨立して世を渡らんとする者は、餘裕のある限りは、保險をつくるをよしとす。
（ヘ）交際費、快樂費　交際の爲に要する費用も亦、避け難き費目の一ならん。されども世にいふ華美なる交際をし、外飾を張りていはゆる山師の如き生活をなし、そが爲、義務費の支出を滞らせ、子女の敎育をゆるがせにする事は、沙汰の限ならん。快樂費も亦、一家相携へて春の花、秋の紅葉を稱し、朋友知己を招きて、無害有益なる樂しみを取るは勿論あしき事にはあらざるべきも、これまた前に擧げたる必要缺くべからざる經費の不足なるをも顧みずして、なすべきにあらず。さるを世には己が快樂を得ん爲に、家族の生活費を減じ、敎育費を削るもの少しとせず。爲に一家の平和を破り、一時の快樂を得んが爲に、永久の不快を引き起す例少からず、まことに思はざるの甚しきものといふべし。故に予はこれ等の費目を、最も必要の度少なきものとして、こゝにおきしなり。
主婦はまづ收入を量りて、以上の順序により、前年又は前月の費用にもとづきて支出の豫算を組むべし。豫算は大概、人數の減らざる限りは、前年度より一割乃至

二割を増して、漸く足るべきものなれば、常に餘裕を存すべきはいふまでもなく、物價の高低定まらざる今日に在りては、ことにこの心得あるべし。

◉負債　經費の豫算を調製するに當りて、もし收支和償はざる時には、なるべく收入の増加を計りて、必要なる支出は削減せぬやう注意すべき事は、前に述べし如くなるか、こはたゞ生活費、義務費、教育費などいふものゝ事にて、たゞこの從來の生計の度を低くせんことを厭ふ、外飾剛情などの感情より、名を衞生交際等にかりて、收入に伴はざる生計を營み、爲に負債を起こし、又は掛買などなして支拂ひを怠ることあるべからず。正しき理由ある負債は、經濟社會より見なば、必ずしも惡しき事とのみ一概にいふべからずといへども、そは償却の見込ある場合の業務擴張費、學術研究費等と、不慮の災害に遇へる時の融通などの外は、みだりに他人の財嚢をあてにすべきにあらず。況して懶惰にして奢侈に耽り、遊蕩に流れ、又は自營の心ともしき爲、一家の生計を整ふる事あたはずして、徒らに何の目的もなく他人を頼みてその財を借らんとするが如きは、既にその心掛人道に外れたるのみならず、その結果はよからぬ事のみに終るべきなり。

よしや償却の見込ある負債なりとも、もとより他人の力を頼み、其の財力を藉ることとなれば、對等に交際し得べき人にても、幾分か其の前には己れが權利縮まれるやうにて、常に屈服すべき恥辱を蒙るべく、且償却の時には、無論利子の支拂を爲さゞるべからず。時としてはその報酬として、物品を送るもあるべければ、何れにしてもわが權利をそぎ、餘分の金錢を支拂ふの損あるをみん。しかも損はたゞこれのみに止まらで、萬一期限に至りても、償却の義務を果たさゞるが如きことあらば、家資の分散はいふまでもなく、名譽を傷け權利をなげうち、殊に妻子離散の苦しみをうくるに立ちいたる事は珍らしからず。かくて名譽も信用もふたつながら地に落とし、甚だしきは累を親族朋友に及ぼし、苦痛を子孫に殘こすにも至らん。假令さほどにあらずとするも、負債償却の義務ある間は、常に人知れぬ心の苦し

みあるものにて、剛膽なる人も、怯懦に陷り、愉快なる人も憂鬱となること少からねば、負債ある家の主婦は、その償却の爲には、如何なる堪忍をもなして、一日も早くこの苦境を脱し、家長の名譽と信用とを全からしめ、その意志をも自由ならしむるやう務むる事肝要なり。

さて負債を償却せんには、かならず正當なる收入によるべきなり。かの負債を償はんが爲、他に負債を起し又は投機めきたる事業によりて、一時の急を救はんとあせるか如きは、ことによろしからず。若し目的の外れたらんには、いよ〳〵苦境の深みに陷り、困難に困難を重ねて、また救ひがたきに至らん。殊に負債を起こすには大概保證人または連借人を要するものなれば、おのが負債にても、償却の道をあやまりなば、それらの人々に迷惑を及ぼすべきことは明かなれば、この點よりも務めて償却の道を立つべきなり。さればまた、己れ引き受けて償却し得べき目的なき時は、たとへ親しき朋友親戚の依賴なりとも、輕々しく他人の負債に保證をなし、又は連帶者となる事もまた愼しむべきことなり。世には己が使用せぬ金錢の爲に、妻子眷族に迷惑をかけ、名譽をも信用をも落とすもの少なからねば、よく注意すべき事なり。

◎貯蓄及び保險　前に述べたる恐るべき負債を免るゝの道は、たゞ勤勉にして節儉を守り、常に餘財を存して貯蓄保險等にあつるにあり。抑々生計の度に應じたる收入ある者にても、思はぬ不幸にあひ、慮らざる災害の起こりて、非常の入費を要し、あるひは收入の道、頓にふさがる事も例なき事にあらねば、あるがまゝに支出し盡す事は、慮なきことゝいふべし。たとへさる不幸災害には出あはずとも、常に貯蓄あれば平生安心して職務に從事し、漸々資本を增して業務を大にし、日に研究を積みて、愈々見聞をひろめ、もし不時の經費を要することあるも、他人の前に膝を屈めて助力を乞ふの心配もなく、自由に獨立自營の道を立つる事を得べし。

されば一家の獨立を保ち、その體面を汚さゞらんには、必ずとも貯蓄を要すべく、貯蓄の種類は數多なるべしといへども、普通に行はるゝものは、政府或は銀行に

依頼するものと、わが家に蓄積するものとの三つに過ぎず。その政府に托するものとは、遞信省の郵便貯金にして、確實なるはいふまでもなく、且何處の郵便局にても、取扱ふをもて殊に便利とす。近頃又郵便切手をもて、少額にても預けいるゝ事を得るやうになりたれば、ひとしほ便利なるべし。たゞ銀行その他民間のものに比すれば、比較的薄利なるをもて、増殖の度割合に少きが如し。銀行にては通常定期預かり金當座預かり金をなし、定期の方は一定の期間を限りて預かり、その期限に至りて後、拂ひ戻すといふ、當座預けは利子の割合など定期よりは薄けれども引出すに期限を定めざる便利あり。小口當座預けなど取扱ふ銀行にては、大概五圓以下位の少額をも預り、貯蓄銀行などいふ類にては、郵便局の如き少額を取扱ふ事あれば確實にして信用ある銀行を撰まば、便利少からざるべし。自家に貯蓄するものは、盗難の恐あるのみならず、利倍增殖の益もなく、殊に政府或は銀行をして運轉せしめなば、社會的の有益なる事業の資本ともなりて、國益を增す一助ともなるべきを、自家にのみ蓄積すれば、天下の大切なる融通物を、金庫の底に葬りおきて、瓦石と同じく世に何の光をも放たしめざる事、眞に天下の財を私有するの罪ありといふべし。されども又利子を得んことをのみ計りて、個人に貸附し、或は不熟の運轉を試み、爲に慘酷の名を得、資本の損失を受くる事などに至りては、心あるものゝすべきことにはあらざるなり。

保險は不時の入費を要すべき非常の場合にても、困難を免れ狼狽せず、負債せず、他人の助力をからずして、獨立し得べき準備なれば、永久少しの不幸もなく、困厄もなき時に於ては、不利益なるが如く觀ゆる事もあれども、直接には他の不幸なる人を助け、間接には有益の事業に資本を下すに外ならざれば、わが幸福の餘澤を他人に及ぼすの道ともいふべく、殊に不幸及ひ災害は、一家の内に何時落ち來べきもはかられざるものなれば、平生幸福の時よりその備をすべき事、遠き慮あるものゝかならず心がくべき事なり。保險の種類に數多ありて、生命保險と稱ふるは、會社と被保人との約束に

よりて、或年齢に達したる時、又は死亡の後、保險金を受取るべき爲、年々被保人より保險料を拂ひ込むの法なり。されば通常は終身保險を始めとし、養老、教育、結婚などの數項に分てり。火災保險、海上保險などは、建物、家具、貨物等に對して、保險を附するものにて、その理亦、生命保險と大差なからん。何れの保險にても、確實なる會社を撰みて、投機的の薄資なる會社には、たとへ表面利益なるが如くみゆるも、他日の損失を招く虞少からざれば、決して契約すべからず。これもと保險は家資增殖の考にあらずして、非常準備なれば、確實なるをもて第一の目的とすべきものなればなり。

◉節儉　一家を經營するに當りて、必要なる經費を支辨し、餘財を貯蓄保險などにあてんが爲、奢侈を禁じ浪費を誡むるをいふ。されば徒らに金錢を惜しみ、必要なる經費をも減じ、有益なる研究にも、資本を投ずるを厭ふ、かの吝嗇家の如く、家内の平和を破り、家族の健康を害ひ公共の義務を缺き、兒女の教育を打ちすつるも、一向蓄財にのみ餘念なきが如きものは、節儉の何たるをすら、辨へざるものといふべく、これらはたゞ、一家一族の上に不利益を招き却て不經濟の基をつくるのみならず、延いては、國家の損失ともなり、社會の害毒ともなるに至るべし。節儉の目的は必要有益なる經費を支辨せんが爲に、蓄財するにあれば、もし蓄財其の物のみを目的とし、少しも有用なる經費を辨ぜずんば、たとへ巨萬の富を積むとも、己れを利し家族を幸福ならしむる事能はざるのみならず、却て子孫をして懶惰ならしめ、親族故舊の怨みを買ふの基たるに過ぎざるべし。

經費を節約して、よく浪費なからしめんには、豫算を確かに立て、帳簿を整へ、過去の費目に照して後來をいましめ、下婢の監督をよくして、薪炭油の浪費を少からしめ、なるべく掛買の風を去りて、現金購入を行ふべし。掛賣する商人は、月末までの金利を品物に加へ、統計上不拂の金額をも算入して、高價にし、一手販賣の傾をつくりて、物品の新鮮良好を缺く事も珍らしからぬ例なれば、かゝる弊害は避くるやう工夫し、確實なる商店に

つきて、親しく物品の良否を檢して購入するやうすべし。商店は小店にして薄資なるものは、價値廉なるが如きも、往々粗製の物品多く、爲にかへりて不經濟に陷る事あり。呉服物、家具類にはことにこの注意を要す。西洋諸國に在りては、貴婦人といはるゝ際の者も、下婢料理人をともなひ、馬車を驅りて市場におもむき、そが望みの食品を買ひて、一日の食料とすることと異例にあらねど、わが國の如きは少しく豐かなる生計を營み、婢僕を使用する者は、自食品などを購買するを恥つるが如き風ありて、一切他人に任かせおくの習慣なれば、その間にいふべからざる弊害もあり、不經濟ともなるに至る。これ等はもとより急に改め難き風習なるべきも、せめては自家の臺所に立ちいづるほどの主婦は、魚肉のよしあし、野菜の適否など、自ら撰むべきは、當前の職務なりと心得るやうすべきこと、望ましきかぎりなり。

◉**奢侈及び流行**　今わが一家の經濟なる稿を終るにのぞみて、いさゝかこれと反對の關係ある、奢侈及び流行につきて一言述べんとす。世に心あるもの、誰れか奢侈の名をきゝてこれを慕ひ、これを得んと望むものあるべき、何れも忌み嫌ひてわが家の內には、一歩も入れじと誓ふならん。しかも世は、無識者のみの世ならねど、奢侈の沙汰は、日に月に多く、年々歲々途上にみる人の服粧より、客室の粧飾、書生の用具、さてははかなき小兒の玩弄具に至るまで、奢侈に傾かざるはなし。こをもて單に、國の富めりと欣ぶべきか、書生の品位上りたりと誇るべきか、又は小兒の智識が昔日に勝れるによるとして安んずべきか、まことに疑ひなき能はず。奢侈或は贅澤と稱ふるものは、もとより高尙なる考より出づるものにあらずして、人に誇り人をして羨ましめんとの不德なる感情が、外見に美を飾りて天然の醜を掩ひ、修飾によりて、人に褒められ、悅ばれんと願ふ、卑劣なる希望か、好奇心或はおのが慾情を抑へ難きが爲に起る念慮なれば、修德、衛生、經濟の如き、家をとゝのふる爲に必要なる德性とは、もとより和容れざる性質のものなり。然るに不思議にも、この不德なる慾情は

豪放なるべき男子よりも、綿密なるべき婦人に多く、餘生少き老人に少くして、生先長き少壯の者に多きが如し。ことに婦人が、一度この慾情に驅られなば、衣服、頭髮の飾より、洋傘、下駄の好みに至るまで、總て人に後れざらんとつとめ、いはゆる流行を追ふにいたるべし。流行といふうちには、便利、衛生、經濟の如き實用上の目的によりて、行はるゝもあれば、總てをもて悉く奢侈なりとは定め難しといへども、多くはたゞ、感情にのみ流れて、何の意味もなく、何の便利もなく、單に流行物なるが故に流行すといふが如きものも少からず。ことに美の完全ならんことを欲して、變遷するものが、存外に眞の美より遠ざかる例もあり、不都合、不便を忍びて、流行物を用ひ、不衛生、不經濟と知りつゝ、流行の渦中にたゞよふ人も極めて多し、これらは實に、無益有害にして、奢侈の極と稱すべし。しかも奢侈の結果としては婦女子に在りては、眞面目に業務に盡すべき時間、又は勉強の時を、外飾のことに心を奪はれ、或は變遷常ならざる流行におくれざらんが爲、染物、裁縫に忙はしく、家事の整理をおこたり、遊惰輕薄の心を養ひ、男子に在りては、柔弱、無氣力の弊風に陷り、不健康を招き、負債に苦しめられ、遂に投機的の所業をなし、產を破り名譽を墜とし、信用をさへ失ふに至るべし。これを歷史に徵するも藤原氏時代の驕奢が、いかに人心の腐敗を招きしか、如何に衛生上不爲なりしか、驕る平氏の久しからずして西海の露と消え、質朴なる鎌倉幕府は、天人ともに赦さゞる大罪を犯しつゝ、なほ百五十年の間、民心を得たるにあらずや。かの豐太閤が英資を以てすら、二世の泰平を保ち難く、家康が戰亂の後を受けてよく十五世の泰平の基を開けるも、他にさま〳〵の原因あるべしとはいへ、また彼れの驕奢、これの節儉に因らずとするを得べき。まことに「驕るもの久しからず」といへることは、眞理にして殊に婦人の服膺すべき訓誡なり。よしまた古の例を引かず、現代の狀況を考ふるも、國民の多くが、驕に耽り、奢侈に沈むに至らば、自然に有益なる事に用ふべき財貨を浪費するに至るべく、隨て貯蓄心は薄らぎ、貯蓄乏しくなり行かば、國家

に有用なる事業を起さんとするものも、その資本を得るの道なく、しかも一方には、奢侈品、贅澤物の需用盛なるが爲、その製作に忙はしくて、益々資本の缺乏を促すに至るべし。かゝる勢に至らば、物價は騰貴して租税は重く、貧富の懸隔外面にまであらはれ、誇るものは誇り、怨むものは怨むに至らん。若しかゝる有樣の永く世に續きなば、まことに一人一家の上は更なり、一國一社會の危機ともいふべく、歎きても餘りあることゝいふべし。されども又世にはかゝる說に反對して、奢侈流行は文明國の特徴なれば、決して歎くべきにあらずとする論者あり。その言をきくに、奢侈は多く外飾の目的なれば、社會を美しく粧はんには、他人に害を與へざる限りはこれを禁ずるの必要なしとか、市場の賣買を活潑ならしむるに必要なりとか、甚だしきは人が勞働する目的は金錢を得て、十分に贅澤をせんとするに外ならざれば、これを禁ずるは勞働を奬勵する道にあらずといふもあり。然れども社會の外面を美しく粧ひて、文明に誇らんとするは、婦人が貞節を貴ばずして、外貌の美をのみ欲するが如く、市場の賣買盛ならんが爲、奢侈流行の必要を說くは、一夕千金の豪遊を試みて、料理店を利し、歌妓を益したるの慈善をとくが如く、一笑の價あるに過ぎじ。殊に人が勞働する目的を奢侈にあるが如くいひなすは、まことに誤れるの甚しきものにて、かゝる愚なる者も、稀にはあるべしといへども、さる愚者の爲に、奢侈の辯護をなすは、汽車に轢れて怪我する人あるをみて、汽車危險なり、廢すに如かずといふにも似て、まことに沙汰のかぎりといふべし。

されば一家の經營をなす主婦たるものは、家庭の空氣中には、奢侈の分子をだに含まざるやう、住居は衞生を主として家人の快樂を傷けざるやう營み、食物は營養に富める物を最とし、一家團欒して晩食を共にするの樂みをうけしめば足れりとし、殊にわが國婦人の生活の程度よりも、超えて奢れる衣服につきては、よく節約を守りて、浪費を避け、晴着と常着との區別をたて、常着は洗濯に堪え衞生にかなふべきを主とし、晴着は禮式にそむかず、品格を落とさゞるを度として撰むべ

く、かの歌妓、俳優の扮粧等より起れる、野卑なる流行品の、美術的の意匠すらなくして、且不當の價格を拂ふべきものなど、用ふる事ゆめ〳〵あるべからず。ことにかゝる流行物は、その變遷も速かにして、先月の流行物は、今日既に古めかしく、今日の新物、明日は陳腐の譏を免れ難きもの、珍しからず。さればかゝる流行に遲れざらんとするものは、實に忙しきことなるべく、到底一家の經濟を握り、一家の整理を司るものゝ、すべき事とも思はれざる事なれば、その渦中に卷きこまれざるやう、常に警誡して、其の地位貴く、其の家富める夫人は、いよ〳〵節儉の德を積み、奢侈の弊を去り、人の摸範ともなりて、一家の經濟を整へ、家族の健康、家內の平和を守り、社交を圓滿にし、國家の義務を果たし、兒女の敎育を全うし、家長の名譽と信用とをして、愈々發揮せしむるやう務むべきこと、肝要ならん。（完）

家庭教育談

平尾光子

私の敎育上の考へは世の中の人の考へとは大に異る所がございます。私は習慣を外づしては敎育は立たぬと云ふ考へであります。世の中の學校の敎へ方、或は奥樣お孃樣方の爲さるゝ所にはどうも胸に落ちぬ所が多うございます。日本は昔から忠孝で以つて國が立つて居る所でありまして、忠孝が土臺と爲つて、それより分れて種々の敎へになつて來て居るのでございますが、近頃の敎育は其の習慣に逆ふて智育のみを奬勵する仕方と思はれます。それ故に婦人が人に嫁し、一家を持つて社會に交るに當つては種々の不都合を見る事と思はれます。女子敎育の方針と致しては習慣と云ふことが土臺と爲つて其れに枝の咲くものであります。

それから家庭の事に移ります前々お話を申上げて置きますが、其の習慣と云ふものに就て女子を敎へて參ることは、誰にせ分り切つて居りますが性に從つて敎を

立つると云ふことが一番大切であります。性に從ふと申すのは、即ち性質に從ふ事である、それで極く目端の利くと云ふ女子には性質にねぢれた所がある、又目端の利かない女子には性質に極くすなをな所がある、同じ學校で同じ學科、又同じ時間で敎へても決して同じ樣な生徒が出來て來ぬ、それを敎へ込みますには、目端の利く者で、性質の悪いといふ其方の性質を直して行くのと、又一つには目端の利かない者で、鈍いけれども性質の極く温順な者に、目端を利かせる樣にして行くと云ふことは、誰も注文する所である。併し是を木に譬ふれば先づ桐の木の如き、又紫檀の如き木があります、元來木の性が紫檀であるのを桐に導くと云ふ事は出來るものでない。又桐の性質であるものを紫檀に直すは到底出來ない。然らば

◉敎育の方針は如何にすべきか、

先づ性質のねぢけて居る子供に對して敎員が修身の事を言つて聞かせる、さうすると悪い所に段々理屈を覺えて來ると云ふ結果になる。それから性質の鈍い者に修身の話をして聞かせると、段々是はお轉婆に近寄つて來る。其れを直すにはどうして直ほせるかと云ふに、性質の極て勝つて居る即ち目端の利いた女で其代り性質のねぢれた者には敎師が思ひ遣つてやる、即ち其の思ひ遣りと云ふ所で直す。それから目端の利かぬ者には敎師が先き立つて共に働いて見せる。是れが生徒を導きて行きます所の第一の方針であります。それで今日は一般の母親が自分の娘の子に就て考へるのに、どうも娘を學校に出して置いた所がお轉婆になつたと云ふ話と、娘が萬事に氣が附かなくて困ると云ふ話との二つが、母親の小言の種の樣に思はれる、が、其處が即ち世の母親たる人に對して注文を致したい所です、まづ母親なるものは目端の利かぬ者に對しては共に娘を引連れて働く、それから氣象の勝つて居る即ち性質のねぢれて居る者に對しては母親が勉めて小言を言はないで思ひ遣りと云ふ方針を執つて、學校は唯智育を附けると云ふだけで可なり、其處までは屆かぬものと見做して宜いのです。

又二つには女の子があれば、それが非常に目端が利くと母親が喜んでホイ／＼する、又目端の利かぬ方の者は元來性質が素直である者に、氣が利かぬと言つて非常に性質を惡くして仕舞ふ。私共長の年月檢しました所でも、先づ將來賴母しいと思ひました者はどう致しても

◎不幸に逢つたものに却つて役に立つ者が多い。

それで子供の時から目端が利いたり、親の寵愛したと云ふ者には必ず良い結果はござりませぬ。娘が盛りになれば乾度我儘が増長する親に孝を盡くすとか、夫に貞を盡すとか云ふ者は何れも不幸に遭遇して居る、さうして眞に練上げた者である。親は其子が目端が利かないと言つて先きに立つて行つて見せやうとする者はない、目端の利く者は蝶よ花よでおしまいには途徹もない者にして仕舞ふのである。其處の釣合一つである、扨て學校に寄越されてから、教師が受持つて、その目端の利く者に對して教師が段々と理屈を言つて聞かせますと、それが本當の理屈になつて來ないのです、つまり我儘に理屈が附いて來るのです、そこでその我儘に理屈が附いて來る者は、だん／＼と進んでまいつて我家に居ては我儘をしてもそれが通るといふので人に向つても我儘をするやうになる。然らば人に對して嘘を吐いたり或は人をいぢめたりして非常に增長した者に成つて來る。それから一口にノロマといふ側、即ち目端の利かぬと云ふ娘は、良い所は枯れて來て惡い所だけが伸びて益々目端が利かなくなる、利かなくなつた結果は剛愎になつて來る。是は學校に取りまして母親の育て方如何に依りてさういふ結果を生じて來るのです。母親が其處を心得て居て與れば當人も助かり、教師も助かる。それで嫁しますと子供の時から育つて來た所が嫁に行つた所でそつくり働きます。それで兩親に我儘勝手を働いて居たのが、嫁に行つて見ると理屈になる。それで女子の目端の利くより却て目端の利かないのろまを女房にした方が一家が丸く治まると云ふ結果を生ずる。全體さうあるべき筈のものかと云ふ

にこれは世の中の道理から言ひましてもそんな筈はないのです、目端の利いて性質が素直ほで、夫に從ひ一家を廻はして行くと云ふ女を拵へる爲めに文部省で骨を折つて居らるゝのであるが、其處がどうも甘くまいらぬ。其處はこれまでの學校でさういふ傾きが出て來る譯があるからです。學校の方では表面に現はれました學科と云ふもので其人を品評して行くのですから、

◉敎師が其人の性質の内輪にまで立入ると云ふことはしない。

唯々學校では表向きの技藝即ち表面の藝を進ませて行くと云ふ丈けのものである、其處が母親の最も目を着けねばならぬ所である。學校の敎へは此の部分であるから母親の擔任は此であると云ふことを知らねばならぬ。然らざれば敎師が自ら生徒の心狀に立入りて敎育をして行けば本當である。外國では宗敎と云ふもので敎師も生徒と親切を盡くし合つて行く所で性質を直して行くから充分の結果を見る事になる。今日の世の中の有樣で見れば藝を敎へらるれは今日は先生であるが、學校を出れば素知らぬ顏をする有樣である。故に敎師が生徒の心に立入ると云ふことは出來ぬ樣になる、却て薄情になる。其處が學校の先生のお手柄かと云ふにまことにつまらない事で、それ故生涯其の先生を慕ふ樣な敎育の仕方がして欲しいのです、それほどにすれば必ず溫順な生徒が出來る。それでどちらかといへば官立學校よりは寧ろ私立學校の方に氣風の薰陶が多い、即ち昔の英雄豪傑の方々は規律の立たない學校から出たのが多い、佐久間象山先生あたりの塾に致しましても、其の先生の氣質を生徒が受けて「あの先生の爲めならば」と云ふ樣になるから人物が出來る、今日の學校の組織と全く違ふ。私が毎度嘆息するのは大工仕事師の如き者に至つても親方の爲めとか申すと命に代へてもやると云ふ程の者が多い、今日結搆な敎育を受けながら——敎師も其念が薄く、生徒も薄い。甚しきに至つては學校を出ますとモウ暑中正月の挨拶もせぬ、遂には通りすがつても素知らぬをする。それはつまり學校のやり方でもあるが。一つは母親が身に染

みぬからである。母親が大切な娘を遣つて置くのであるから時には先生の處へ行つて相談するならば宜いが世間の母親は拋つて置く、まづ第一世の母親は學校の先生を知らない。さうして一朝間違ひの起つた時は其事を訴へる、何たる粗末な事であらうか全體人の性質は如何なる學理上から申しても

◎人の性質の賢愚智鈍

と云ふ事は如何なる教育と雖も直らぬものと信じて居ります。けれども多少はそれを矯め直すことの出來ないと云ふことはない。植木に致しましても植木屋が顯りに枝振りを直して居るに、其の植木が思ふ儘にならないと云ふのは木が惡いにあらず、植木屋其ものが下手なものである世間の親達は娘の子が思ふやうな結果を得ないといつて其の罪を教師に歸する。誠に間違ふ話である家の娘が仕末にいかぬと云ふはつまり己の恥を曝す樣なものであるまいか。

また母親の考へとしまして何もかも學校任せと云ふことは途轍もない考へであると思ふ。どうしても娘の子は

◎母親と教師との協力

で行かなければ迚も好都合な娘は出來ないのである。

それで此れは御參考までに申すのでありますが、上流社會は最も其の弊害があります、先づ娘の子が手車或は馬車に乘りて學校へ往復をする、然るに其先生は辨當を持つててく〳〵歩く、途で會ふに生徒は馬車でお禮を爲し、先生は下に居てお禮をする。或時は人込みの中で會ふに、生徒は先生に恭しくお禮をするかと云ふに、其の母親亦はお供の者が居る時など、先生が歩きて行くのを見て生徒は挨拶をせぬと云ふが今の風である。ドウしてさういふ風になるかといふのに其の教師たる人の見識が低いからである。先づ昔しならば佐久間先生、現今では福澤先生と云ふ人の門人は世の中に出て相當な事をして居ると云ふは、即ち其の先生が其の生徒をほんとうに教へるだけの頭があッた人であるから、それ故に生徒にえらい人物が出るのである。そこで貴族の人の學校には多くの學科を置くに及ばぬと

思ふ徳の高い敎師が居れば皇室の藩屏となられゝと云ふ考へである。さうでなければ家には兩親に我儘、學校では敎師を侮り、結局旦那を何とも思はぬと云ふ結果となるのです。其れが心の方の因つて起る害であるが。それから行の方からいふと、家に居りまして育ちます時と、學校に上ッて育てゝ貰ふ時と、年頃になつて學校を下ッて兩親の手許に居ります時と、嫁いて嫁さんになつた時と、非常な段が附いて來る。學校に居ります時代は勉めて活潑と云ふにして、所謂體操とか、始終腰を掛けて居り、廊下を歩けばと言つても或は草履を穿くか、又お辭儀をすればと言つても首だけを下げると云ふことで、學校で敎へられましたものは、今度は年頃になッて母親の許に居るとなりますと、朝から晩まで坐らせらるゝ、是が境遇の餘程變ッて來る始めてある。それで先づ遣り切れるものでないのです。それから學校で致しました事を

◉嫁しづきてからは如何

と云ふと、嫁しづいてからは日本の習慣として夫と運動に出る譯にも行かず、馬に乘る譯にも行かぬ、嫁は家に居て針仕事でもするが大人しい嫁と云ふ、間もなく子でも出來、學校で習ッたものが何程も役に立たぬと云ふことになつて來る。それで現在今日の所では餘り敎育に段が附く樣に思ひます。故に敎師の敎へますのと年頃になつて兩親の左右に居る事と、片づいて嫁となる時の事と、學校で餘りひどい差の起らぬ樣に敎育をするが目下の必要と考へて居る。さうするにはどうするが宜いかと云ひますと、少し寺子屋流とはなりますが、矢張り女の子には坐つて敎ふると云ふものか、左もござりませねば學校で草履を穿くと云ふを廢めて、學校の家屋を奇麗にして全く娘の子を育てる樣な振合に育てゝ行くかせねばお辭儀をすればと云つてもしとやかに、挨拶すればと云つてもしとやかと云ふ娘は出來ませぬ。さうなつて來ますと敎師の養成法と云ふものは目下の養成法では將來生徒に完全の母と爲るべき所は此處と云ふ事を敎師が敎へ與ふと云ふ事は到底六ケしい事と思ふのです。と云ふは敎師自ら ——(實は

生徒は偖措いて）人の前に出て立居、振舞、言葉を滿足に使へる人はどうかと思ひます、唯々生徒の少し黴の生いた者の様に思はるゝのです。それ故に先づ西洋あたりでは教育を擔任すると云ひますと、經驗があり資金もある後家さんがするのである、それで眞に教師の教育が行屆くが、先生の眞似して束髮を天竺玉に結ふてガス／＼歩きて、或る學校では日向に出て體操をする有様である、其の體操も至極結構な事であれども女子と云ふ文字を忘れない様にして貰ひたいと思ふのです。さう致しますと大層今の學校をけなして來ますが、今の學校の事をけなすと云ふに終りませずして、母親たる者が

◎今の學校は智育の所だ

と云ふ所に目が着けば宜いのです、智識を授ける所と云ふことを知つて母が育つれば宜い。學校に任せて年頃になつてお轉婆でいかぬ、物に氣が着かぬと云ふはどうも無理であらうと思ふ。それであるから先づ本當の教育を仕やうと思ひましたら今の學校に出さないで、母親が先づ總括りに括つて、藝だけは先生を家に招きて教へさせる。母親の行屆かぬ場合は道徳の高い伯父さんなりに來て貰ふて監督をして貰ふとか講釋をして貰ふと云ふは結構と思ひますが、是は財產が無ければ出來ぬ事で、中以下には行はれぬが、即ち何れの國にも中以下、極上等と云ふものに就ての教育はそれ程必要がないと思ふ。國で一番大切なものは中等社會である、中等社會は母が世の中に交際するとか、夫が交際するからまんざら知らぬ事は無ささうなものであるが其れが知らないのです。それに今の教育の有様が先づ中等とすれば、中等よりは

◎身分を超えた教育をして居る

と思ふ、身分相當の教育でないと思ふ。裁縫を教へますから、料理の事から、或は禮式などを教へて、今日一寸した客が來たから茶を出すとか云ふでなくして、昔風の煙草盆から持出すと云ふ風で、さういふものを受取らぬ客ならばお孃樣が突ッ立つて仕舞ふ。教育の方針が上流社會の娘に下等社會の教育をさせるは害が

起らぬけれども、下等社會の者に上流社會の教育をさすれば害ばかりである、終局生涯滿足を心に與へられぬ結果を生ずる。其處で

◉夫が馬鹿に見える

私の朋友は好い所に片づきたとか、友人の夫は勅任官とか云ふ所に目が着く。男女に關はらず男子なれば壯士が出來、女子ならばお轉婆女が多くなる。其處で今の教育の方針は少し身分不相應な教育の樣に思はるゝ。可愛子は旅をさせと云ふ通りに、恐れ多くも維新の今日と云ふものは長の年月御上に御難儀遊ばされて下の情に御通じ爲さるればこそ德下に及ぶので、仁德天皇を始め奉り下の情を御存じの時の御代ほど能く治まつて居る。況して女は幾ら身分が宜いと言つても下々の事を關係なしに日を送つて行くと云ふことは出來ない。それですから奥さんにしても下々の事を能く知ります人ならば女中を使ふにも思ひ遣りがある。女中と一緒になつて女中が斯ういふ事があつて困ると云ふと、さうてあるかと云ふ所が分るから思ひ遣りがある。

◉學理の上から婢僕にやさしくしやうと言つても出來るものでない。故に上流社會にして下流の事をやつても害の無い事である。下流の者が上流の者の事をやれば目ばかり肥へて無法に高尚な事を好む。今日は男女を問はず小學校もさうである、故に學校と家庭と相容れぬ。學校でやる事は家に必要がない、又片づきても必要がない、學校で骨を折つた事は忘れて仕舞ふ。それでズーッと家庭が進んで行つた上ならば宜いのであるが、日本の家庭はまだ進まぬからさういふ譯に行かぬ。それ故に女に耐忍力が薄くなつた事はヒドイものである。片づきて少し嫌やな事があれば忽ち出で來る。故に教育か進んで難有いと云ふ裏に離縁の數か増して來たのです。それで離縁を受ける人は調べて見れば多少教育のある人に多いのです。それに誠に生意氣なのは夫に見込がないとか、望みがないとか云ふが口上で、生意氣千萬な事である。さういふ樣に今日骨を折つて教ふるのである。　(完)

哺乳兒の急性胃腸加答兒豫防法に付きて

某學校醫 寄

およそ、人の親として子を愛せざるものなく、其子の健全に生立たん事を望まぬはなけれど、これには、先づ哺乳兒の養育法に注意するを以て甚だ肝要なりとす。

抑も哺乳兒の體質は、急性胃腸加答兒に特殊の素因を有し、一二歳以內に於いて小兒の死亡數の夥多なるは、過半本病に因するもの丶如し、されば、授乳の任に當る人にして、本病の徵候並にその豫防法等を常に心得置くことは、極めて必要なれば、左に其概要を述ぶ可し。

本病に罹たる小兒は、多くは顏色青くなり、食氣缺乏し、精神不快となり、常に啼泣し、乳汁を飲用せしむるも、直に吐出し且つ下痢を來す、而して其下痢物は固有の卵黃色中に綠色の小塊を混し、或は全く綠色の稀便となり、又排便の時には黃色なれども暫時間大氣中に放置するときは、綠色に變ずることあり。

若し生母にして、上に記せる如き徵候存することを認めば、直に醫士の診察を受け、適當の處置を爲す事を怠るべからず、而して小兒の胃腸加答兒を起すは、乳汁用法即ち營養法の如何に大なる關係を有するものなるを以て、左に其原則とも稱すべきものを記すべし。

◉小兒の營養法

諸多の營養法中、生母の乳汁を以て最も適當の食物となす、然れども生母にして、其生兒に哺乳せしむべからざる場合あれば、次に之れを記載せん。

(一)生母十八歳以下なれば、其生兒に哺乳せしむべからず、是れ猶ほ滋養分に乏しきと、少婦に授乳を命ずるときは體液を失ふに由り、萎黃病若くは肺病に陷ることあればなり。

(二)肺病若くは精神病等に罹りたる時産みたる子には、其乳を飮ましむべからず。

(三)産後始めて月經の通したる時は、其乳を與へざるをよしとす。

(四)乳腺の發育充分ならざる爲に、乳汁分泌の分量

少きときは、暫く哺乳を止むべし。

(五)授乳の間に新に姙娠したるときは、直に哺乳を止むべし、何となれば姙婦は内は胎兒を養ひ、外は小兒を養ふの務ありて、一身二兒を養ふ次第なれば、姙娠の後乳汁を與ふる時は、自身並に内外兩兒の營養に不足を告ぐるに至り、終には何れも其健康を害するものなればなり。

前に述べし如く、小兒の急性胃腸加答兒は、乳汁用法の如何に依て大なる關係あるものなれば、生母の狀態授乳に適するものに在ても、其哺乳せしむるに方りては、嚴に一定の時間を以て乳房に就かしむる習慣をつくべし、小兒が啼泣すればとて、その都度に乳房に就かしむるが如きは、極めて惡く、元來小兒は只哺乳を欲するときのみ啼泣するものにもあらず、又如何ほど身體の滋養になる品と雖ども、過度に飲食せしむる時は、胃腸を損し疾病を來すは必然なり、さて乳を與ふる時間は朝は六時より初め午後は十時迄とし、其間生後二ヶ月に於ては、毎二時間其他は毎三時間に於てすべし、又哺乳後は必らず清潔の布片を冷水に浸して口内を拭ひ、以て乳汁殘渣の口内に欝滞するを防ぐべし、然らざれば乳汁の殘渣自然口内においで腐敗し、哺乳兒が之れを嚥下するときは、新に胃の內容物を腐敗せしめ、胃腸の疾病を起すことあるを以てなり。

前に述べし如く、生母の其授乳を禁ぜざるべからざる場合には、則ち乳母をして養はしむるをよしとす、されど乳母の撰擇は至つて大切なるものなり、其乳を飲みて生長する事漸く久しければ、後には乳母の性質をも感受するものなり、能く注意すべきことなり。

充分に乳母の撰擇を爲すには、必ず醫士の檢査を受けざるべからず、然れども又傭主の乳母を撰擇するに方り、常に心得置くべき箇條二三を揭げて參考に供す。

(一)病者にして色青白く、憔悴したる女を乳母とすべからず。

(二)腋臭ある女を乳母とすべからず。

(三)癲癇の病ある女を乳母とすべからず。

(四)音聲の濁りたる女を乳母とすべからず。

(五)髮の毛の少き女を乳母とすべからず。

(六)耳聾の女を乳母とすべからず。

(七)吃の女を乳母とすべからず。

(八)神經質の女を乳母とすべからず。

(九)身體皮膚病ある女を乳母とすとべからず。

(十)五體不具の女を乳母とすべからず。

生母若くは乳母に由て小兒を營養する能はざるときは、牛乳を以て人工營養を行はざるべからず、之を用ゆるには可及的人乳に均しからしめん爲め、水を以て稀釋し、且つ少許の砂糖を加へ甘味を附すべし、而して其稀釋法及び小兒に與ふる乳汁の分量等は、人々多少其説を異にするが、左に外國の小兒に就て定めあるものを掲げ參考に供ふ。

◉牛乳の稀釋法

小兒年齡	牛乳	水
一ヶ月乃至三ヶ月	一分	三分
四ヶ月乃至六ヶ月	一分	二分
七ヶ月乃至九ヶ月	一分	一分
十ヶ月以上	二分	一分

◉稠乳の稀釋法

小兒年齡	稠乳	水
一ヶ月乃至三ヶ月	一分	二十二分
四ヶ月乃至六ヶ月	一分	十八分
七ヶ月以上	一分	十二分

◉乳汁の用量表（一日量概算）

日時	乳汁分量
第一日	三食匙
第二日	十食匙
第三日	一合一勺
第四日	一合四勺
第五日	一合八勺
第六日	二合
第七日	二合二勺
第八日	二合三勺
第九日	二合四勺
第十日	二合四勺

第三週　二合九勺
第五週　三合六勺
第十週　四合四勺
第二十週　五合
第三十週　五合四勺
第三十五週　五合六勺
第四十週　六合一勺

今乳汁を家宅に配達し來れば直に煮沸し、殊に夏日に於ては煮沸したる後、少量の重炭酸曹達を加へ酸敗するを防ぐべし、而して清潔なる硝子板を以て之を覆ひ、暗冷の場處に置くべし、但し哺乳兒に乳汁を與ふるには、決して寒冷なるべからず、其乳汁を温むるには、之を盛れる瓶子を熱湯に投じ、適度の温に達するを見ば、前に述たる如く、重炭酸曹達を加へ水を以て稀釋して砂糖を加入すべし。

食後瓶内に乳汁を殘すときは、直に之を廢棄し、決して再び與ふること勿れ、又瓶子は水及び食鹽を以て洗淨し、哺乳器も又食鹽及び水を以て洗ひ、次回の用に至る迄で清水中に保存すべし。

健康の小兒は、九ヶ月の終に至れば、單に乳汁を以て養ふを止むべし、之を離乳せしむるには漸を以てし、齒牙の發生期及び暑熱の氣候を避け、殊に小兒下痢の流行するに方りては、離乳器を延ばさゞるべからず、否らざれば往々下痢を來し、再び母乳を攝らしむるも、猶ほ之を制すること能はざればなり。

左に生母の心得置くべきもの二三を述ぶべし。

(一)生母は常に清潔の空氣中に住居し、成るべく消化し易き滋養の食物を攝り、日々適宜の運動を爲し、專ら哺乳兒のことに注意すべし。

(二)室内は成るべく清潔にし、時々窓を開き新鮮の空氣を通ぜしむべし、又身體を清潔に保ち、衣服に注意し度々洗濯し、決して垢じみたる衣服を着用すべからず、且つ寒暑冷熱其適度を誤らざる樣注意すべし。

(三)乳房を堅く締め又は壓迫すべからず。

(四)喜怒哀樂驚愕等凡て感情を動かすことをつゝし

み、且つ常に自身の健康に注意し、腹痛、下痢、大小便變色、又は少しにても脚氣の氣味あるときは、直ちに醫士の診察を受けその恢復をはかるべし。

以上述ぶる處の諸件は、小兒養育上極めて重要の事なれば、其方法を誤らざる樣注意し、殊に七八月酷暑の候に多く來る、小兒の夏日下痢症は甚だ危險なるものなれば、一層注意せられんことを希望す。

春の庖厨

春江女史

◎手輕日本料理

▲口取　隱元キントン　二色玉子　▲皿　香火者　矢蓮　干生姜　▲茶碗　うしほ　小口みつほ

◎二色卵子　玉子を水より入れてよく茹で（玉子のうだりたるや否やを見るには火箸にてはさみ上げ、挾み上る時はうだりたるなり）。うだりたらば一度水にとり殼を去り、黃味と白味を別〳〵に分ち、白味の方は湯にてよく洗ひ、ふきんにて水氣のなきやうふき、いづれも別〳〵に手にて揉みくだき、砂糖と鹽を適宜に入れ、裏ごしにかけおき（白味より先きすべし）美濃紙をぬらして板の上に敷き、其上に黃味を平らに四角にのべ又其上に白味を同じやうにのべ、海苔まきずしの如くまき（美濃紙はのりまきの時すだれの心持にて）捲上げて後蒸すなり（蒸す時は蒸籠の蓋を少しきりおくべし）

◎隱元キントン　豆一舛（豆粒よりて買ふべし）をよく洗ひ水と同時に入れて火にかけ煮立ちて二分間ばかりにて一度水をかへ（他の鍋に湯る手ひき加減に沸かしおき鍋よりすくひあげてそれに取ればなほよし）煮立ちて二十分位たちたる頃また初めの如く、水をかゆ、是れあくを出して豆を白ろくするためなり、これよりは火を弱くしてこと〳〵と煮たゝせ、よく煮へたる後ちザル樣の物に揚げ四合ほど別けて裏漉しにかけ殘り六合のつぶの豆に砂糖三百匁、鹽盃に二はい位の割合、（砂糖のあくひきなどはなほよし、之に水二三合を

加ふ）を入れしばらく煮たる後、前へのうら漉にかけたるものを入れ極弱き火にてこと〳〵煮つめるなり。

◎煮肴　すべて肴を煮るには味淋と醤油四分六分位の割合を適度とす其煮方は先づ肴をこしらへおき鍋に味淋を煮たゝせ敷笊を敷き、其上に行儀よく肴をならべ暫く煮たる後醤油をさし落蓋をなして煮るなり。

◎矢蓮　蓮の皮を去り斜に二寸位の長さにきり、醤油と砂糖にて蓋なしに煮る時は歯切よく煮へ上るなり煮上げてたてに開けば矢の如き形となるなり。

◎うしほ　肴を程よく切り鹽をあておき一旦水にて鹽を洗ひ落し一寸湯を見せ（湯を見せるとは入れると直ぐに引上ぐるをいふ）直ちに笊にとり此度は水より鍋に入れて煮たゝせ泡など浮きたる時は残らぬ様にすくひあげ鹽少許を加へて加減すこれをうしほといふ。

◎小口みつば　みつばの白根を小口より細かに切り水にとりおき茶碗に盛る時生のまゝ加ふ

◉手輕西洋料理

◎ビステキの製法　ビステキは牛肉（ロース亦はヒレ、スキラキとて買ふべし）を適宜に切り（一人前掛目二十五匁位なれば充分なり）庖丁の背にてよくたゝき之に鹽と胡椒をふりかけバタにて焼くべし、尤も味をよくするには庖丁にてたゝきたる後サウダの油をひき暫時そのまゝに置きそれより鹽と胡椒をかけて焼くなり。

◎ヒース、シチウ　牛肉を適宜の大さに切り、ヘツド（上等などはサウダの油）にてよく焼き中頃鹽少許を加へ、汁の無くなる頃うどん粉少許とスープを多量に加へよくかきまぜフランス鍋にうつし胡蘿蔔、ジヤガ薯などを入れ二時間ばかり煮るなり。

◎コロツケーの製法　牛肉（ツブシの肉位にてよし）を大切に、バタにてやきたる後よくたゝきて小くし、サウダの油にていため鹽、胡椒、ウスタソーダ少許を付け別にジヤガ芋を茹て裏漉にしたるにバタとミルク少許をよく掻き交たるに右の肉をつゝみ、饂飩のでき形を拵へ其上に饂飩粉へ湯少許（上等にするには

ソップ）を加へて加減したるをつけ更に玉子と麵包粉をまぶし之を豕の油（ラート）にて揚ぐるなり。

◎ライスの製法　ライスの拵へ方は胡蘿蔔と葱を極く細かに切り、パタにて一寸あをり（パタにてじり〳〵やく事なり）たるにソップを加へ（米の煮へるだけの分量（之れにサフランを加へ（藥種屋にあり）を入れ黄く色を出し、鹽をも少許加へ煮立ちたる所に米を入れ、煮上げて形に入れるなり出す時パタとチーズを加ふれは味更によし。

◎竹輪ぐわいの製法は至て手輕である、即ち慈姑の兩端を切り、皮をむきたてに粗く庖丁目を入れ、その中心に穴をあけて、一見さながら竹輪の如くになし、小口より二分ほどの原さに切り、これを水にてざつと洗ひ、うつし水より火にかけ煮たる時に、浮き上りたる白き泡を去り、あとに殘りし澄みたる汁に味淋（白砂糖にてもよろし）と醬油を適度に入れて煮上れば、煮染用として大いに見えよきものが出來る

傳記

惹安達克（下）

文學士　中内蝶二

（六）謁見

かたき巖をも透すといひけむ、げに女の一念ほど恐るべきは無し。或時は狂女よと罵られ、或時はまた拐兒よと誹られ、到る所に嘲笑を招きし惹安が言葉も、熱誠漸く天に通じて、遂に人々の用ゐる所となれり。

時に査爾斯はシノン府に在り。チークーリユールの街より此地に到らむには、實に一百五十餘城を過ぎらざるべからず。しかも、これ等の諸城は既に敵兵に占領せられて、英吉利とブルガンヂーとの軍卒は雲の如く屯まり、戰塵漠々として路を塞ぎしかば、行路の難は云ふばかりなく、惹安はこれが爲めに日を費すこと十有

一日、つとめて敵兵の目をしのびて、夜行をむねとしたりしほどに、殆ど衣體を解くの間だもあらざりき。

かくて長亭短驛行きつくして、一行は遂にシノン府の門に着けり。惹安は直ちに書を査爾斯に上りて拜謁を乞ひしかども、因循にして久しく決すること能はず。加ふるに、在廷の臣僚及び軍人の輩は、聲を同うして之を排せしかば、惹安が一行は未だ遽かに都門を潜ること能はざりしが、幸にも査爾斯の皇后と母后とは、深く惹安が忠愛の志に感じて、ひそかに査爾斯に勸むる所ありしかば、惹安は漸く三月六日初めてシノン府に入ることを得たり。

然れども、直ちに禁中に入ることを許されず、城外の民家に宿りて、待つこと三日に及びしかど、廷議紛々として、なほ決するに至らざりき。この時恰かも、疴爾良城危急の報櫛の齒をひくが如くに至り、救を求むること愈よ急なりしかば、さすがの査爾斯も、亦他を顧みるの遑あらず、遂に惹安に拜謁を許せり。惹安が喜び如何ぞや。

査爾斯は先づ惹安を試みむと欲し、故さらに瑤冠寶衣を捨てゝ、侍衛の諸官と服を同うし、玉座を降りて遙かに臣僚の間に交はりて在りしが、惹安は徐かに堂に上りて、一瞥直ちに査爾斯を知り、進むで足下に跪いて曰く『仁慈なる陛下よ、妾はドムレミーの村の賤女にて侍り。在天の主、密旨を陛下に傳へしめむが爲めに妾を送りぬ。佛蘭西の國王たらむものは陛下にて侍り、何ぞ速に敵兵を掃蕩して、即位の大禮をレーム府に行ひ給はざる。願はくば、妾に兵馬の權と一隊の兵士とを假したまへ、妾は直に疴爾良城の急に赴き、誓つて英兵を殄滅して、陛下をレーム府に入れ奉らむ』と。音吐朗々、風姿凛として冒すべからざるものあり、査爾斯は覺えず容を正して其傳ふる所を聞きぬ。

（七）　紀明

かくて惹安は密旨を傳ふることを得たり、査爾斯は果して其言葉を信ぜしや否や。性來優柔不斷なる査爾斯は、己が疑惑を解くに足るべき十分なる證左を見るにあらずむば、惹安の所謂神託なるものは、毫も信を措く

に足らずと思ひしかば、聲望學識ある數多の碩學高僧等に命じ、ボアチエールの議院に於て、惹安を糺明せしめむと決しぬ。

惹安は報を得て少しも臆する色なく『妾を導きたまふものは神なり。たゞ其命じたまふ所を述ぶれば足るのみ。はやく妾を行かしめよ』と答へて、三月十一日ボアチエールに至れり。

あはれボアチエールの糺明こそ、惹安が運命の分るゝ所なりけれ。進められて國家の救主と崇められむも、退けられて君を僞るの罪囚と罵られむも、一つに其結果にあり。集まるものは誰れ〳〵ぞ、レームの大僧正を始めとして、僧正、大法官、樞密院顧問官、その他數多の碩學鴻儒、何れも難題を胸に畜きて、惹安の到るを今や遲しと待ちかけたり。

糺明は朝より夜に亘り、難問また難問、間斷なく次で至りしかども、惹安は少しも淀むことなく、その答辯の明晰なること、さながら快刀の亂麻を斷つが如くなりしかば、滿堂の人々、何れも舌を卷いて其智嚢の測り難きに驚き、遂に惹安が言に服せり。

糺明の結果は斯くの如く豫想の外に出でたりしかば、或は妖術を以て愚民を誑かさむとする魔女の族ならむことを恐れ、三人の貴夫人をして、親しく惹安が言動を吟味せしめしに、篤實温順、女性としての操行は一も缺くる所あらざりき。

こゝに於てか、惹安が名聲は頓に揚り、風評一時に喧しかりき。初めは狂女と誹りしものも、全く熱心なる愛國家なることを知り、さては拐兒と罵りし者も、眞に國難を救はむとて來りし神の化身なることを信じぬ。内宮廷に在る百官は勿論、外軍旅にある將卒に至るまで、皆擧つて惹安を敬ふに至りしかば、さすがに因循なる査爾斯と雖も、最早疑惑を夾むこと能はざりき。

（八）凱旋

さるにても、惹安は蕞爾たり一小軍隊を以て、如何にして痾爾良城の圍みを解き得べきか。これ査爾斯を始めとして、萬人の均しく危み且つ憂へし所なり。

査爾斯は即ち惹安が策を用ゐて、一隊の兵馬と、將帥の

權とを授け、且つ寶劍一口、鎧甲一領、白馬一頭を賜ひしかば、惹安は志望なかば成就して嬉しさ限りなく、直ちに鎧を穿ちて馬に跨り、威風堂々あたりを拂ふて見えしかば、かつては輕侮の念を抱きたりけむ、部下の將士等も、何時しか敬仰の情にうたれて、進むで是一少女の爲めに身命を擲たむと誓ひぬ。

紀元千四百二十九年、惹安は全く遠征の準備を整へ、一萬餘の軍隊を率ゐてシノン府を發す。僧侶の一列は其前を拂ひ、瀏喨たる音樂につれて、壯快幽玄なる讃歌を誦せり。

既にして惹安の一行は痾爾貝に近くや、城兵市民何れも赤子の父母に逢ひたるが如く、歡聲を揚げて其到着を祝しぬ。惹安は城中に入りて、その運命の危急なること、一刻も猶豫しがたきを見、日を期して一時に城門を打つて出で、周圍に築ける英軍の壘に向つて總攻擊を行はむと決し、將士を會して其部署を定めぬ。五月六日の天明くるや否や、矢叫の聲、劍戟の響き忽ち起りて、痾爾貝城の周圍は見る／＼内に修羅の巷と化してけり。

激戰二日にわたりて、兩軍の働きは實に目覺ましきものなりき。佛軍上は將校より下士卒に至るまで、悉く死を決して出で、差しかへ引き替へ、寄手の壘を襲うて大に英軍をなやましたり。英軍もまた死力をつくしてこゝを先途と防ぎ戰ひしほどに、佛軍稍や疲れて攻めあぐみたる色見えしかば、惹安はこゝぞ大事の場合と綵旗を風に飜かせて、自から眞先きに進み出で、矢石亂飛の間を馳せ廻つて、味方の兵を叱咤督勵し、身に重傷を負へるにも屈せず戰ひしかば、さしもの英軍も遂に支へがたく、亂れ立ちて敗走せしかば、佛軍は遂に英軍の根據を拔き、凱歌を奏して城中に歸れり。痾爾貝城の人民が歡呼の聲は雷の如く、勝利を祝する寺々の鐘の聲は、終夜城中に響きわたれり。

惹安が痾爾貝の城に入りてより、こゝに至るまで僅かに八日、さしも七ヶ月の長きにわたりし大敵の圍みを解き、滿城の人民を餓死の中より救へり。その威力の非凡なること、その勝利の目覺ましきこと、奇とやいは

む、怪とやいはむ、まことに人間の業には非ざるなり。

見よ佛蘭西の全土一たび英軍の蹂躙する所となりてより、一時の絶望の淵に沈みたる國民の士氣が、大旱の後に沛然たる雨を得し草木の如く、忽ち一道の光明を認め、猛然として振ひ起るに至りしは、實に惹安が賜物にあらずや。

查爾斯は遂にレーム府に入りて、莊嚴なる即位の大禮を行ひ、佛蘭西の國王となりぬ。時に七月十七日、惹安が天の使命はこゝに全く了りけるなり。

《九》生擒

痾爾良城の圍み全く解けて、查爾斯は既に王冠を戴だき、惹安が素念は悉く成就したりしかば、長く軍旅の事に拘りて、久しく功名の地に止まることを欲せず、查爾斯に向つて、はやく舊閭に歸りて牧羊犂鋤の業に從ひ、父母兄弟と共に安樂なる生涯を送らむことを歎願せしかども、王は深くこれを惜みて放つの意なかりしかば、言を左右に托して其請を許さず。惹安強いて去らむとしけるを、王を始め諸士百官等、切に止まらむことを望みてやまざりしかば、惹安も其情の厚きにほだされて我意を張つて去るに忍びず、心ならずも王の朝廷に止まれり。

あはれ惜しむべきは惹安が進退なりき。この時よく忍で舊閭に歸りなば、赫々たる聲譽の内に天命を全うし、姦佞なる小人の毒手にかゝりて、不幸の最期を遂ぐるが如きことはあらざりしならむに、一時の情實に拘束せられて、遂に百年の命運を縮むるに至りしは、悲しといはむ愚かなり。

さばれ、士は己れを知るものゝ爲めに死すといへり。人の知遇に酬ゆべきもの、いかで男子にのみ限るべきや。惹安が查爾斯の懇請を拒むこと能はざりしも、毫も名利に懸戀せしが爲めにあらずして、人情の忍びがたき所、まことに止むを得ざるに出で、深く咎むべきにあらざるなり。否、われは一掬同情の涙をそゝぐことを惜まざるなり。

紀元千四百三十年五月二十日、英軍遽かにカコムビーニユの城を圍まむとするの報到りしかば、惹安は王の

命を受けて救ひに赴き、寡兵を以て敵の大軍にあたり、士卒を勵まして幾度か勝利を得たりしかど、數千の援兵またもや來つて敵軍を救けしかば、味方の軍氣やうやく沮喪して引き足となりしかば、惹安は單騎踏み留まつて、追ひ來る敵を打ち拂ひつゝ、徐かき退きて城門に入らむとしけるに、こはいかに、門外の懸橋は既に撤去せられて、呼べど叫べど答ふるものなく、惹安一騎を鎖出して、敵の餌とぞなしてける。惹安は進退こゝに谷まり、敵兵の爲めに十重二十重に取まかれぬ。馬を縱橫に乘り回して、前なる敵を拂つて拂へば、後の敵また襲ひ來り、左の敵に向はむとすれば、右なる敵またせまる。心は矢竹にはやると雖も、遂に如何ともすること能はず、あはれ奇代の女丈夫も、運拙うして英軍の擒となれり。

さるにても、憎むべきはコムピーニユの太守なりけり。英軍遽に襲ひ來りて、狼狽爲す所を知らざりし危機に際し、惹安一人諸將に先きむじて此處に駈けつけ、城中の人民を救はむとせる好意に酬はむ心もなく、その苦戰の狀を傍觀しながら、これを援けむともせざるのみか、却て惹安が大功を妬み、獨り城外に鎖出して、遂に死地に陷れたるが如き、殘忍といはむか、酷薄と稱せむか、虎狼にたとへむも猶ほ足らざるを覺ゆ。

〔十〕焚刑

流るゝ水の行末と人の身の上とは、げに測り難きものぞかし。かつてはドムレミーの一村女として、野に群羊を牧せし身の、一たび天の命を受けて國家の救主となり、兵馬の權を握りて三軍に將となりしに、時利あらず今は囚虜となりて獄裡に繫がるゝに至りぬ。惹安が感慨果していかに。

英王は惹安をにくむこと蛇蝎の如く、その肉を食ふもなほ飽き足らずと思へるほどなれば、ルーエンの法數裁判所に移して罪を正さしめしに、糺明の結果、無殘にも火焚の刑に處せらるゝことゝなりぬ。惹安は固より心に期する所なれば、敢てわるびれたる擧動もなく、從容として刑場に向ひぬ。鐵鎖に繫がれながら歩む姿は、屠所の羊に異らず。沿道の人民はいふまでもなく、無

情なる護衛の兵に至るまで、涙に袖を濡らさゞるはなかりき。惹安やがて最後の祈禱を終り、梟木に身を托して瞑目すれば、火は積み重ねたる薪の束に點ぜられしよを見る間もなく、野風さつと起りて、火烟高く柱を包み、天色濛々として雲黯憺たり。時は維れ紀元千四百三十一年五月三十日、驍勇ならぶものなかりし絕世の烈女も、あはれ野火一片の烟と化してけり。

上下五千載、東西三萬里、歷史は永く、人は多しと雖も、眇たる農家の一女子を以て、回天の偉業を世に立てたるもの、惹安を措いて、他に何處にか求むべき。二十年の生涯は短かけれども、佛蘭西千年の社稷はこゝに全きを得たり。まことに蓋世の奇傑、絕代の女丈夫、前に有ることなく、後に見ること能はず。位人臣をきはめ、壽は百歲をかさぬるとも、なほ足らざるべきに、天恩勞に酬ゐずして、罪なきに久しく囹圄の裡に苦められ、妙齡僅かに二九に過ぎずして、世にも稀なる濫刑に遇ひぬ。哀れといはむか、いたはしといはむか、ルーエンの原頭風寒く、鬼哭怨を傳ふること今に四百年。（をはり）

王昭君

文學士　久保天隨

花咲きにほふ漢宮をあとにして、心細くも、鬼泣く胡地の巖陰に身を寄せた王昭君の名は、昔から薄命な女の引合に出されて居るから、知らぬ者もあるまいが、その終始を審にして知つて居る者は、先づ少いと謂つても善からう。元より舊い時代の事で、記述も備はらず、今さら明にし難い事情もあるからであらうが、實は甚だをかしい譯である。そこで今ざつと辻褄の合ふ樣に、諸書に出て居る斷片的事實を綜合して、試に話して見よう。

王昭君は、字を嬙といつた。後世になると、晉の文帝の諱に觸れて居るとかいふ譯で、明君と記すことが普通になつて居る。もとは南郡秭歸の人で、良家の生れだと傳へてある。今、舟に乘つて蜀から出て、神女が楚王の夢に入つたといふ巫山の下の早い流を降つて、なほ數十里すゝむといふと、名さへ床しい香渓とい

ふ川が南から來て落ち合ふことになる。そこで、其流について溯ると宋玉の居つた宅址などいふ者もあつて、水源に近い山奥に、今でも昭君村といふ處が殘つて居るが、こゝが當年の佳人が生れた土地だといふことである。唐の杜甫の詩にも、群山萬壑荊門赴、生長明妃尚有村とあるから、疑の起るべき筈がない。或は昭君を指して、齊國王襄の娘だといふけれど、この方が寧ろ怪しい。

御存の如く、昭君は生れて天成の美質、儀容絕麗であつた上に、節を以て聞えたからして、自ら引手あまたといふやうな風で、國中の長者、爭つて之を求めたけれども、應じない。やがて、年十七になると、良家の子といふ資格で、忽ち選ばれて、後宮に入ることになつた。これが、抑も後年の不幸の本であるといふことは、自らも知らなかつたのである。

昭君の才貌を以てすれば、六宮の粉黛たちまち顏色なく、おのれ獨りで房を擅にすることも出來る筈であるが、そう成らなかつたに就いては、頗る譯がある。俗說だから、あてにはならないが、先づ下の如しだ。當時の天子であつた元帝は、宮中進御の婦女が隨分多くて、一一めぐり見るといふ譯にも行かないからとて、一つの妙案を考へ出された。それがどうだといふと、寫眞術などは夢にも知らなかつた世のことだから、有名な畵工を幾人となく雇ひ入れて、あらゆる宮人の繪姿をかゝせ、之を御覽になつて、さて御氣に入つた者を御寵愛なさるといふことであつた。そこで、宮中の女どもは、畵工に賄賂をやり、つとめて美しくかいて貰ふといふことになり、多きは十萬金、少きは五萬金といふ相場にきめられた。昭君なども、少しは畵工に握らせれば善かつたが、もと〳〵かゝる事は嫌でもあり、自分は此位の標致であるから、別に善くかいて貰ふにも及ぶまいと澄して居つた。ところが畵工は之を心憎しと思つたと見えて、わざ〳〵醜女にかき立てゝ仕舞つた。だから、召し入れらるゝこともなくて、宮中にありながら、君の御顏さへ拜む折がなかつた。

しかるに、竟寧元年に、匈奴の王の呼韓邪單于といふ

者が入朝して、多年の勤勞、漢の爲に盡したが、どうぞ漢朝の婿にして下され、そうすれば親類の續き合から、今後一層、御爲になる樣にするとの事であつて、如何にも無作法きわまる事だけれども、前にも例のあることで、元帝は之を許し、やがて宮女を下し賜ふといふことになつた。一說には、此折昭君が自ら進んで、願ひ出でたといふけれど、これは塡逆と思はれる。元帝は例の繪を繰りひろげて、王昭君のを見られ、これはさばかりの美人でもないから、呉れてやつても惜しくないとて、いよ〳〵昭君が選に當てられて仕舞つた。さて單于が國に歸るからとて御暇乞に出て來ると、宮中には文武百官を會し、儀式を盛にし、其塲で昭君を引き出して與へらるゝことになつた。そこで、元帝が始めてまことの昭君を見らるゝと、こはそも如何に、繪にした姿とは全く反對であつて、實に無類の美人であつた。古書に之を形容して、應對を善くし、擧止閑雅、貌は後宮第一たりしともいひ、豐容靚飾、光漢宮に明かにして、影を顧みて徘徊し、左右を竦動せしむ」とも書いてあるから、今更事々しく述べるまでもない。元帝もしばしはあきれて、やがて惜しいと思はれ、一たび之を留めやうとされたけれども、區々たる一婦人の爲に大國の信を異域に用ひ、又もや塞外の兵を動かす樣な事があつては得策でないと、さすがは漢家賢明の天子だけに、思ひ切も善く、目を塞いで單于に賜はつたといふ次第で。

昭君がはるけき胡地の旅の哀れは、いふまでもないことであつた。唐物語には、その心の中を思ひ遣つて、數句を以て之を寫して居る。故郷を戀ふる涙は道の露にもまさり、親はらからに立ち別れぬる嘆は、繁き山の行末はるかなり。かゝるまゝには、唯だ音をのみ歎けども、何のかひかはあるべき、」といふところなど、誠にさぞかしとも思はれる。この前に江都王建の娘が、烏孫といふ夷國に嫁したことがあつたが、其折は馬上に琵琶をもたせ、道すがら之を彈じて、僅に其憂き思を慰めたといふが、昭君を胡地に送つた時も、之と同じで、戎服をつけて馬に上ぼらせ、また琵琶をあてがつた。昭君は馬上で新曲を造つて、其中に哀怨の聲も少くなく

なかつた。今に昭君の詩だとて傳はつて居る次の一首も大方此折に作つた者であろう。

秋木萋萋、其葉萎黃、有鳥處山、集于苞桑、養育毛羽、形容生光、既得升雲、上遊曲房、離宮絕曠、身體摧藏、志念抑沈、不得頡頏、雖得委食、心有徊徨、我獨伊何、來往變常、翩翩之燕、遠集西羌、高山峩峩、河水泱泱、父兮母兮、道里悠長、嗚呼哀哉、憂心惻傷、

身を以て鳥に比し、羽が折れて、あらぬ方に舞ひ落ちたといひ、父母を呼び旻天に號哭せむばかりなる心の悲み、これが千古の詩人が同情を寄する點である。

單于はすでに昭君を賜はり、とんだ甘い事になり、その美を見て喜悅に堪へない。そこで國に歸りて後、之を號して寧胡の閼氏といつた。寧胡とは「胡之を得て國以て安寧なり」といふことで、閼氏とは單于の嫡妻といふことである。かくて白髮頭をかゝへたる呼韓邪單于と一處に昭君が穹廬の中に棲んで居たさまは、さながら、石に花の咲いた風情であつたろう。そこで昭君は頗る自ら滿足しなかつたと見えて、次の樣な意味の手紙を、千里の遠きより、わざ〳〵元帝に送り、己れの不幸を嘆いたことがある。

臣妾幸得禁臠、謂身依日月、死有餘芳、而失意丹青、遠竄異域、誠得捨軀報主、何敢自憐、獨惜國家黜陟、移于賤工、南望漢闕、徒增愴結耳、有父有弟、惟陛下幸少憐之、

まことに憐れな手紙である。その畫工を怨んだのも無理とはいへぬ。さなきだに、元帝は悔恨の情に耐へなかつた故に、こゝに新に人を遣はして、畫工の家を取調べ、みな棄市することになつた。當時の人物畫家といはれた毛延壽や、安陵の陳敞、龔寬、及び下陽の陽望、または樊育などいふ手合は、罰せられて、殺されたのである。世間普通には、毛延壽ひとりのみが、昭君を惡るく畫いた樣に取沙汰するけれども、彼等はすべて連帶責任を以て罪せられたるので、誰かまことの罪人であるべきか、其程は今から知れぬのである。

昭君は、この厭な〳〵夷の老爺にかしづいて、止むを得ず、契をこめ、かなたからは頗る尊敬せられ、遂に伊

屠智牙師といふむづかしい名の男の子を一人もうけるまでに立ち到つた。これは後に右日逐王となつた人である。かくて三年もたつといふと、不幸にも呼韓邪單于は老病の爲に死んでしまつた。昭君は氣に入らぬ夫であつたけれど、定めて涙ぐらゐは流したであろうと思はれる。

その初呼韓邪單于は昭君を娶る前に、嬖妾が二人までもあつて、その若い方の妾の生んだ子の雕陶莫皐といふものが、嗣いで立つことになつた。然るに、匈奴は未開の野蠻人であるからして、父が死ぬといふと、其母を妻とすることは、一般の風俗で、別に怪しむべき者としない。まして昭君は漢人の種で、たつた三年を過ぎたばかり、色香は失せぬ昔のまゝの美人であるからして、新しき單于は無理にせまつて、自分の義母なる義理にも拘はらず、之を妻として、やがて娘を二人までもうけ、長を須卜居次といひ、小を當于居次といつた。これは可笑な名だが、居次といふは公生といふと同じことであるそうな。かくの如き次第で、昭君はその後滿足もしまいが、まゝ樂々として胡地の人となり、後に老死したといふことである。これは漢書に見えて、むしろ正しき事實であるが、頗る人意に快くない事柄である。何となれば、胡俗に從つて、小夜衣のつまを重ね、兩夫に見え、しかも義子と慇懃を通ずるなどといふことは、言語道斷の次第で、吾々はむしろ次の説の眞ならむことを希望するのである。しかし、前にも言ふ通り、今さら熟れとも團扇は揚げ悪くい事である。

その説によると、昭君が生んだ子に世達(一本に世違と作る)といふものがあつて、父に代つて位を嗣ぎしとき、胡法によりて己れの生みの母に妻とならむことを求めた。實に不埒千萬の事である。すると、昭君が御前は夷の禮をするか、又は開けた漢の禮をするかといはれた時、世達は、我は胡禮をせむことを願ふのであるといつて、意地張つて聞かなかつた者だからして、昭君は之に從ふことが出來ないといふ決心からして、憐れ無慘にも、とう〳〵毒藥を呑んで死んだといふことである。かくいへば、昭君は漢禮に從ひ、また兩夫に見ゆ

ることを欲しなかつたもので、矢張見上げたところがある。昭君ともいはれるものが、死ぬのが厭で、汚はしい夷の眞似をしたといへば、之を哀れとて歌つてやるべき理由もない。おふもに昭君は、苟くも夫と定まりし呼韓邪單于に對して、貞操を守り、やがて死んだものであろう。

いづれにしても、昭君は死んでしまひ、正當の手續を經て埋葬されてしまつた。一體夷の地は、氣候が寒いものだからして、草がろく／＼生へない。或本には白草のみと記してあるし、或本には草皆黄としてある。唯だ昭君の墓の近傍ばかりは、草が青々と生へ、他と違て居る。そこで之を青塚を呼んだ。其池はむかしの豐州の西六十里で、振武軍金沙縣の西北であるといふことである。わが國には鬼女の居たところだとて黒塚と呼ぶ地が、今の岩城の安達郡にある。此にくらべると、青塚の名は、いかにも優しく、兎まれ角まれ、美人の墓につき／＼しきやうに思はれる。

昭君の事蹟といふは、先づかくの如くで、外に云ふべきものはない。之を詠じた詩の中で名高いのは、石季倫、李太白、劉長卿、白樂天、王荊公、高青邱などのであるが、一一擧ぐるも煩はしいだらう。なほ一言すべきはこんなつまらぬ短篇ながら、これでも多少の書籍を參考したといふことである。之を擧くれば、重なるは漢書、西京雜記、全唐詩、太平寰宇記、大明一統志、情史などである。

うめか香にたくへてきけば鶯の
　こゑなつかしき春の山里　　西行

春のこぬ宿さしりてやうくひすの
　こなたの竹に枝うつりせぬ　　師光

ふる雪に色はまかひぬ梅の色
　香にこそ似たるものなかりけれ　　躬恒

うづもるゝ軒端のうめや咲ぬらむ
　にほひにさゆるゆきの下風　　家隆

學術

蓐婦の衛生

醫科大學　石原笠軒

摘要
(産蓐の定義)産蓐の期限、蓐婦の定義
(産蓐經過の概略)産蓐熱の危險、子宮創面の治癒、子宮の縮少、惡露、發汗、乳汁分泌
(蓐婦の看護)蓐婦の身體には大なる弱點を有す、一國衛生の進歩と家庭衛生、身體及び精神の安靜、清潔、産蓐室の事、飲食物、授乳の事、衣服、體溫を測る事、運動と外出

◎産蓐の定義及期限

凡そ婦人が分娩を致しまして、それが正規の通り、日立を取るならば、普通、六週間でもつて、その身體が元の様に回復して來るものであります、即ち妊娠前と同様の身體にかへるのであります、此期間を稱して産蓐と中します、

◎蓐婦の定義　蓐婦とは、簡單に申せば産蓐經過中の婦人を指すのです。

◎産蓐經過の概略

産蓐期にどう云ふ風に、身體が回復してくるかと申しますに、御承知の如く、分娩には、小兒のうまれた後に、後産がうまれます、これは、母親の子宮の内面に付着してゐた胎盤でありまして、親と子との界をなすものであります、これが子宮の内面から剝離して、出てくるので、其跡には大きな創面が殘るのです、凡ての創面なるものは、これからして、悪るい病毒の侵入門を爲すものでありますからして、此子宮の大いなる創面も、また甚だ恐るべきものであります、

◎産蓐熱の危險　産蓐熱と申して、産後に發熱致し、終に、不幸にも死に歸するのは、主に此創面より病毒が侵入するに原因するので御座ります、産蓐中には先づ、

◎子宮の大創面が治療せんければなりません、これは、分娩後、一日間は出血を呈せる創面でありますが、

それから日を經るに從へ、漸を以てなほつて、參ります、

◉子宮の縮小　大きくあた處の子宮が、段々と、小さくなッて參ります、分娩後凡そ、二週間を經れば、素人の方でも、外から最早觸知することが出來ないことがわかる樣になります、其他凡て、妊娠、分娩に關係したる器官が皆元の樣になります、獨り、乳房のみはこれと反對であッて、盛んに乳汁の分泌を營む樣になるのであります、

◉惡露　分娩の後では、必ず、下りものがあるのです、之は產科の方で、惡露と名づけますが、初めには、柔軟なる、粘る樣な、薄き皮の如きものを混じたる血液で、四五日すれば、また、薄い血の樣なものに變じ、其後、再變して、あまり色のないものとなります、それから後は何も下りないので、之は前に申したる、子宮創面の全く治癒したる證據であります、

◉發汗　分娩のあとで、必ず、全身からして、温き汗が出るものであります、分娩を致した後、一日間が殊に多いので、之はあたり前の事であるからして、決して、心配なぞしてはなりません、

◉乳汁の分泌　乳汁は初めには分量も少く、色も淡いのでありますが、段々と澤山出まして、四五日目に達すれば、充分の分量となり且滋養分に富める乳汁となるのです、

以上が、ザッと產蓐中の經過の梗概で御座ります、これより本題に移ります、

◉褥婦の看護法

却說、分娩と云ふことは、決して病的では無く、全く生理的であつて、當り前にゆけば、少しも心配も何もいらないわけのものであります、從て、蓐婦も決して病人ではありません、けれども、分娩によつて前記の如く、身體の一部分に大なる創面を受けましたし、それから澤山の失血もしましたし、分娩機轉の間に、隨分痛みにも苦しみましたし、それでもつて、

◉蓐婦身體の弱點　身體に充分の弱點を持つてゐるわけなのであります、それにも拘はらず、田舍や、陋巷の

愚婦たちは、誠にはや、亂暴極まつたもので、吾々の眼から見れば、どうしてあんな事が出來るであらうかと云ふ樣な處置をして、一向平氣なものであります、しかし之は、學問もなく敎育もなく、身體の衛生も何も知らない者のする事であつて、唯其愚を憫むのほかはありません、幸にして事無く經過すれば何よりの仕合でありますけれども、萬一、不幸なる經過を取りました時には、彼等は、只、產後の日立が惡かつた爲めであるとか或は難產の爲めであるとかに罪を歸して、全く平氣で居るのであります、益々憐むべきではありませんか、

◉衛生の進步と家庭の衛生　我邦の文化も、年々、進步致まして、女子敎育も追々と世人が氣を付ける樣になりました、凡て、一國の文明てふことの反面には、家庭の進步發達てふ事を意味してゐるのでありますが、私は、常に我邦衛生の程度のいたく低いのを歎じてゐる一人でありまして、殊に、學校敎育に衛生學を遍く組入れ度く希望してゐます、就中、女子の學校敎育には、何處でも、是非とも、衛生學を敎授し、それに地理とか歷史とか云ふ樣な學課と同等なる地位を與へ度いのであります、そうなれば、一家の衛生も自然に進みます、從て一國の衛生も發達してゆくに非常な便利であります、元來、一國の衛生を進めるのには、一國全體の文明が進めねばならぬですけれども、我邦、今日の狀態では殊のほか家庭の衛生てふ思想が大に缺乏してゐますから、これを進めれば、一國衛生を進めるの一大捷徑であらうと考へまして、先年以來、家庭に衛生思想を注入せんことを思付き、不健ながらの筆を執ッてゐるのであります、それで、私のは、可成、學理を主とし、實地を副と致し、皆さんの頭腦に衛生學と云ふものゝ學理が浸み込めば、其後は、皆さんの實地應用におまかせ申し度いのであります、處で、お產の事に就きましても根が病的で無いからして、多くの場合は、わけなく、善良なる日立を取るがゆゑに、或は皆さんの內にも、誤ッて、彼の無敎育の輩に似た樣な考で、何に、理窟はそうでも、實地はそうも心配すべきで無いとの御考でもッて、案外、不衛生的の擧に出でられないとも限らぬと考

へます、けれども、學理は決して實地と離れたものでなく、殊に、産科學の如きは、實地の研究からして、學理を産み出したる處が最も多いので、今一々、例を示しませんけれども、實際そうなのであります、

前にも申します如く、蓐婦は、病人では無いけれども恐るべき弱點を備へてゐるので、一歩を誤れば直ぐに、生理的の境を蹈み越して、忽ちに、病理的となり婦人科病の範圍内に入るのであります、西洋の諺にも、何者かそれ産蓐に於ける如く、しかく生理的と病理的と兩々相密接して併び立つものあらんや、と、これをもッても産蓐の決して輕んずべからざる事が知れます、

然らば、蓐婦には、如何なる注意が必要なのである乎と云ふに、

◉身體及び精神の安靜　と云ふ事が最も急務で御座ります、既に子宮内面に於て、大なる創面をもッて居る事でありますから、

◉身體を安靜　にし置かない時には、易しく出血し來るようになるのです、外科の療治をした後で、身體を安靜にしてゐなければならぬと同じ事であります、出血を釀す爲めに平靜にしなければならぬばかりでなく、其創面をして早く回復せしむる爲めにも亦安靜が必要であります、加之、身體を動かす時は、病毒侵入の機會をば、一層多くするのであります、若し蓐婦が安靜を守らぬ時は、どう云ふ惡い事が起るかと申さば、右にしるしましたる如く、創面が早くなほらぬゆゑに、惡露が永く下りて來るし、それに血液も混りますし、從つて、身體が弱てくるわけであります、其ほか、子宮が弛緩して終に子宮の下垂或は一層出てくれば脱出する樣なこともあります、病毒が侵入すれば恐るべき産蓐熱も起して來ますでしよう、

かゝる次第であるから、産科學の敎ふる處、實地の鑑例の示す處に從へば、蓐婦たるものは、少くとも九日間は床に就きてゐなければならぬのであります、無智のものは、隨分三四日の後に、起きて働くのですか、これは論ずるは及ばぬ暴擧と云はなければならんです、

で、先づ最初の二日と云ふものは、必ず、仰臥にねてゐる

のです、其あとは、身體を動かすに、極々氣を付けて、そッとせんければならぬのです、假令、寢換をするとか、横になるとかの時にそうであります、床の上でも起立と云ふことは、最初の五六日間は、決してせぬ樣に、愼まんければならぬのです、從て、大小用は、便器を用ゐて取るべきのです、大用は、大抵、産氣の付きし時に、産婦自からが辨ずるか、或は、産婆が灌腸でもッて取るのですが、分娩の後では、大凡そ、第四日目位から再現するものです、若し、これが無く、且つ、氣持が惡るければ、直ぐに醫士産婆に言ひ付けるべきであります、小用の留ることは、甚だ險呑のものであるゆゑに、若し分娩後、廿四時間をたつも通利無き時は、産婆なり醫士なりが通利を付けてくれるものですが、皆さんが、豫て心得てゐてよいのですからして、素人ども出來ることを御話申さんに、清潔なる布片を、一旦、綺麗な釜の内で煮沸て、これが、程良き温かさに冷却したる頃、石鹼にてよく洗へたる手にて、程良く絞り、其温きまゝで、蓐婦の臍の下邊に當てゝやるのです、そうすれば大抵通利するのであります、尙ほこれでも効が見えねば、素人ですることはやめて、産婆なり醫士なりに、おまかせなさい、大小用を辨ずるにも可成蓐婦の體を動かさぬ樣にしたいのです、

◉精神の安靜 は最初の一週間は極めて必要です、蓐婦は、隨分感じ易いし、また、少しの事でも身體の方に影響を及ぼして、案外に大害を來すものであります、であるからして、出來るだけ刺戟を與へぬ樣にせんければならぬのです、家事向の件や、其ほか、心配になる樣な事は無論、きかさぬ事とし、物言や音のきこへぬ樣に注意し、談話をするにも、可成、無邪氣な主意のことを話す樣にし、それも永くはせず、又見舞人ありとも室には入れず凡て用事無き者は、決して室に入らぬことゝ定めるがよいのです、憤怒、憂悶、恐怖、驚愕、等の激情は、總じて害大なれば、普段から、こんな事に感ぜぬやう注意すべし、

身體精神の安靜に次いで、緊要なのは、

◉清潔と云ふこと であります、此清潔とは、通俗の語

で申したのでありますが、其實は、甚だ、八釜敷意義で御座ります、醫者の方で申す、消毒の事です、消毒と云ふことは、誠に大切の事であつて、仲々簡略には御話の出來るものではありませぬ、攻めて、他日に申上ぐる事と致しましよう、けれども此處で、鳥渡御話して置き度いのは、前申した病毒侵入と云ふことは殆んど全く消毒の不完全から起ると云つてもよろしく、産蓐熱のやつてくるのはこれが結果であつて、昔日産後の日立が惡いとか、難産のせいだとかいつて居たのは、多分は、消毒の不完全から、人爲的に招いだ惡結果にほかならずでしよう、

それで、先づ耻部の清潔が就中第一番に肝腎です、定規として、最初の一週間は一日二回づゝ、煑沸したる微温湯を以て耻部を洗ひ、其處は、消毒充分の脫脂綿或は綿紗にて清拭し、次に百倍乃至三十倍の石炭酸水を同じく消毒せる脫脂綿或は綿紗に浸たし、よく絞りてこれを當て置くか、或は、水楊酸綿を當て、更に其上から、消毒せる脫脂綿次に消毒せる布片を重ぬべし、かくして丁字形の繃帶を掛け置くべし、惡露等に汚れたるものは凡て、蓐婦の近くに置くべからず、直ちに其室より取去りて燒却又は無害の處に埋棄するか、東京ならば、御承知の通り胞衣會社の手に渡すべきのです、大小用の後では又必ず、當てるものを取換ふべし、扨てまた、此取扱をする者の手は充分に消毒してかゝらねばなりません、産婆の役目であるけれども、若し皆さんが、なさるならば、一旦湯を煮沸し、これが冷却するを待ちて消毒したる金盥（石鹼水又は曹達水を綿につけてよく內部、緣を清拭し、次に、三十倍の石炭酸水を同じく綿に浸して清拭す、最も宜きは、釜に入れて煮るにあり）に移し、石鹼を用へて手を充分に洗ひ、殊に指爪は前以て剪除し置き、此處でもつて、刷毛にてよく／＼拭擦、手、指、爪を充分に綺麗にす、次に、消毒せる脫脂綿に亞爾箇保兒を浸たして、今洗へし部分に、こすり付け、それから五百倍の昇汞水に手を入れてまたもや充分に洗ふのであります、如斯して始めて消毒が出來るわけであります、しかし餘程丁寧にせんければなりません、

形だけで、ほんの心持だけ消毒したつて何にもなりませんのです、近頃養成せられたる産婆は皆此通りを履行するのです、若しそうせんならば、反則であるからして、充分詰責して、差支ありません、海綿は決して用へません凡て恥部に當るものは悉く皆消毒の完全を要するのです、

次に御注意を致したいものは、

◉産蓐室 の事です、元來、蓐産室と産室とを別々にするのが規則でありますけれども、日本で、中等社會、尙ほ、それ以上でも、そう云ふわけには參り兼ねます、それゆゑ、産室が産蓐室となるのです、先づ、空氣の流通のよい樣にし、季候に從ひそれ〴〵の準備を施し、冬なれば、暖爐なり火鉢なりを置くから、一層通氣をよくせんければなりません、と云ッても風が直接に蓐婦に當る樣ではいけないのです、新鮮佳良の空氣は、創面の治癒を助けるのですから、天氣がよければ障子を明けて空氣の交換を謀り、尙ほまた、常に室內には塵埃のたまらぬ樣に氣を付くべし、これには、はたきをかけるわけにはゆかぬから、固く絞りたる雜巾でもッて床や柱や疊の上を清拭するのです、不潔物は直ちに室外に去らんければならぬのです、室內の溫度は高からず、低からず、凡そ華氏寒暖計の六十度を標準と致します、餘り暖かに過ぎて、發汗の多いのは、蓐婦の爲めに有害であります、室は光線の受けをよくし、決して陰暗にすべからず、日光は新鮮なる空氣と同樣に必要です、

お床は、若し惡露に汚れば直ちに取換へ、且つ常に惡露に汚れぬ樣に他の綺麗なる布で、小なる蒲團を作くり敷いて置くのであります、

尙ほ次きに御注意を致すのは

◉蓐婦の飲食物 はどうであるか、これは、餘り八釜敷云ふべきものではない、けれども、話して見やうならば可成度々大用にゆかぬ樣、即ち當分はあまり便にならぬ物が良いのである、そして蓐婦は、勿論飢へる程に少食でもいかんが、又あまり澤山はやらぬがいゝです、そしてまた、平素の習慣ある事ゆゑ、何人にも一律には參りません、初めの三日位は、あまり食を欲せぬもので

すが、凡そ液質に近いもので、例令、牛乳とか、肉羹汁、鶏卵、葛湯、重湯、など結構です、第四日目頃から段々と、あたり前の固質のものを混ぜてやり、鮮魚の刺身やはらかき鳥肉、お粥、パン、等の類を與へ、二三週間經ては通常の食物に復します、飲料では、濃き茶、強き珈琲、チヨコレート、などは、いけません、お酒などは、最もいけません、藥として用ふる他にはやらぬがよいのです若し、下痢でもあれば、直ちに醫士を迎へる樣にせんければならぬです、

次に述べたいことは

◎初生兒に授乳　する事であります、先回哺乳に關して鳥渡申上げ置きましたれば、此處には別に御話しませんが、お産をしてから凡そ何時間たては乳を與へてもよいかと申すに、母が分娩の疲勞から回復し、生兒が現世に於ける、第一の睡眠より覺醒せる時でありまして、産後六時間乃至八時間、多くて、十二時間ののちであります、此時分の乳汁は、あたり前の乳と成分が違へ、且つ薄いのですけれども、生兒に與へるのがよいのです、生兒の胎便を早く逐へ出すの効があります、最も前回御話申した通り母が病氣があれば授乳を禁ずるのです、若し母が身分の乳汁を與へ、ことの出來無い場合には、産後一週間位より段々と、流動性の食物を控へる樣にし、乳房は清潔で、やはらかき布片を以て包み置くのであります、

◎蓐婦の衣服　は勿論清潔を主とし、また、濕ればこれを取換へねばなりません、

◎體温　は一日二回朝の内と、午後と、腋窩で測ることを忘れてはありません、産後に三四日が殊のほか肝要です、少しでも高ければ、醫士を迎へねばならぬであります、これは看護人の必ず忘れてはいけない事であります、

◎運動と外出　産蓐が無事で、一週間、又は前記の如く、少くとも九日を經過せば、毎日一二時間位は床を離れてよいのです、三週間すれば、力の入らぬ運動や仕事はしても差支無く外出は、四週間經たねばいけないとしてあります、但し、これは、一般、ひつくるめての規則で

あつて、各人の慣習、體質に應じて、多少の加減を致してもよいのです、呉れ〲も御記憶になり度いたのは、六週間を過ぎねば産蓐は終らぬと、云ふこと、身體が元の通りにならぬと云ふことで御座ります、

前に述べました內で大切なる事柄どもを簡畧に規則の樣なものに作りて列べますれば、左の如し、

一、産蓐の間最も重要なるは、身神の安靜及び清潔なり

一、蓐の期限は六週間なり

一、分娩後二日間は仰臥すべし、起きる事は五六日間は禁制なり

一、産婦は分娩後少くとも九日間床を離る可からず、

一、室內運動其他、努力を要せさる運動は少くとも十日又は二三週間の頃を待つべし

一、外出は四週間頃より始むべし、人力車の劇しく動揺するは害あり、

一、産室の溫度は華氏六十度を以て標準とし空氣の流通、日光の投射を善くすべし

一、食物は初めの內は可成流動性のもの、柔かなるものを主とし、二三週間を經ば、常食に復す、

一、發熱ある時、分娩後廿四時を經るも小水の通ぜざる時、四日を經るも大便を通ぜざる時は醫士を迎ふべし、

一、體溫は必ず每日二回宛測るべし

一、初生兒に授乳するは、分娩後凡そ六時間、乃至八時間遲くて十二時間の後始むべし

日本名蹟雜話

文學士 喜田貞吉

◎京名所、上(山城の名蹟のつゞき)

延曆十三年に、桓武天皇が都を此所に遷し給ひてからこのかた、時に盛衰の差はありとも、何しろ千百年に近い年數の間、歷代の帝都の地で有つたが故に、此京都には名蹟殊に多く、至る所として名所ならざるは無しと云ふ有樣あり、されば諸國の老弱、別しては一向宗の門徒の人々など、春の日永にもなれば、汽車の便を藉りて各地より集まり、御本山に詣でゝ後生の大事を願ふ序に、周ねくこれ等の名所を見物して、歸國の後のお咄の種とするもの、年每に引きも切らず、人間一生に一度は誰も京名所見物は爲ねばならぬものゝ樣に、何國にも言ひ囃すなり、かの忠臣藏のお石の臺詞に、金閣寺拜見

ならよい傳手があるぞえぞ、名所見物を勸めたのも、強ちにお世辭のみにはあらざりしなるべし、されば我等も、此等の人々の尻について、京名所を一巡せん、東海道鐵道の京都驛、即ち七條の停車場で降りたなら、すぐ北に方つて極めて大きな寺を見ん、之れ即ち○○○東本願寺なり、これは先年火災の後、更に新築したもので、本堂の大きなる事は、恐らく京都第一ならんか、此寺より西五六町なる所に、○○○西本願寺あり、これも結構東本願寺に劣らず、此東西兩本願寺は、各一萬以上の末寺があつて、信徒日本全國に周ねく、宗教上の勢力、他に之と肩を並べるものなし、もと本願寺は、眞宗即ち一向宗の開祖親鸞上人。見眞大師の女の、覺信と云ふ尼が、山科に建てたのが始まりで、其後他宗の人々の嫉みから、一旦破壞せられたので大阪に移り、暫くは石山本願寺と云ひて、今の大阪城の所にありしに、勢力の盛なるより遂に織田信長と一大衝突を始め、其和睦の條件として、當寺の門佳光佐即ち顯如上人は、此石山をも引き拂へり、然るに新門主の光壽と云ふ人は、極めて盛んな人にて、ムザ〱此要害堅固なる城を明け渡すを承知せず、檄を門に傳へて籠城の用意迄もした故に、信長は怒つて急に之を攻め潰さうとし、顯如上人光佐は此時已に紀州鷺の森といふ所にありしが之を聞いて大に驚き、爲に一時光壽を義絕し、本願寺の跡目は弟の光昭即ち准如上人に讓る事と成りたり、然るに間もなく信長死して事も穩便に治まり、秀吉の時に京都の六條に移つて大建築を起したのが、即ち今日の西本願寺のもとなり、次で江戸大阪と立ち分れて、關が原の戰爭を成つた時に、右の光壽は早く東に赴いて德川家康に謁し、家康は本願寺の勢力の極めて恐るべき事を、豫てよく承知し居る故に、此光壽を引き立てゝ、更に本願寺の東の方に土地を與へ、全く西のと同格の寺を建てしめ、末寺をも隨意に分屬せしむる事としたり、玆に於て光壽即ち敎如上人に心を寄するもの、又は德川家の威光に從ふものは多く此方に附き、こゝに東西兩本願寺は對立して、一向宗の勢力は全く兩分する事と成れり、此事は恰も慶長七年の事で、今

は丁度其三百年目に相當する所から、東本願寺では、盛に其分立の紀念の爲に法要を行ふとの事が新聞などに見ゆる樣なり、兩本願寺分立の由來ほゞ右の如し、されば西は本家なれども弟の筋なり、東は新立ながら兄の筋にて、殊に德川家に對しては頗る羽振りの宜しい方なり、かた〴〵相對立して下らず、今日に至つても、西が本願寺派と云へば東は大谷派と云ひ、西が其稱呼を畧して本派と云へば、東は大派と云い、西が一萬圓寄附する場合には東も一萬圓寄附すると云ふ樣な風で、東西兩本願寺は確かに佛敎界の東西兩大關の地位を占むるなり、

西本願寺から西南十四五町、鐵道を横つて先きに高き塔の見ゆるは、眞言宗の總本山敎王護國寺即ち

○○東寺なり、此寺は、もと桓武天皇延曆遷都の後に、當時の平安京の最南端、即ち九條に地を撰び、平安京中央の大通なる朱雀大路を夾んで左右に東西兩寺を興したのが始まりで、次で嵯峨天皇の御世に東寺を弘法大師に賜ひ、西寺を守敏僧都に賜ひしが、其後西寺は早く廢れしも、東寺は今日に至る迄根元の位置に繼續せるなり、東寺の西二町餘、

○○羅城門の址あり、石を建てゝ其場所を示す、羅城門は平安京南方の入り口で、朱雀大路の南端にありしものなるが、源賴光の頃には、此地方は既に荒れて人もあまり通はなんだものと見え、鬼が住んで居たとの有名な俗說もあるなり。此羅城門址から北へ、一條の眞直なる道路あり、續く事五十四五町、之を

○○千本通と云ひて、今は大半野中道となり居れども、之れ即ち古への

○○○朱雀大路の址で、もとは此西にも、東の方と同じ程な市街があつた譯なれども、それは早く滅びて、西の京村西の院村、西七條村、朱雀村などいふ田舍村落が、田野の中に殘つて居る許りなり。而も尙、一條、二條、三條、四條、五條、七條、八條などの大通りは、野中道ながらもほゞ古への位置のまゝ眞直に殘つて居る故、平安京當時の有樣も、ほゞ想像し得られざるにあらず、

右の千本通と並行して、十町ばかり東、即ち東寺の東方

より北へ、西本願寺の前を過ぎて、眞北へ五十餘町も上れる小川あり、之れ即ち

堀川 にて、其位置は平安京當時のまゝ殘れるなり、されば此堀川と東寺の場所とを標準として、今日の京都を測量圖の上に、古の平安京の圖を引く事、容易なり、此堀川に沿うて、西本願寺より北に上る事二十餘丁、

二條離宮 あり、こはもと二條城とて、徳川氏の築ける所、將軍上洛の時に、こゝに駐まる爲にせしものなり、明治十七年收めて離宮となすといふ、其位置は恰も二條堀川の西にあり、二條離宮の南に、

神泉苑 あり、古來有名なる園池にて、弘法大師こゝに雨乞の祈禱を成せりと傳ふ、二條離宮の西北は、聚樂廻りとて、古人秀吉の建てたる

聚樂第 のありし所なり、秀吉の志を得るや、此聚樂第を築きて天皇上皇の行幸を仰ぎ、一世の榮を極めしが、其後關白秀次、秀吉の意にたがひて自殺し、次で聚樂第も廢する事に成れり、此地方は古への

大内裏 の一部にて、皇居を始め八省百官多くこゝにありしが、度々大災あり、南北朝の頃より今の場所に移つて、大内裏は全く廢する事となり、其あとは内野とて荒野の原と成つて、有名なる應仁の亂の時には、山名宗全方の西軍が此あたりに陣せしが故に、今も尚此邊の總名を

西陣 と云ふ、西陣は今は織物を以て極めて有名なり、斯の如き變遷なる程なれば、古への宮殿のあとも、皆民家の間に隱れて、全く判然らぬ樣に成りしに、先年京都市に、桓武天皇遷都の千百年祭を行ひしとき、その遺跡を調査したる結果で

大極殿遺址 の石標を、千本通下立賣の民家の間に建設して、其場所を明にしたり、大極殿は朝廷の正殿で、大禮を行はれし所なり、

こゝに千本通下立賣と云ふは、南北に通ずる千本通と、東西に通ずる下立賣通との交りたる場所を示す、前に二條堀川と云へるも同じ、元來京都の街筋は、正しく東西南北に通じて居る故、何町の何丁目など六かしき事を云はずとも、縦横の通りの名を云ひて、東

へ入、西へ入、或は上る、下る、など丶云ひてよく判然るなり

此大極殿遺址より西北十五六丁、

北野神社　あり、官幣中社にして、菅原道眞の靈を祀る世に天滿天神と稱す、道眞讒により貶せられて、太宰權帥となり、間もなく薨ず、天下其冤を憐れみ、天皇亦悔いて贈位贈官あり、村上天皇の御代に、神異ありしによりて今の地に祀る、祭日には天皇の行幸もあり、神靈顯然たりとて、諸國に周ねく之を祀るに至る、世に天神といふは、多くは此菅公を祀れるなり、本社は筑前國大宰府にあり、明年は恰も公の薨後一千年に當るとて、こ丶にも大祭を修する由なり、北野神社の西北二三丁、

平野神社　あり、官幣大社にて、境内櫻多し、平野神社より西北、十丁餘、有名なる、

金閣寺　あり、足利義滿の建立にて、鹿苑寺といふ、林泉極めて名あり、林泉の間二層樓あり、今は剝げて僅かに古への面影を殘すのみなれど、もとは一面に黃金の箔を押してあつた故に、之を金閣寺とも云ふなり、當時南北朝の久しき戰亂にて、上下共に疲弊して居たにも拘らず、奢侈を極めた有樣は、此金閣のみにても、容易に想像し得らる丶なり、

又北野神社から東北に方つては

船岡山　といふ小山が、外の山とは全く離れて、奇麗に平地の中に立てるが見ゆ、此山の東の麓に

建勳神社　あり、織田信長の靈を祀る、信長はよく天下の大亂の後をうけて朝廷の爲につくし、王室中興に於て大に效あり、不幸にして中途に逆臣の爲に殺されたれども、明治の聖代に至りて特に神號を賜はり、別格官幣社に列せらる丶に於ては、公の靈も滿足なるべし、船岡山の東北は、之れを

紫野　といふ、萬葉集に

あかねさす紫野行き標野行き　野守は見ずや君が袖ふる　額田王

とあるは此所なりとか、此外古歌多し、紫野に

大德寺　あり、禪宗の一派なる臨濟宗大德寺派の大本山にて、後小松天皇の皇子として、頓智噺に有名なる一

休和尚の住職せられしを以て殊に有名なり、

右述べたる所にて、ほゞ京都市西部の名蹟は盡きたり、之より踵を廻らして市中の名蹟を尋ね、次で東部に及ぶべし

古への平安京の東の京極は、今は殆ど京都市の中央となりて、之を寺町といふ、豊臣秀吉が、一旦廢れたりし京都を再び修興せし時に、各地に散つて居た寺院を多く此町筋へ集めた故に此名あり、此寺の中にも、浄土宗の清浄華院、誓願寺、日蓮宗の妙満寺、本能寺、など有名なり、誓願寺には豊臣秀頼の子國松丸の墓あり、本能寺はもと六角通西洞院の邊にありて、頗る盛なりしが、明智光秀がこゝに織田信長を弑して、其時全く兵火にかゝり、後に今の所に移れるなり、されば頼山陽の詩に、

本能寺の溝の深さ幾尺ぞ、我大事を就す此夕に在り、茭粽手に在り粽を併せて喰ふ、四簷の梅雨天墨の如し、老坂西に去る備中の道、鞭を揚げて東に指す天猶早し、我が敵は正に本能寺に在り、敵は備中に在り汝能く備ふるや

とあるは、當時の光秀の身上を咏じたもので、此本能寺は今日の場所にてはあらざるなり、此本能寺の遺址と、誓願寺新京極とのほゞ中間に六角堂あり、堂の形を以て名を得、六角通りの地名また之より起りたり、誓願寺の邊は、近年新たに町を開きたるが、その町を稱して新京極といふ、三條と四條との間にして、劇場、見世物小屋、寄席等相連なり、京都市中に於て最も繁華なる所なりと稱せらる、

六角道の西の通りを烏丸といふ、京都停車場より正北の道筋なり、此烏丸と寺町との間、市の北方に方りて京都御所あり、所謂土御門御所にして、南北朝の頃より明治に至り東京に遷都し給ひし迄、凡そ五百年許の間皇居のありし所、今の境域、東西約三百八十間、南北約七百間、二十七萬坪に近し、中に、皇居及び仙洞御所あ

り、維新前には宮方をはじめ、諸公卿の邸宅も此中に並びしが、今は取り拂ひて一帯に御苑と成れり、皇居内には、紫宸殿、清涼殿、皇后宮御殿を始めとして、其他の御建物まで、安政年間御造營の儘に現存し、自今永く、御即位の大禮、大嘗會の大典は此京都にて行はるゝ事に定められたり、古へを忘れ給はぬ爲の大御心、有り難き御事なり、仙洞御所は皇居の東南にあり、天皇御讓位の後に入らせらるゝ所にして、宮殿は今は無けれども、林泉は極めて幽邃にして、時に庶氏の拜觀を許さるゝ事あり、御所の北方にあたりて

相國寺あり、臨濟宗相國寺派の本山にして、足利義滿の建立する所、京都に於ける所謂

禪宗五山の一なり、五山とはもと南禪寺、天龍寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺の五寺を謂ひ、禪宗中に於て特に勝れたる五ヶ寺に特別の資格を與へしものなりしが、義滿此寺を建つるに及びて、之をも五山の中に加へ、爲に南禪寺を上して五山の上とせしなり、

相國寺の北にの方に

上御靈神社あり、京都御所の東南に下御靈神社あり、此兩社もと同神にて、崇道天皇、橘逸勢等罪ならぬ罪に死したる人々の怨魂を祀れるものなり、御所の東方に接したる所に

梨木神社あり、別格官幣社にて三條實美公の父實萬公を祀る、又御所の西に接して、同しく別格官幣

護王神社あり、これは和氣清麿の靈を祀る、此神もと京都西北なる高尾山に鎭座せしを、近年此地へ移したるなり、

右にてほゞ洛中即ち加茂川以西の市内の名蹟も終りたれば、次回には、古への白河、即ち加茂川以東、東山地方の名蹟を巡覽せん　（つゞく）

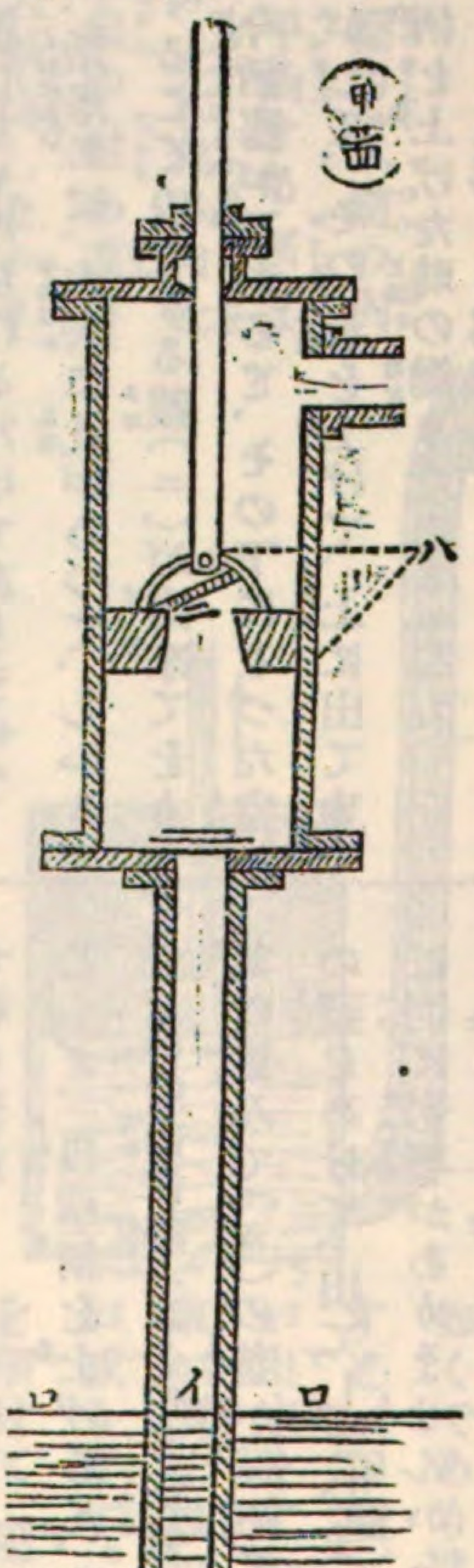
空氣の話（つゞき）

女子高等師範學校教諭　岡田光子

この前は、空氣に壓力があるといふことから、續いてその壓力の高低を測る機械、すなはち、晴雨計のことを

申しました。これから、皆樣ご存じの、
◉ポンプの話をいたしませう。あれも、やはり、空氣の壓力を應用したもので、次ぎに申すことゝ同じことであります。

ガラスか、何かの管の一方を、水の中に入れて、他の一方から、水を吸ひだすことがありませう。その時、水はすぐと出ないで、暫時してから出てきます。その譯は、管の中に始は空氣がありますから、それがまづ口の中へ入るので、その内にそこの空氣は減つて、明き間が出來ます。處で、ご承知の通り、水面には絶えず、空氣が壓してゐますから、勢、水はその管のあき場所へ壓し入れられずには、ゐられません。ですから、通常管で、水を吸ひ上げると申しますが、實は、管の中に場所ができたから、空氣が水を壓し入れたのだ、といはねばなりませんのであります。



處で、井戸などの、低い所にある水を、酌み上げるポンプです。あれの普通目に觸れます部分は、木か金で作られてある筒と、水の出口と、それから上り下りする柄とであります。しかし、あの筒の下には、まだ長い管があつて、水中に達して居ります。次の圖には、縱に半分に截つて、中の樣子を見せた所を、畵きましたのであります。

さて、水を酌むといふ時に、ポンプの柄をまづ上げるとします。すると、中はどうなりますか。それを知るには、まだ柄を引き上げない以前の、有樣を一つ考へて、おかねばなりません。即ちその時には管の中には、空氣があつて、管内の水面(イ)を壓してゐますし、管の外にも、空氣があつて、管の外の水面(ロ)を壓してをること、丁度ガラス管の中にも、空氣があり、

外の水面にも、空氣があつて、壓してゐたのと、同じことであります。

そこで、今柄を引き上げると(甲圖)中には、筒によくあふ活塞があつて、柄と一所に上り下りするやうに、なつてゐますから、それがズーッと下がります。(ハ)もし、この活塞が、木のかたまりか、何かならば、その下にある空氣は、壓しちゞめられるだけでありませう。處が、そうでなく、活塞には、中央に孔があつて、しかもその孔には開閉することのできる蓋(ニ)が出來てをります。ですから、今活塞が下がると、その下になつた空氣は、逃げ道をさがして、その蓋を上げて、上に出てゆきます。これが、柄を上げた時の働きであります。

次に、柄を下げますと、從うて活塞は上ります。(乙圖)それにつれて、先に出た空氣は、下へ行かうと思うて、上から、蓋(ニ)を壓しますから、却てふたが閉ぢてしまつて、下へ行かれません。で外へ出てしまひます。そこで、活塞の下に空虚ができます。そこはどうして、充たしますか、といふと、管の中の空氣が、筒と管との堺にある蓋(ホ)を明けて、上つて來るのであります。すると、今まで、管の中で、水面を壓してゐた、空氣の分量がへりますから、壓力も減じます。そこで管の外の空氣の壓力で、管の中へ水が壓し入れられます。丁度ガラス管の中の空氣が、減つた爲に、水が管の中へ、入つたのと同じことです。これが、柄を下げた時の働きであります。

こんど、再び柄を上げると、また活塞は下ります。それで、筒の內に殘つてゐる空氣は、下へ行かうとしても、其の重みで(ホ)の蓋が閉ぢてしまうから、餘儀なく(ニ)の蓋をあけて、出てしまひます。かくの如く、管の內へは別に影響がありませんから、一たん管內へ入つた水は、其のまゝ止まつてゐます。

次に、また柄を下げれば、活塞は上るにつれて、モウ空氣がないから、管の內に入つた水が(ホ)を下から明けて、だん〳〵、上に昇つてきて、柄を上げ下げする內には、水が出口から出るやうになるのであります。

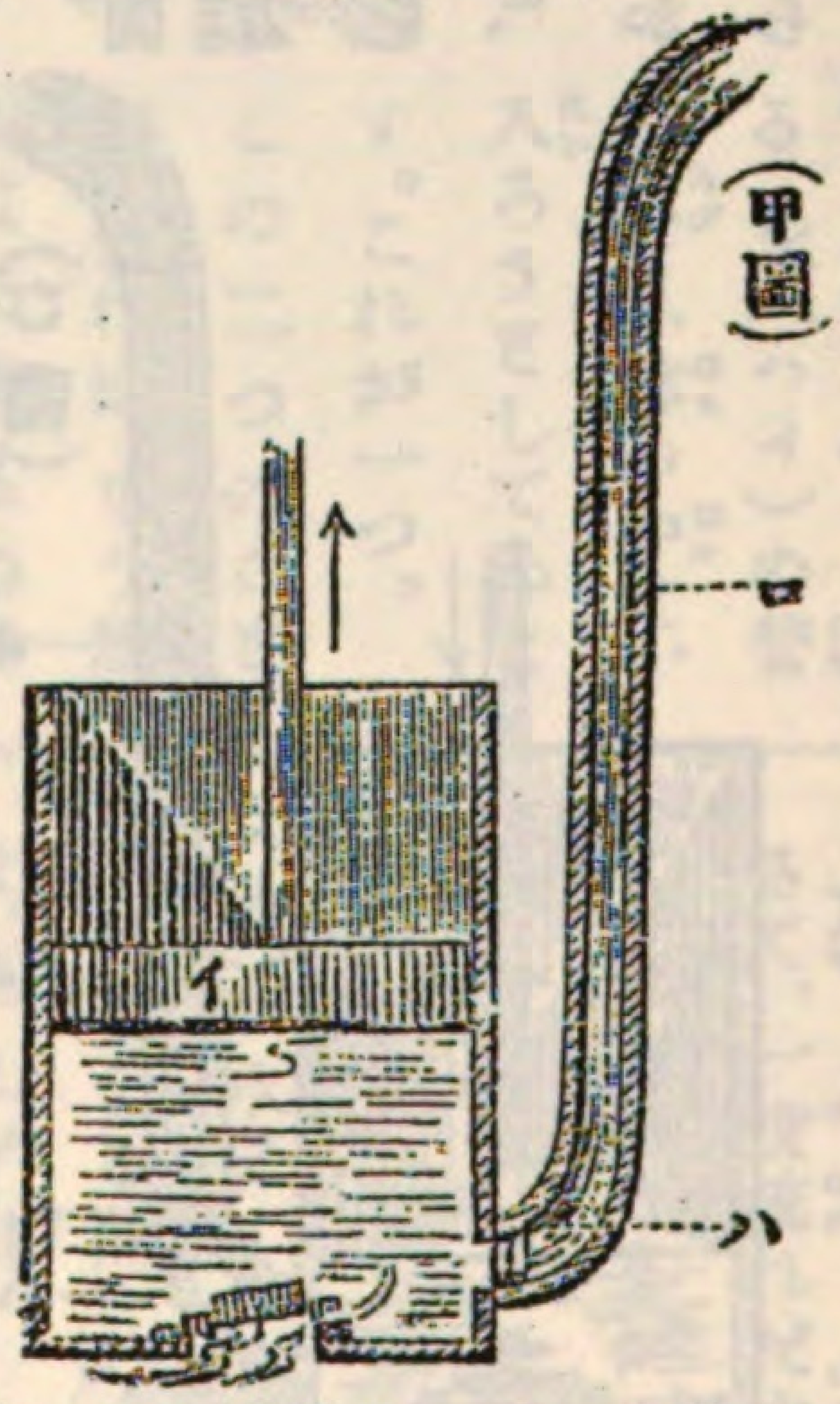
右のことは、一寸こみ入つてゐるやうに見えますが、日

常に使用してゐる器械のことで、ありますから、注意して、御讀みになることを、希望いたします。

このポンプで、水を酌み上げるといふのも、やはり、正しくないので、ポンプは管内の氣壓を去つて、水の上る通路を作るもので、水の上がるのは、全く外の氣壓のためだと、云はなければなりません。

それ故、外の空氣の壓力と、筒の内の水の柱の高さと、平均する所までゆけば、それより上には水は上りません。(丁度、水銀の柱の高さが、外の空氣の壓と、平均したやうに)。その平均する處は、水ならば、三丈五尺位(五間餘の高さであることは、この前に申しのべておきました。(實際はそれまでも上りませんが)。

しかし、どうも時によつては、五間以上の高さに、水を上げねばならぬことが、ありますからその様な折には、また少し風のちがつた、ポンプを使ひます。それは、つまり水を高い處へ上らせる仕組だけが、ちがふので、理屈に、かはつた事はありません。



このポンプには、活塞はやはりありますが、孔も蓋もありません。(イ)それから、水の出る管(ロ)は、筒の下の方についてゐてそこに(ハ)といふ蓋があります。

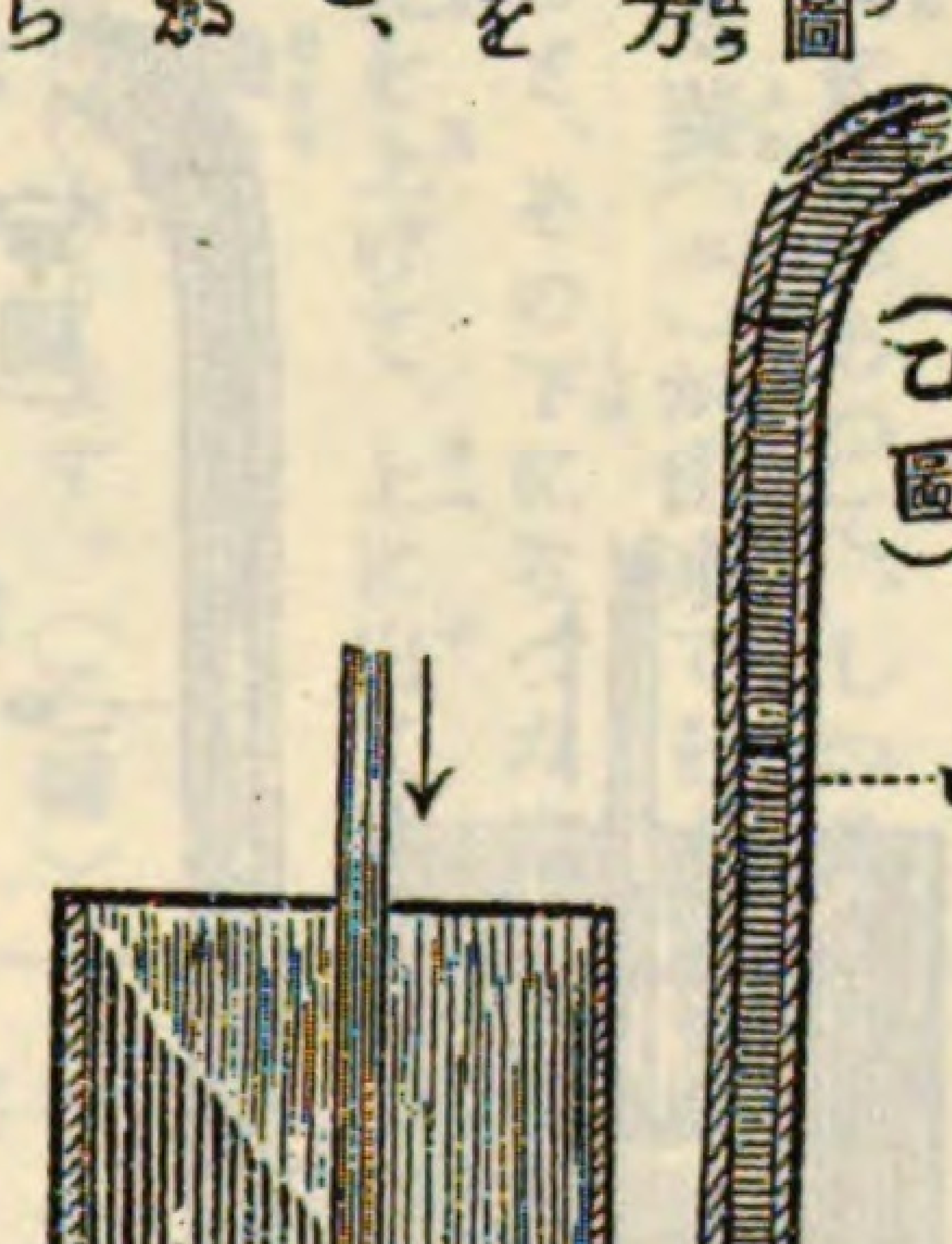
このポンプで、水の上る工合は、次の如くであります。活塞を引き上げますと、(甲圖)それの上つただけ、場所が出來ますから、その下に、あつた空氣が廣く擴がつて、下の水を壓す力が減ります。だから、水は下の蓋(ニ)を明けて、壓し入つてきます。

こんど、活塞が下ると(乙圖)蓋(ニ)は下へは、開かないから、水は下へ、行かれないやうになります。上からは、壓されるし、他に出道がないから餘儀なく、脇の管(ロ)の方へ、蓋(ハ)を壓して、入ります。こゝでも、一たん入つた水が、あとへ、歸れないやうに蓋が閉ぢます。で、その働きを、くり返し〳〵すれば、水は追々、管の中

へ上つて、とう〳〵その上から出ますから、これならば、非常な高いところへも、水を上らせることが、できるのであります。

◉水出し。。。も、一つ、空氣の壓力を應用したもので、よく子供の玩具にする出水しといふものがあります。あれは、ごく無造作なもので、理屈はなか〳〵面白うございます。

これは、竹でも、ガラス管でも、圖のやうな形に曲がつた管で、一方が短かくさへあればよい。これをやるのには、その短かい方の管を、水の鉢の中へ、入れるのです。しかし、それ丈では、水は出ませんから(ロ)の處を、一寸口で吸うて、管の中の空氣を去るか、さもなくば、始に、曲管全躰に、水を滿たして置いて、こぼれぬやうに、兩方を指で塞いで、(イ)を水鉢の中へ入れて、(ロ)の指をはなせば、鉢の中の水は、管の中へ入つて、(ロ)から、流れ出ます。



(乙圖)

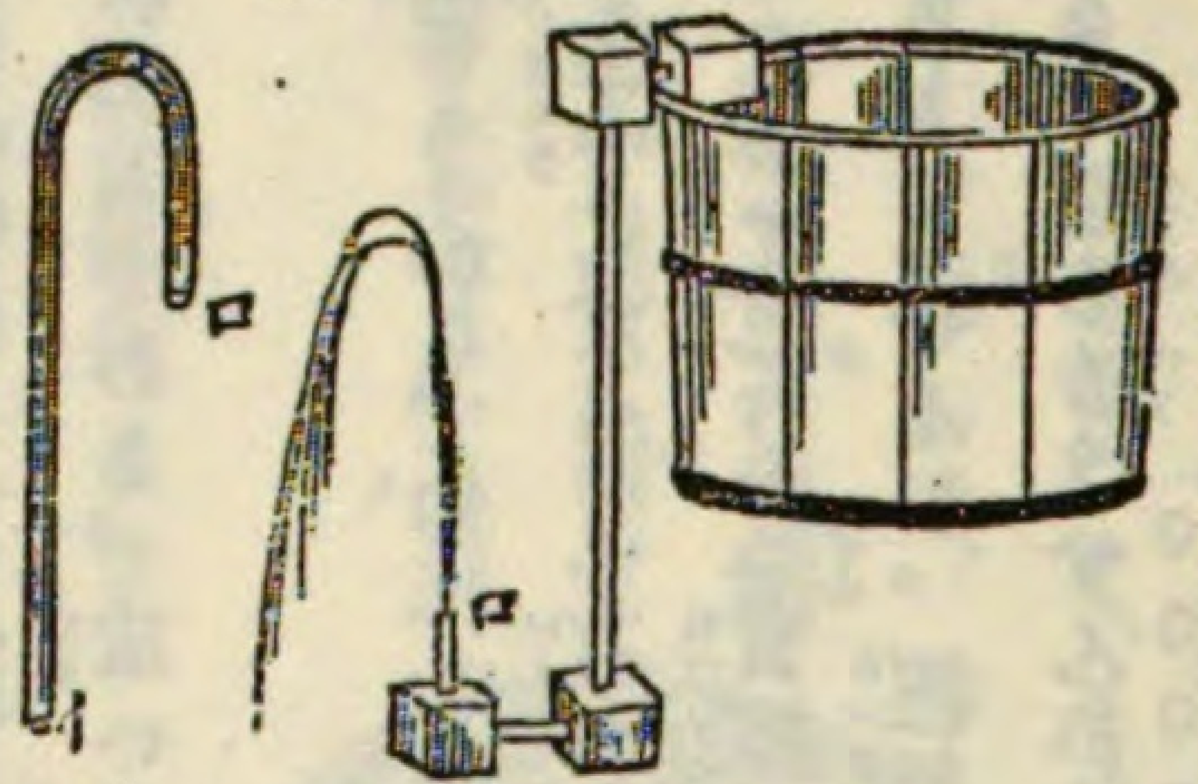
この理屈は、どういふのでせう。空氣が壓すからだといへば、それぎりですが、よく、それを見てみますと、かういふことがあります。

水の出口が、水鉢の中の水面と、同じ高さであると、管の中に、水は一ぱい來てゐても、水は出ません。それから、もし水の出口の方が、少しでも鉢の中の水面より、上にゆくと、水は出ないばかりか、逆もどりをしてしまひます。たゞ、都合よく水の出るのは、水の出口が水面より低い時ばかりなので、出口が低ければ低いほど、水の出は盛であります。

どうしてそうなのでせう。少し、御考へなされば、分ります。次に說明はいたしますが、御讀みなさらぬさきに、その理屈を御考へなすつてごんなさい。

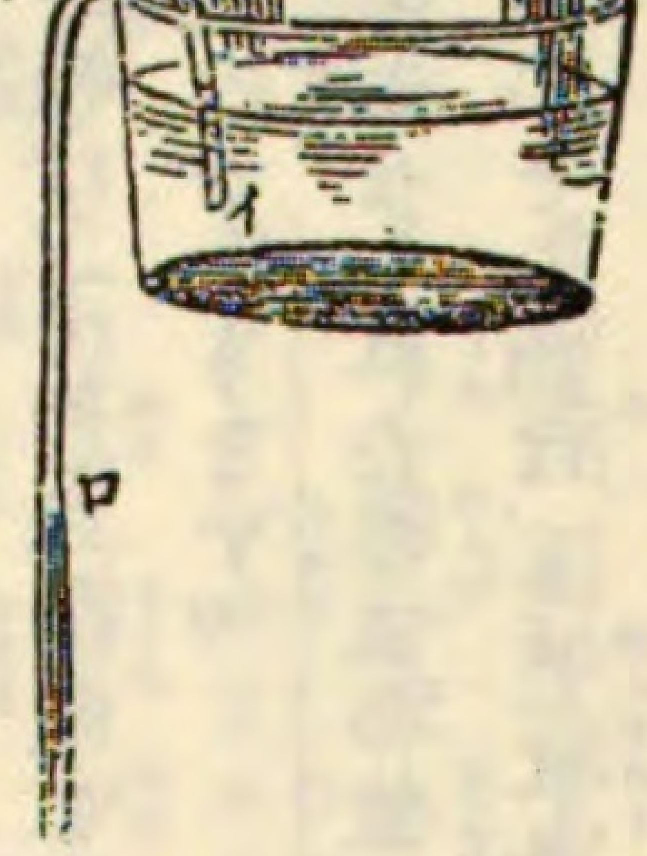
よく、分かつてゐることから、だん〳〵に申してゆきませう。まづイロハを曲管といたし、(イ)は水鉢の中に入

つてゐて、(イロハ)の管の中には、すでに水が滿してあるといたしませう。そこで空氣の方から申さば、空氣は鉢の中にある水の面を、上から壓して、(イハ)管へ、水を壓し入れやうとして、ゐますし、また水の出口(ロ)を下から壓して、やはり(ロハ)管へ、水を壓し入やうとして、ゐます、これが、分かつてゐることの一つ。それから、反對に、水の方から申すと、(ハロ)といふ管の水は下へ出やうとするし、(ハイ)の管の水も、鉢の中に、入ろうとしてゐます。これが一つ。この二つのことが、分れば、もう説明はできるのです。即ち、(ハロ)の中へ、水を壓し入れやうとする力は、是と同じく、空氣の壓力から、(ハロ)の水の壓力を、引き去つたものでせう。(イハ)の中へ、水を壓し入れやうとする力も、之と同じく、空氣の壓力から、(イハ)の水の壓力を、引き去つたものです。所が、(ハイ)と(ハロ)とは、同長



でなく、(ハイ)の方が短かい。ですから、(ハイ)の水の壓力は、(ハロ)の水の壓力より少ない。從うて、(ハイ)に水を壓し上げやうとする力は、(ロハ)に、水を壓し入れやうと、する力よりも、大きいから、鉢の水は、だんだん(ハイ)に入つて、(ロ)から出るのです。

さて、一度流れだすと、管の中が、すぐ、空虚になりさうに、思はれますが、水が出れば、出ただけ、水面の氣壓が(イハ)に水を入れますから(イ)が水にとゞいてをる間は、絶えず出ます。で、管が、是非一方長くなければ、ならぬわけ、水面と同高に、出口がなつた時、或は、それよりも、高くたつた時は、水の出なくなるわけも、皆、右の説明で御分りであらうと思へます。



空氣の話も、大分進んで參りましたが、尚、も一つ、肝要な性質がありますから、それを申して、終へることにいたしませう。

◉空氣の浮力といふことで、空氣は物をその中で、浮ばせることが、できると申すことです。丁度水の上に、木片や木の葉が、浮くやうに、シャボン玉や、煙などが、空中に舞ひ上るのは、皆樣の、しば〳〵御覽なすつた事でありませう。

どうして、これらの物は、上るのでせうと申せば、通常は、それは、輕いからである。重いものは、上らないと、答へませう。

なるほど、一應さうかも、知れませぬ。水に、金や鐵が浮かぬやうに、空中にだつて、石や木は、浮きませんから。しかし、さうかと思うと、實際、鐵で作つた軍艦が、水に浮ぶではありませんか。輕氣球に、人間が乘つてさへ空中に上るではありませんか。

これで考へると、あながち、只輕いからと、ばかりは申されない、ことになります。

さらば、眞に物の浮ぶ譯は、何でありますか。

空氣の中に、物を置けば、其の物の容積と、同じだけの空氣は、押しのけられますから、物の容積が大きければ大きいだけ、排却せらるゝ空氣の量は、多くなりませう。

それで、排却せられた空氣の重さと、物體の重さと、比べて、もしそれが均しかつたら、丁度空氣のかはりに、其の場所へ、物を入れたと同じ故、その物は、そこに止まつて、上りも下りもしません。

排却せられた空氣の重さよりも、物體の重さの方が、輕かつたらば、その物は、下から、空氣に壓し上げられて、上る。即ち、浮ぶのであります。

これと反對に、排却せられた空氣の重さよりも、物の重さの方が重ければ、その物は、そこに止ることができないで、沈みます。

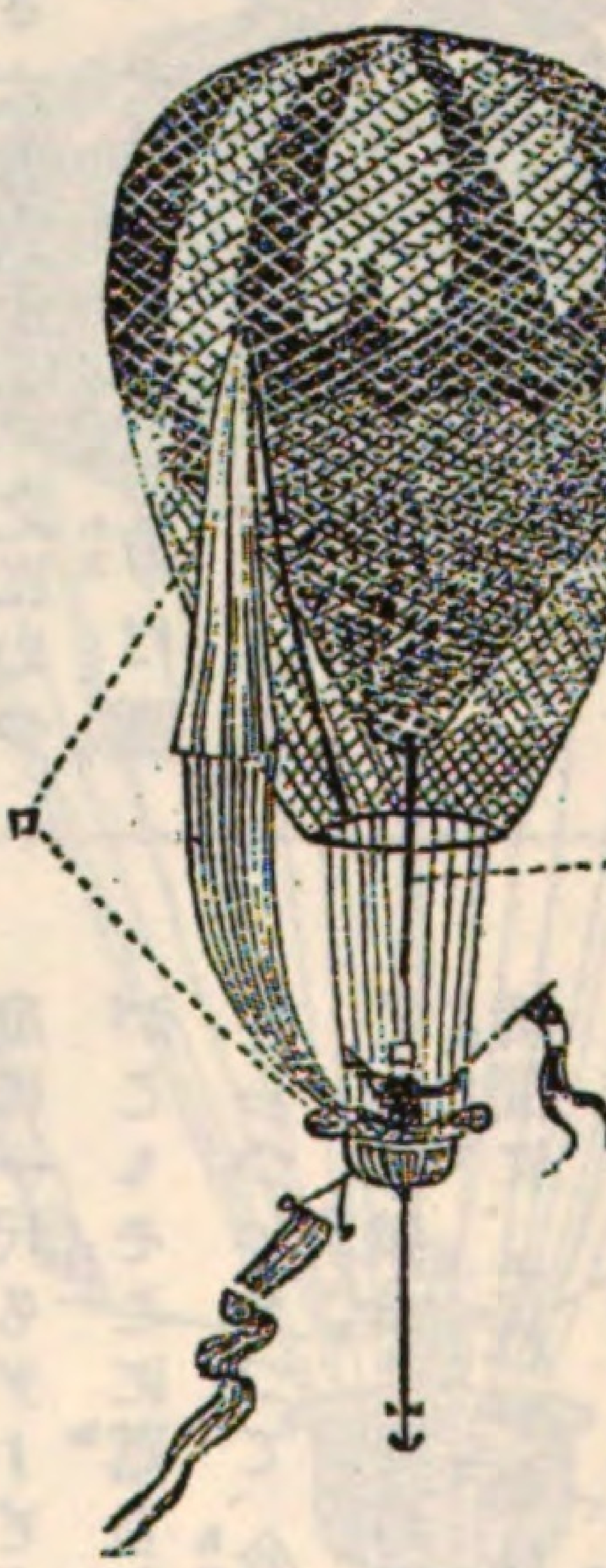
かういふわけだから、目方の重いものだとても、その容邊を大きくして、排却する空氣の重さが、その物の重さよりも、多くなるやうにすれば、浮びます。輕氣球は、即ちこの理に基いて作つたものであります。

◉輕氣球の話

これから、その輕氣球について、申しませう。

明治二十三年に、米人スペンサーと申す人が、上野博物館の中で、輕氣球に乘つた事がありましたが、皆様の中には、御覽になつた方もありませう。

其の搆造を簡單に申しますと、まづ、丈夫でそして薄い布に、漆の一種を内外から塗つて、その布目をふさいで其れで、大きな〱嚢を作つて、その中に、空氣よりも輕い瓦斯を入れます。而して、嚢の外に、網をかぶせて、其の網に籠製の船のやうなものを附けて、それに、人が乘るやうになつてゐます。



今は、右のやうなのを使ひますが、元はそんなだつたのではない。今から、二百三十年ばかり前で、ありましたらう。人も空中に上れたらば、面白からうと思うて、工夫した人がありました。此の頃は、まだ世が開けなかつたから、この人の考も、今から見れば餘程妙です。籠のやうなものに、風をうける帆をつけて、籠の四方に、金屬製の中空の球を一つ〱附けました。これは、その球の中の空氣を去つてしまへば、輕くなるだらうといふわけなので、何故、金屬で作つたかといへば、もし、もつと、薄いかろいものでしたならば、都合はよいが、中の空氣を去るにつれて、外の空氣の壓力で、破れるからであります。

考はまあかうであつたが、これでは、一向上ることが出來ませんでした。

その後、百年餘たつて、もつと、うまく考へた人は、フランスのモントゴルフエルといふ人で、この人は嚢の中に、熱して輕くした空氣をつめて、それを上げました。(我天明三年にあたる)。これが輕氣球を上げた第一の人と申してよろしい。

その後、たゞ熱した空氣を、入れるのでは、いろ〱不都合があるものだから、空氣よりも、輕い水素といふ瓦斯や、石炭瓦斯を入れるやうになりました。

輕氣球を上げるまでの仕掛は、大したものでありま す

から、左に一寸は話して見ませう。以下に申すのは、十二三年まへに、米國のあるところで、人が四人も乗つた非常に大きなのを揚げた時の事で、或る書物にあるのを、ぬいたのであります。

嚢やそれにかぶせる網のことは、さきに申したのとかはりませんが、其の大きさと、目方とを申しますと、嚢につかつた切が、巾三尺で、長さ六百六十丈、之にぬつた漆は三樽だといふことです。それから、其目方は嚢や、繩や、船や、人やをこめて、六百貫餘りあつたといふことであります。

その書に、申してあるのに、

その嚢に瓦斯をつめるには、嚢を二三尺地から上げて、おいて、瓦斯だめから、管でもつてドン／＼瓦斯を送りこんだ。それに、丁度十六時間かゝつた。それがまた、容易く行かなかつた。なぜといふと、ダンダン嚢に瓦斯が入つて、ふくらむにつれて、はや上ろう／＼としたからなので、一躰用意が出來るまで、それを固定しておくために、網に一つの目方が、一貫だらずもある砂嚢が多數につけて、あつたのですが、それ位では足らなくなつたから、人が大勢ついて、押へたり引張つたりした。それでも、終には人も砂嚢も、共々に引き上げられさうに、なつた位だつて。

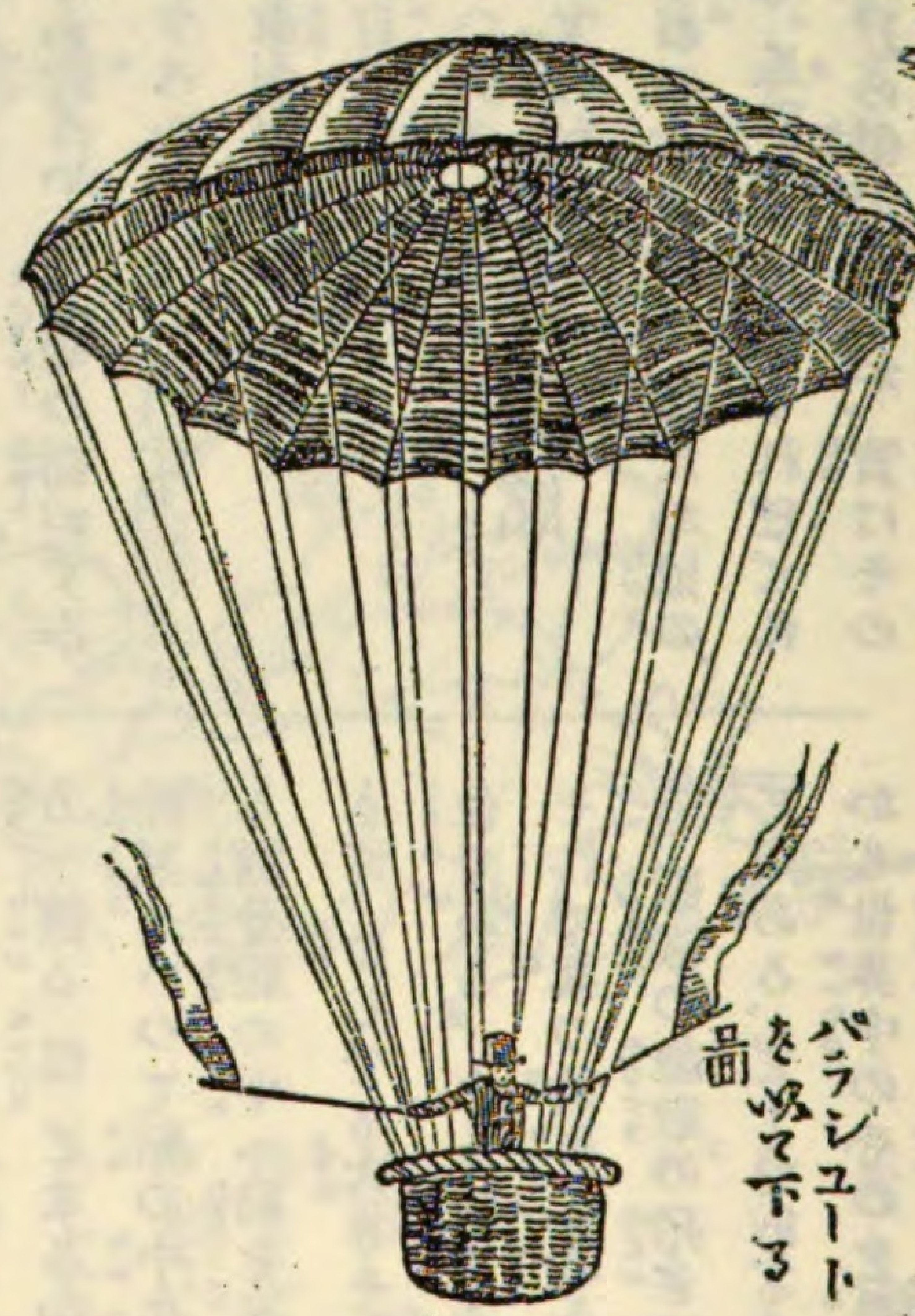
瓦斯もよいといふ處まで入つて、船も附くし、用意もほゞ出來た頃になつたら、輕氣球は委細かまはず、一度に一尺もヅーと上つた。それで、附いてゐた砂嚢がこゝそこに落ちた。しかしまだ人は引きづられながらつかまつて、合圖をまつてをつた。やがて「ヨシ」といふ號令！それと共に、人が皆手を放した。すると、瞬間に、それが舞ひ上つた、其勢の凄じかつた事、何ともいふことが出來ないほどだつた。

この勢で、上つていつたならば、何處まで行くかといふに、上に行くほど空氣がだん／＼稀薄になるから、終には、排却する空氣の重さと、氣球自身の重さと平均する處に至ります。そこまでゆけば、もう其の上へは上れません。これまで、輕氣球の上つた最高點は、三萬三千尺（我富士山のザット三倍）だそうです。

これで、すべて工合よくゆけば、よろしいが、時によつて、色々の不意の出來事で、下りなければならない事があります。その時には、次のやうな事をするのです。輕氣球のふくろの眞上に、蓋があつて、そこから船まで繩が下がつてゐて、(圖イ)船中で隨意に引張ることが、できるやうになつてゐる。だから下りやうとする時には、之を引いて蓋を明ける。するとガスが泄れて、容積が減じますから下りられるのです。しかし、下りるとしても、時によると、危險なほど、早く、ゆき過ぎることがある。(一秒に一丈餘も)。この時、之を救ふには、船の中に、あらかじめ入れてある砂の嚢を、投げすてゝ、目方を輕くするのです。

今一つ下りるのを助けるために、船から、碇が下がるやうになつてゐる。これは地面に近くなつた時、それを、木か何か、丈夫なものにひつかける、ためであります。

またパラシユート(風傘)といふものが、用意してつけてある。(圖ロ)之は氣球を離れて、下りる時に使ふので、上る時は、つぼめて、綱につけてあります。入用の時に、之をはづせば、直ぐ開きますから、之を以て、下りて來れば空氣の抵抗によつて、急に落ちず、無難に、地に着することができます。



パラシユートを以て下る圖

こんな風に、いろ／＼の設がしてありますが、なか／＼危險なもので、風の爲に拂はれて、行方しれずになつた人、水に落ちた人などが、いくらもあります。これの効用としては、三十年前に、パリーが獨軍に圍まれた時、城外のものと交通するために之を使用しましたやうに、軍事に用ゐられる事も廣い

が、亦學問上の研究のために、使はれる事も頗る多いので、この爲に、さま〴〵の、有益な氣象學上の智識が、得られました。

之で空氣とは。如何なもので、どれほど必要で、どんな性質をもつてゐるか、その性質を利用して作つた重な器械には、どんなものがあるか、といふ大略の話がすみました。（完）

鼠の話

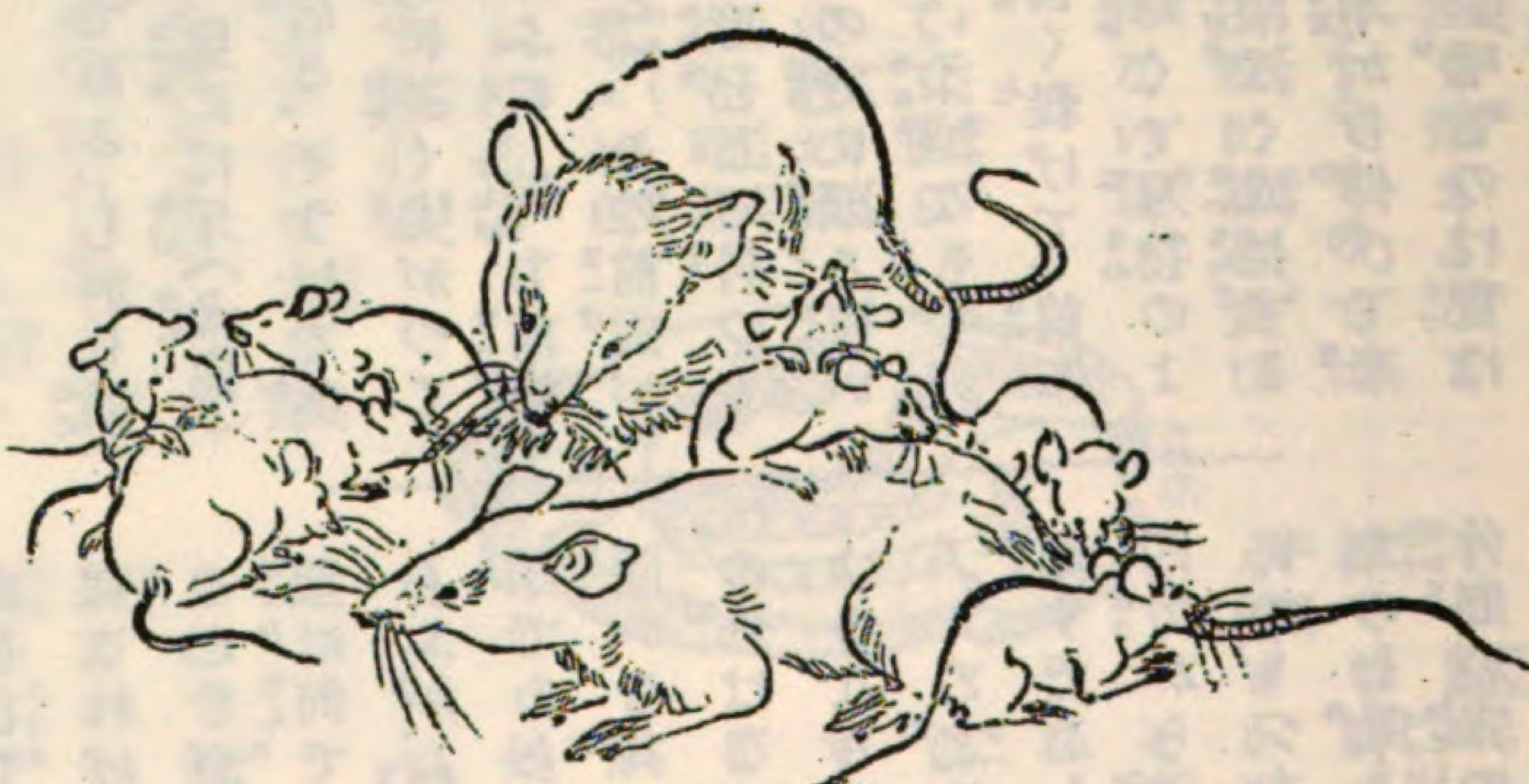
高等女子師範學校教諭　藤堂忠次郎

此の前には猫の話をしたものであるから、何だか鼠の話をして見度いよーになる。ところで鼠がそれほどに有益なものであれば、話すだけの價があるが、實はその價値がない。しかしながら、我々は鼠の害を被ることが一通や二通でないから、その害を避ける爲から、一應鼠の本性や樣子を承知して置かんではならぬ。

先づ鼠が家毎に棲んで居るといふことは、俗に國に盜人家に鼠といふ諺がある通りで、實に彼れは世界の何處の果まで居らぬ所はない、假りに新世界新陸地を發見しても、人が此れに立ち寄ることがあれば、それでもう鼠が何時の間にか住居をして居る、何故かといふに、船が岸に觸れるか、荷が家に着けばそれで以て鼠の諸方へ擴る媒となるからである。能つく考へても御覽、船鼠といつて船の中にも夏蒼蠅ほど鼠が住んで居るから隨分船の中へ猫を畜ふほどである。荷物でもその通りで、少しでも大きそーなものであると、必ず鼠が居る位である。よくもマア此のよーに擴がつたものであるそれで其の世界に居る數の夥だしいことは驚くばかりで、獸類の總數の殆ど三分の一を占めて居るといふことである、どーであるか、獸類といへば種々樣々で、而かも世界中のものを擧げれば數限りもない程であるにその全數の三分の一とは豪氣なものではないか。

どーして此んなに鼠は數多くあるのかといふに、彼れの殖える力が尋常ではないからである、その殖える力とは親の子を產む力が非常なのである。鼠は生まれる

と四ヶ月を經つて、モー親の身になる、牝はそれで子を產む、その子を產むのは每年三回づゝである、そうして一回每に少ければ八頭多いければ十二頭、時とすると十四頭も產むことがある、今試みに一ヶ年の末にどれ程になるかを計算して見よう、先づ牝牡一番が二頭あつて四ヶ月目に十頭の子を產んだとしよう、さすればそれで親子合せて十二頭となつたのである、それから次の四ヶ月目に又十頭を產んだが、そのときは前の四ヶ月目に產んだ子の半數が牝であつたと見て、その各々が十頭づゝ產めば五十頭を得る譯である、故に第二の四ヶ月目は新に六十頭を附け加へた勘定である、それから次の四ヶ月目にも又十頭を產み、それに第一四ヶ月に產まれた十頭の中の牝五頭が又合せて五十頭を



產み、更に第二の四ヶ月目に產まれた五十頭の半數が牝とすれば、又新に百二十五頭を加へる次第である、これで第三の四ヶ月目即ち始より滿一ヶ年の終には總計(2＋10)＋(10＋50)＋(10＋50－125)＝257二百五十七頭となるのである。

此のよーな勢で子を產むから、堪まつたものではない、殖え出した日には止め度もない程である。それに鼠は他類を壓し倒す力を具へて居る、自分等の住まふと思つて居る場所に、他の獸類が先口に住んで居るならば、忽ちに恐ろしい齒を以て彼等を嚙み殺さでは措かぬものである。實に鼠の團體の勢力といふものは强いもので、猫さへも之れには叶はないで反對に遣られることがある、甚だしきは人までが幾十幾百までの鼠に殪されることがある程である、間々一頭の

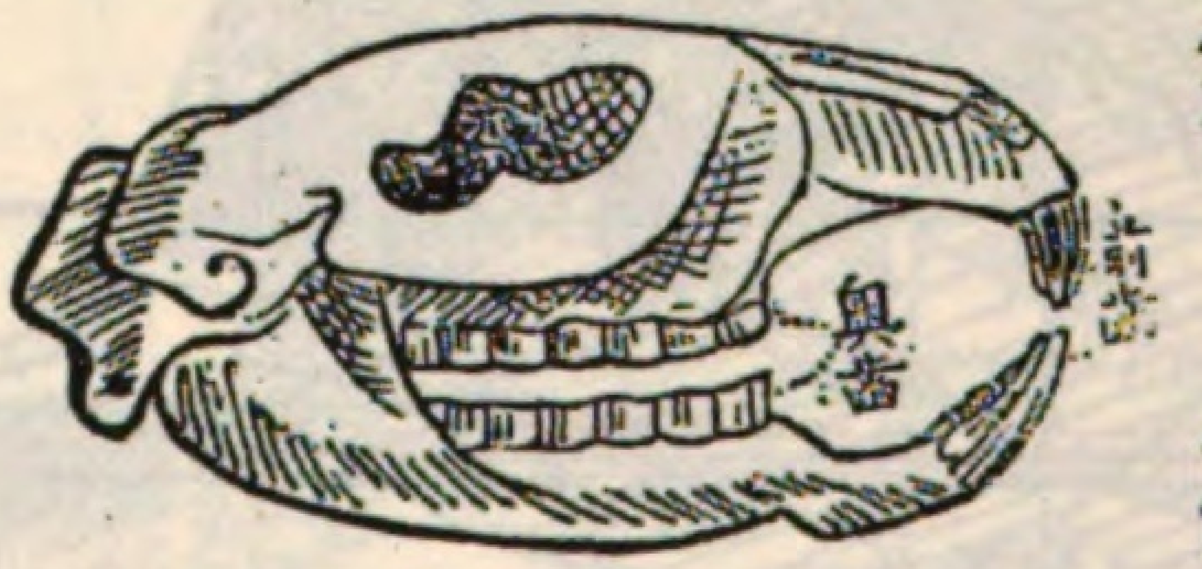
鼠が犬を殺したといふ例がある、見掛によらぬ强いものではないか。

これといふも鼠は、その齒が鋭いからである、しかし猫の齒などとはまるで趣が異つて居る。鼠には牙(犬齒)がなくて、その所に大きな隙が明いて居る、そうして奥齒(臼齒)が上下に六枚づゝあつて格別に甚く尖がつても居らぬ、さればどの齒が鋭いかといふに、即ち前齒(門齒)である、他の類に滅多にないことで、その前齒が上下に二枚づゝあつて長い鑿のよーな形をして居つて中々鋭いものである、それといふは、前の方に頗る堅い橙黄色のものが被さつて後の方に割合に柔かなものがあるから、齒の磨り減る都度に後のみ甚く殺げて、前に餘り變りがないから、磨れるほど益々鋭くて刄物のよーになるのである。此の前齒は自然に限なく成長する性質があつて磨り減るだけは忽ち其の本から伸びて來て償はれる。鼠が常に木などの堅い物を噛むのは實は其の齒が餘り伸びるから態と之れを磨り減らすためもある。だから若しも前齒の一枚を誤まつて打ち破はして終ふようなことがあれば、相手の齒が獨り限りなく成長して終には顎までをも貫くほどになる、このようになれば口を明けることさへも出來ないから食物を取ることが困難で死するより外はない。

鼠は何でも人の食するものは嫌ふものはない、飯であらふが、餅であらふが、肴であらふが、菜であらふが、菓子であらうが何でも角でも貪ぼつて食ふものである。而かも其の貪ぼるために共食するに至つては驚き入るの外はない。若しも仲間のものが誤まつて怪我でもしようならば、その血の色を見、その血の香を嗅いでムラ〳〵と之れを喰ふといふ氣になる、人なれば憐の心を起すであらふが、鼠はさることは少しもない無殘にも四方から追捕り卷いて、食ひ盡すのである。現に鼠穽にかゝつた鼠が手か足などを殘して置いて逃げて往つたのを見ることがあるが、實は逃げたのではない、一旦仲間が穽にかゝつたときは、他の鼠が之れを喰つてしまふのである、即ち共食のためである。時とすると鼠の牡の數が非常に多くて牝の數がその半分にも足らぬ

ことがある、これが牡が牝を食つてしまつた爲である、それといふのは、牝の躰の肉は軟らかで牡が喜んで之れを食ふからである。前に鼠の非常に多く殖えることとを云つたが、實はそんなに無暗矢鱈に殖えるものではない、仲間に共食が行はれるからである、殊に牝を食ひ減らすに於ては愈〻益〻左程に殖えられない理屈である。

鼠は元來人等の眼を忍んで夜の間に出て、働らけるように躰が出來て居る、第一に躰の色が黒つぽくて灰色や褐色であるものでも何れも暗黒に潜むに都合よくなつて居る、若しも我〻が白衣で以て暗中を行かふならば直きに曉られるようなもので、彼れは決して目立つよーな色を持たない。それから彼れの躰が甚だ小いさいのも大きに理由があることで、今若し大きな躰であらふならば、たとひ色が薄黒くでも觸られたり物に衝突かつたり其の重さで足音が聞えたりなどして、どーも曉られ易いものである、そこが躰が小さければ誠に都合がよい、

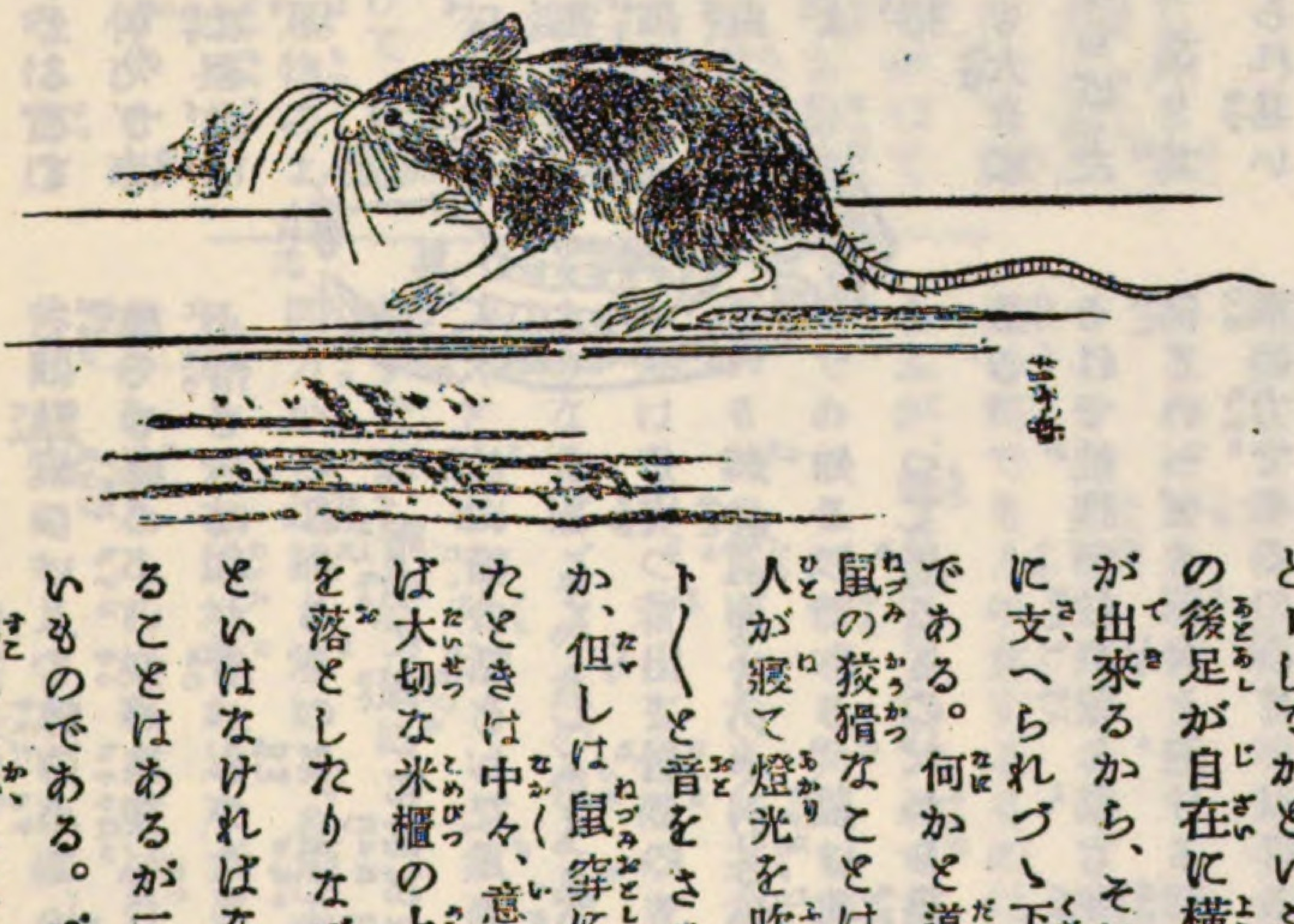


それはかりではない、全躰忍行といふことにはどうせ窮屈な小さな抜け穴などをも潜らなければなるまい、その點からいふも躰の小さいのは勝手がよろしい。泥棒でも躰の小い奴が重寳がられて居るそーで、昔し鼠小僧といはれた者があつたといふことである。

それからその長い疎な髭も大に用をなすのである、暗中に探るに甚だ必要のもので、その理由は前に猫の話をしたときに述べたから、此では略することゝしよう。次に彼れの鼻頭が割合に長く尖つて出て居るのも意味がある、即ちその尖が軟かなものであるから、又それで觸れて探り知るのである。鼠は此のよーに便利な道具を持つて居るものだから晝よりも夜分に働らくのである。

それで彼れが柱や壁を攀ぢ登ることは實に巧なもので猫といへども三舍を避ける程である、猫が登るには只爪の力でするのみといはれるが、鼠は爪ばかりではない、足の力をも以てする、即ち彼れの足蹠が全く柱に附

着くことの出來るように扁くなつて、まるで人間の足のよーである。これが猫とは甚だ異ふ點である。趾の數は前足は五本づゝで後足が四本づゝあつて、爪は可なりに鋭どい曲つたのをもつて居る。それからその四肢の長さが實にどーも適當である、餘り長くもなく先づ短い方で、それだからピタリ躰を柱などへ附着けることが出來る、即ちそれで躰を容易く持ち上げることが出來るのである。しかしそればかりでは充分でない、彼れの尾が大に助をするもので先づそれが滅方に長い、寧ろ躰よりも長いのと、そーして其の面に細かな鱗が並んで居るのとが、その助をするのである、何故といふに、その尾でもつて柱などの面へピッチリと附着けながら登るから、それが丁度好い支となる、而かも其の面に鱗があるから一層ひかゝつて都合がよろしい譯である。たゞに登り行くのに巧なば

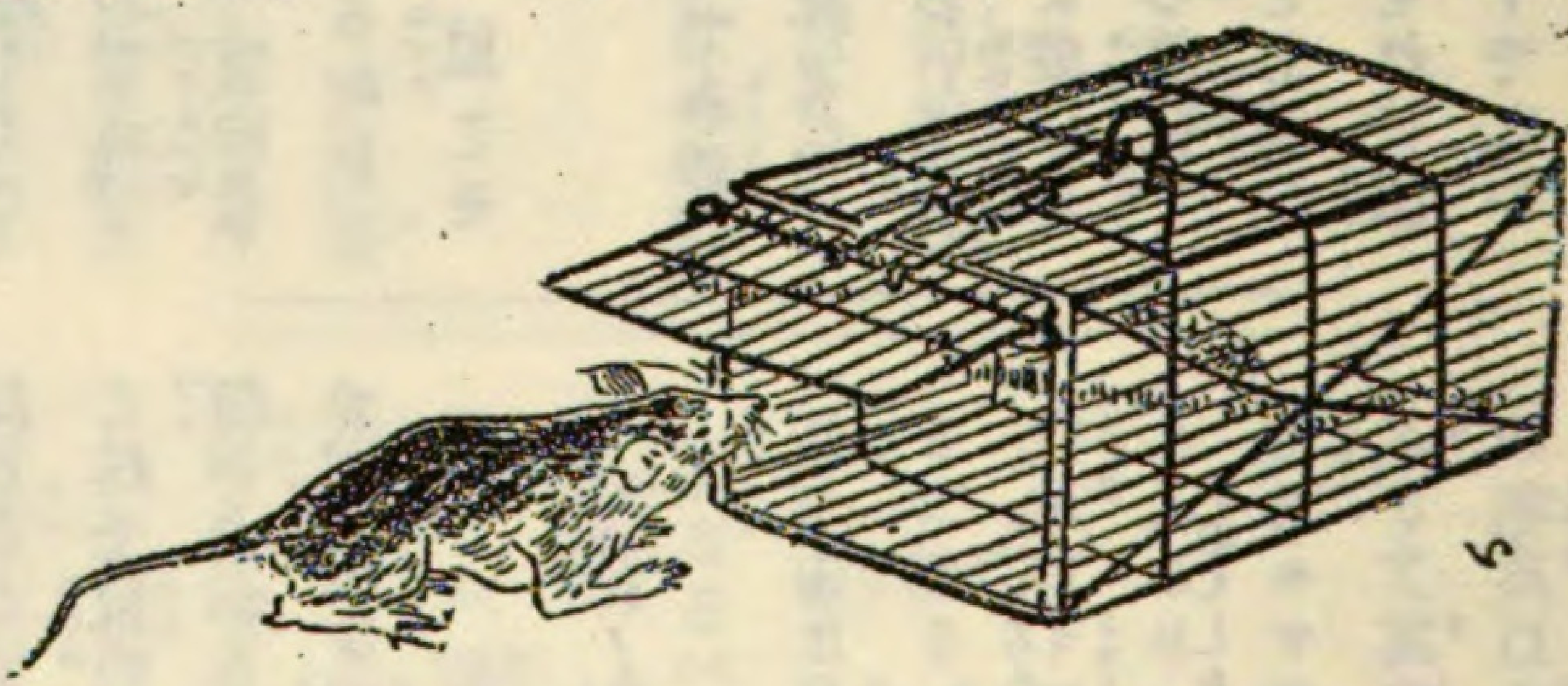


かりではない、彼れは下り行くにも甚だ妙を得て居る、どーしてかといふに、そのときには彼れの後足が自在に横の方へ拄げられることが出來るから、それで躰の落ちないよーに支へられづゝ下つて行くことが叶ふ譯である。何かと道具の世の中である。

鼠の狡猾なことは實に憎らしいもので、人が寢て燈光を吹き消すとはや直きにコトヽヽと音をさせる、之れを追ひ蓄くるか、但しは鼠穽にかゝらふとするを悟つたときは中々意地の悪い報をする、例へば大切な米櫃の上などに尿をかけたり糞を落としたりなどをする、實に困つた奴といはなければならぬ。鼠穽も一度は掛ることはあるが二度目からは中々掛らないものである。どーかすると最初からして少しも掛らないことがある、ヨモヤ其の仕掛を見て居つたといふ譯でもなからふが、不思議

にも掛らないことがある。それは彼れが人の手の香を嗅ぎ知るからで、その仕掛のときに人の手が觸れるからである。少しも油斷のない奴である、これを防ぐには人の手の香を紛らはせるが最も宜しい、それには丁子か薄荷か何か香氣の强いものを手に塗り付けてその穽を扱かふのである、但し猶丁寧ならば手套を嵌めてすれば一層よろしいよーである。しかしこれとても度〴〵で鼠に合付かれると、もー効力が無くなる、實際は一つの方法では永續するものではない、色々に手を替へ品を代へなければならない、それほどに彼れの狡猾であることが分からふ。

西洋では煉瓦などの硬い壁でも鼠の齒では穴を明けられることがある、そのよーに一旦穴を明けられると、一寸之れを塞いでも矢張元の通りに明けられる、そこで硝子の破片などを混ぜたセメント粉を煉つて之れを詰めるのが一番よろしいそ



ーである。日本の家でも鼠の拔け穴は木のよーなものでは一時はよくても長くはいけないもので隨分面倒なことである。

彼れが狡猾な例は未だ〳〵ある、米屋干物屋肉屋などから假初にも食物を商つて居る店では、何れも彼れのこすい悧巧には困つて居て、店にある品物が何事もないよーに見えて居て、實は人の目に觸れないよーに食ひ荒らしてある、農家などで稻や麥の積み重ねてあるものを、知らぬで居る間に、はや窃食せられて居ることがあつて、チョット熟練した人の目でなければ氣附れないほどである。それから彼れの狡猾は大膽が加はつて居る、隨分危險を犯かし惡いことをする例である。彼れは牛馬の畜舍に忍び入つて、馬の蹄や牛の角などを嚙つたり、又犬の眠て居る間へ交り込んで、ソット其の犬の足蹠を嚙ることがある。それから鼠は鳥の目が夜になると見え

なくなることを知つて居るものであるから、夜中に鳥屋へ忍び込んで羽を喰つたり肉冠などを噛み痛める、それで鷄や鵞などが夜中に不意に叫び立てゝ騷しくなる、されど、人はこれを鼠のすることとは氣付かないで猫か狐かなどが襲ひに來たものとして居るが、實際世間では毎でも狐狸などを惡物と思ひ込んで居るから、寃罪で可憐そーなものである、それに引き換へ鼠こそ實にこすい奴といはなければならない。

段々鼠の罪を數へて見たが、中々盡きせぬほどである、しかしながら全然彼れは無用のものとはいはれない、間接ながらも意外にも人生に大きな役目を働らいて居るものである。それは外ではない、市街の下に縱横樣々に渉つて居るところの水道の管に棲んで居る溝鼠といふものが、水中に流れ來る動植物の殘片などを漁つて食べるから、その御庇で飲料水が腐らない、それで以て市中には病人が存外に出來ない、若しもそーでなかつたならば、それこそ赤痢や窒扶斯や虎列刺などが我一と爭つて市人を攻め立てゝ來るだらう、そこが鼠の效能である、思つて見ると、掃除人を雇つて置くよりも忠實に親切に掃除するものといはれる。而かも只で賃錢もなくて濟むことではないか。

これで鼠の話は切り上げよー、それに動物の話も大分續いたから、此の次は植物に移らふ最早四月になるので、陽氣な櫻などの話をして見たいものである。

つれ〴〵とふるは涙の雨なるを　はるの物とや人の見るらむ　泉式部

ときはなる山の岩根にむす苔の　そめぬみどりに春さめぞふる　長經

こゝろあらん人に見せばや津の國の　難波わたりの春の景色を　能因

名もしるし峯の嵐もゆきとふる　やまさくら戸の明ぼのゝそら　定家

技藝

割烹科（つゞき）

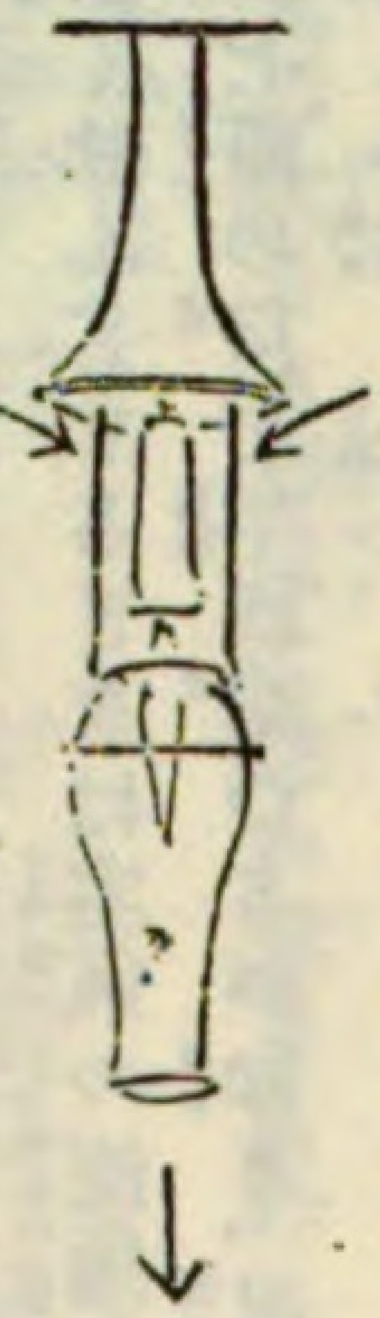
女子職業學校にて　高橋章臣述

(二) 火のこと

文明國の人民と野蠻の社會とに於ては大に生活の有樣を異にすれども、食物を調理するに火を用ふることは野蠻の人と雖も之を知らざるものなし、去れば人類は總て火食するものと謂ふべきなり。

◉燃燒

▲試驗　蠟燭に火を點して之を「ランプ」のホヤにて覆ふべし、而してホヤの上に紙の如き輕きものを持ち來るときは其のものは上に向て飛ぶを見るべし、又ホヤの上口を密閉するときは火は消滅すべし。



右の試驗に於てホヤの上の紙の如き輕きもの丶飛び上がるは空氣がホヤの中より上昇するが爲めにして、其の空氣は矢を以て示すが如く、絕えずホヤの下口より入りて其の上口より風となりて出づるものなり。

次にホヤの上口を密閉するときは、空氣は其の下口より入るも、上口より出づること能はざるが故に、遂には空氣は下口よりも入ること能はずして空氣の流通止まるに至るべし、而して火は終に消滅す。是に由て見れば燃燒するには空氣の流通を要すること明なるべし。

▲應用　火吹竹にて火を吹くときは空氣の流通を速にすべし、故によく火が燃ゆるなり。

鞴の用も亦之に同じ。

炭を次ぐにも亦薪を入れるにも其の間にスキマを多くして空氣の流通する樣にせざれば能く燃へず。

七厘の戶を開けば火か盛に燃へ之を閉つれば火力の衰ろふると同じ理なり。

火消壺は火を入れて其の口を密閉し、矢張り空氣の流

通を止めて火を消すなり。

是に由て若し火力を强くせんとするときは空氣の流通を能くせざる可らざること明なるべし、若し又火力を弱くせんとするときは空氣の流通を少くすべし、例へば七厘の戸を半ば閉つるが如き、又は灰を以て炭上を蔽ふか如き是なり。

次に全く火を消さんとするときは空氣の流通を全く止むるか、若くは之を冷却するなり、例へば吹き消すが如き又は水を注くか如きは冷却して火を消す仕方にして火消壺又は蒲團抔にて火を消すは空氣の流通を止めて消す仕方なり。

▲試驗（三）　熱のこと

火箸の一端を火に入れて熱すれば他端までも熱せられてアックなるべし。

右の試驗にて熱は火箸の一端より他端まで傳はり行きたること明なるべし、之を熱の傳導と云ふ、而して熱は火箸に限らず何物にても傳はり行くものなり。

然れども物によりて熱の能く傳はるものと否らざるものとあり、其の能く熱の傳はるものを良導躰と名づく、否らざるものを不良導躰と名づく、例へば鐵銅等の如き金屬は良導躰にして木毛布藁等の如きは不良導躰なるが如し。

▲應用　鍋釜類は良導躰なる鐵銅等の如き金屬にて作るなり、鍋釜などの用は其の外面に熱を受けて之を導きて其の中にあるものを熱するに在り、故に良導躰を宜しとす。

鐵器の柄などを木にて作るは其の柄の熱くならざるを要するが爲なり。

冬に飯櫃を藁にて包むが如きは飯の熱を失はざらしめんが爲めなり。

夏に氷を毛布又は鋸屑にて包むは外熱を遮りて氷を解かざらしめんが爲めなり。

衣服を毛布木綿等の不良導躰にて作るも躰温を失はざらんが爲めなり。

▲試驗　湯屋にて入浴するときに湯の上部は底の方よりも熱きことは人の知る所なるべし。

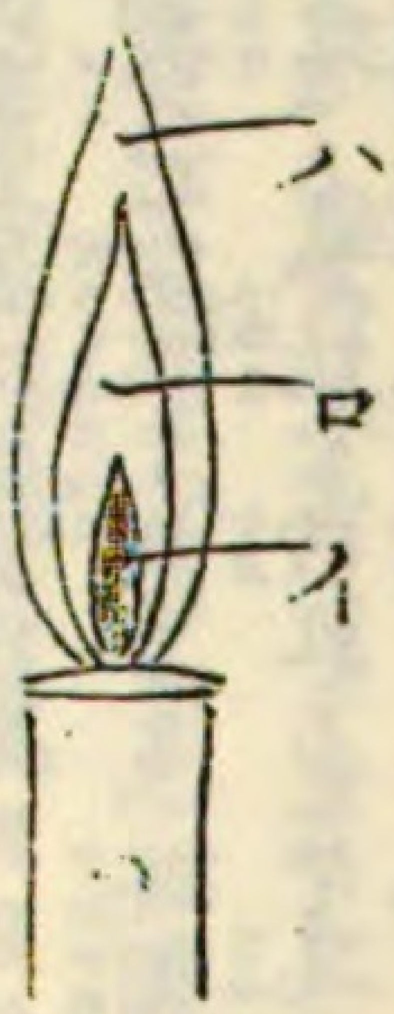
是に由て見れば水は上部より次第に熱くなることを知るべし、其の理は底の方より熱すれば、其所の水は先づ熱せられて輕くなる、其故に上方に上りて上方の冷水は重き故に降る、斯くの如く熱せられたる輕き水は上り冷き重き水は降り、次第々々に上方よりアツクなるものとす、之を熱の對流と名づく、是を以て湯を沸し物を煮るに、下より熱を加ふるを利ありとす。

▲試驗　火鉢の近くに寄れば温暖を感ずべし。右の試驗に於て火鉢の火の熱が如何にして來るかと云ふに、空氣を傳はりて來る所の傳導にもあらず、何となれば空氣は不良導體なるを以てなり、又對流にもあらず・何となれば熱せられたる空氣は矢張り輕くなりて上昇すればなり、然らば如何にして來るかと問はんに、是は其の火より眞直に進み來るものなり、之を熱の放射と名づく。

▲應用　魚などを燒くは炭火に向はしめて其の放射熱を用ふるなり、而して炭を重ぬるより之を廣く排べる方を宜しとす、何となれば之を廣く排べるときは熱を放射すること多ければなり。

炭火を團扇などにて扇ぐときは、空氣を送るのみならず、炭上の灰を除きて放射熱を多からしめんが爲めなり。

焰には次の如き部分ありて其の部分により温度異なるものなり(イ)は焰の中心にして燃燒せざる所にて温度最も低し(ロ)は不十分に燃燒する所にして最も光る、併し温度は光る割合には高からず(ハ)は十分に燃燒する所にして光は甚だ弱けれども温度は最も高し。

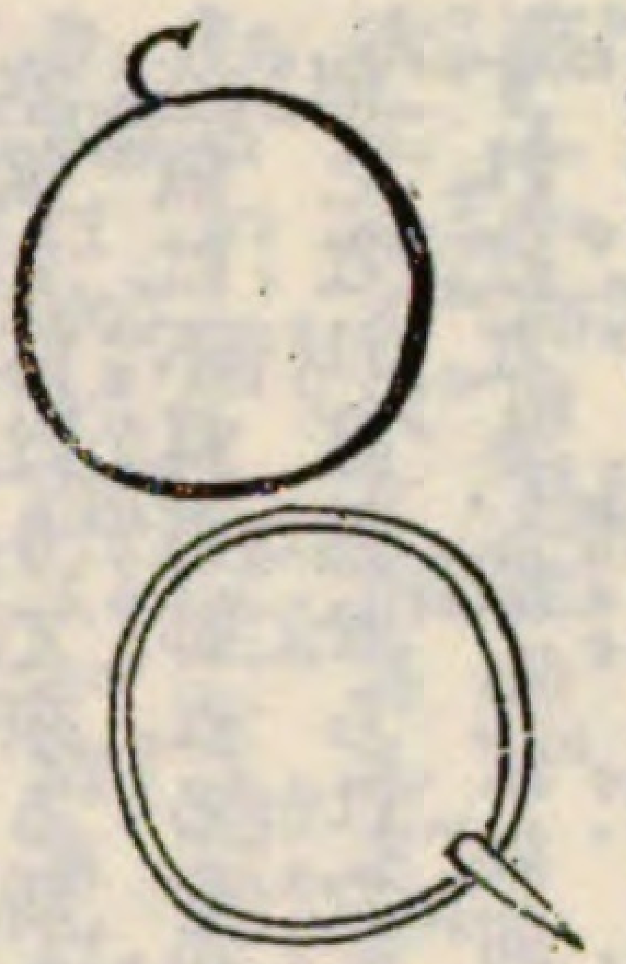


是は焰の中心は空氣入らざるが故に燃燒せず(ロ)部は空氣入るが故に燃燒すれども其の空氣が不充分なるが故に全くは燃燒すること能はず、然るに(ハ)部は最も外部にして空氣十分なるが故に全く燃燒することを得るなり。

湯を沸し物を煮るときには此の焰のことを能く理解し居りて鍋なり釜なり又は鐵瓶なりの底に丁度焰の最も

温度高き部分か當る樣にせざる可らず、焰を離るか又は其の中心の黒き部分に之を入れるは頗る不利なるものとす。

▲試驗◉膨脹のこと（イ）は金屬の球にして（ロ）の環を自由に通り



得るものなり、今此の球を熱するときは球は大きくなりて其の環を通らざるに至る、即ち熱は此の球を膨脹せしめたるなり。

又次の圖に示せるが如くガラス管を有するビンの中に



水を滿盛し、而して之を下より熱すれば水は溢れて管の口より流れ出づべし、是ビン内の水は熱の爲めに膨脹して多量になり、ビン内に入り切らず遂に管より流出するに至るなり。

又膀胱に八九分ほど空氣を入れ絲を以て其の口を堅くくゝり之を火上にて熱すれば、中の空氣膨脹して終に膀胱までもフクルゝに至る。

是に由て見れば熱は總てのものを膨脹せしむるものなることを知るべし。

倶口のビンの栓を取らんとするとき其の栓の取れざることあり、此の時にはビンの頸部に丈夫なる繩を二つほど巻き、之を左右にかはる〳〵引きて摩擦し、以て熱を起して膨脹せしむれば取れる。

玻璃器に熱湯を注けば忽ち破れる、而して其の器か厚く出來て居れば尙ほ更に破れ易し、是は熱湯に觸れたる部分は膨脹すれども、外面の方は膨脹せずして其のまゝなるか故に破れるなり。

卵、栗子などを殼のまゝ燒くときに音の發して破裂するは內部の空氣の膨脹するに由る。

熱は物の有樣を變す。

▲試驗◦◦堅き蠟を熱すれば解けて液軆となる。水を熱すれば蒸氣となる、而して蒸氣か底の方にて生じ泡と

なりて上るときは之を沸騰すと云ふ。水は攝氏の百度に熱せらるゝ時は蒸氣に變するものなり、故に何程熱しても通常の場合にては水は百度より高く上ることなし、然るに沸騰したる後も薪を加へて火を盛にするものあり、斯の如きは薪を無益に費して湯を蒸氣にするのみ、湯を沸すにも物を煮るにも能く此の理を知り居りて薪炭の經濟を計るべし。

（四）　燃料

燃料の主要なるものは薪炭なり、近來は石炭を用ひ又は石油を用ふるに至る。

▲薪　樹木の幹にはアカタとシラタとあるものあり、若き木にはシラタのみなれども、老木に至れば内部にアカタを生ずるに至る、一般にシラタは軟にして早く燃へ、アカタは堅くして長く燃ゆ故に薪としては老木を宜しとす。

薪とするに適する植物は通常次の如し、

クヌギ（櫟）カタギ又は菓子屋塡と云ふ、薪の最良なるもの なり、老木は火力强し其七ヶ年目位に伐りたるものは、火力稍弱けれども烟少くして炊飯に適す。

ナラ（楢）良薪なり、

カシハ（槲）良薪なり。

此外のものを雜木と稱して價廉なり、

▲炭　炭は木をムシヤキにして作るものなり、櫟、槲、楢等にて燒きたるものは上等の炭にして雜木にて燒きたるものは下品なり。

▲石炭　石炭は植物が自然に土中に埋まりて炭に化したるものなり、種類多し。

無煙炭　燃燒して煙を發せず故に名つく、鐵を製するに用ふ。

黒炭　通常の石炭なり、上等の木炭よりも三倍程の火力を發すコークス（骸炭）は之を蒸したるものなり。

褐炭　通常の石炭に屬す、臭氣を發し、火力も弱けれども燃料に適す。

泥炭　下等の燃料なり。

▲石油 地に深井を掘りて其の中より汲取るものなり併し天然のものは極めて點火し易くして危險なるを以て常用に適せず、故に之を精製するなり。

（五） 熱に關する什器

▲鍋 鐵鍋は衞生上に最も宜し、銅鍋はカラカネ（青銅）シンチウ（眞鍮）等にて作る、鐵鍋よりも熱を導き易けれども衞生上に宜しからず、酸化（サビル）の恐れあるを以てなり、銅鍋を磨きたるときは十分に乾すべし、然らざればロクシヤウ（綠青）を生ずることあるを以てなり、物を煮たる時は未だ冷へざる内に之を他の器に移すべし、然らざれば毒を生じ又鍋の保存にも不利なり。

▲鍋釜鐵瓶等を新調せるときには先づ鐵氣を去らざるべからず、其法は蕎麥粉を入れて煮るか、又は甘藷或は糠を入れて煮沸すべし。

▲竈 改良竈と云ふものあり。

東京の煉瓦製竈 薪炭を節減すべし。

大阪の改良竈 外國風なれども便利なり。

愛知縣の改良竈 實用に適す。

長野縣の改良竈 廉價にして薪炭の儉約も出來、火力の散失なく最良のものなり。

（六） 食物を熱すること

▲煮ること 食物を煮る目的は大畧左の如し。

食物を軟にして消化し易からしむ、例へば澱粉を煮るときは膨脹して消化し易くなり、肉を煮るときは軟脆になるが如し。

腐敗を防ぎ傳染病毒を撲滅す、即ち腐敗及び傳染病を起すものは下等の生物なり、然るに此等の生物は煮るときは死す。

美味を與へ又は種々の食物を混合す。

▲注意 古き豆を煮るには先づ冷水に浸し軟水にて煮るべし、若し硬水ならば少許の曹達を加ふべし、然らざれば消化し難きものとなる。

肉を煮るには汁を沸騰せめして後に肉を入るべし、之を煮る間に箸にて動かし又はツヽクことなどは宜しからず、而して熟煮するを要すれども餘りに煮過ぐると

きは不味不消化のものとなる。

▲燒くこと　目的は煮ることに同じ但し肉を燒くには初め强き火にて燒き後に文火にかくべし、燒き過して硬くすることなかれ。

▲蒸すこと　水蒸氣にて蒸すものにして其の目的は矢張り煮ることに於けるが如し、是は滋養分を失ふこと少きが故に最も良き方法なり、併し堅き物には施し難し。

（七）食物

食物を別ちて食品及び嗜好品の二つとなす、食品とは滋養品として取るもの、例へば肉、五穀、野菜、果實等にして嗜好品とは茶、コーヒー、酒、香辛料等の如きものを云ふ。

▲貯藏法　物の腐敗するは下等の生物即ち黴菌の爲すことなり、故に之を貯藏せんには、此の黴菌を殺すか又は其の蕃殖することを防がざる可らず。

罐詰法　熱によりて黴菌を殺し之を罐中に入れて密封すべし、罐詰の蓋の凸起しあるは腐敗の印なり。

燻煙法　防腐の効ある煙にて肉を燻するなり、是は黴菌の蕃殖を防ぐ。

漬物　通例鹽にて防腐するなり。

氷室に置くこと

乾燥すること

燒くこと

▲注意　米に少許の酒又は酢を入れて炊くときは飯は腐敗し難し。

海苔は錫の壺又はブリキの罐又はガラスビンに入れて周圍に煎り米を塡め置くべし。

卵は乾砂食鹽又は石灰水の中に置くべし。

鰹節は少し酒を塗りて置くべし。

醬油は白麻袋の中に芥子を入れて其樽の中に入れ置くべし。

酢は煎り鹽少許を加へ置くべし。

（未完）

造花科（つゞき）

女子職業學校造花科教員　伏見藤三郎君述

此度は桃の花の造り方を御話し致します、桃の色は御存じの通り。白、赤などが御座りますが、先最初赤色に付て御話し申します。

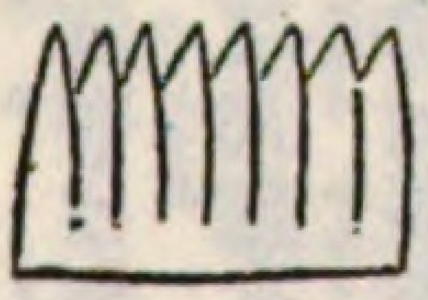
寒冷紗又は白絹をとり、ローダミン七分、フロクシン三分位の割合で湯でよく解しました汁の中へ入れ斑のないやうによくつけまして、後夫れを引き上げ程よく絞つて乾かします。

第一図

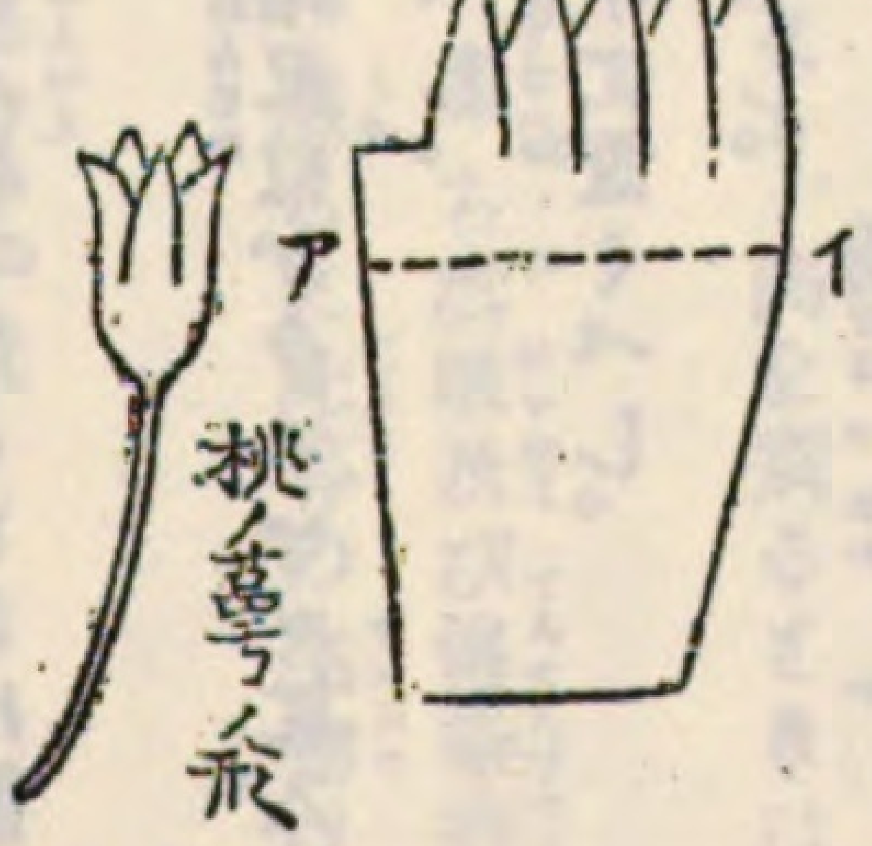


偖、乾きましたなら、其切を第一圖のやうに大小二通り切り、其大の方には「大の瓣鏝」で下の方に丸みを持たせ、先の方は「小の瓣鏝」で少し皺をよせます、又小の瓣には「中の瓣鏝」で下の方へ丸みを付け、先の方は「小の瓣鏝」で皺をつけます、又蘂に近き瓣即内側の方のものはちゞれを多く致さなければなりませぬ、(之は實物の花を御覽になれば其工合が分ります)かやうに致しましたのを、開きには大の瓣十枚と、小の瓣三枚遣ひます、大の半開には瓣の數は開きと同じに致しますが、只少しつぼんだ形に致すので御座ります。小の半開には大の瓣は用ひませず、只小の瓣ばかりを、成るべく丸く鏝をあて十枚程付けます、其付方は梅の時と同じやうで、蕚に糊をつけて、初めに五枚次に互ひ違ひに五枚といふやうにつけます、夫れから終りに蘂を入れます、此蘂も梅のと同しもので宜しう御座ります。

第三図



第二図



蕚は青紙で第二圖のやうに切りまして、上部をブローンでぼかし染に致し、(ア)の邊へ一寸糊を付け、又木の箸のやうなものを程よく削り、上の方から凡(ア)(イ)の邊位までの處におきて、其紙をまきつけ其下の方はよくよぢりまして、丁度梅の蕚のやうな形につくりま

す、第二圖の乙の通りで御座ります
蕾は花に染めました切を六七分四方に切り、小さく丸めました綿を入れ、細い針金で括り、蕚の中に入れるので御座ります。
花が出來上りますれば、姫糊を少し薄く解かして、其蕚へしき、又綿をごく／＼細かに切り粉のやうにして其上に付けます。
葉は青紙で第三圖のやうに切り一筋の邊を上の方から切込のある所までゐて、針金にまきつけ倘臘をしき（臘のしき方は前回に申ました通りで御座ります）後青紙で纏めるので御座ります。
かやうに出來ましたら、實物の枝を手本とし、マセンダとカシドラパルとを解し置き、青紙でまとめましたものゝ上を、筆で此繪の具をうすくぬるので御座ります。



桃花圖

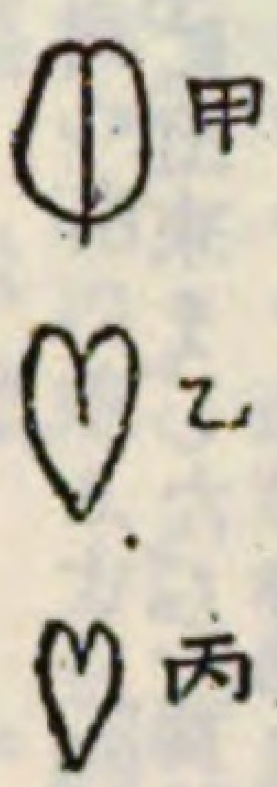
又白桃の花を造りますに、皆前と同じやうに致しますが、花の瓣はヲウラミン七分グリーン三分位の割合に薄くとかした汁で、染めるので御座ります。次に

◉蓮花草の造り方

を申上ます先づ絹か寒冷紗で第四圖のやうに、三色の瓣を切りローダミンを濃く解しました汁の中に、何れも二三枚づゝピンセットで元の所を狹み、初めは水に入れまして一寸指先で水をきり、夫れから前の繪の具の中に入れてぼかします、そして、元の所は染りませぬやう、白色を殘し置き、かたく水をきります。
蕚は第五圖のやうな形に青紙を切り、先の方をマセンダでぼかし置き、乾きました時、木の箸のやうなものに

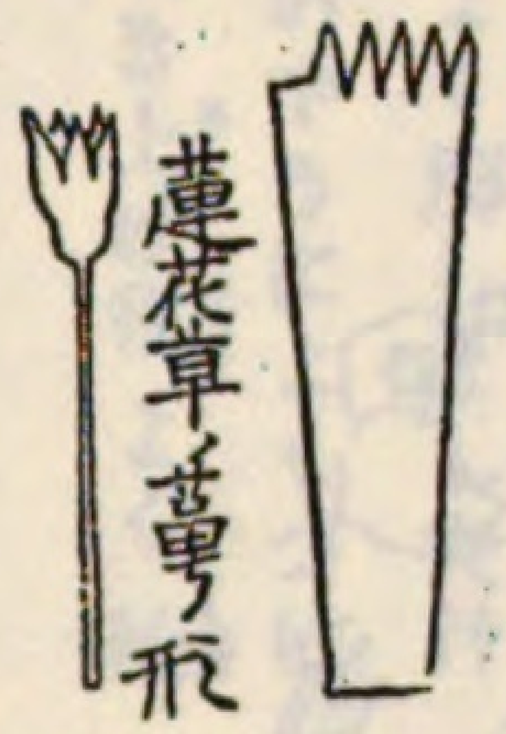
巻きつけ、下の方をよくよぢりまして、丁度桃の萼をつくりました時と同様に致します。

第四図



花瓣へ鏝をあてますには、先づ甲の瓣を二枚位重ね布の上にのせ筋鏝で眞中に筋を引き裏返しに致し、両端を「小の瓣鏝」でふくらします、乙丙の瓣は初めに「小の瓣鏝」で両端にあて、すぐに眞中の所を筋鏝で筋を引きます、又之を萼に付けますには、一つの花につき、甲の瓣は一枚を第六圖のやうに付け、乙丙の瓣は向ひ合せに致して萼に入れます。

第五図



蓮花草ノ萼形

蕾は、雁皮を小さく切り、綿を極少々入れまして、ピンセットの尖で、細く長き形に捺らへ、細い針金で括りまして、萼へ入れるので御坐ります、（丁度第七圖のやうな形に致します）夫れから、花と同じ繪の具で先の方を濃く、元を薄白くぼかして染上げます。

第六図



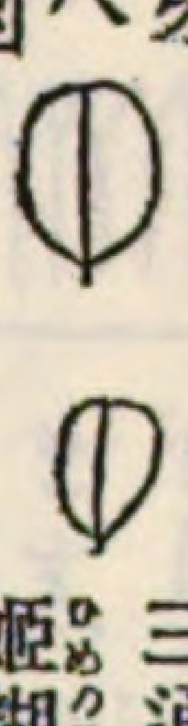
花のまとめ方は、實物にならひまして、開き、半開き、取まぜ七ッから十位をとりまして、萼から凡一分位離れました所に、細い針金をまきつけ、堅く結び、其殘の花の柄は皆切りおとしまして、其針金を眞直に延ばしました其上に、青紙を巻きつけます、蕾とまとめますにも之れと同じ様に致します。

第七図

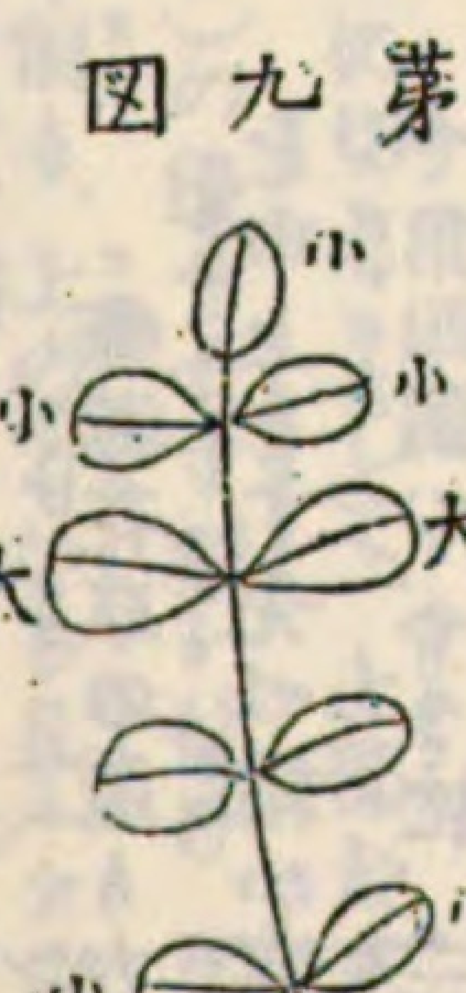


葉は、初め寒冷紗をグリーン、チウラミン、マセンダの三通りを合せて染め、竹シンシで張り、姫糊をよくときまして裏表からしいて乾かします、乾きましたならレモンエルロー四分、セルリン六分位の割合に合せました汁を片面から布きまして、表葉と致します、これは前に申しました薔薇の葉の造り方と同しで御座ります。

第八図



第九図



第八圖に書きましたやうの楕圓形の葉と、大小二通り

切りまして、裏の方から、青紙をまきました針金を付け(即葉柄で御座ります)ピンセットの先で細く筋をとり裏から「中の瓣鏝」で兩端へあて、夫から臘をしきます(臘のしき方は薔薇の葉の時に中しました通りで御座ります)。かやうに致しました上、第九圖のやうに、小葉を一枚とり、其柄の二三分離れました所に細き青紙で、小の葉二枚を向ひ合せに纏め、次に大の葉を同じく二枚といふやうに、だん／＼に付けます、凡て葉の付工合、又其數などは實物を手本と致しますのが一番宜しいので御座ります。

花、蕾葉など出來上りまして、夫れをまとめます時にも、矢張實物を手本と致しまして、花は五まとめ、又は七まとめ、葉は七まとめ又は九まとめ位にして其葉をマセンダで染て置きます、第十圖は出來上りました所のものを御目にかけたので御座ります。次は

第十圖



◎蒲公英の造り方

を申上ます、先花を造りますに寒冷紗を、ヲウラミンを湯で濃く解しました汁で染め置きまして、乾きましてから、八枚ほどに重ね、前回に御話致しました、小菊の瓣の打拔で打拔き、(打拔が御座りませぬ時には鋏で切ります)第十一圖のやうに鋏を入れ、尚四ツ切に致しまして、布の上にのせ、筋鏝で一瓣つゝ筋をつけます。

蕊を造りますには、黄木綿糸を細い針金で第十二圖のやうに結ひまして、上の方を平たく切り、先を「ヨージン」を薄く解した汁で一寸染るので御座ります。

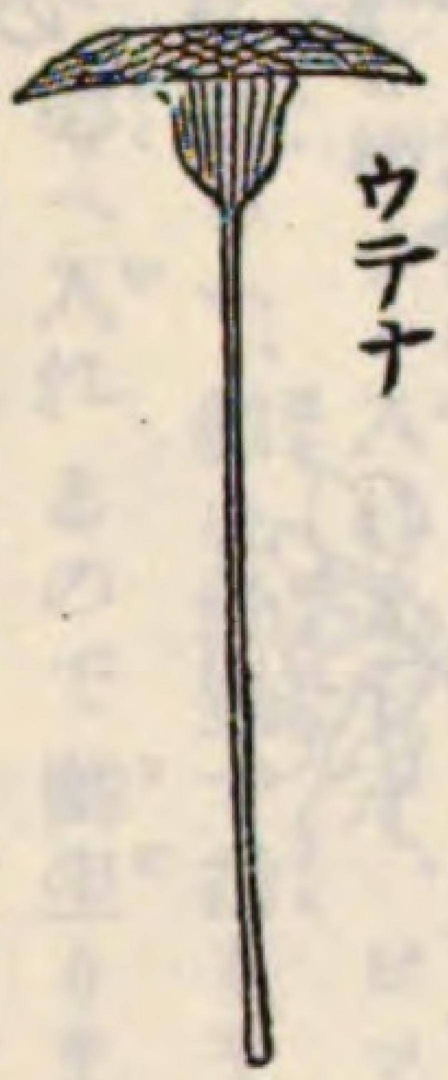
第十一図



蒲公英ノ花辧

此蕊が出來ましたなら前に造りました辧を小から先に付け初めます開きには小、中、大の瓣皆八枚づゝと、極大を十二枚、都合三十六枚を片よらぬやうに付けるので御座ります、又半開きには、極大の瓣を省きまして、只大、中、小三通りで宜しう御座ります、小さ半開きには小と、中の瓣二通りを六枚づゝ付けて丁度よろしう御座ります。

第十二図



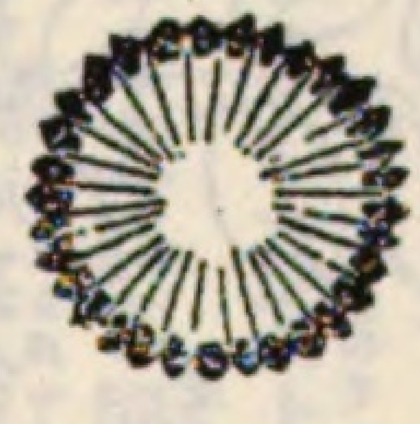
ウテナ

萼は青紙で瓣の小、中の形を切りまして夫れをブローンを少し解しました汁で、第十三圖のやうに外側から筆でぼかし染に致し、花と同じ様に切込を入れ、四ッ切に致し中を初めに、次に小と、四枚づゝ糊で前の花の下の方に付けるので御座ります。

花の莖は、針金に紐護謨を、開きには三寸、半開きには二寸五分、小の半開には二寸位に切つて通します。

葉の造り方は、初め寒冷沙に竹シンシを張り、姫糊を解し、裏表から、むらのない様にしき、乾かしまして、實物の葉二通りの形をとり、夫れを一枚づゝピンセットで挾み、

第十三図



最初水の中に一寸入れ、新聞紙のやうな紙の上にのせ置き、又グリーンチウラシンマセンダの三通りを、少しさえました色に合せ、明礬を入れて、よく解かしました液を筆につけ、第十四圖のやうに、

第十四図



蒲公英ノ葉

葉の中を白く殘し、兩端と先の方を濃く、其間は薄くぼかし染に致します、そして乾きましたなら、裏から、青紙をまきました針金を付け、表か

ち、ピンセットで、細く筋をとり、布の上に載せ、表から筋鏝をあて、又裏返しにして筋のきへませぬやうに、氣

第十五図



をつけながら「中の瓣鏝」をあてます、其上で臘をしき出來上りになります。「かやうに致しました花の開、半開、蕾とりまぜ五ッか三ッ葉は大小十枚又は九枚位つけ實物に倣ひましてまとめるので御座りまして第十五圖は出來上りの花で御座ります。

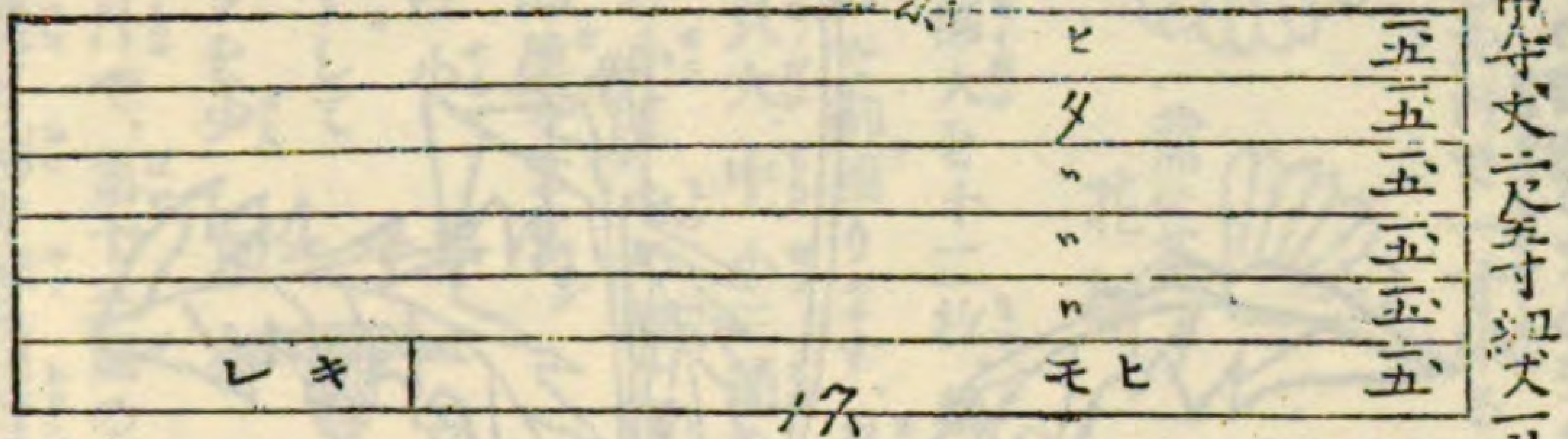
裁縫科

女子職業學校
裁縫科教員　金子銅子述

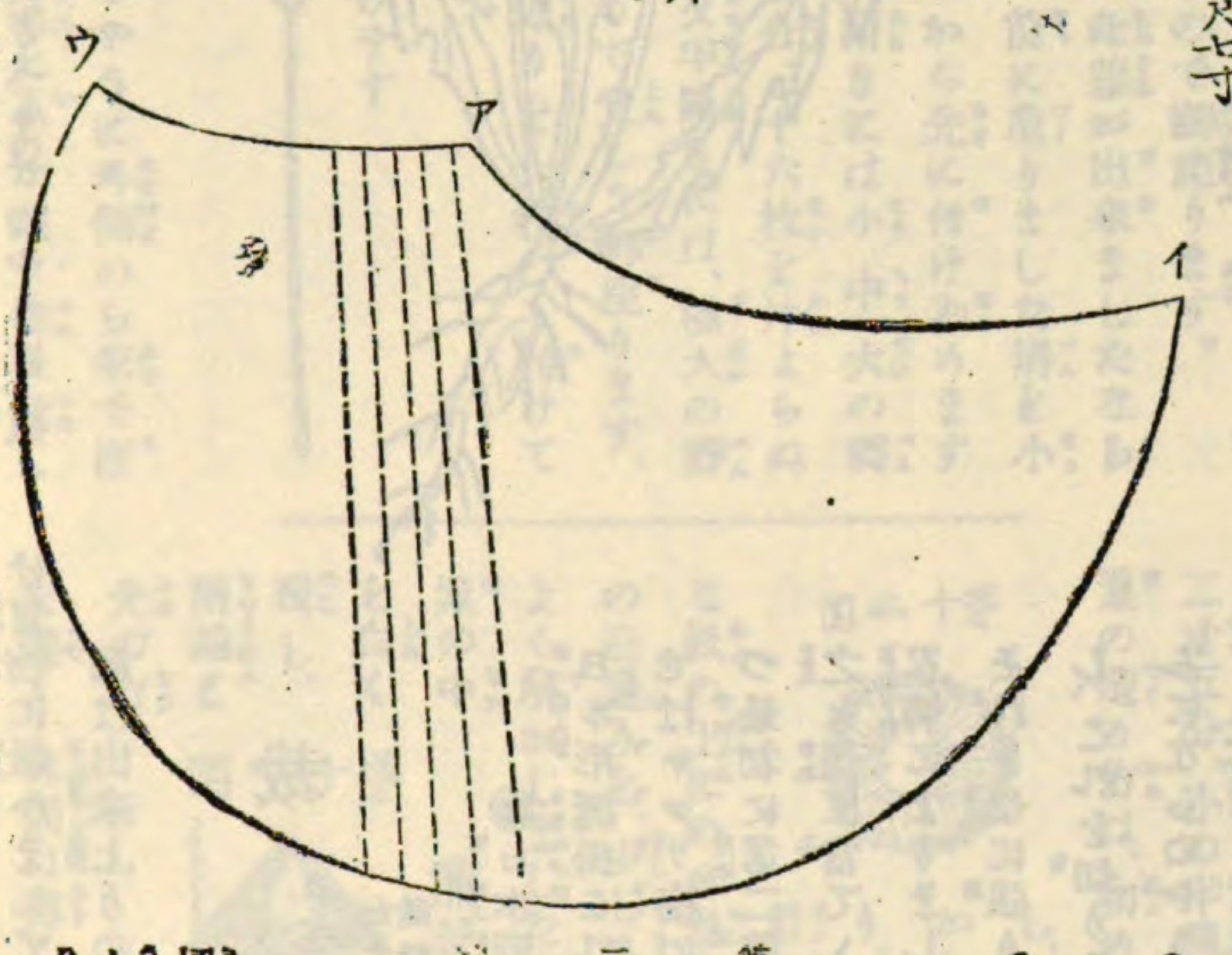
◉日本形涎掛

日本形涎掛これは種々の形がありますか、此學校ではチヂリ梅の形のよだれかけを縫はせます、先つ最初に第二圖の樣な形を厚き紙で切り置まして之を切に當てゝ表の切五枚裏の切五枚をとります又切によりましては薄き紙に形を切り置まして、それを切に張りまして、きるときもあります、しかし、これを切ります時に、注意して、布目のあちこちにならぬやうに、丁度第二圖中の點線が、布のたてになる樣にして、切り取るのでございます、それからヒダの切と紐の切とも亦第一圖の通りに裁つて置ます

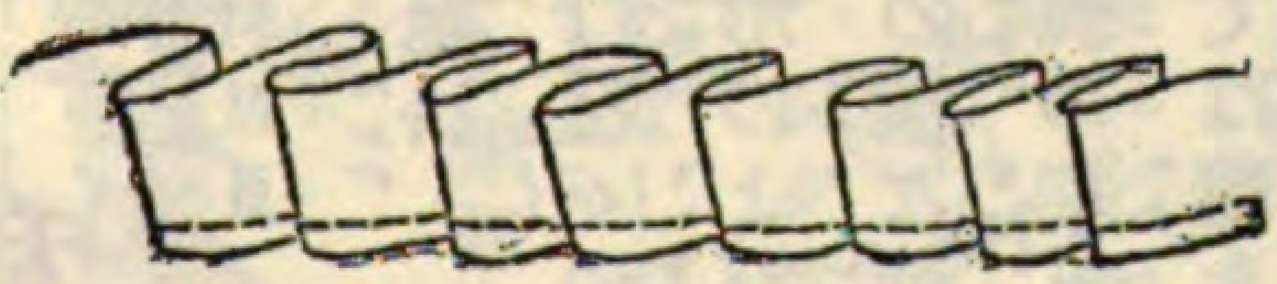
此圖に巾九寸と致しましたが、これは縮緬並巾のつもりでございます、扨之を縫ひますには、初めになる切第四圖の(サ)の切を除き他の切を第二圖の(ウ)(イ)のへりに同圖の(ア)(イ)の丈だけの印をつけます、次にヒダにする切をとりまして、巾を二つ折にして、假縫ひしまして、第三圖の通りにヒダを取りよくくずれぬ様にをさへます、箇様に五箇とも揃へまして終りの第四圖の(イ)の所だけは、端を縫てをくのでございます、次には第四圖の(ア)の切の(ウ)の縁、丁度第二圖で申せば(ウ)より(イ)の所まで表の切にヒダをとぢ付けて置きまして、其上に裏をかぶせて、三ツの切を共に一針ぬきにして縫ひ表にかへします



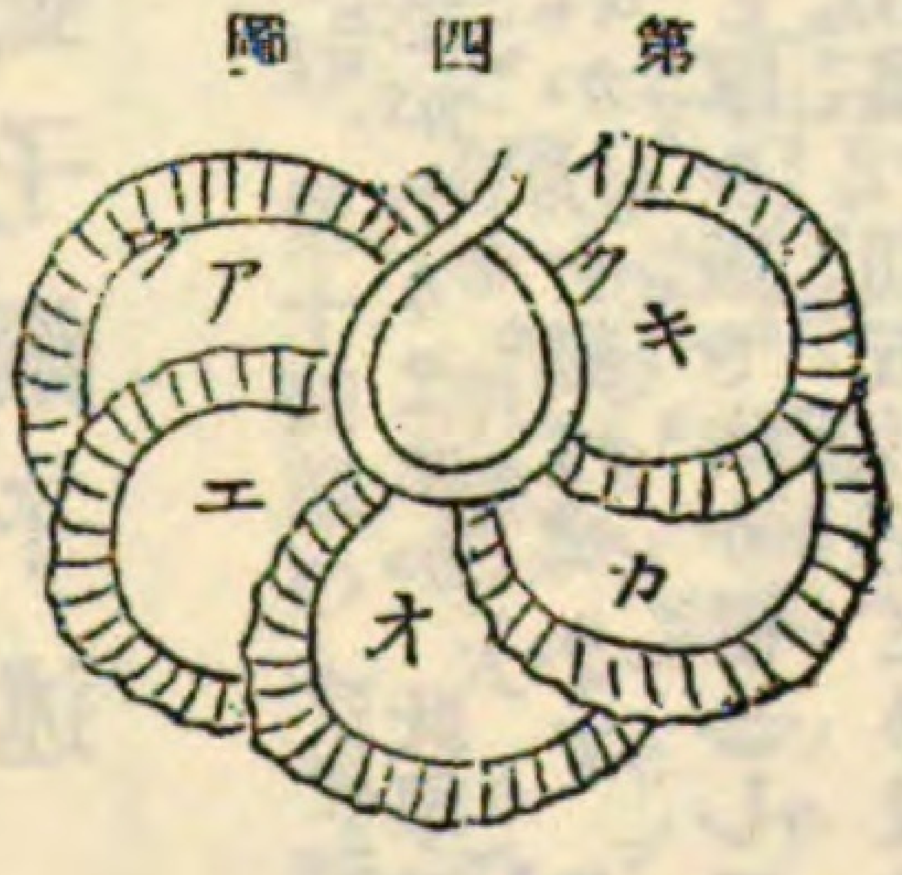
(第一圖)



(第二圖)



第三圖



第四圖

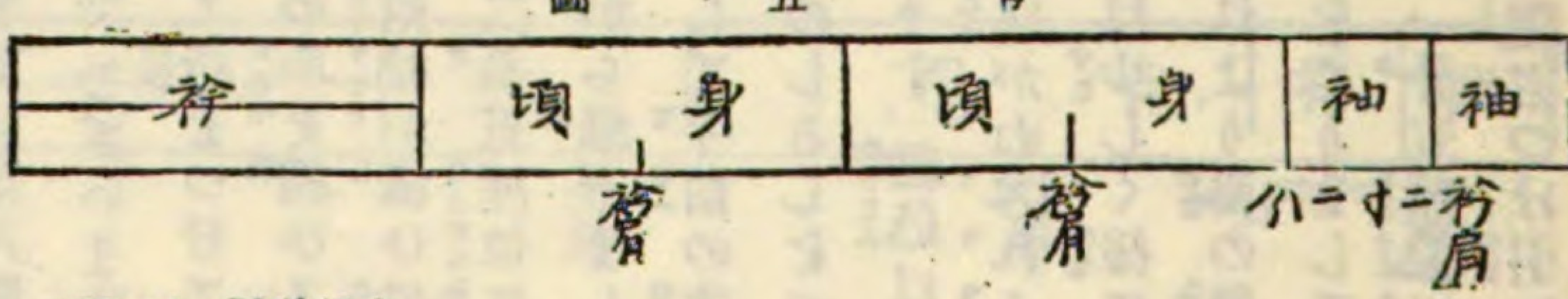
次に第四圖の(エ)の切之も(ア)の切の様に表にヒダの

切を綴付けまして、それより(ア)の表に(エ)の表をのせ(ア)の切の裏に(エ)の裏をつけまして、つまり(エ)の表裏の切にて(ア)の切をはさみ一針ぬきにて端まで縫ひ表にかへします、次の(オ)(カ)(キ)の枚の切とも只今の様に付けまして、たゞ(キ)の切だけは(ク)の所をも縫ひて引かへしますのでございます、夫より紐を付る所をヒダの切も共に假り縫ひを致しまして、紐をつけます、次に紐の兩端の所を縫ひまして、綿を入れまして、裏を絎ます、紐の端は花形でも何にでも好みによりて括りまして、先に房をつけますのでございます、これて涎かけは出來上りましたから次にうつります。

◉單衣襦袢

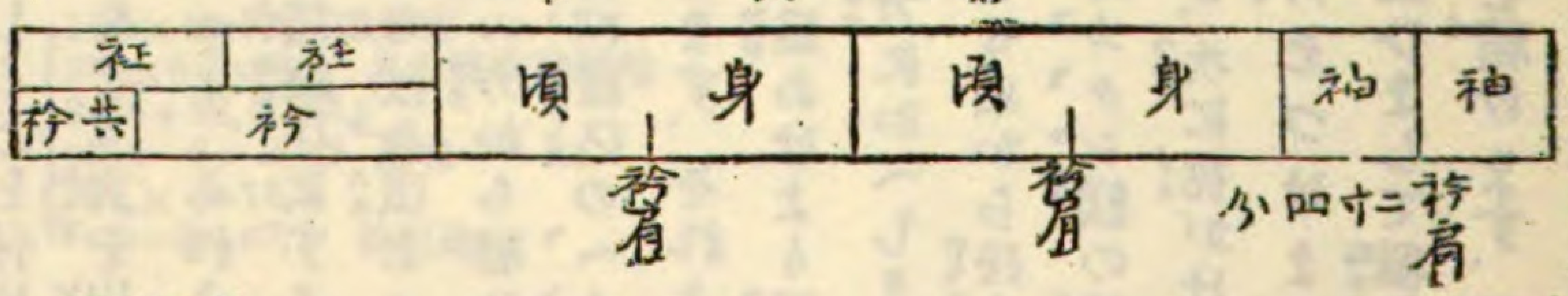
この單衣襦袢には男物女物小兒用と種々ありますから先つ此三種の裁方積り方をお話し致します、第五圖は男襦袢の裁方の圖で、用布が一丈五尺八寸の布にて袖丈を一尺二寸五分裁ち切りといたしまして、襟は山繼にする裁ち方でございます、圖の下は積り方でございます、之は用布を知て居て身の丈を出す仕方でございます、第六圖は女襦袢ので袖丈を一尺五寸と致しまして、身の丈を二尺二寸位としての裁方積り方でございます、これは袖丈見の丈を知て居て用布を求める仕方でございます、この積り方は何れも通して用ゐらるゝものでございますから、男物の袖丈身の丈を知れば、用布を出すこともで

第五圖



125×4=50袖總丈
158−50,=108總尺より袖總丈を減したるもの
108−3=105衿肩マワシ概略の縫込
105÷5=21身丈
21+3,=24,衿丈

第六圖

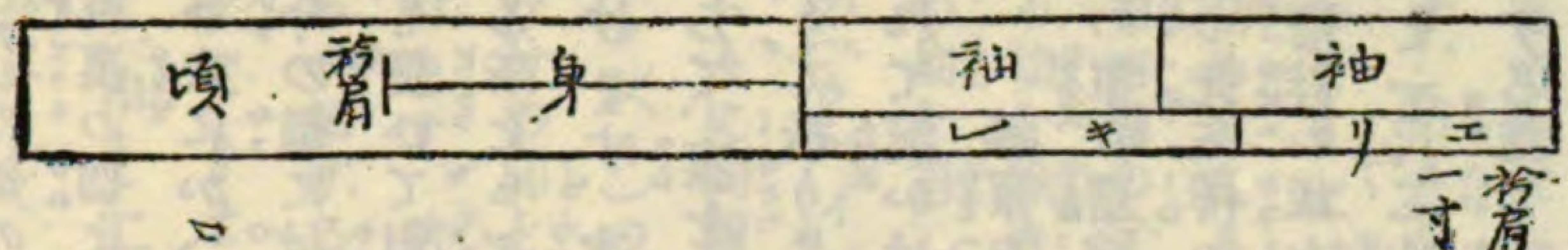


15×4=60
22×5=110
110+3+60=173
22+3=25

此式は第五圖と同じ只寸法を異にするのみ

き、女物の用布を見て袖丈身の丈をはかることも出來

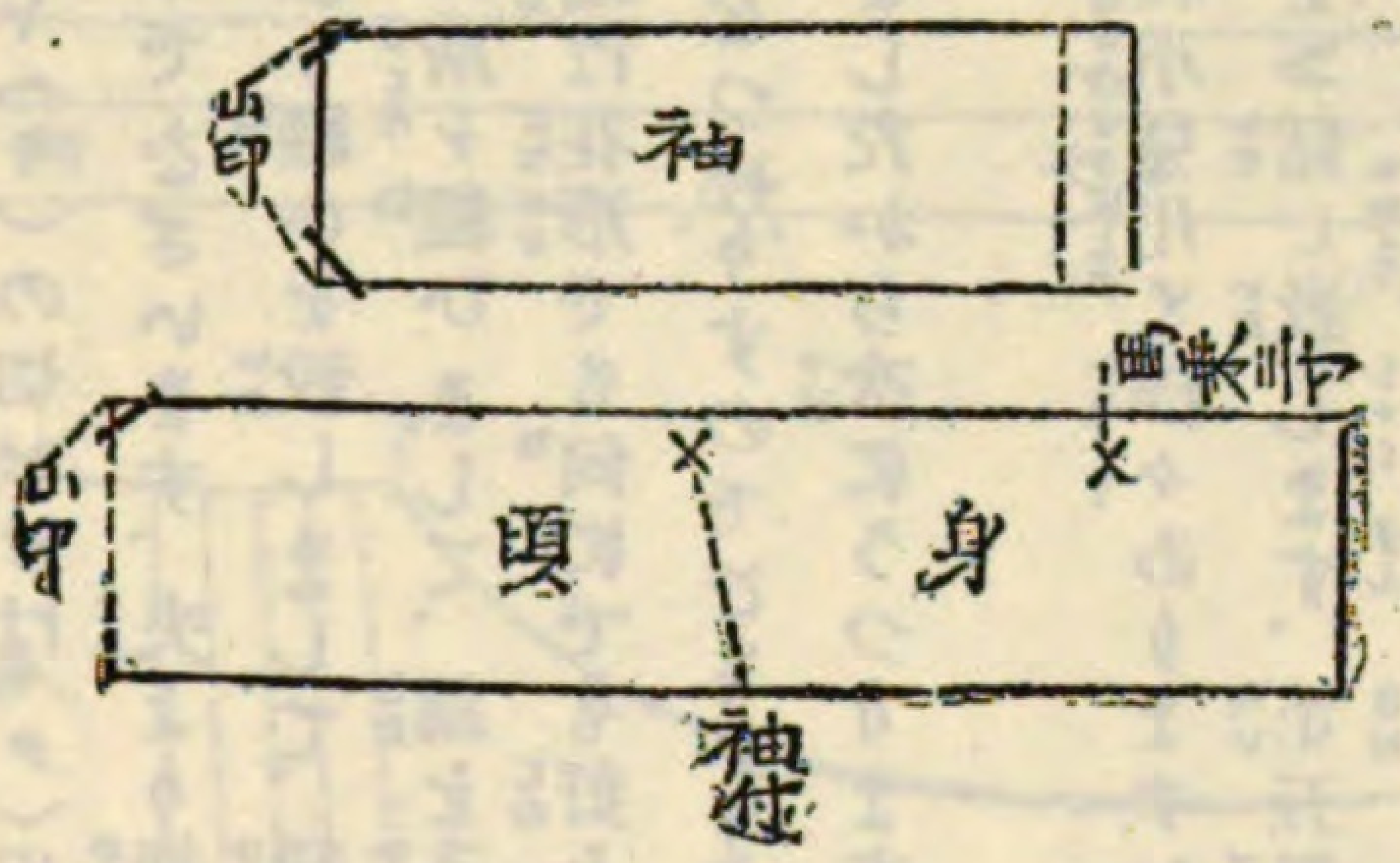
第七圖



丈袖總　14,×4＝56,
丈身總　11,×2＝22,
用布　22,56,＝78,

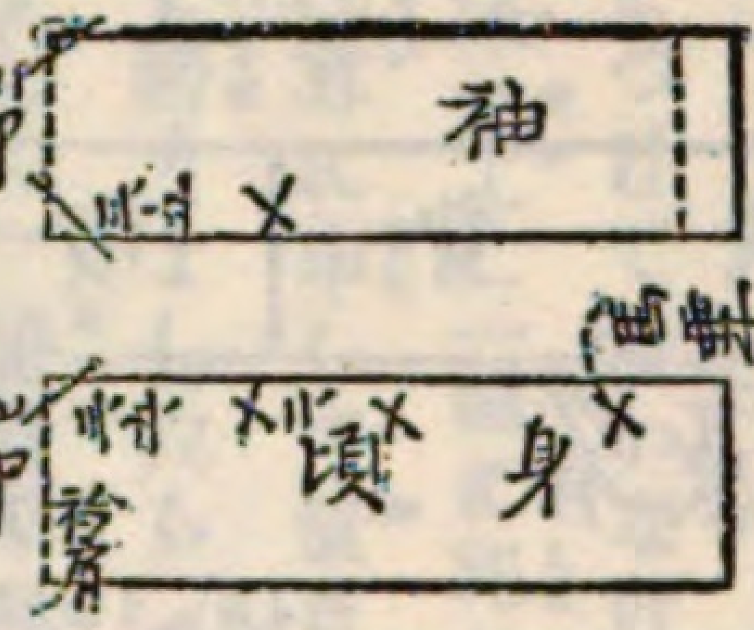
るのでございます、第七圖は小兒用のでございます、これは七尺八寸の布にて袖丈一尺四寸裁ち切りの襦袢でございます。

第八圖



單衣襦袢は大抵は身頃と袖は別々の切でございますが、又袖身頃同じ切でするとがありますから、先づ裁方の方でも其方を取りましてお話しいたしました、扨て縫ひ初めます前に第八圖の通りにしるしを付けますこれは男子のでございます、先づ袖をとり表を出して一度縫ひまして折をつけて引かへします それより又今一度しるしの所を縫ひますつまり袋縫ひにするのでございます、兩袖が縫ひ終りましたらば身頃をとり、背の縫シロを二分五厘位にして衿肩の方から縫ひはじめます、それから縫へましたらば再び縫込のへりの方を今一度縫まして手前の方にかへします、それより後巾を當り肩巾のしるしをつけまして脇わけより馬乘まで兩脇を縫ひます、縫込は前身頃の方にかへします、しかし袖付の縫込がねぢれるといけませぬから後身頃の縫込一枚だけは少しく後にかへしてカクシ躾の樣に一寸をさへ、それより脇の縫込を綴ぢ、次に裾がけを致します、次に衿をとりまして山を繼衿をつけます、衿先を縫目より一分五厘位はしるて縫ひまして縫込を裏にかへし細く綴ぢつけ引かへし衿を絎けます、衿は巾を下一寸八分衿山を一寸五分にするもありますし何れの所も同じ樣

に一寸五分にするのもあります、それは人々の好みによります、次に袖を付けヤックチをくけますので、これで縫ひ上りました、女物のときは、しるしの付方は小兒のと同じ樣で、第九圖の樣にします、只寸法がちがふばかりでございます、女物の寸法は其人々の好みによりますから此處では極めては申上ません、第九圖は小兒



第九圖

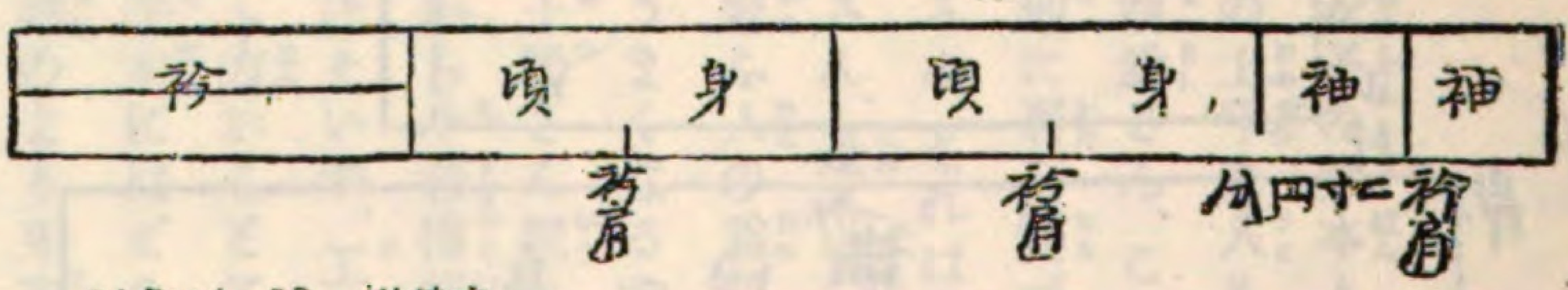
用のでございますが丁度此樣にしるしをつけます、扨て縫ひ方は男物と少しも變りはありません、只袖付がすくないのがちがふばかりでございます、又小兒の襦袢は女物の通りで只背縫ひがありませんのが女物とちがふ所でございます、其他は大小の差があるばかりでございます、次は

◎單衣

の裁方積り方を敎へます、前申しました襦袢をはしめとして、此後種々の裁方積り方など少しく生徒にわかつてまゐりますと、種々な應用問題を出しまして、實地の反物又は切地を裁つ心もちで工風させて、裁ち方積り方の巧拙を許してやりまして、熟練いたさせます。

單衣の裁方の圖は第十、十一圖に就てごらん下さい、第十圖は一反の長さ二丈七尺八寸位のものとみなして、棒衽の男單衣の裁ち方でございます、(甲)の積り方は袖丈一尺四寸五分裁切にして衽下り四寸五分としての積り方で、身の丈や衿衽地の丈を積る仕方でございます、(乙)の積

第十

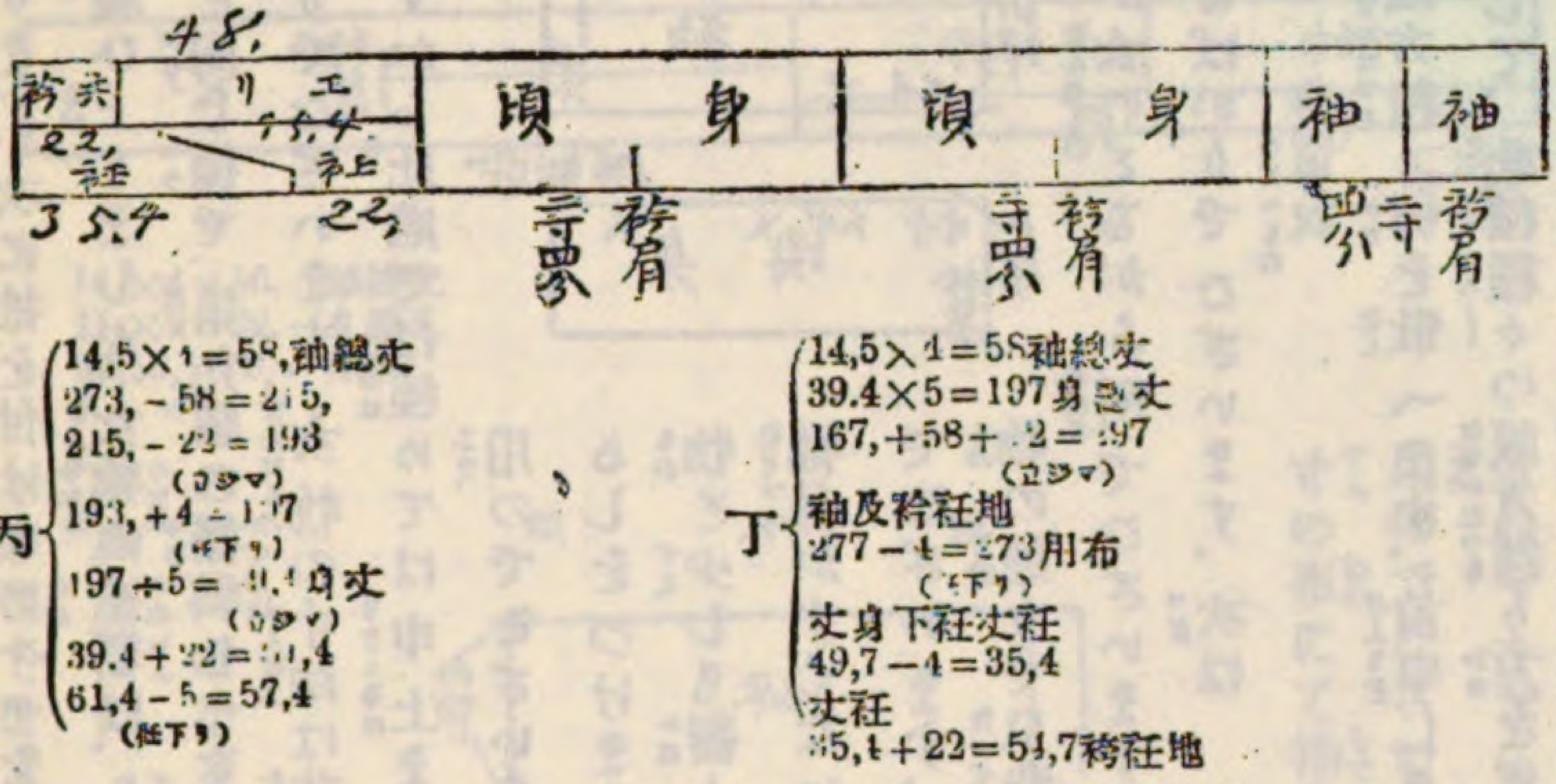


甲
14,5×4=58, 袖總丈
278−58=220, 用布より袖總丈を減じたる殘り
220,+9,=229, 衽下り二倍
229,÷6=381,餘 身の丈
381×2=76,2
762−9=612 衿衽地

乙
14,5×4=58, 袖總丈
381×6=228,6 身の總丈衿衽地
2286+58,=286,6
2866−9=277,6 用布
381,×2=76,2
76,2−9=67,2 衿衽地

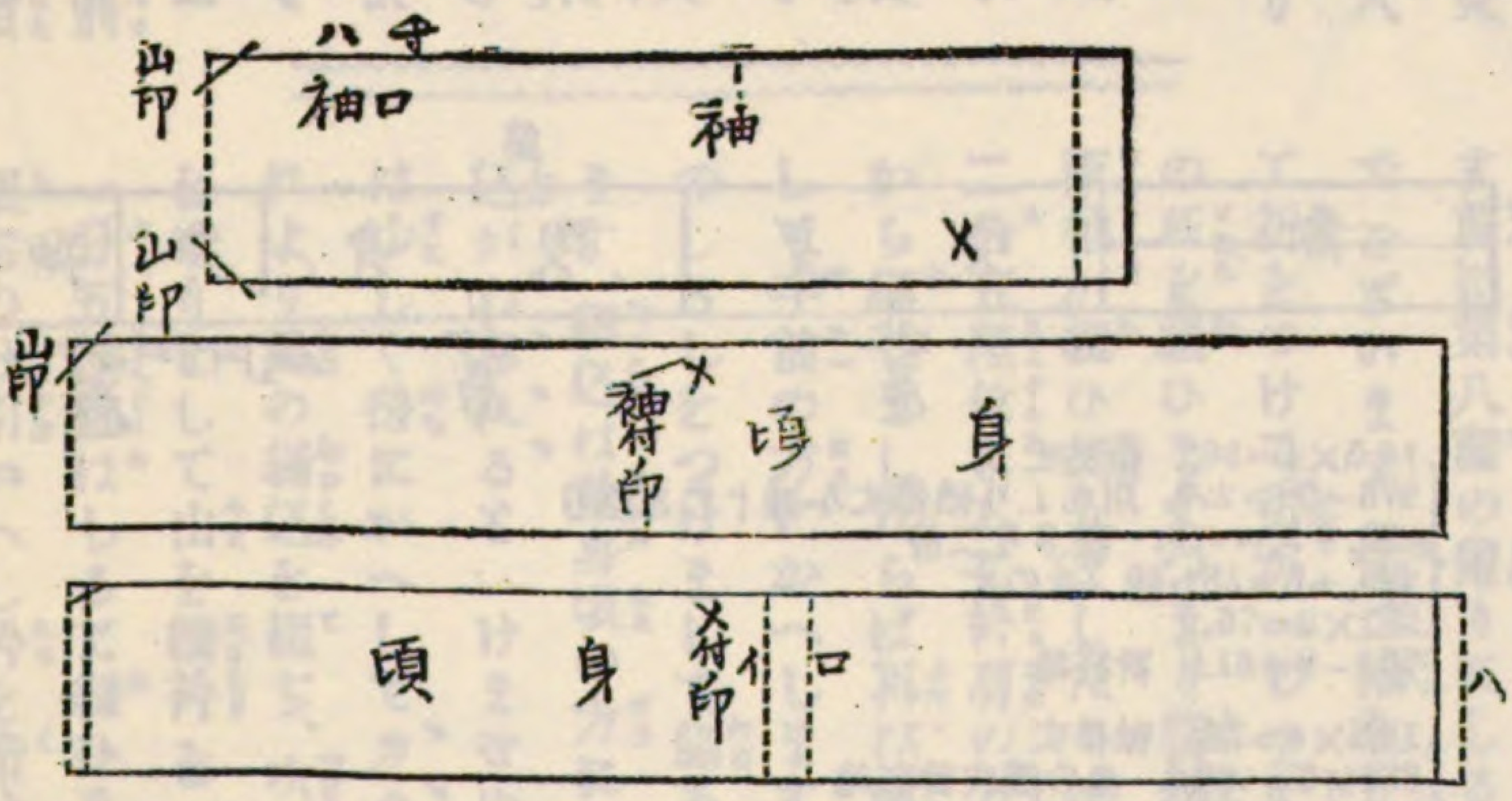
り方は袖丈身の丈衽下りを知て用布を出す仕方でございます、第十一圖の裁ち方は第十圖の通りに矢張り男

第十一圖





第十二圖



物の單衣の裁ち方積り方でございますが之は衽が釣立ちになりますので、（丙）の積り方は衽地の丈を知る

方の仕方でありまして、(丁)の方の積り方は用布の長さを知る方でございます、つまり前の裁方は總尺の長きものに用ゐますし、後の裁ちかたは丈のつまりました反物などを裁つに用ゐます、しかし好みによりていつれも皆用ゐます、偖て以上お話しいたしましただけで裁方積りかたはすみましたから、これから縫ひ方でございますが、之も亦縫ひ方に先だちまして、しるしをつけて置かなければなりません、そのしるしの附方は、第十二圖に記してある通りでございますが、一寸御注意に申して置きますが、此圖中第二番の圖のしるしを終りましたら、後身頃を除き(ゆきの方にはねてをきまして)前身頃に衽下りのしるしをつけましてそれより後身頃を五分點線(ハ)の所までくり下げましてアゲのしるしを(イ)及(ロ)つけます、丁度それで前と後のアゲの差が一寸になるのでございます、あとは圖のそばに記してありますからそれで御承知下さいまし、次は縫方を申し上ます。

書法の話

坂正臣

女子の手本とするに恰好な、和用(即かな)を書くことの上手な人も多い。私の知つてゐる人では、まづ多田親愛さん、これは細いかなのちらしがきなどゝ來たら、他に肩を雙べる人は有りますまい。それから小野鵞堂さん、これは楷書でも行書でも何でも上手だ、植松有經さん、是も實に熟したもので、この人の書は癖が無く、習ふ人の爲にはよほどよいと見えて、門人が皆ぢきにうまくなるやうであります。

土肥さん號を樵石といふ人のかなも、實にうまい。それから小杉榲邨さんも、大きな字や小さな字や、ふといやほそいや、工合よくまぜてかゝれる處がうまい。大ものゝ方かことによろしいやうであります。しかし女子の手本にはどうでありませうか。大口鯛二さんの假名は誰のよりも古氣を帶んで居るやうで、歌集の板下などにかゝれた所は、多田さんよりも小野さんよりも、或は

失禮して居るかと思ふ位であります。又千葉胤明さんも、字の結體はすこしよくないが、輕妙な所は獨得であります。岡田起作さんは、師範學校の先生でありますから申すまでもない。尾崎紅葉さん、岡麓さんなどもうまいやうで、其外にも上手が澤山有りませうが、中々目が届きませぬ

書でも畫でも、大切な所はかたちとふでとの二つであります。かたちとは字の風姿形體で、之をよい鹽梅に搆造いたしますのが、所謂結體で、結體のわるいと申しますのは、いやに頭出つ勝であるとか。へんがわるく大きいとか。横に平つた過ぎるとか。丈が長過ぎるとか。何處か不釣合の所があるので有ります。筆と申すのは、竪に引き横に引く棒一本でも、扁たく板を置いた樣ではならぬ。まづ早く申さば、丸い竹の管か木の、幹がころがつて居るやうになければゆかぬ。龍蛇筆端に競ふと申す如く、蛇のからだが折れ曲つて行くやうに、すべてに力が滿ち渡つて居て、其間に味も有り、艶も有るのが、つまり筆の有ると申すので、此の筆が無くては、たとへ結體がどのやうによくても、すこしも愛すべく敬すべき所が無く忽見飽がいたします。それ故大師樣の書家では、十二點畫といふものを敎へ、筆の味を會得せしめる爲め、一畫三年などゝいふ、やかましい事が有つて一本の棒を横に引くのに、三年の間毎日毎日習はせるとか申す。そのかはり此の流義では、結體の方は一向搆はないといふ傾きが有つて、甚しきは殊更に結體をわるくするを以て、得たりとするやうな氣味があります。是はあまり感心致しませぬ。結體があまりに亂れては、第一讀むことが出來ぬ憂があります。それも美術的の書は、讀めないのが貴いといふ說もありますが、とんだ邪說だと私は思ひます。

そこで體と筆とは、車の兩輪のごとく、一方缺けては勿論いけませぬが、片方が重く、片方が輕くてもよくありませぬ。同じやうに大切でありますけれども、さればとて二つを一時に學ぶこともむつかしい。まづ片方からすまして行かうとするに、いづれを先にしたがよいかと申さば、私は書家にならうといふ志の人には、筆

を先にすべしと申し、普通の人、殊に婦女子に向つては體を先にせられよと答へるつもりであります。書家は大きな字もかゝねばなりませぬ。大字は是非とも、筆法か確に腕に無くてはかゝれませぬ。ちひさい字は結體さへよく手に入りますれば、それからは熟練で、自然と筆に味も出來てまゐります。

結體もよく出來、筆にも味が有るやうになつても、熟練して輕妙にかき流さるゝやうになくては、まだ能事をはるとは申されませぬ。大方の人の手紙を見ましても、よく讀めるやうに書いたのは、文字くばり墨つぎなど無骨で、美術的に參らぬ。またそれらの點が都合よく出來てゐる分は、字のかたちくづれて、よみにくき物となります。男子の書よりも女子のは一層、くづれ易いやうに思はれます故、女子には主として、かたちをよくかゝせることを敎へたくおもひます。

書法指南

野口小蘋

○○第九圖　の梅花は、第二號に梅花を書き、その法をあらまし志めしたり、幹枝を書くにかはりたる事なし、只花を作るに淡墨を筆に蘸し、筆先に幾かの濃墨をつけて、筆さきの出ぬやう丸く畫くへし、開きたる花は墨薄く、蕾のかたは幾分か濃き方よろし、墨畫にて濃淡よろしきを得は、着色にて書くもかはる事なし。

○○第十圖　椿を書くには、まへになりたる葉の二枚をはしめに書き、而して花をゑかき、次に枝、次に其他の葉及び蕾を書くへし、葉を書くには、淡墨を皿にて調和し筆先に濃墨をつけて、濃淡相分るやうに書くべし、葉すしは濃墨にて後にすべし。

○○第十一圖　水僊は鈎勒法なり、此圖を作るには雙鈎以て先つ前にある所の葉を書き、而て花をゑかきて、後になりたる葉を跡に書くへし、葉の墨は、餘り濃からす、又薄からぬ墨を用ゆべし、花を書くには、葉よりもすこ

し墨薄き方よろし、花心は濃墨にてのちに作るかたよろしきなり。

○○○

第十二圖　ゑかき出す蒲公英は、先つ花をさきに書き、次に蕊及び莖を書きて、やはり他の花卉の葉を作ると同しく、濃淡分るやうに葉を付くへし、此根草は春のもえ出たるはかりの若草なれは、柔らにみゆる様注意して、作る方を希望するなり。

裁縫の必要科目たる所以

某學校醫寄

女學世界第一號に、三島通良氏の懇にものせられたる、裁縫の衞生といふ一篇は、定めて諸孃が見落しなく讀まれしことゝ思ひます、その中にも冒頭に話されし如く、女子たるものは何を致すにしても、裁縫の科は誠に必要なるものであることは、今更御話しする程の事でもありませぬが、唯々それにつき一言申して置きたきことがあるのです、私は東京へ參つてから、未だ間もありませんから、何とも申されませぬが、私が關西地方の女學校の上から概觀しまするど、肝心なる女子の科目である裁縫科であるのに、兎角これを厭ふ風があつて、其の時間に出るのを好まぬと云ふ風を見るのである、尤もその氣風の多く見受けるのは、小學程度の學校にては尋常科の方でなくて、高等科生の方に多い、高等女學校であつては、撰修科の方はさうないが、普通科即ち本科生の三年生頃までの生徒に多くあるやうに觀ます、そして他の算術やとか地理やとか理科やとか讀書やとかいふものに中々競爭が始まつてあるのです、そこで如何いふものかと其の原因を探てみると、ソコには種々の原因のあることは知り得たですが、何しても箇樣なる考は諸孃の腦中にあつてはならぬのです、方今に至りて何處とも私立の高等女學校が澤山出來て、此の學校へ就學するものも多いことになつて參つたが、これ等の學校にては、費用の足らぬのと、監督の不行屆と、良教師の少ないのと、又たまには利益主義に傾くのことからして、その影響が裁縫科に及びまして、その肝心の裁縫時間をば、一學期中編物、毛絲細工、レース細工で終つて仕舞ふものもあつたらしい、これ等は學校の教授上の罪もあらうが、諸孃の中にも箇樣な傾きのあるのは、注意せねばならぬのであります、これにつきて思ふのは、諸孃が就學する前にあたりて、隨分學校を撰ぶといふことは必要な事であります、さもなければ學校を卒業しましても、單物が獨で出來かねるといふ、ツマラヌことになり終りますよ、大阪などへ往つてみると、隨分わが娘の子に舞、三味線などを仕込むのに熱心な親達が多い、うつくしきはれ衣を纏はして、舞の舞臺で人の譽るのを樂しんでる親達を中流以上に見受けるのは、私どもから思ふと情ないことに考へるのです、こういふ家庭を受けた娘に限つて、實用の裁縫などに疎いのが多い、遊藝も結構であらうが、肝心のものを放棄されては、その娘の末が案じられる、何分にも芝居狂ひの大阪などは、おのづと人情がそれに傾き易いから、娘を持てる親達も、その家庭に生れた孃達も充分の注意が望ましい

文苑

和歌

輕井澤十首

男爵夫人　末松生子

我庭に泉あり亭を泉源亭と名づく

わき出つる清きいづみを結びあげて
　庭おもしろきやまかげのいほ

樓の名を觀自在樓といふ

我庭のながめとなりてやま〳〵は
　こゝろのまゝにみゆる高どの

あたご山

たかどのゝあなたにたてる愛宕山
　あをきすがたぞ夏はすゞしき

はなれ山

はなれ山ひとり離れてたてりけり
　くもゝかすみも風にはらひて

折にふれて

こせ山の小松にまじるえびかづら
　みやこの子らの家つどにせん

はら〳〵と萩の露ちるやりみづに
　あきに志らるゝ庭のおもかな

曉あられ

三宅龍子

明わたる空のなかはのかきくれて
　かせたつ軒にあられ降きぬ

立見花子

にはとりのあかつきつくるねやの戸に
　玉とみたれてあられふりきぬ

甲野文子

雪さそふあられの音のはけしさに

おき出てみれは夜も明にけり
三浦みの

ほの〳〵と志らみそめたるあかつきの
ねやのいたとにふる霰かな
奥信子

有明の月影さむくかきくれて
ふゝめる梅にあられ降なり
三宅常盤

さめたれときいてまうき曉の
あられの音のさむくも有かな
茂木敏子

とふ人も音なき宿のあかつきに
ゆめおどろかす玉あられかな
高橋久野

うへしこそさえまさりけめ朝またき
掃はぬ庭に霰ふるなり
由比孝子

あけ行はのきのしくれの音絶て
ふりかはりたる玉あられかな
喜多山孝

まどちかきいさゝむら竹音つれて
あかつきかたに降あられ哉
杉かす子

ねさめしてまた又起出ぬあけかたに
まどのとたゝく玉あられかな
川口ふさ

わか菴のまどのひまもる北風に
あられふきいるゝあかつきの空
石丸光子

朝ぼらけゆめもくたくる音たてゝ
まきの板とふ霰たはしる
田邊君子

あられ降まどのむら竹さら〳〵と
あかつき寒くよは明にけり
片山てる

さゝの葉にはしる霰の音さえて

あかつきおきの袖ぞ寒けき　茂木敏

まどの戸をたゝくあられにゆめさめて
あかつきかたの月をみるかな　高橋久野

しのゝめにめさめてきけば松のとを
たゝくあられの音しきるなり　喜多山孝

明方のにはの落葉に音たてゝ
たましくものはあられ成けり　三宅常盤

有明の月は雲間にみえなから
ふく風寒くあられ降きぬ　杉かす子

しらみたるねやのいたとにはら／＼と
あられたはしる音のさむけさ　立見花子

雪ましりあられみたれてあかつきの

ねや寒けくもなりにけるかな　三浦みの

有明の月のくもるとみる／＼に
おとろくはかりあられふりきぬ　由比孝子

ふりしきる雪にもまさる寒さかな
あられたはしるあかつきの空　川口ふさ

木からしの吹かまに／＼玉あられ
あけ行庭に散みたれつゝ　甲野文子

あかつきにねやのとあけてみ出せは
おとろくはかり霰ふりけり　石丸光子

山まとのまつのあらしは音絶て
あられみたるゝ明かたの空　珍田貞子

なすのゝにありし昔のしのはれて

あけ行のきに霰ふりきぬ

奥信子

あかつきのねやの寒さもいやまして
　板戸にはしる玉あられかな

大竹英子

光ある玉ならはともおもふかな
　あけ行のきにはしる霰を

珍田貞子

朝またきおき出てみればわが宿の
　庭もせきまて降あられ哉

手鞠

東京女學館生徒歌會（坂正臣撰）

岡本つる子

つく鞠の音をきくにもをさめ子の心の春ぞ思ひしらるゝ

栗原照子

手まり手にもたるまゝにていねし兒は夢のうちにもなほやつくらん

鈴木すゞ子

少女子はまりに心やうつすらんよへども母のもとによりこす

岡田さち子

願ふこと世になかりせばをさな子と共に毛鞠をつきてあらまし

鈴木千代子

幼子と共に手鞠はつきみれど同じよはひにたちはかへらず

岩根みゑ子

樂しさを顔にいだして幼子がまろぶ手鞠のあさを追ふなり

志立きよ子

ぬるまだにはなたでもてるをさめ子が夢にもうたふ手鞠哥かな

石川喜代子

つくまりのおつれば又もあがるごとたゆまぬこゝろ我も持たまし

曾野清子

羽子の音もいつしかやみて隣にはひいふうみよと手まりつくなり

大久保道

手より手につき渡しつゝ少女子の鞠のあそびのいそがしげなる

白井もと子

をさめ子が下げたる髮の長き日を飽く色もなくつく手鞠かな

白石まさ子

ひふみよとてまりつきつゝ處女子もつきせぬ御代の春祝ふなり

鈴木てい

羽子よりもなほおもしろき手鞠かな今日もひれもすつきくらさまし

佐藤えい

をさめ子がつくや手鞠の音きゝて昔こひしく思ひけるかな　玉置みち子

をさめ子がつく鞠の音も春めきて田中の里もにぎはひにけり　園田みれ子

あら玉の年立かへり家ごとに手まりつく子の聲ぞにぎはふ　服部のぶ

さえかへるさむさもよそに處女子がまくり手しつゝ手鞠つきけり　三宅秀子

雨ふれば羽子うちおきてをさめ子の手鞠つく聲にぎはしき哉　岡田しづ

處女子が春着の袖をふりはへてふし面白く手まりつくなり　上田みほ子

長閑なりたもとかゝげて幼子のまりつく音の春のしるべも　雄山由利子

たらちねの膝のもとにてはらからと手鞠つきつゝ今日もくらしつ　山内みれ子

大御代の春の長閑さしられけりをさめ子がつく鞠の音にも　長瀬實子

えみ榮えのぼるひさしにうちむれてつくや手鞠のふしの長閑さ

和文

税所敦子刀自の歌文

佐々木信綱

かたち美くしきをみな子は多かるべし。かたち美くしくして心また美くしきをみな子は多かるべきか。學びの才すぐれしをみな子は多かるべし。學びの才すぐれて婦德またすぐれたるをみな子は多かるべきか。我は共に否と答へむとす。

税所敦子刀自の學才婦德ともに一世に秀でて、明治の紫式部とたゝへられしは世人の皆知れる所、くだ〴〵しういはんはをこのわざなるべし。おのれ刀自の知を辱うしつる事あまた年なりき。刀自世を去りまして既に一年にならむとす。こゝに刀自の文詞と詠歌とをとり出て、いさゝか品隲の詞を加へむとす。地下にいます刀自、例のやさしきおもわにほゝゑみ給ふらむか、はたよしなき事をと眉ひそめ給ふらむか

刀自の文はなだらかなる文なりき。かの紫式部の文詞、のなだらかなるが如くなだらかなりき。式部の夫は幼き子と若き妻なる式部とを殘して世を去りぬ。式部は人生の最も悲慘なる境に遇ひぬ。さはれ此境遇は式部をして式部たらしめき。さてのち式部は九重の大宮づかへに出たちたりき。刀自の境遇また相同じ。若くして夫に別れ、其忘れ形見なる幼兒を抱きて、まだ見ぬ薩摩の國の姑に仕ふべく心づくしの果に下り、のち島津家に仕へ、遂に宮中に召出されたりき。たゞ式部には古今にわたれる大作あり。刀自には小品あるのみ。これ恐らくは刀自の文才式部に及ぶべかりしも、其時代其宮づかへのいそがはしさ、藤原氏時代の如くならで、靜に大作を練るべき時のなかりしと、刀自があまりに功名の心なくあまりに女らしくおだしかりしとによれるなるべし。さるはおのが如き後學の輩の逢ひまつりし折も、刀自の風采談話は、一世の名媛なる刀自の君とは思はれず、謙遜なる慈愛深き老夫人と見えたればなり。刀自の文詞の世に公にせられたるは、心づくし、宮城御移轉記、大婚廿五年盛典記等なり。心づくしは知れる人多からむ。他の二編は未見の人多かるべきをもて、まづ其二編をかゝげ、つぎ〳〵刀自の歌文につきて吾思ふ所をしるさむ。

編者曰く本誌第一號文苑欄「宮城御移轉記」は税所敦子刀自の歌文なりしを誤つて佐々木信綱氏の筆に成りしやう記せしを以て茲に其の疎漏を謝す

鶯

鹽井福子

つらゝゐる心のそゞろ結ぼゝれて、春とも覺えず、野に入るも山に入るもうるさくて、久しう一間にのみたれこめぬるを。如何にし玉ふ、いたうも枯れにけるかな、山川の水も聲立てつるにと流石に誘はれては、日來好む田舍、亡き父君の折りふし毎に通ひ玉ひしやどなるもなつかしくて、あづさ弓にはかに心も引かれ出でぬ。都のほどは足も重くて、うしろのみ省みられけるを、流石かぎろひの立つ野邊はいとも心ゆきて、若草もえ

出る道のたもともなつかしく、紫に匂ひ出でたるつぼすみれ。誰にゆかりの色にそむらんと思ふもあはれなり。

其處となく匂ふ梅が香、此處となくさへづる百鳥の聲も春めきて、霞むか淺みどりなるをちの遠山をふりさけ見つゝ、野邊山邊をこえて出る田面、一むら二むら枯れたるかやが根に、よめな、すゞなのもえ出でたるもかぐはしく、あつものゝつまにもと思ふばかりなり。

こちよと招ぐ青柳の、いつしか糸によりぬるまがきのもとあたらしくたゝずむ彼方の軒に、人くとつぐる鳥の聲おなめづらし。おどろきてかけ出でたるうなひ、ほゝ笑みてむかふる人々のかげもなつかしけれど、かのめづらしきものゝ、人くといとひもぞする、遠方にうつりてはと心ときめきぬ。

やがて、まうけられたる席になほりて見亘せば、田も畠もかすみ亘りて、何となく何となく心もうら〳〵のどかなる軒に又や唱ふ鶯、云ひ知らず聲のかをりて、心さへ花になりぬ。あはれ、百鳥のもゝさへづりはあれど、たゞ此の一聲によのうきふしも忘らるゝよ。都の人の心にもなき百言のなぐさめ言聞かんよりは、たゞ此の一聲よ。之れや谷の戸出では、吹く風もやはらぐべく、幾重つもる高ねのみゆきも、氷に閉ぢし山川の水も、結ぼゝるゝ青柳の糸もうちとけぬるこそうべなれや。げに此の一聲には、花もほゝゑむべし、若草もほころぶべし、幾重つもるむねのうれひも、結ぼゝるゝ涙の玉もげにうちとけぬる心地す。よに鯖を食すれば狂を治し、此の鳥を食せば妬をさむと云ふ。食してをさまるや知らず、たゞよをうらむ人、此處に此の一ふしを唱ふを聞きても見よかく、つらゝゐる心もおのづからとけぬらん。

旅の命毛（其三）

中村秋香

八日卯の時に峠をたちいづ、雲きりおほひつゝ露いとふかし、下りなれども根笹生ひしげり石いとたかくて

行きなやむ、風越と云ふにて日のひかりさしいづ、明けゆく雲のたゝずまひも、常ならず、はるかに見る山々皆目の下にて、右も左も木立はなくてたゞ笹のみいと多く、朝づく日に照わひたる湖のけしきたとしへなし、加茂の翁このうみをうち見て三巴に似たりと云ひつゝ、なほ論じつるやう、昔よりいくそばくの人が此湖をのぞみたらんにさせる名なきこそあやなけれ蠶叢に擬したる人誰ならんなどいひき、おのれ今こゝをみるにさらに三巴の趣とは同じからず、近き頃の府志によりて其似つかはしき地理勝景をしひてたぐへば、箱根の關をば順天府の庸關になずらへ、湖は宛水洞に似たりとやいふべからん、宛水洞はその奥源を極めし人あらず、洞中金龍ありて旱には雨を祈る驗ありときく、春深き頃桃花いづちよりか洞口に流れて、瓣のおほきやかなる五錢とかや、又洞中有二音樂聲一樵夫往々聞レ之とあるに思ひあはすれば、けさよりこのものになふをのこがけぢかきほどにて云ふをきくに、洞のほとりには常にいとあやしきことあり、いつも上の三日下の八日と

いふには極めて水うみちかき嶺にて、いとめでたきものゝ音聞ゆることたえずなどかたるに、まづ宛水を思ひ出たり、げに山ふかくたづねいらんには、神仙もいますならん、桃さく山のかくれ家もありなん、などいとなつかしくて、船もとめいでゝ尋まほしきこゝちぞする、擁翠聳危巓てふ危き山の姿のみ見えて、あさ嵐山ひこにこたふるを、犬には鳥の聲もたえてきこえず、うかりける旅衣誰も〳〵朝露にしとゝにぬれつゝ、甲石、みつ屋、つかはらなど、所々にうちやすみて山水をむすびつゝ渇をうるほす、こゝらよりは木立もしげり、山の峽谷のかけ道所々山畑など賤が苦しきいとなみもおろ〳〵みゆるを、膏腴ならぬ地こそ民の業いとまなき習の中にも、ことさらに苦しき世をと、見るから哀なり、巳の時にやう〳〵山をくだりはてて、三島明神に行手の遙拜奉り、此住たひらかにせさせ給へ、且は老たる親にひとたび生涯のたいめせさせ給へとぞぬきたいまつる、けふも晝より雨もよひして曇もはてぬ空の氣色いとあつし、原吉原をゆくにかねて不盡の根などりなく眺め

はやとおもひしを、雲覆ひて見えず、こゝちならんと思ふ根かたはかりけちえむなるものからほいなくくやしきことのかぎりなり、むなしう堤の春色のみ望むに、はや梅は夏をむかへて實を結び、殘絮春を送りて飛び、朦々たる空のものむつかしきに風少しふきてこゝちよく覺ゆるほど、とばかり見わぐれば、たゞ咫許の目のまへに不盡のなごりなくはれわたりたる、うれしとも嬉し、けふみずはまたいつの世にかながむべき命のほどもさだめなきを、とまでに思ひいりつゝ、まじろきもせず、花水橋にてみししばしはかりのおもかけとはやうかはりて、すそ野よりいたゞきまで隈なく見ゆ、右のかたに愛鷹山をかけ、そのかけより寶永山つらなりて見ゆ、卯月の氣しきしるく、なからばかりよりは雪は消えて白き糸を引きたしたらんやうにみゆ、ましろなるいたゞきも只白きにはあらで、白きが中に濃淡あり、高きを低きとくだりにすちを削成せる、たとへば白芙蓉の瓣の白きすぢを引たるごとくなり、高卑濃淡のおのづからなる白妙のさまをなどてよゝのゑだくみはかきわきざりけんと口をしう、されど實に少納言のかきおとりするものといふにやなすらへましなどおもひかへす、しばしありて風やみぬればまたたくうちに見えずなりぬ、あらぬこゝちに只おほぞらをのみ仰ぐ、かうふかきこゝろをさくや姫のあはれみ給ひて、しばし珍かなる姿を見えぬひつるやといとかたじけなし、このかたにのみ心をいるれば、田子の浦人あびきするもみず、いとくちをしう、笠着て渡れのいましめにはたかふんかしとて人々わらふ、浮島が原、ふじ沼などいふもしづけき御世には皆狹まりて、早苗しわたしあらきたかへしなどに、富士沼は舟こぎ入れうなぎをとりてあきものとす、海雀とかいふものもこゝより取るにや、あやしの小家にあるがみゆ、蒼田の海となれるを見しといひつたふるもまことならぬ諺とのみ思ひしに、こゝの地理もてかうかふれば眼のあたり海の田となりしことしるければ、こもまた平かなるみよのしるしといとありがたし、松かけ寺といふはきくもたのもしきこゝちして、しばし輿を停む、ちひさき佛に色々の花もてあづ

まや葺きてたてまつれるが見ゆ、げにけふは灌佛にこそおはしけれ、あわたゝしきこゝろまどひに、後の世をも忘れにけり、いと罪ふかしとをそろしうて、おこたりをかぞへつゝ法施たてまつりて、ふる里にをちどまりし人と、れいのおやをぞまづ祈る、下つかへどものあなたに車かへしと云ありき、見しやといふを聞きて、

音にたつ里の名にしもしるしあらばとく引かへせ親に逢らん

たゝことのやうにうち歎かる、貞應の記には蟷螂が道にあたりてとゝめけるが、梓兒が士城を作りて孔子に答ふるか、もしまた勝母の里ならば曾子にわらぬも誰かいかゞは通らんとありし處なるべし、初夏のならひはれみはれずみ、ものむつかしき雲のかよひ路なる物から、また不二の姿も見えず、しはせ山をのみ近くのぞみつゝ行く、されど左り不二といふはいさゝか雲のはれ間に見えたりしこそをかしかりしか、松原をはてなくゆくにいつしも右にのみ見ゆる不二の、思ひもかけずしばし左に見ゆ、とばかりありてまた右にうつりぬ、道は一すぢなるをそのうつり行くさまの早きは、幻の術ありてひきかくしつるかとあやしきまで覺ゆ、夕つかたよしはらにやどる、いつぞやかぐつちの災にあひて屋のさまいたくあばらなれば、おそろしきこゝ地してうちふせど、かゝる旅寐はまたならはぬほどなれは寐いられす、夜中ばかりに雨いたくふりいづれば、山を越えはてたるを人々よろこぶ、我はさるほどの苦しさも思ひやらず、あすもふりなば君を見ましやと夜ひとよなげく、もろこしには竹をうつくしみてこの君とよびし人あなり、月をこひつゝ君とうたひしおきなもありと聞けば、我も此山を君とやいはましなど寐られぬまゝにあやなき思ひを盡す、映々旅燈下、愁多常少眠と遠さかり行くふる里の空をうちみやれども、雨夜のをくらきのみにて旅情しきりなり。

講義

土佐日記講義（三）

文學士　塩井雨江

この折りに。ある人々、をりふしにつけて、唐歌ども、時に似つかはしきをいふ。またある人、西の國なれど、甲斐歌など謠ふ。斯くうたふに、ふなやかたの塵も散り、空行く雲もたゞよひぬとぞいふなる。

○をりふしにつけて。差し當る場合に隨ひてといふ事なり。○時に似つかはしきをいふ。その場合に似あひたる、やがてその場合に相當したる詩などを謠ふといふ事なり。○甲斐歌。甲斐の國の風俗歌なり。古今集の大歌所の御歌に、甲斐歌とて「甲斐が嶺をさやにも見しがけけれなくよこほりふせるさやの中山」「甲斐が根をねこし山こし吹く風を人にもがもやことづてやらむ」などとあり。この甲斐歌の意は、一々詳しく解くも、さまでは用なからむ故に、本居翁の遠鏡の解釋を、假りにあげおかむ。その説によれば「甲斐が嶺をはつきりと見たいものぢや。あのさやの中山が横はつてあるで、つかへて、はつきりと見えぬ。あゝ心ないさやの中山ぢや」「峯をこし山をこして甲斐が根を吹てこえる風を、どうぞ、人にしたい物ぢやナア。そしたら、京へことづけをしてやらうに」といふ意なり。○西の國なれど甲斐歌を謠へりとは、土佐にて甲斐歌をうたへるなれば、かく洒落れてかけるなり。○かくうたふに。かく唐歌や甲斐歌など、いろ〳〵詩歌を謠へばといふ事なり。○ふなやかた。船屋形なり。船の上に造りたる屋根なり。○たゞよふ。ぶら〳〵と止まるさまをいふ。○いふなる。いふけしきなるといふやうに、けしきといふ詞を入れて見るべし。○船屋形の塵も散り云々。歌の面白く聲の

めでたきに感じて、船の屋根の塵も動き散り、天を行く雲も、あしをとゞめて、ぶら／＼と止まりて聽きたりといふやうなるけしきなりといふ事にて、支那の魯人虞公といふ人は謠にすぐれたる人にて、聲を發すれば梁の塵を動かすともいはれ、また、秦青といふ人ありて、この人も聲は林木を振ひ響は行雲をとゞめたりといへる故事あり。それ等のけしきに比べてかく謠の面白くひゞきあひたるをほめはやして書きたるなり。

こよひ浦戸にとまる。藤原の言實、橘の季衡、こと人々追ひ來たり。

○廿七日の夜に、浦戸に一泊したり。言實季衡といふ人と、其の他に數人の人が、なほ貫之のあとを追ひかけて、この浦戸の泊りにたづね來たれりといふ事なり。

廿八日。浦戸より漕ぎ出でて、大湊をおふ。此の間に、はやくのかみの子、山口の千岑、酒よき物ども持て來て、舟に入れたり。行く／＼飲み食ふ。

○大湊をおふ。大湊といふ所をさして船にて行く意なり。○はやくのかみ。貫之よりもなほ前に居りたる國守なり。其の國守の子の千岑といふ人が、いかなるわけありてならむか、この土佐の國に留まり住み居りたるなり。○よき物。うまき物といふ事なり。○舟に入れたり。酒やうまき物を持ち來たりて、貫之の舟に入れたるなり。貫之たちに贈りたるなり。○行く／＼飲み食ふ。行く／＼、舟の中にて、其の千岑の贈りくれたる酒や美味を飲みも食ひもしながら行きたりといふ事なり。

廿九日。大湊に泊れり。醫師、ふりはへて、屠蘇、白散、酒加へてもて來たり。志あるに似たり。

○醫師。朝廷より土佐の國に置かれたる醫師なり。各國に一人づゝ、朝廷より醫師を置かるゝ定めあり

たり。○ふりはへて。わざ〳〵といふ如し。○屠蘇。白散、正月の元日。に酒に加へて飲む藥なり。屠蘇の方は、袋に入れて、酒に浸しおきて、その酒を飲むなり。今も爲す如し。白散の方は、袋につゝまずして、刻みながらに銚子の中に入れて、その酒を飲むなりといふ。これを酒に加へて、正月の元日に用ふるは、一年の邪氣を拂ふ爲めなりといふ。明くれば正月の元日の事なれば、其の爲めにとて、醫師が、わざ〳〵と屠蘇白散と酒とを持ち來たりて、貫之たちに贈りたるなり。もて來たりと書きたる所は、かく云ひきらずして、もてきたるといひたる方、おもしろからむ。○志あるに似たり。醫師のかく屠蘇などを贈りたるを、志あるやうなりとほめたるなり。

元日、なほおなじとまりなり。白散を、あるもの、よの間とて、ふなやかたにさしはさめりければ、風に吹き流がさせて、海に入れて、え飲まずなりぬ。

○元日。承平五年の正月元日なり。○なほ。俗にやはりといふ意なり。○おなじとまりなり。昨日と同じ泊りに居るといふことにて、やがて、今日も大湊に泊まり居るとなり。○白散。昨日醫師より贈られし白散なり。白散の事は前回に詳しく記せり。○あるもの。ある人がといふ事なり。貫之の家來などならむ。○よの間とて。たゞ一夜の間の事なればとてといふ事なり。○ふなやかたにさしはさめりければ。白散を船の屋形のはしなどに挿し挾みておきたる故にといふ事なり。○風に吹き流がさせて海に入れて。白散を風の爲めに吹き去らしめて海水の中に入れしめたりとなり。吹き流がすとは風に吹きさらはれたる意なり。え飲まずなりぬ。白散の藥酒を飲む事能はずなりたるなり。○此の段の意は、昨日、親切なる醫師よりもらひたる白散を、貫之の家來が、深く心を用ひずして、唯一夜の間の事なれば此處に挿して置くのみにて、大事なしと思ひて、船の屋形のはしに挿し挾みておきたる故に、いつしか吹く風の爲めに、

白散は吹き飛ばされて海水の中に入りてしまつて、殘念にも、白散の藥酒は、今日の元日に飲む事能はずなりたりといふ事なり。

芋も、あらめも、はがためも無し。かうやうの物も無き國なり。求めしも置かず。たゞ押鮎の口をのみぞ吸ふ。此の吸ふ人々の口を、押鮎もし思ふやうあらんや。

○あらめ。海藻なり。○はがため。歯固めの義にて年の始めに固き物を食ひて歯をかため齢をのぶるこゝろの祝ひにするなり。舊くは猪鹿などの肉を用ひたり。この頃は押鮎、餅などを用ふ。○かうやうの物もなき國なり。此の樣な物も無き場所なりといふ事なり。此の樣な物とは、芋、あら藻等をいへるなり。國といへるは、今とまるり居る大湊といふ所を、かくいへるなり。大湊の土地とても、求めなば、芋、あら藻などの無き事もなかるべし。されど、都と異りて、かゝる田舍の、元日にもさる物を食ふ例も無かりしならむ、故にそれ等の物を、注意して贈る人も無く、また、自身も用意せずして、今日の元日に、さる物なくて、物足らぬ心地する腹立たしさに、都の方のいと戀しく、今の境遇のいと悲しくて、腹立ちまぎれに、かく此の樣な物も無き國なりしといひ捨てたるなり。○求めしも置かず。自身も豫め芋あらめなどを求め置かざりし事をいへるなり。しもは詞の調を强ういひたるまでにて、別に意なし。○押鮎。鮎に鹽して、固くおしをかけて、押しかためたる物なり。押鮎の口を吸ふとは、その鹽づけのかたき鮎を食ふ事を戯れていへるなり。いかにもかたき物故に、通例の生魚の如くにしては食ひかねたれば、人々、口にて、その鮎の頭より、食ひかじりて食する故に、かく戯れていふなり。たゞといひ、のみといへるは、他の芋や海藻や歯固めは無くして、此の押鮎ばかりを食ふ意なり。○此の吸ふ人々の口。此の押鮎を食ふ人たちの口なり。○押鮎もし思ふやうあらんや。今、人々に食はるゝ押鮎が、若しも心をもちてあらば、此の食ふ人たち

の口を、此の人の口は好きなりとか、此の人の口は嫌はしやなどと思ふ事であらうかと戲れたるなり。あらんやのやは疑問の詞なり。

今日は都のみぞ思ひやらるゝ。九重の門のしりくめの繩の、なよしのかしら、ひゝら木等、いかにとぞいひあへる。

○今日は云々。今日は殊更に都の方ばかりを戀しく思ひ忍ぶとなり。○九重の門。宮城の御門なり。○しりくめの繩。藁の端を切らぬ繩にて、注連繩(しめ繩)なり。宮城の御門に懸けわたしたる注連繩をいへるなり。○なよしのかしら。なよしとは鯔にて、今、イナといふ魚なり。かしらは頭なり。鯔の頭なり。○ひゝら木。黄苓、杜柊、谷樹とも書く。木の名なり。四時色を變へざる木にて、葉は椿に似て小く、五のとがれるかどあり。夏の頃、白き小さき花を開く。此の鯔の頭やひゝら木などを注連繩に挿みて、元日の門の飾りとして祝ふ例なり。後世は、鯔の代りに鰯を用ふる事をしたり。○いかにとぞいひあへる。どんなにめでたき景色ならむなど、人々の互ひに語るとなり。即ち、宮城の御門に注連繩かけわたして、それに鯔の頭やひゝら木などを挿したる元日の宮城の御樣子などを思ひやりて、さこそめでたきありさまならむと慕ひ忍びたる心なり。

二日。なほ大湊に泊まれり。講師、物、酒などおこせたり。

○二日の日も、同じく大湊に舟とまりして居り。そこに、講師より、食物や酒などを贈り來たれりとなり。講師の事は前回に記せり。

三日。おなじところなり。もし風波の暫時と惜しむ心やあらむ、心もとなし。

○おなじ所。大湊なり。三日の日も此の大湊に泊まり居り。○もし風波の暫時と惜む心やあらむ。若しや風波が、なほ暫時此處に留まり居りてよと、別れを惜しむ心のあらんか、それ故に斯く風波の荒くして、

舟を出だしかぬるにかといふ意なり。今日も風波の荒くして舟を出だしかぬる故に、若しや風波の別れを惜しみて、舟を出だす能はぬやうに爲すにやと戲れに疑ひたるなり。○心もとなし。早く京へ行きたしと思ふに、風波のしづまらぬ故に、待ち遠く思ひ心の落ちつかぬさまなり。○此の一段、風波の荒くして舟を出だしかぬることを、それといはずして、そのさまを知らせたる筆のあと、いと面白しといふべし。

四日。風吹けばえ出でたゝず、昌連、酒よき物奉れり。かうやうの物もて來る人々、なほしもえあらで、いささげわざせさす物も無し。賑はしきやうなれど、まくる心地す。

○風吹けば。風の吹く故になり。○え出でたゝず。出立する能はずといふ事なり。風の強く吹く故に、大湊より舟出する能はざるなり。○昌連。人の名なり。如何なる人ならむか、知り難し。或は貫之の嘗て召し仕ひたる家來などにやあらむ。故に、よき物奉れりと敬語をもて書かれたりといふ説あり。それ、よからむか。昌連といふ人が、酒や、よき物を貫之に贈りしなり。よき物とはうまき食物なり。○かうやうの物もてくる人に。かゝる贈物などを持ちて來たる人になり。○なほしもえあらで。そのまゝに默しては居られずといふ如き意なり。何にか返禮せざればすまぬといふ意なり。此の句の下に「何にか少し許りの物にても返禮したく思へども」といふ如き語を足して見るべし。即ち、「そのまゝに默しても居られじ、何にか少し許りの物なりとも、返禮し度く思へどもといふやう」に見るべし。○いささけわざせさす物もなし。命じて少し許りの返禮にさせる品物も、船中に無しといふ事なり。○賑はしきやうなれど。返禮は爲しかねたれど、その人々に酒は飲ます故に賑はしきやうなれどといふ事なり。○まくる心地す。此方より返禮する能はざる故に、彼方のいろ／＼と親切に物を贈りくれる人の情に對して、此方が負け

る心地がするといふ事なり。○人々よりいろ〳〵と心をつけて物を贈り來る故に、此方も何にか返禮をやりたし。されどもの足らぬ船中の事とて、思ふやうにならず。その人々に酒食を與へて賑はしきやうなれど、その人々の情に比べては、此方が負るけ心地がするとなり。

百人一首講義（三）

文學士　大町桂月

十一、參議篁

わだの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよあまの釣舟。

○わだの原は海のこと也。

○八十島は數多き島のこと也。「や」に八の字を宛てたるは、假字にして「や」は「彌」の略にて、數多きことを意味す。八咫の鏡、八千矛の神、八百萬の神の八は、數字の八の義に非ず。彌の義也。八十島は、幾十の島をいふこと也。「かけて」は「兼ねて」也。左大臣にして左大將を兼ぬと云ふも同じ義也。「八十島」かけては「八十島」を「兼ねて」にて、俗語にて言へば、「八千島ひつくるめて」也。即ち「八十島を經めぐりて」也。八十島かくるの一語、八重の潮路をはる〳〵渡りゆく意こもりて、面白き言ひあらはし方也。

○「あまの釣舟」の「あま」は漁夫也、漁夫の釣りする舟よと呼びかけたるものなるが、眞に舟を呼びかけたるにあらず、舟を人に擬したるにて、釣舟に居る漁夫よとの意也。細君と云ふ代りに丸髷と云ひ、大學生と云ふ代りに角帽子と云ふと同じ修辭法也。

○この歌の意は、余はこゝの浦より船出して、八十島かけて、はる〳〵大海を渡つて行つたと云ふことを、都なる我妻子に知らせてくれよ。コレ船頭さんと也。

○篁、隱岐に配流せられ、さてこれより舟に乗りて離れ小島の隱岐に赴かむとす。住みなれし都、看むと欲すれども、見るべからず、なつかしき妻子、逢はむと欲すれども、逢ふべからず、我悲しき心緒、言ひや

うむと欲すれども、手紙か〻む由もなし。歸期も知るべからず。天蒼々、地茫々、この間唯漁舟の浮べるを見る。見も知りもせぬ漁夫なれど、愁絶の餘、ことづてを頼む。配流煩悶の情、自からあらはれて、いと憐れなる歌也。「八十島かけて」にて、遙々流さる〻悲哀の意あらはれ、「あまの釣船」にて、蕭條たる浦頭の光景想いやらる。而して思ひあまりて其漁舟の人に傳言す、情景共に哀切なるを覺ゆ。配流途上の口吻、巧を弄せずして、自から人を動かすものありと云ふべし。

十二、僧正遍昭

天つ風くもの通ひ路吹きとぢよ、少女の
姿しばし止めむ。

○天つ風は天の風也。「つ」は「の」に同じ。然し古來用例なり。「の」の代りに濫用すべからず。

○五節の舞といふ儀式にて、舞姫を咏じたる歌也。舞姫の美麗にして氣高きを見て、よもや下界の人にはあるまじ。恐らくは、天女が雲にのり來て、假りに塵の世に下れるならん。美なる哉其顔、艶なる哉其姿、見れども飽かぬ思ひ哉、やがて雲にのりて去らば何とせん、風よ、吹けふけ、吹きしきりて雲の通ひ路を吹き塞げよ。然らば天女歸るを得ずして、暫し此にとゞまるならむ。而してわれはなほ美容妙舞を見るを得むとて、五節の舞姫を愛惜する意を歌へる也。

○舞姫を天女に比したる、歌柄も氣高くして美はしく、舞姫を咏ずる歌としては、當意即妙の趣なしとせざれども、格別名歌として誦すべき程のものにあらず。とは遍昭が未だ僧とならざりし以前の作也。其僧となりし時、歌を作つて曰く、「たらちねは斯かれとてしもぬば玉のわが黑髪を撫ずやありけむ」と。この歌は、千古の名吟也。「天つ風」の歌などの比にあらず。

十三、陽成院

筑波嶺のみねよりおつるみなの川、戀ぞ
つもりて淵となりぬる。

○筑波は關東の名山也。「筑波ね」は、「筑波のみね」也。「筑波ねのみね」は「假庵の庵」と同じ用ゐ方にて、「みね」の語をわざと重ねたる也。
○水無の川は筑波山より流れ出づる川なるが、平生は水なく、水は川の底をくゞりて流れゆきて、末終に櫻川となり、深き淵を生ずと言ひ傳へたるを以て、淵と言はむ序に用ゐたる也。
○筑波山より落つる水無の川は、さつぱり水が流れて居らぬやうなれど、つもり〳〵て、末は終に深き淵となるが如く、我戀も初は人に知られず、さまでに切にも思はざりしが、いつしか淵のやうに深くなりて、首たけにはまり込み、死なば共にとまで思ふに至れり、戀は不思議なるもの哉。
○上の句は、序詞なれども、彼の「足引の山鳥の尾のしだり尾の」とは異なりて、有心の序也。水無川がいつしか淵となるといふ自然の趣を捉へて、之に戀の知らず〳〵深くなることを寓し、寓し得て穩當にして切實、小町の「花の色」の歌と同工異曲也。されど感嘆すべき名吟にはあらず。

漢文評釋

文學士 久保天隨

節婦(其一)　磐溪大槻清崇

偃武以還、言義烈之事、必以赤穗義士爲稱首、而世所傳四十七士之外、蓋有小島喜兵衛者、而其妻死節、事最可傳云、

これは、赤穗義士四十七人の外なる一忠臣小島喜兵衛の妻なにかしが、節義の話なり。近古史談に載す。節婦を以て篇に名つけし者、之に引續いてなほ一篇あり、故に一と注せり。德川氏、元和の初年、大阪城を陷れ、天下の諸侯を統治し、干戈を戢め、弓矢を嚢にし、全く武を偃せしより以來、元祿にいたるまで、凡そ六十年、昇平日久しく、世俗漸く奢侈に流れ、士風大に廢頽せり。この間に於て、忠義節烈の事をいへば、必ず赤穗義士、亡君淺野長矩の爲に吉良義英を殺

し、不倶戴天の讎を報ひしを以て、第一に稱すること。昔も今も異ならず、而して赤穗の義士は、必ずしも四十七人に止まらず、事に先ち不幸にして死せし者、數名ありと傳へ、其中に一人小島喜兵衛と呼ぶ者ありし由にて、その忠貞の志はいふにも及ばず、其妻も亦同く節義に死せりといへり。おもふに、是れ最も世に傳ふべき事柄ならむ。以上第一段、專ら本傳撰製の由來を述べし者にして、記傳の變體なり。一篇の提綱、自ら莊重の趣あり。そも小島喜兵衛の事たるや、世に傳ふもの少く、實際かゝる人ありしや否や、むしろ疑はしきものあり。三宅觀瀾の報讎錄は、その當時元と赤穗の醫員たりし寺井玄溪に聞きて編述したる者にして、頗る信憑すべき者なるが、その篇末に事に先て死せし者を擧げて、萱野三平、岡野金右衛門、橋本平左衛門を數ふるのみ。蟠溪の此の文は、傳聞を其儘しるせし者にして、自らも確然たる證據を有するに非す。故に蓋の一字を着けて、其意を暗示せり。蓋は元と疑辭にして、伯夷傳の中に、余登箕山其上蓋有許由冢云といひ、於是伯夷叔齊聞西伯昌善養老盍往歸焉といへるを見ても知るべし。

初喜兵衛去赤穗城也、竊與大石氏謀、誓欲共報主讐、及大石氏韜跡於山科、喜兵衛亦去、隱于攝之福島、以待其東行之期、既而漸靡歳月、囊橐殆竭、竟至除端長二刀外、家不留一物、喜兵衛自謂、貧困至此無可以成大事、不若及今一死、以明其志、

初の一字を下し、前段を受け、輕々筆を轉じて事實を舖張し來る。喜兵衛が先に赤穗城を去らむとしける折、ひそかに大石良雄と謀り、必ず主君の讐を報ひむと誓ひけるが、良雄が山科に退きて跡をかくせしに及びて、喜兵衛も亦た世の耳目を避けむが爲に、攝津國福島といへるに隱れ、五十三次東に下り、仇家を討たむ時の早く來れかしと待ち居たり。かくて覺えず歳月を過し、貯も盡きはて、家にあるもの盡く賣りて

かして、食に代へ、やがて四壁山立、一長物を留めず、殘れるは武士の魂といふ大小二口の腰の物ばかりとなりぬ。糜け飯などの腐敗することにて、歳月を糜すといへるは、やゝ新奇の用字法なり。嚢橐、いづれも財布なり。義士鐵石の心あり、窮迫實にかくの如く、誠に憐れむべきなり。 かくて喜兵衛は自ら心におもへらく、かばかり貧乏の境涯にあり、今日をだに送り兼ぬるに、復讐の期はいつとも知られず、とても大事を成すべき由なければ、いつそ腹かき切り、先君に地下に見え、宿志を明にするこそ善けれ、と。嚢橐殆竭より以下三句は、貧困の極點に達したるを叙し、自謂以下の數句を以て之を解釋す。たとへば春蠶絲を吐くが如く、綿々として絶えず、而かも緊切を極め、絶えて無用の間文字を容れず、文に老いたる者に非ざれば能はず。喜兵衛が決死、人をして酸鼻に堪へざらしむ。之を斥けて何か他に手段のありそうな者などいふは、古しへの武士の凛々たる精神を知らざる者にして、固より齒牙に挂くるに足らず。死を潔くするこそ本意なれ、豈に其他を問ふに暇あるべけむや。

於是使其妻出賣水於市、身獨在家、整頓後事、而後徐引刀自裁、不殊、妻自外至、驚扶而起之曰、傷深矣、不可救也、夫君其從容就死、妾亦同死於君前耳、直取刀刺其喉、夫妻相藉以死、

喜兵衛すでに心を決せり、或る日の事、妻に命じ、水を市に賣らしめ、その不在に乘じて、愈よ自刄せむとす。武士の妻にして水を賣るといふ、零落の程、推して知るべし。かくて喜兵衛は妻を出し遣り、身ひとり家に在り、心靜かに後の事どもを處理し、其事終りし後、刀を引きて、腹かき切りたり。されど中々に死に切れず、もたへ苦しみつゝありし折しも、妻は水を賣り終り、歸り來りけるが、之を見て大に驚きながら、流石は武士の妻なれば、あはてもせず、先づ伏し居たる夫を引き起し見けるが、とても助かるすべ無しと思ひ定めければ、顔色すでに蒼く、蟲の息わづかに通ひつゝありし夫に向ひていへるやう、傷深ければ回

生の術ありとも覺えず、心しづかに死に玉へ、かねてより恩愛の契淺からず、生きては室を同うし、死しては壙を同うせむと盟ひし身の、夫に後れて獨りながらへ居らむも詮なければ、今君が眼前に死し、さぞな淋しからむ冥路の旅も、手に手を取りてたどり行かむと言ひもあへず、あたりに在りし刀を取り、喉笛をかき切り同し枕に臥し、もたれ合ひて死にけるとぞ。

以上第二段、之を二小段に分つこと前の如し。整頓後事の一句、從容逼らざるを寫し、區々の狂死に非ざることも知られたり、文を作るもの、常に此等の處に注意して、決して輕々筆を着くべからず。

妻乃大野氏之女、平生同艱苦、有間輒慫慂復讐之事、其叔父九郎兵衛、實逃盟偷生之人也、而此婦不係世類、變怯懦爲義烈、洵可感嘆也、

前段文意すでに盡く、こゝに尙ほ餘波を起し、其闕を補ひ、首尾をして完からしめむとす。そも此妻たるものは、大野氏の女にして、平生夫に事へ、辛勤苟くもせず、常に艱苦を同うし、また君臣の大義を知り居るが故に、時につけ折につけ、夫に對し、復讐の事を勸めたり。されど、その叔父にあたれる九郎兵衛は、實に約束に背き、空蟬の命惜しさに、不義の名を世に殘し、爪彈さるゝ人なり。さるをこの婦人は、かゝる血族に生を享けし者たるに拘らず、臆病を變じ節義の爲に死したるは、瓜の蔓に茄子の實りしが如く、實に感嘆すべきことなり。以上第三段、論賛的に加へし者にして、すべて起首第一段其妻死節、事最可傳云に對應し、不忠の臣を叔父にしつゝ、絶えて其汚濁に染まず、淨然として獨り淸きもの、愈よ傳ふべき者たるを知らむ。

赤穗義士の眷屬中、烈女を以て稱せらるゝ者、少からず。自刄して兒を勵ませし原元辰の母の如きもあり、義擧の後、其夫と子との死を聞きて絶食し世を辭せし小野寺秀和妻の如きもあり、他に堀部の義母たる正慶尼及び其女妙海の如き、皆傳ふに足れり。而してこの小島氏の妻の如きは更にすぐれたる者ありと稱すべく、人をして覺えず涙を垂れしむるになむ。

（以下次號）

小說

菜摘川

學海居士

上

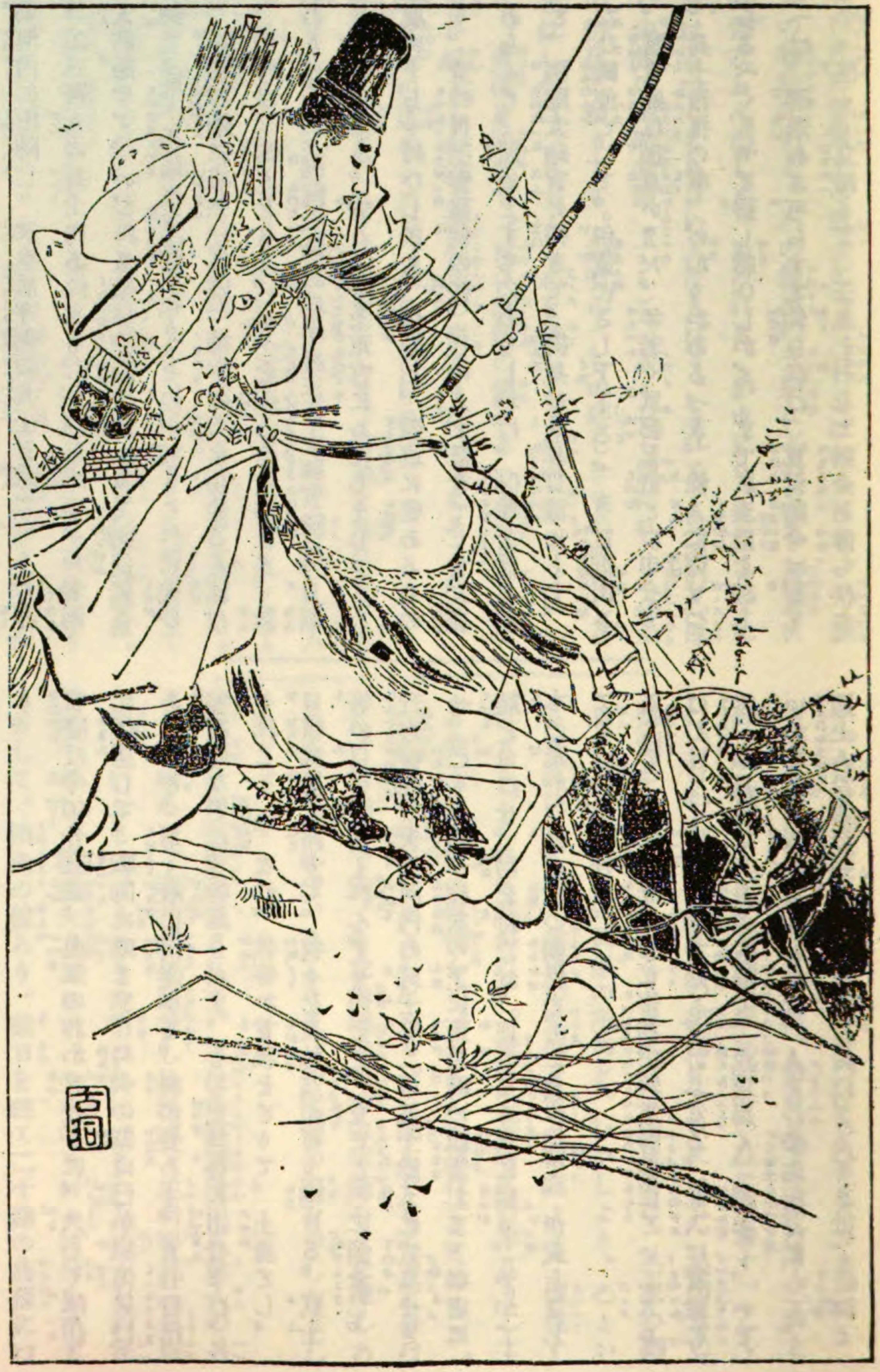
君ませは嶺にも尾にも住居して深山ながらの都なりけりと先帝（後醍醐天皇）が芳野の山に遷幸なりき。吉水院を皇居と定めさせ給ひ。百官百司警衛の武士まで。此處彼處の寺院。または民草の家居にも立こみて。深き山中も朝夕衣官の公卿、甲冑の武士緋縅の鎧。紅紫の旗旌谷間岩間の樹々の葉末に輝きしをかくは詠しとしられたり。

先帝は御仁慈深きのみならず。御智略かしこく。然しも威權四海を靡かしたる。鎌倉を亡し給ひ。公家一統の御世となし給ひしかど。彼足利尊氏が逆意を企て。諸國の武士等が公家の政事を快からす思ひ忍び〳〵に朝家に楯突むと謀るよしを知りて。利害を說き。土地財物を餌として。語らひしにぞ。利に走り榮を思ふものども。我も〳〵とつき從ふにぞ。尊氏は龍虎の勢をもつて。風雲に嘯き遂に帝を逐出し奉り。持明院殿の御血統をもつて世を知ろし召させむと。表にいひなして。伏見宮の皇子量仁親王を御位に即け奉りしかは。世にはこれを北朝と申し奉りぬ。されは忠義を思はぬ公卿殿上人五位六位の侍まで。都にのこり留まりて。柳營の風に靡き。朱門の塵をのぞむもの多かり。南山におもむき伺候する人〳〵は。然すかに。これとは同しからす。關白福恩寺の左大臣をはしめ。四條大納言隆資卿。洞院大納言實世卿など。その餘先帝に仕へ奉りし誠心厚きものも。また少なからず。まして當代は先帝の英智にも。おさ〳〵劣らせ給はす。聖の道はさらにもいはす。武き軍の事にも習

はせ給へは。文武の諸臣も皆末頼母しく仕へまゐらせたり。されは中宮に仕奉る女官に至るまて。詩歌管絃の道のみならす。古の賢婦烈婦の君に仕へ奉りて。命を落し。又は夫にかしづきて。節を失はさる事なと。日本の世々の國史。又は唐土の書なと。讀みあきらめて。古人におとらぬも多しとぞ。

實世卿は御子あまたあり。いづれも。當代に仕へ奉りて。官位滯る事なく。また武士の道にも。携はり給ひて。武士等ともに。甲冑を帶し。戰功を著はし給ふもありけり。季は御女にて。中宮の御もとに奉へまゐらせ。內侍のすけとなりぬ。御眉目麗はしく。和歌を善し。心さまも。優にやさしく。御兄君に似させ給ひて。雄々しき御心はへもおはします。されは。先帝の御時勾當の內侍と聞えし君の新田左中將の北の方となり給ひ。又近き頃伊賀の局といはれし內侍が楠木左馬頭に嫁きしごとく。名ある武士の妻にやなり給はんと。囁やくは口さがなき女孺雜仕などの問はずかたりにやあらんかし。されば。此典侍はものゝつゝましき性にてかりにも。浮きたる事を好み給はねは。殿上和歌の御會などにも。戀歌などは絕えて。よみ出て給ふとなく。ともすれ。わが君が畏しこき御身をもて。外都の塵に。うもれさせ給ふを。歎きられふる心を言の葉によせたるのみぞ多かる。在らぬものは。婦女の歌として。いとこちくしう優しき心なりと毀るものもありしかど。典侍はきゝ知らぬ顏して。そを善しとも。又あしともいはで。眞人こそ志らめとて。咎め給ふとなし。

正平の六年の冬の初の事なりけり。伊賀の國の御領の解狀にこの歲の貢物をたてまつる可きよし。國人より。吉野の行宮に申しおくりたり。されど。道遙なれは。警衞の御勢無くては。兇徒等の爲に奪はるべし。いかで。さるべき人を下し給はりて。貢物をつゝが無く。押送し申さんと。ありしかば。勘解由司より。關白殿にそのよし請申けるにぞ。福恩寺關白師季公は。さらば。行在警衞の武士に仰せて。警護押送の事を計ひ申せとありしかど。此時行在の武士甚少く。多くは。



伊勢河内に出陣し。又皇居守衛の兵士を減ず可くも非ず。二三百人の兵士はあれども。それを率ゆべき者兩三人に過ぎず、いづれも皇居警衛の任ありて御使にさし難し、楠木正儀は本國に在り。その一族もこれに從ひて。北軍防禦に暇無ければ。楠木の力を用ゆると能はず。されば。何人をもて。兵士を率ゐさすべきと。詮議ありけるに。洞院大納言の子息三位中將實隆は。日頃より武藝を好み。去る頃今上東宮におはしましゝとき陸奥に下らせ給ひしにも。供奉し。戰場に覺あるものなり。貢物押送警護使の任。この人を置きて。また誰かあらんと。薦めますものありしかは。師季公然るべしと。洞院大納言を招きて。御身の子息實隆ぬしを。こたひ御使として。伊賀にさし下さるべき旨仰出さる。實世卿は愚息いまだ。年若く武藝を好とは申せども。兵士指揮の事。いかゞかあるべき。餘人に仰せつけらるべくもやと辭し給ひしかど。すでに奏問を經しうへは。辭退ある可らすと仰られは。實世卿今は辭するすべ無く。立歸りて。子息を召して勅命を傳られたり。

實隆は今年廿五歲。血氣のわか者たるに。久しく深山に住居して。戰陣に臨ます。弓矢の業は己か家傳にはあらねど。屢ゝ敵に出逢ひて。腕に覺あり。貢物押送警護使なとは。物足らねど。もし兇徒等に出合なば。それこそ幸なれ。彼等か首級をとりて。土產とし。日頃武勇に誇りて。我々を長袖なんどゝ嘲ける。武士等の目を醒しくれんずものをと。立ところに領承し。行宮警衛の大和河內の武士等二百五十餘人に武具せさせ。己も烏帽子狩衣の下に萠黃縅の腹卷して。從者に箙を負はせ。弓を持たせ。鹿毛なる馬に跨り。やがて木の葉かつ散る秋の朝風ともに勇み進て。伊賀をさしてぞ。發足しける。

こゝに。三條一流の末に宰相中將實勝朝臣といふ人おはしけり。家號を油小路とぞいふなる。此人は實隆に年一歲長けて。身の丈高く。色淺黑く。鬚多く。いといかめしき人物なりしかば。人その學生出身にして。殿上人たるを知らず。衣冠し給はざるときは。近國よ

り行在に警護する武士にやと疑ふばかりにて。光源氏の物語にある。かの髭黒の大將などいふも。此君にや似たらんかしと。思はれき。かりにも。女子などに思はるへくもあらぬ人なりけり。されと。忠義の心厚く先帝の御時童殿上して。親く召し使はれ。又今上の御代に至りても。近習のうちの睦しきものに思し召されしかは。ます〳〵心を盡して。仕へ奉り。いかて。兇徒を平けて。再ひ御運の開かるへき事を日夜に思ひ謀りしかば。歌管絃の事なとは。耳にも入れす。唯武士の道のみにて。學ひ給ひけれ。實勝その性すくれて。剛直にして。權勢を畏れず。軍議などあるときは。己か心の思ふまゝを。打出す萬人に降るとを好ます。されは今上の御寵愛は深けれとも。關白殿はよしとも。思ひ給はす。實勝は君寵に誇りて。己が官爵の卑きを知らずして。己かまゝに振舞にて心得ねと。歳のはしめの。敍目にも。推任の事無れば。官位も中將にとゝまりて。加譜の沙汰にも及はさりき。こゝをもて。こたひ。伊賀貢物の警護にも選まれす。實世卿の子息にぞ。仰せつけられしなりき。

さても洞院三位中將實隆は。勅命をうけ給はり。日を經て。恙なく。伊賀國名張郡野井の莊に到着す。こゝは。むかしより龜山院の御領にて世にいふ。長講堂の御領といひしがうちなりければ。領民等は。公家の御恩を蒙ると厚く。武家の所爲を。むかしより。心よからず思ひしにぞ。尊氏が兇惡を憎み彼處より〳〵催促すれども。これに從がはず。先帝の芳野に行幸なりしより歳々の貢税の事惰らず。ことしの秋は。ことさらに。行在の御物乏しきよしをきゝ。一國こぞりて力を合はし。穀物幾千俵。また卷絹染布沙金宋錢あまた徵しあつめたりければ。さてこそ。押送使の事を申したりしなり。

貢物の押送警護使として。三位中將實隆三百餘人の兵士を率ゐて。野井莊に到着しければ。庄司野井三郎顯常といふもの。人あまた引つれて。これを迎へわが家にやどし。饗應大方ならず。士卒等も村々に分ちやどらして。酒食の儲あり。數日を經て二十餘の唐櫃には

卷絹五百卷染布五百匹沙金三千兩。宋錢二百貫をおさめ。これを人夫五十餘人に舁かしめ。まづ先發として。實隆これを警し兵士二百人を從ふ。中一日を隔てゝ。牛五十頭に米千餘俵を牽かしめて發せしむ。

實隆は。かゝる多くの貢物を獲てければ。喜ぶ事大方ならず。士卒を戒め。道をいそぐほどに。第二日に及びて。大和國宇陀の郡に入りにけり。この宇陀郡は。山路嶮岨にして。名に負ふ宇陀山あり。おりしも。秋の季なれば。木々は紅葉を染成して。萬匹の錦を曝らし。渓谷の流は潺々として。珠を漲らす。崎嶇たる徑路は岩石聳えて人の歩行を艱まし。樹木は陰森として。晝なほくらかり。實隆は馬上にて。この風景を觀て。そゞろに。興を催し。古歌などを打誦じけるほどに。士卒はもとより。數日の饗應に心よく役夫等も。いま一日にして。吉野の行在に到るべしと思へば。心に勇あり。はやくかの地に到着し。君臣上下の喜ばせ給ふをみて。これを歸國の土産とすべしと嶮岨の山路を物ともせず。唐櫃を舁きつゞけて。路をいそぎけり。

此日の夕刻にはや宇陀山の巓を過ぎて。二里にして。麓に至るべしと。檜の木。杉の木生茂りたる山陰を過ぐるとき。あやしや夕陽の落むとする西の森の端より咄と揚げたる喊の聲木たまに響きておびたゞし。實隆は馬をひかへて。これをみるに。その勢三四百人桐の紋つきたる旗を眞先に飜がへして花やかに鎧ふたるの武士馬を跳らし驅け出たり。

その時馬上の武士は聲高く。やおれ。南山の痩公家等うけ給はれ。これは。足利殿の恩顧の侍土岐の九郎頼繁なるぞ。かねて伊賀の國の目代をうけ給はりて。貢物を催促するといへども。南山の御領なりとて。土民等御教書に從がはず。よく間諜をもつて。伺がはせしに。窃に貢物を吉野に運送するよし聞えたれば。斯くは。軍馬を起して。これを奪ひとらんとて。向ふたり。南山の兵士等は河内の國におもむきて。皇居守護の兵少しときゝたれば。後援の勢無しと知る。今は逃るゝ道はなし。疾く〳〵貢物をわれに渡せよ。命ばかりはゆるしくれんと罵りければ。實隆大に怒り。殘虐無

道の尊氏に與みし。辱くも君に奉る供御の物を奪はんとする强賊。何ほどの事かあらん。盡く素首をうち斬て。我歸山の土産にせん。物共はやく土岐奴を射て落せとはげしく下知を傳えしかば。畏まりぬと。從ふ兵士弓に矢つゝかへて散々に射る。されども。賴繁は聞ゆる剛の者にして。射かくる矢を事ともせず。皆拔連て斬てかゝる。勢猛虎の荒たる如く。面を向くべきやうも無く。御方は久しく敵に合はず。數日の饗應に。身體惰りて進退合期せず。貢物を敵に奪はれじと。心を勞するからに。戰やうやう。つかれて。やゝもすれば受太刀となりて。防ぎ戰ふ。實隆は馬上にこれをみて。自ら弓を執りて。日頃の手術をあらはし。忽ち敵を兩三人射倒したり。これに氣を得て。頹れんとせし御方の兵士忽にもりかへし。こゝを先途と戰ふたり。

伊賀の國より從ひ來りし。役夫等は。先手に戰始りしを見て。大に懼るゝものから。吉野の兵士等が防ぎ戰ふをみて。やゝ心を安くし。森の樹陰に唐櫃をおろし。おさ〳〵用心に油斷なく。おの〳〵。かねて斯るともやと。いづれも腰に佩たる一刀を拔きて。唐櫃をとり圍みもし敵これを奪はむとせば。命かぎりに。斬りちらして。貢物を。やはり。敵のものとすべきと。かひ〳〵しく警固せり。

土岐賴繁は無二無三に吉野の兵士等と戰ひしが暫しありて。實隆が弓勢にや怯れけん。又如何なる謀やありけん。忽ち馬をかへして。逃げ走しる。吉野勢はかくとみて。きたなき。兇徒のありさまかな。疾く引かへして。勝負せよ。瘦公家の手なみを見せんと。呼はり〳〵。我先と追ふほどに。敵はあとをも見ずして。散り〳〵ばら〳〵になりて逃げたりけり。實隆も思はず馬をすゝめて。山坂の嶮岨をいとはず。西の方五六町ばかり追たりけるに。風と心つくよしありて。馬を止め。貢物はあとにのこせしものを。いと心元無し。物ども敵をな追ひて。よきほどに。追すてよと下知し。諸勢をまとめて引かへしもとの處にきて見るほどに。唐

櫃は一つも無し役夫十餘人或は射倒され。或は斬り倒されて死せるもあり。傷つくもあり。算をみだして。散亂す。さては兇徒奴に欺かれしか。遠はゆかじ。いで〳〵追かけて。とり戻さん。かゝる大任を帶ながら。心淺くもたばかられて。いかで生て還らるべき。ものどもつゞけど。馬を馳せて敵のゆきしかたを。手負のものに尋ねきゝて。追かけんとひしめきけり。

忽ち起る喊の聲かなたの溪間にあたりて。此方を指して馳來るさまなり。すは敵がかへし來つるよと。おの〳〵刄をぬき矢はげなんとして。待ゐたりしに。かの勢どもは。凡て二百餘にて。敵とは見えず頭なる人にや。烏帽子直垂に弓矢を負へるが。馬をすゝめて。馳せ來り。實隆をみて。人々おどろき給ふべからず。こは油小路中將實勝ぬしの使をうけ給はれる某は殿の郎従にて。備後助忠幹と申ものにて候。主にて候人の仰を受けて。唯今兇徒を追散して貢物を奮ひかへして候つるなり。なほ兇徒は。その半を他の手にわたして。いつ地へか退きて候と。主なる人の追ゆきて候へば。遠からず。立かへり候なん。御心やすく覺しめし候へといひけり。

實隆は。意外の助に夢かとばかりに。大に喜び。忠幹の勞を謝し。取りかへしたる唐櫃の半を役夫等に舁しむるに。幸にして。懼れて逃れしものも。立かへりて。又射倒され。斬り倒されしものも。いづれも。深手ならねは。やうやくにして。人を走らせ。人夫を雇ひてその闕を補ふとを得たり。さるにても。實勝は敵を追ふていづ地にゆきしにやと。折しも日くれしかば。山を下りて人家に至りて。まつほどに。三時ばかりを經て。實勝は實隆主従かやどりし村長の家に馬をとめ。さて實隆に對面し。こたひの任を勞らひ。又ゆくり無き。兇徒の荒びを慰め。さて伊賀の貢物の事は。大納言殿より承りて。某心安からす。尊氏が黨類は日夜に吉野殿の動靜を伺ふを少しも惰り無し。もし途中に於て如何なる枉事も出來んかと。危み思ひしゆへは。上の仰は無けれとも。某幸にこの地の住民等にしるべあれは。去る日郎従忠幹壹人を從へ和君を迎へ申さんと。

來りし。住民等これをきゝ。某がもとに馳せ參りしかは。そを從へて敵が和殿を欺き唐櫃を奪ひしをみるからに忽ち敵勢を追散らし御唐櫃の半をとりかへせり。されと。その半は敵の爲に奪はれたれは。追ゆきしかと。逃けのこりたる。敵の首十餘級を得たるのみ。御唐櫃の半は失ひたり。敵は一手にあらすして。兩手に分ちて。奪ひしと思はれたり。無念の事をしてけりと。いひしかは。實勝大に喜ひ。且は悔ひうらみ。御身の救無らしまかは。盡く失ふ可かりしに。その半を取りも返せしと。聊か過を償ふへし。されど實隆御大事の使をうけ給はりて。かゝる禍に逢ふ事。その罪甚重し。とてもこのまゝに立歸り何の面目ありて。奏聞すへき。自殺して。罪を謝し奉るへし。中將ぬし。よしなに申し給へと。いひしかは。實勝は。こは思ひもかけぬ事かな。賊徒は大勢にて。しかも北朝にて聞ゆる土岐の一族なり。事不意に起りし事なれは。和殿の罪にあらす。ましてや。御唐櫃は半は。とゝめてこゝに在り。又貢米は。なほ明日到着すへし。

某住民等を率ゐて。これを警衞し。恙無く。押送しまゐらせん。吉野にかへり給ふとも。實勝が途中に於て御唐櫃をとりかへせしとは。ゆめ申し給ふ可らす。又唐櫃の半の事は。關白殿に委細の事を注進して。その御沙汰を仰かせ給へ。かゝる亂世の事なれは。誰にてもかゝる事あらん。いかて御身を罪なはし給ふへき。穩便の御沙汰あらんと疑なし。みたりに身を輕くして。反て敵の爲に笑はれ給ふ可らす。かへす〳〵も。心短く思ひ給ふなと。諫めしかは。實隆もまた勅命をまたずして。みだりに自殺するは。臣子の道にあらず。とにかく。御唐櫃を恙なく。守護して。進退を關白殿の仰にまかすへし。和殿の好意にまかせ。御救助の事は言上すへからすと。實勝が好意を厚く謝し。また軍兵役夫等にも。堅く洩らす可らすと命せしかは。彼等もまた己等が罪得むとを畏れしかは後々までも。實勝が救を得るとは言はざりけり。實勝を助けし土地の住民等もまた實勝が友に厚きを感して。その事をもらすものなかりき。

（未完）

お伽噺

獨乙 添乳物語

なにがし

一 香と音

ある宿屋へ一人の旅人が泊まりまして、早速夕飯の仕度を吩咐けました。ところが、客が大勢混合つて居た爲めに、大分手間が取れたものですから、旅人は我慢しきれなくなり、ずん〳〵宿屋の臺所へ還つて來て、豚肉を燒いて居る圍爐裏の傍で、その香を嗅ぎながら、袂から麵包を出して食べ始めました。所へ亭主が還つて來まして、「夕飯の準備が出來ましたから、食堂へ御入來ないさ」、と申しますと、旅人は「もう燒豚の香で腹が一杯になつた」、と言つて、圍爐裏の傍を立ちませんでした。そこで亭主は、外の客に夕飯を出しまして、それ〳〵勘定を受け取りました、暫く經つて、亭主は、またこの旅人の所へ來まして、外の客と同じ樣に、勘定を請求しますと、旅人は、大層腹を立て、「何にも食べないのに、金を拂ふ筈がない」と怒鳴りつけました。そこで、亭主が「イヤ、たとひ香を嗅いだばかりにしろ、御腹が張つたと、いふ以上は、召上つたも同樣です」と負けずに言ひ張りました、旅人は「それなら、善し」、と言つて、財布から銀貨を出して、ぽんと床の上へ抛り出しました。「如何だ、銀貨の音を聞たか」、「確に聞きました」と亭主が返答すると、すぐ、旅人は、その銀貨を拾ひ上げて、再び財布の中に入れて終ひました、亭主は譯が分らぬと、言ふ樣子を爲て居ります、と、旅人は、微笑ながら、「私が、燒豚の香を嗅いだ計りで、腹が張るものなら、御前は、銀貨の音を聞いた許りで、貰つたのも同じと考へることも出來る理由だ」、とこう言つて、すたすた、宿屋を立つて往きましたとさ。

二 馳走くらべ

或村にくはずといふ吝坊が住むで居りましたが、その隣村にのまずといふ自分よりもツと吝嗇な者が居る

といふのを聞きまして、甚麽な樣子だか知りたくなつて、早速訪問に參りました。のまずは村の者から爪彈されて居りまして、大層寂しく思つて居る處へ、くはずが來て呉れたもんですから、非常に喜びまして、流石ののまずも御馳走を爲る氣になつて、くはずを伴れて、街へ買物に出懸けました。第一に立停つたのは麵包屋で、「御前の店には廉價くて甘味い麵包はあるか」、と聽きました。「極く宜しいのが御座います、牛酪よりも新しい柔軟なのが御座います」、とその主人が申しますと、のまずは、麵包と比較べられる所を見ると牛酪の方が善いに違ひない」、とこう思つて、今度は食料品屋へ參りました。「牛酪の善いのがあるか」、と尋ねると「へイ種油より、もつと新鮮で美味いのが御座います」、と言のを聞いて、「牛酪の上等に比較られるところを見ると、種油の方が、ずつと善いに違ひない」、と、斯うまた考へて、今度は油屋へ行き、「種油の良いのがあるか」、と聽くと、「水よりも純粹で、そうして透明のがあります」、といふ返辭でした。のまずは、さも感心したといふ樣子で、くはずに向つて申しますには「如何です、段々聞いて歩いて見ますと、どうも、水が一番良さそうではありけせんか、水なら何も買ひに來る必要はない、家の水瓶に充滿汲むでありますから、充分御馳走ができますと」、こう言つて、手ぶらで歸りました、流石のくはずも、水の饗應には驚きましたが、吝坊は吝坊だけに、「これは善い事を覺えた」と言つて、自分の村へ歸つて參りました、くはずは、御馳走の返禮を爲たいと思ひまして、ある日、のまずの處へ、「この間は有難う御座いました、その御返禮として、聊か御馳走を致しますから明日御入來ください」、といつて遣りました。するとのまずは、大層喜びましてあくる日早速出懸けて參りました。くはずの家へ着きますと「さあ、何卒」と言つて、家族の居る室へ通されまして、四角張つた客待遇をせず、極く懇意な人の樣に、馴々しく、妻君や子供から話しを仕懸られました。のまずは、非常に滿足していろ〳〵喋舌て居りますけれども、一時間經つても、茶を一つ出して呉れませむ故、すこし氣懸りになりましたが、

大概饗應の準備に忙がしい故だらう、と思つて居りますと、二時間經つても、菓子が出ませむ、のまずは今日は御馳走が食べられると思つて朝飯を食べずに來たものですから腹が減つてたまりません、どうか早く御馳走をして呉れゝば善いと、頻りに氣を焦燥して待つて居りましたが、三時間經つても、四時間經つても、一向その模樣がありませむ。のまずは、到頭堪へ切れなくなつて、くはずに向つて、「あの今日私に御馳走してくださるといふ御話でしたが、どうか御早く御願ひ申します」、とこうぶしつけに切り出しました。すると、くはずは笑ひながら「あなたには、この御馳走が合點りませむか、食ひものや、飲みものを出すのは、これは御馳走でも何でもない、客あしらひをせず、親類同樣に、取扱ふのが、これが何よりの御馳走ではありませんか」、と言ひました、これにはのまずも返答に詰まりまして、「成程左樣です寔に有難う御座います」、と言つて、空腹じいのを堪へて、早々に自分の家へ歸つて行きましたとさ。

三　三つの質問

或國の王樣が御微行で、御城下を御通りになりますと、御城下の外れに一軒の穢い小さい粉屋がありまして、其粉屋の入口の戸に、大きな字で、「苦勞なしに世渡する」、とこう書いてありました。王樣はこれを御覽になつて「こんな貧亡な粉屋でありながら苦勞なしに世渡りすることが出來る筈がない、何か譯のあるに違ひない」、と思つて、粉屋の主人を呼んで、其理由を御尋ねになりした。粉屋の主人といふのは、最早六十歳でもありませうか、髮の毛は大分白くなつて、顏には小皺が寄つて、光澤が悉皆拔けて了つて居ります、極く貧乏と見えて、垢たらけの襤褸の衣服を纏うて居ります、しかし何處か悠然とした所があつて、嫣然〳〵としながら、王樣の前に小腰を屈めて、「なに理由なんていふことはありませむ、が私は苦勞が御座いませんで、それで、いつか徒らにあんな事を書いて置きましたので」、とこう申上げました。王樣は、そこで、主人に向つて、「どうも

己には御前の苦勞がないと言ふことが腑に落ちない、で己れが御前に聞きたいことがあるから、明朝、王城へ來呉れ」と仰有て御歸りになりました。翌日、粉屋の主人は約束を違へずに、王樣の處へ遣つて參りました。王樣は氣輕な調子で、「ヤー善い天氣だね、よく來て呉れた」、そこでと、御前は己が今思つて居ることを當てることが出來るか」、と仰有りますと。粉屋は「大概粉屋が遣つて來たと思つて御居でゞせう」と申上げました。「そうだ、よく當つた」「そんなら、月の重量は如何程あるか」、「そりや精々、月の四半分を四つ合せたゞけありませうよ、虚言だと思召すなら、御自分で計算り直すに越したことは御座いません」、王樣は更に「海の深さは如何の位あるか」「へイ石を投げて底につくまでの距離程御座いませうよ」、粉屋は造作もなく、一々返答いたしました。そこで王樣は笑ひながら「御前は餘程氣輕な奴じや、御前の樣に、そう何んでも容易く見て居つたら、苦勞と云ふこともあるまい」、と仰有いまして、大層粉屋が御氣に入つたと見えて、いろ〳〵と物品を御遣しになりました。これから毎日王樣の話相手に出る樣にと、いふことゝなつて、粉屋は晩年を樂に送りましたとさ。（をはり）

世界第一等の冕

世界の中に最も尊き冕を戴くものは英利士の女王と葡萄牙王の二人なり、女王ビクトリアの冕は最も有名なるものゝ一にて、數個の艶麗なる紅寶石と一個の鮮潔なる碧玉とにて飾られ、その他微小なるものには、十六個の碧玉、八個の綠寶石、四個の紅寶石、一千三百六十個の白色金剛石、一千二百七十三個の薔薇色金剛石等を保ち、尚又四個の大なる眞珠と二百九十六個の小なる眞珠とを添へ加へありて、その價實に二百萬弗に當るといふ、されど此の女王の冠にも遙かに立勝りたるもの尚一個あり、そは葡萄牙王ドン、カアロスの冕とす、これぞ世界第一等の冕にして、その價値少くとも六百五十萬弗以上のものなり、王の冕に飾りたる十字架は最も光澤よき四個の大なる金剛石より成り、之が臺には彫刻なき紅寶石を用ひたり、その他冕の總ての部分もありとあらゆる寶石珠玉を以て裝飾をなせり、然るに惜しむべし、露西亞の故帝崩儀の際此の王冕より一個の寶玉を剝ぎ奪りたるものありて、今尚其行方を知らずと云ふ。

雜録

漫言

水原未瑳子

徒然なる身にはあらねど、爲すべき事の多かるが中にも、日ぐらし硯に向ふ事のおほかるついで〳〵に、心に浮ぶよしなしごとを、只手ならひのやうに書つゞるも、猿まろが人まねの、あやしうこそ物くるほしけれ。

いでや、女とうまれては、願はしかるべきことこそ多かめれ。后の御位はいともかしこく、只うどの思ひかくべき事ならねばいかゞはせん。

一の人といへど、今の世は、其身に學あり運ありて、世を政ごつ才あるは、下ざまより經上りて、終には總理の位にも至らるゝなれば、女も夫をたすけて、よろづいそしみはげまば、及ばぬことにもあらざめり。さばれ、運といふものこそ、才學にも拘はらず、せん方なき物にはありけれ。

運拙くして、高きにのぼるべき楷梯もなく、或は、中程より押おとされなどして、又よづべき望も絶なむには、陶朱公にならひて、富をつくらむにはしかじ、それはた叶はずば、世に益ありて、後代に名をとゞむべき書をあらはさむ事をこそつとむべけれ。此三つのうち、いづれをか得ぬべき人を撰びてぞ、終身のよるべとあがめかしづき、我もまたともにはげみて助くべかりける。盡してならずば、天なり、命なり。盡さゞるは、怠なり、誤なり。況て、さるかたに、心をもとめざるは、此世に人と生れたる甲斐なし、男は夫とするに足らず。女は友とするに足らず。

○女のたのしみとすべき事、何ならむ。人はいふ、流行の衣裝を調ずるなり、髮を今やうにゆわせて、あたひたふとき櫛笄、さては簪、又はおよびの輪にだいやもんどゝかや云ものかゞやかせて、足には繻珍はな緒のはきものはきて、馬車にのりて、人にみせびらかさむ哉。今

一人は云、演劇のかはる度毎に、三度は缺くとも一度を見はづさずば、他の事は、いかなるをも堪忍びてむ、最負の何某が覗みるばかり、心ゆく樂しみなし、もし是をしも見ずあらば、世に生ける甲斐なしと。此外の樂事をいふ人、けだしあらむも、そは雨夜の星よりもまれにして、女といふ女は、皆此ふたつを願はぬはなきが如し。觀劇は眼前一日の樂しみのみ、流行は月日とともに移る。衣裝も何もしばしこそあれ、はやらずなりては、忽ち捨てらる、然れども、世に立まじはる限りは、人と異樣ならむも、うたてよの除物となりて、何事にも敬まへられず成ぬべし、それもかひなし。衣裳を好むとならば、眞のよき物を撰びて、數をすくなくし、ことしばかり着て、損せぬ先に早う賣らば、あたひもいたくは落ちず、それに足して、又來む年に新らしく調ずれば、年々に時の流行におくれずして、價やすく得らるるが如し。數すくなければ、納めおくにも便よく、古きをつくらふ事なければ、亂らはしき事もなし。演劇はた無下に見ざれば、交際場裡の話柄につかゆる事あり、暇ある折にはみて、俳優其ものゝ如何には深く心をとめず、唯其世の風俗を察し、其劇の筋を味はひて、歴史學の一助となさば、觀劇も又益なしとはすべからず。我も又女なり、二つとも思ひはなつ事を得ず、好むことは好めども、唯主義の人に異なれるのみ。よの人は、有るが上にも、流行物を得むと願ふ、我は古きにかへて新きをもとめ、久しく止めむと思はず、よの人は、俳優を愛して、劇の如何を考へず、我は劇をみて、俳優の誰なるに拘はらず。



婦女として。樂しき事の極みは、良配遇を得て、うらなく語らひ、すこやかなる兒うみて、おほしたて、是をよくをしへ導きて、天晴なる人となし、名を顯はし人に譽らるゝを見きくばかり、樂しく嬉しき事はあらじ。實の子なくば、やしなひても、又をしへ子にても、多かる中にひとり、末頼もしきがあらば、是にまされる樂しみは有るへからず。次には、旅にい

でゝ、知らぬ海山の景色みるばかり、心ゆく事はなし。昔は、女の旅はさておき、都のうちだに、心に任せて出ありく事はかたくなん有りける。開けゆく世の有りがたさは、海には汽船あり、陸には汽車ありて、遠き處も、時の間に行かよひて、山阪のなやみもなく、雲助馬かたなどいへる、亂はしき恐れもなく、女子どもゝ、易らかに、いづくの旅にも出らるゝを、いかで、家にのみ垂こめてやはあるべき。流行の衣、身のかざりをあがなふ金をもて、旅にいでゝ見聞をひろめ、積欝をはらさば、身心ともに益あること、いくばくぞや、此樂しみを知らず、思はずして、生涯を終らむこと、昔はいはず、今の大御代のおほむ惠にもれておのれと俊寛僧都に似たらむは、口をしからずや。

○文久の頃なりけむ、比叡のふもと、坂本の里に假すみしける時、此の野山のおもしろきに、そこはかとなくせうえうしつゝ、高畑といふ處にうかれいでゝ、とみれば、



大きなる櫻樹のもとに、生垣うつくしう結ひめぐらして、いと清げに造りなしたる庵ありけり。柴の戸少し開きてありければ、やをらよりてさしのぞくに、庭はわざと造らねど、せき入れたる小川の水の心も、自然の趣きあり。そも、いかなる人か住むならむと、ゆかしさの餘りに、そゞろに入りておとなへば、あるじが律師なるべし、鼠の衣左まへにきたる、人がらよしあり氣なるが、思ひの外にいと若くみゆるに、少しはしたなき心地はすれど、今更にいかゞはせむ、知らぬ野山を分入ていたくつかれつければなど、ことよくいひなして、すのこに腰打ちかけて、休らひつゝ見めぐらせば、庵のうちはひろからねど、清らかに、持佛堂よき程にかざりなして南面に文机すゑて、書ども積重ね、凡ての調度いと心憎し、端のかたの阿伽棚に、色よき草花折ておかれたり。庭の眞砂、しら玉をしけるやうなるに、杉苔の青々と色榮えて、天鵞絨といふ織物に似たり。かの櫻た

ゝ一樹の外、又異木なし。琵琶の海づら打ひらけて、露さはる物なく、三上山、すげ、赤の猪かけてみえわたり、北の方遙の沖にうかべるは、竹生島なるべし、うしろは四明か嶽高くそびえて、ふもとの木々の紅葉、そめかけたる山水の景色、いつ迄みるともながめあくまじくて、かゝる處に住み給ふらむ人の心、いかに清からむと、うらやまし。いで居のかたなる爐に、松風の聲たてゝ、かくはしき木の芽にて、すゝめつゝかたらるゝをきけば、爰はものみ、比叡の安樂院の開祖上人の住給ひし庵にて、瑞光庵とぞいふなる。上人筆なりとて、壁に掛られたるをみれば、

坂本に在ける時訪くる人の多きにつけても世の常なさの思はれてと詞かきありて

限りとて爰をもつひに住捨は
　　誰をたにとも誰思ふべき

とある、いとたふとく覺えて、おのれも、

邂逅にとふけふだにも住捨し
　　其百とせの期をこそしのべ

又上人いまそかりける時、此櫻の梢に紫雲たなびきて、尊とき佛の顯れ給へることありしとか、げに幾とせへにけむ、いとも〳〵大なる老樹にて、枝さへふとく生ひひろごれり。花のころ思ひやられて、

櫻木ようき世の人をいとはずば
　　又こむ春の花に契らむ

春さらば必といひつゝ歸りしか、其のちいく程もなく、人づてにきけば、かの律師は、女人に訪はるゝがうるさしとて、山に逃りつ、後には、耳うとき老法師、かはりてすめりとぞ、彼遍照僧正が小町に挑まれて、かさねばうとしとよみながら逃たりし古ごとにも似たるかな、我はゆめさる心にてよみかけし歌にはあらねど、きすくなる法師心には、いかに聞たりけむ、律師がふるまひ、今のよの若僧には、いと珍らしくすそうにこそ。

○或る家を訪らひけるに、主人えさらぬ要用あり、今たゞ今事終るべければ、しばし待ちたまへとて、一間なる處に請じられぬ、まつ程ふとみれば、床なる掛ふくに、

仁に過ればよわくなる。義に過れば人と爭ふ。禮を

過れば謟となる。智に過れば詐多し。信に過れば損をする。五常程のよき事、猶かくの如し。況や餘事に於てをや。萬事中庸をはなれず、過不及なきを以最良とす。

伊達政宗としるして、花押ありき。筆の眞僞はいざ知らねど、其詞のげにと身にしみて覺えしかば、假そめにみたるなれど、今に忘がたし。

英國女皇

文學士　石澤發身

一　其の誕生

今を去る八十二年の昔、彌生の春とはいひながら、風吹きしきり、未だ肌寒き黃昏に、アモルバハと和蘭の境を海岸傳えにたどり行く、脊はスラリと高く頰に紅味を帶べる偉丈夫、手にだつなとりて藹然古風の馬車を驅るを見ん。此矍鑠たる禿顱漢は、當時權力隆々として四海に比びなき大英國に君臨ましませるジョージ三世の第四世皇子に當れるケント公にぞある又公の傍らに席を占めて姙娠れる貴婦人あり。最早盛りの色は過ぎしかど、さりとて姥櫻のそれならねど、芙蓉の花の香ひ床しき姿なり。此婦人こそサックスコブルグ家のウイクトリア夫人なりしなり。公はこの胎兒若し英國に生れなば、他日英國皇嗣となるべき時機到來するは必定と信じ、遙々行路の難を排し、具さに艱難を嘗め、英國さして旅立ける途中なりしなり。

苟くもやむとなき身にましましながら、斯くの如き有樣なりと曰はゞ讀者或は怪まん。併し公は家門の寵兒に非ず。彼の兄弟は公……の胎兒に對し嫉妬の情を抱き、己れまづ先ずじて未來に於ける君主の父ならんと競へり。此より前きジョージ三世及皇后チャーロットは、多くの子女を生み給ひしも或は薨じ、或は他に嫁し、年少なる皇嗣の候補者は極めて尠なかりき。加之幾多の星霜を積みし大陸戰爭（拿破崙との戰）と、國王自から裁可せし皇族結婚法案とは皇子の成年に達せざる間は結婚するを得ざらしめしを以て、當時皇統を

繼承すべき人は、ウヱールス公第一ジョーヂ親王(攝政)其次に繼ぐべきは第一ジョーヂの一人娘にして白耳義王レオポルドに結婚せしチヤーロツト其人なりき。併し意外にも千八百十七年の冬チヤーロツトが永眠せる胎兒を其玉腕に抱きしや、朝野駭然として皇統を繼承すべき年少の皇子皇女なきに心を注ぎ、皇子の婚を求むるもの引きもきらず、クラレンス公カンブリッヂ公及びケント公は靡然として各々三人の皇女に結婚し就中ケント公は其兄弟に先鞭を着け、實は數月以前獨乙に於て結婚し、當時單に其結婚の效果を適法ならしめんが爲めに、英國に於て表面上の儀式を擧げたり。

按ずるに當時の朝廷は驕奢淫靡の濁風に染み、總て此等の皇子は常に放肆なる生涯を送りしを以て、任意に兒女を設くると頗る疑はしきが如きも、併しケント公は嶄然滿朝皇子中に立ちて異彩を放ち、少しく人望の點に於て缺くる處ありしと雖、其性行廉誠にして道德心に富み、生きて兩親の寵兒に非りしを以て幸に阿媚放縱なる惡風に浸染せざりき。蓋し公の思想は寧ろ自由派に傾くが故に皇室内の人望なかりしにして。次に彼の嗜好は大陸的なり。是れ非島國根性に對して慊焉たる英國民に人望なき所以なりき。さればにや放肆なる當代の風潮は、寧ろ公の兄弟に當る諸親王の華麗虛飾なる所謂當世風を愛し、國王の父としての公を悦ばざるの有樣なりき。



時は維れ千八百十九年五月廿四日、ケンシングトン公園にて其名も高き栗の樹が今を盛りに雪かと見紛うばかりの花を吹散らせし時、倫敦ケンシングトン殿裏古き和蘭風の赤煉瓦の家に於て、獨乙皇族の所謂皐月花と呼べる愛らしき少女は生れぬ。嗚呼此誕生を祝ふは英國歷史の内に於て最も長期にして最も偉大繁盛顯著なる御代を祝ふなり。此赤兒の碧眼が初めて此世の光を見し時や、實に平和の大攪亂者たる那翁が、過去に於て全歐洲を漂蕩せし血の海を回想して幽けき生涯を送

りつゝある時なりき。殆んど他の後援なくして終に彼を挫き孤島に捕虜として繫ぎしは、即ち彼女を生みし英國なり。併し永年打續きし戰爭の避くべからざる反動として國內不幸多く、税は高く、食料は騰貴し商業は沈滯せり。此時に當り上に老呆盲目猖狂の聞え高き國王と、放蕩無賴なる攝政を戴くに於ては、奚んぞ目醒しき施政を看るを得んや。

偖赤兒の名稱に就き父はエリサベスの名を冠せんとを望みしも、名け親の攝政は僧官にアレキサンドリアの名を冠せしめんことを命ぜり。於是父はジエオルジーアの名を追加せんとを奏せしも、かくては攝政及國王の名を第二位に置く嫌ひあるに因り、遂にアレキサンドリアヴイクトリアと決定し、又幼名をドリナ內親王と呼び奉ることとなれり。

其年の冬、內親王は父母に抱かれて寒さをシッドマウスに避けぬ。一日父は散歩の途中暴風雨に遭遇し、爲めに熱病を得、千八百二十年一月を最期として僅かに六ケ月の幼兒を哀れなる寡婦に一任して果敢なく此世を去りぬ。時に寡婦の弟レオポルド親王は蒼惶として來り會し、公爵夫人は宜しく英國に止まるべく其少女には暫らく英國的敎育を授け、英國皇位の素養を今より修めしむべしと忠告せしを以て、死後二日を隔てゝ母子共に倫敦に向て出發せり。此時シッドマウスの群衆に訣別を告ぐる爲め、馬車の窓にさし擧げられたる赤子は全く父の訃を知れる樣もなく、樂しげに笑ひ、折々紅葉に似たる掌を擧げて窓玻璃を敲く有樣、いぢらしくも又痛はしかりき。

此公爵夫人は能く宮廷內の腐敗を看破せるを以て、一方に於ては其娘の爲め、其寡婦生活の爲め、他の一方に於ては一家經濟の爲め、宮廷內の華美なる交際を成るべく避けぬ。噫公爵夫人は實に哀れなる境遇に在り。彼女は其娘一人の爲めに獨乙の家門を見捨てぬ。蒼波道遠し思を東海千里の雲に寄す。身は萬里の他鄉に在りて其操つれる國語さへ了解するに苦しみ、白屋苦深きケンシングトン宮殿に寂しき生涯を暮らし給ひぬ。淚に沈む母の顏容に無心の赤子が微笑める顏のコント

ラストは何人と雖、斷腸せざるを得んや。こゝケンシングトンにさしたる變化もなく、極めて單調なる生涯は續けられたりき。後年ヴイクトリア女皇自身に曰へる言に妾の小兒時代は極めて寂しく陰氣なりきと。以て其生活の有樣を想像するに足るべし。蓋し質素と整頓は女皇家庭の特色なりければなり。爰に諸般の學問を屋外の運動を獎勵せれら、佛蘭西語、伊太利語、拉典語、希臘語、數學、音樂及繪畫は其修得せし重なる學科にして、就中音樂と繪畫は最も女皇の得意とする所なりき。蓋し女皇は繪畫及音樂の能手にして今日まで美術を研璣して已まず。人と爲り他を憐むの情強く、周意周到の經濟と現金仕拂の風は其特色なり。彼女は先づ爲しつゝある仕事を片附けて而して後其他諸般の仕事に移るべしと云ふ主義の薫陶を受け、此主義を逸樂にも適用せり。故に誇張の華美虛飾が親王の本領を誤認せられたる時代に於て、ヴイクトリア內親王の行動は殊に異彩を放ち、嶄然として鷄群一鶴の觀ありき。宜べなる哉國民は刮目して女皇の將來を想見せしや。



假令最も周到なる薫陶を加ふと雖、小兒を天使の如く育てあげるは頗る至難の業なり。蓋しヴイクトリア內親王の缺點は彼女の生涯を通じて種々變化したる形にて殘れり。即ち彼女は感激的なり。時として頗る氣儘にして極めて猛烈なり。併し愛情濃く頭腦能く訓練せられたるが故に巧に之を利用して以上の缺點を補ふことを得たりき。

千八百卅年、維廉四世王位に昇り、ヴイクトリアの幸運は漸々拓けかゝりしを以て、彼女が折々朝野の交際場裡に見らるゝと必要となれりと雖、母は女皇をして成るべく之を避けしめ寧ろ隱遁的生活を營ましめたり。

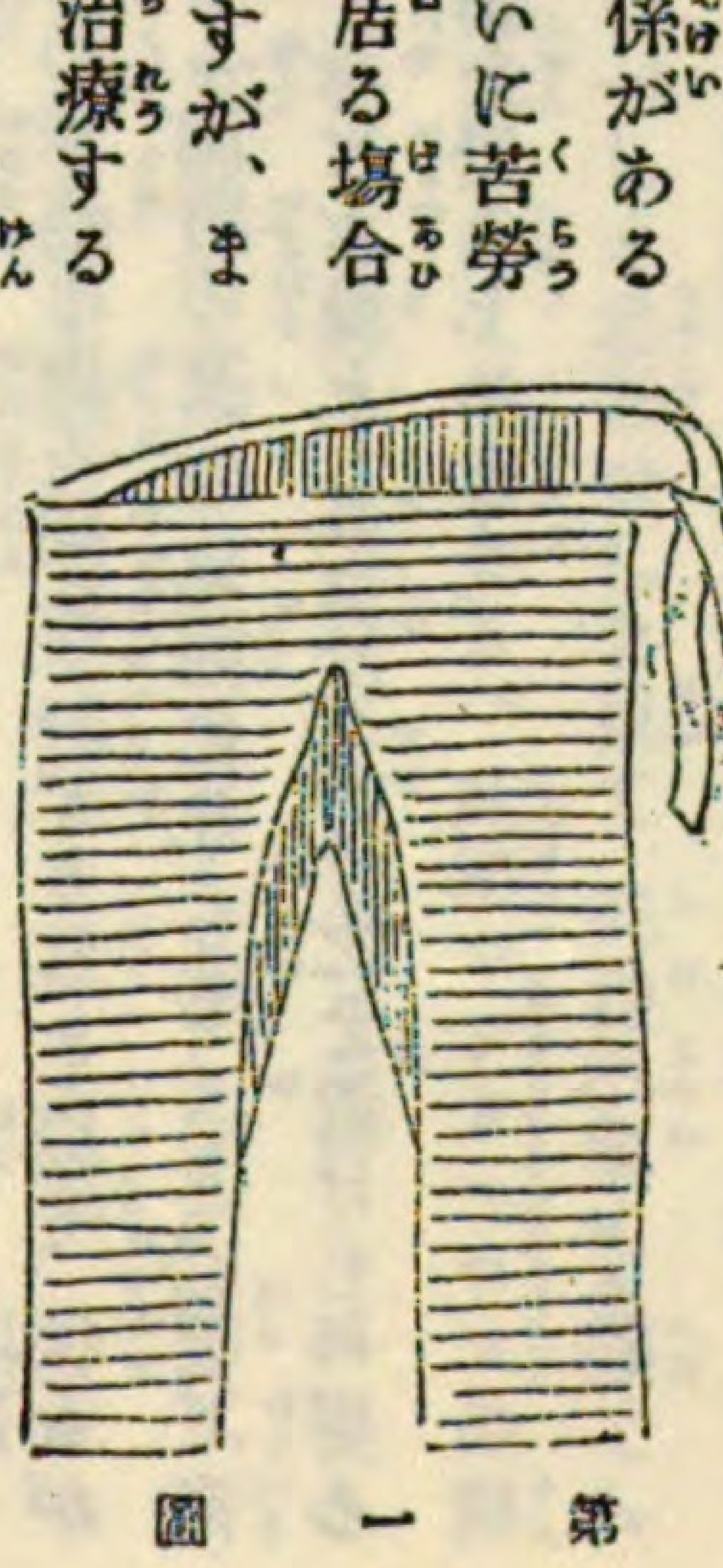
（つゞき）

女子校服の改良案

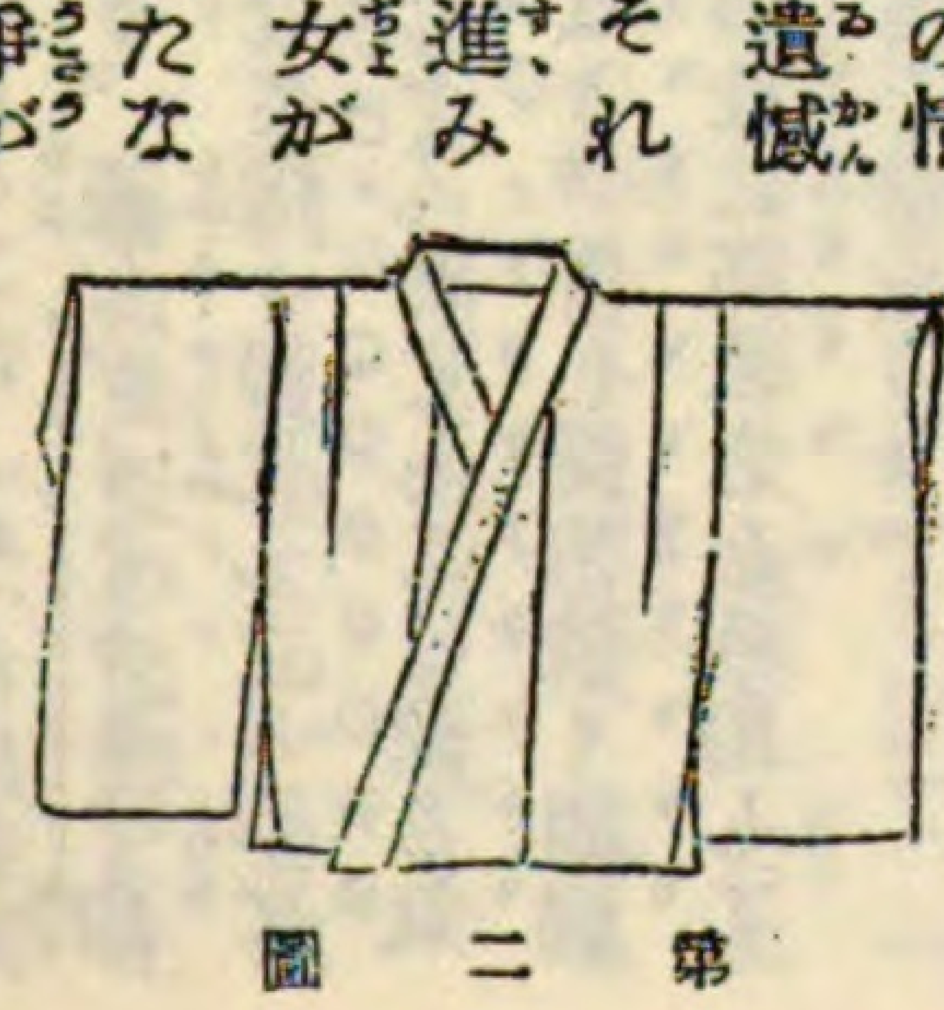
醫學博士　弘田長君談

現今我邦の敎育社會では、男女を問はず、躰育といふことに、大變議論が高まつて、いづれの敎育家も其點に就ては、大變苦心して居ることでありますが、就中女子の躰育に就ては、其事を論ずるのみで、其方法を實行するといふことには、未だ充分に達して居らないと考ひます、然るに、男子の躰育の方法に就きては、まだ隆盛といふに至らぬにしても、種々の方法を輸入し、或は古來の法を採用して、兎に角盛んに其方法に依て、奬勵して居りますからして、今日我邦に於ては、先づ男子の躰育の法は、大いに進みつゝある時期であらうと考へますから、私はその點については、今回は述べる積りでありませぬが、女子の躰育については、遺憾に堪えぬ情況でありますから、大いに此事に就きましては、敎育家は固よりのこと、また吾々どもの如く、局外ではありましても、衛生に關係の有る者は、世の人に向て實行を促がさなければならぬ。

元來私は小兒醫者でありますからして、學校の生徒の健康に就ては、直接に關係がある故に、大いに苦勞いたして居る場合でありますが、また小兒を治療するに當りまして、現今府下の中等以上の母たる人の情況を見まするに、頗る自分は遺憾に存じて居るのであります、それで我帝國の文明は、日に月に進みつゝあります故に、只今の少女が他日母となる時代となりましたならば、今日よりも一層生存競爭が盛んに爲るであらうと思ひます、果して左樣でありますれば、今日の母たる人よりも一層身躰が健康で、能く

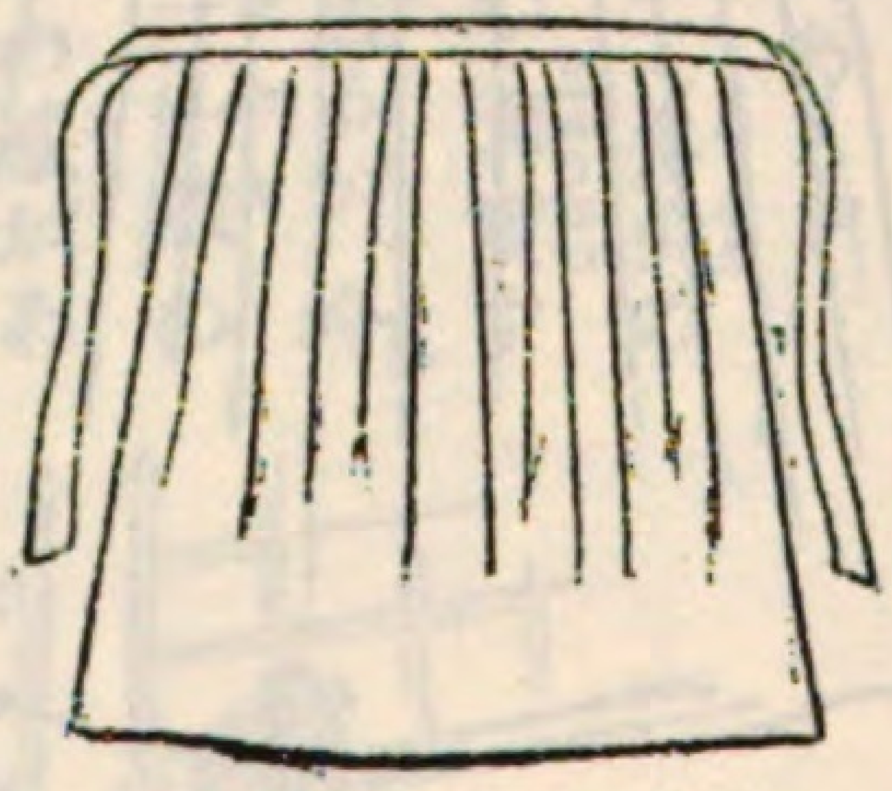


第一圖



第二圖

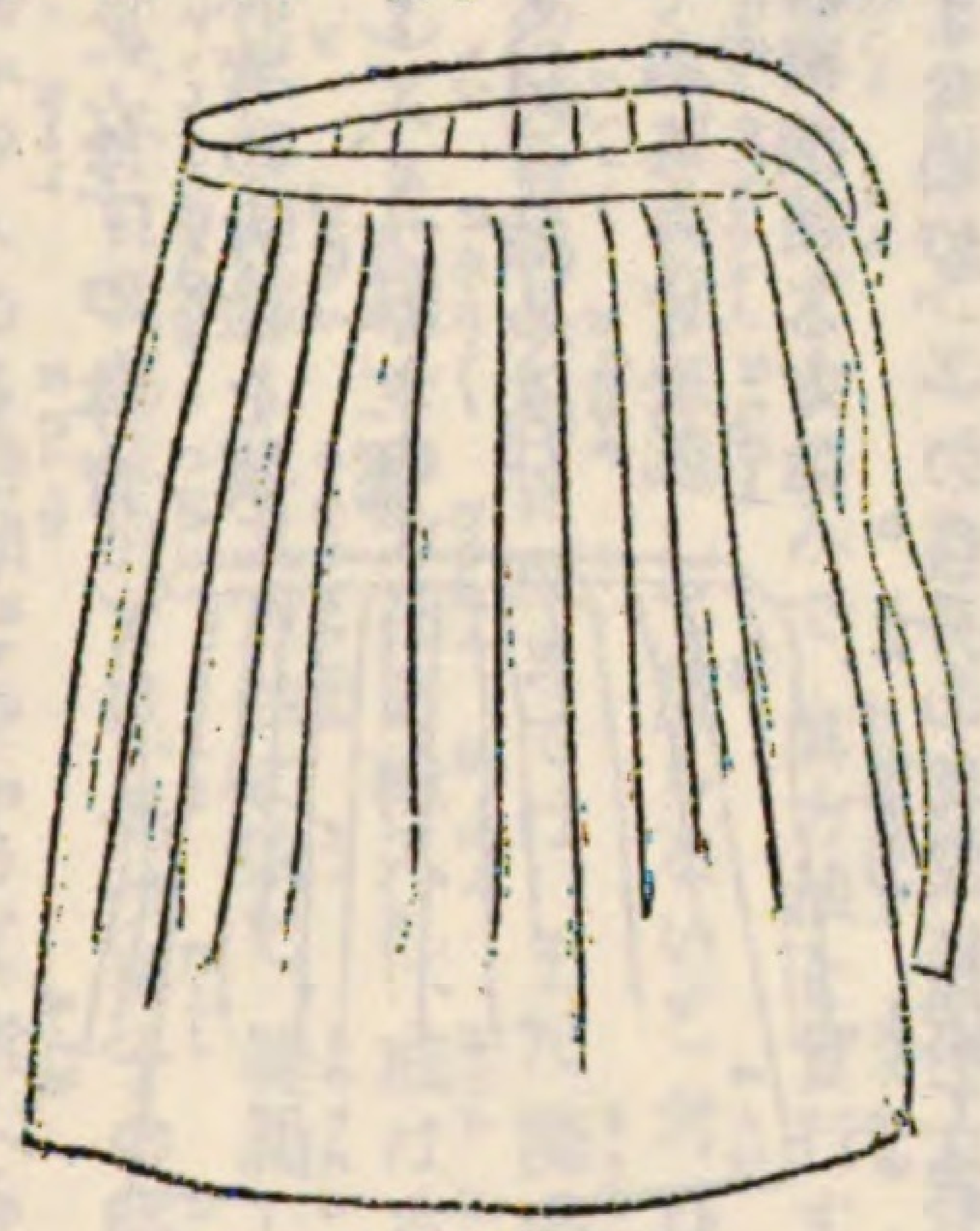
その競爭に打勝つて行くといふ身躰でなければならぬのである。
然るに、今日は最も女子の躰育法に就て、前述の如く大切なる時でありながら、丸で皆無とも申して宜しいやうな譯でありますからして、益女子の身躰は孱弱に爲るとも强壯に爲るやうな望を甚た失つて居ります次第で、今日は大いに女子の躰育法を論じ、その躰育の方法を實行するに就きまして、大いに奮勵して、大決斷を以て始めなければならぬ時機であらうと考へます、故に私は甚だ拙なる方法であるかも知れませぬが、一の自分の考案に依て衣服を作りました、そうしてそれを學校服として、世の中に實行せられんことを、希望致して居るのであります。
小女の躰育を論ずるに當つて、先づ第一に着手すべきものは、小女服改良であらうと思ひます、今日のまゝの服裝にては、躰育の事を如何に論じましても、到底其說を實行することは、難からうと思ひます、それで其實行するといふことになれば、先づ以て服を改正しなければならぬ、其改正をするには、小數の人に行はるゝ所の改正服よりも、成るべく廣く用ひられ得る所の改正服でなければならぬと考へます、故に私の考に依て作りましたのは、その點に最も重きを置きました、其れで或る方面の人には到底滿足を與へぬことであらうと考へます。


第三圖


第四圖

其改良服は第一に其衣と裳とを分けまして、上下と致しました服である、その上に爲ります方は、通常現今の女子が着用致して居る服を、其まゝに股の中央の所から裁りましたので、恰も襦袢の長さと認めて畧ぼ差支なからう、（第三圖參照）それから女下衣の所に當るものは、男子の猿股に

少しく長いもので、其れが大凡脛から少しく下の所まで延びて居るのであります、(第一圖參照)若し夏でありますれば、その上に薄い二重の一種の襠無しの袴を着けまして、(第三圖參照)更らに其上に、現今の學校通ひの女子が用ひて居ります如き、袴を着用するやうな譯になつて居る只現今の袴と異なつて居る所は左右の切れ目を廢しまして、右の方の切れ目は全く閉ぢて仕舞ひ、左の方の切れ目は着用の後に、男子が股衣の前の鈕鉦を鎖づるが如く、鈕鉦を以て鎖づる様に致しました、(第四圖甲乙參照)さうして袴の紐を、現今の女子の着用して居ります袴の紐よりも、長くして、左で結んで長く垂らすやうなことに致してあるのであります、それで若し冬にでも參りました場合でありますならば、此第一の袴と、第二の袴は裏股に致した方が宜しいと思ふのであります、又は第二の袷袴と、それから猿股に當るものはフランネルを用ひても宜しからうと思ひます、足に穿きますものは、靴にするのが最も希望でありますけれども、或は日本の在來の履物に致しても、差支ないと考へるのであります。



第五圖

結婚雜談

淺田空花

三　夫の年齡

◉女子が其夫を撰ぶに當つて、先づ第一に問ふ處のものは其年齡である、品性、才學、技能、血統、財產、職業いろ〳〵聞訂すべき必要條件もあるが、普通一般に先づ其年齡に重きを置て居る。

◉結婚と年齡、年齡の應否が、結婚の幸、不幸に多大の關係を有して居ることは即はち云ふまでもない、然ら

ば、夫を撰むべき者の、最も適當なる年齢は概して幾才より幾才までといふか。

◉女子が女子としての發育期は、十四歳、乃至十五歳を以て初まると同じく、男子が男子としての發育期も、略ぼこれと同時期に於て初まるのである、女子が月のもの見しと直に結婚すべからざるが如く、男子にも相當の成熟期を與ふべきは無論である。

◉風土、氣候、生活の狀態等に依て多少の差違はあるも、先づ男子が體軀の充實する時を、丁年——二十歳として居るが、今日の社會の狀態からいふも、二十歳の夫はまだ〳〵、餘りに若過ぐるの感があるやうに見ゆ。

◉若か過るのみならず、丁年前後より男子の發育は女子が急速の發育に比して頗る遲鈍となり而して早婚の害を受くるに至つては女子よりも遙かに急劇なるが上に、恰かも男子はこの前後より、學問に志すものは學問に熱中し、商業に從事するものは商業に精力を集注し、一身を立て、一家を爲すべき最も大切なる準備の時代若くは基礎を定むべき時代に入るものなるを以て、概して未だ夫となるべき資格を有して居らぬのである。



◉餘りに年若き妻が、結婚に依りて幸福を見出す能はず、却て苦痛とするの事實が普通なる如く、餘りに年若かき夫の結婚は決して幸福なるものであるといへぬ。

◉既に女子が完全なる發育を遂げ、結婚の天分を盡すに足るべき、最も適當なる年齢を二十歳以上、二十五歳までとすれば、其者の夫たるべき者の年齢も略ぼ推斷する事が出來るであろう。

◉故に明白にいつて見れば、二十歳乃至二十五歳の最とも妙齢の女子に適當なる配合は二十三歳より三十三歳迄の男子でなくてはいかぬ。

◉二十三歳未滿の夫は概して健全なる子女を擧るに適せぬ、夫自身早婚の爲めに健康を害するに非らずむば、

其子女の孱弱、不具の爲めに困されて忽ち結婚の幸福を破壞されて仕舞が通例である。

◉少年に妻、小兒に鳥を與へよ、死の手は直に其門を叩べし、といふのは獨逸の古い諺である、大古の哲學者アリストートルの如きも、夙に青年の早婚を戒て、諸種の病因となり、其子女の決して完全ならざる旨を説破して居る。

◉三十三歳より五十歳に至るの間、生理上の原則を守り攝生に怠たらずんば、概して男子は年の重荷を感ぜぬものであるが、而も既に其壯健の絶頂期は過ぎ去つた者で、この期以後の結婚は徒らに其凋衰の期を早むる許りである、而して多くは賴とすべき正當の保護者——子孫なく若き妻を殘して世を逝つて仕舞ふ、五十の坂をも超れば、假令自から壯健を覺ゆるとも、人間の精力には自から限りあり、古りたる器の如く或る障害に遭へば容易に破はされる、この年齢を以て結婚せる者は概して子がないか、左もなくば一人或は二人の病心者と



得るに止まるのみである。

◉多くの老人が結婚によりて其生命を短縮した例は幾らもある、醫師の記録には、結婚の其當夜に於て忽然世を去つた例も尠からず存じて居るのである。

◉夫妻間年齢の關係に就ては、妻は夫より常に年少なるべきは自然の方則で、女子が身心の發育男子よりも急速なる點よりいふも無論夫たるべきもの丶年齢は自分より年長者たるべき筈のものである。

◉女子をして常に、自分よりも年長の夫を撰ましめよ、彼によりて初めて幸福なるべく、女子の心斯して初めて男子に平均すべしとは、千古の格言である。

◉世の中には隨分物數奇な女もある者と見えて自分よりも遙かに年少の男子に嫁するものも尠くない云ふまでもなく是れは不自然千萬で、決して幸福なる結果を得べきものではない。

◉男子が愈よ壯年期に達したる頃には、女子は既に青

春妙齡の期を過ぎて、一年は一年、年を經る毎で相互の年齢、思想に差違を生して來る、この差違の爲めに嫌惡の情となり、果ては他に適當なる配偶を求むる如き事情となり、蒔きたるものは刈らざる可からざる不幸なる閨門の破綻を生するが世間の一般である。

◎日耳曼聯邦の一なりしウーテンバークグ王國に於ては從今七十餘年前に於て、之れに對する法律を制定し止を得ざる事由あるもの、外は、十二年以下の男子と結婚するを得ずと、明らかに制限した事もある。

◎總じて女子は四十五歲以後に至れば、子女を設くるの望は莫くなるものである、故に同年以後の結婚は正確なる意味よりいへば結婚に非ずして單に友情を以て成立するものと云つてもよい、父母にあらずして兄弟、夫婦に非らずして特別の親交を有する友人の間柄である。

◎夫妻間年齢の適不適は叉他に不思議なる現象を呈して居る、即ち夫よりも妻の著るしく年長なる時、妻が夫よりも遙かに年長なる場合、兩者の相違に依つて、其子の男女孰なるかを出生前概して判斷する事が出來るが、これに付ては更らに稿を更めて話す事とせう。

◎妙齡の處女と老年の男子の緣組の恐るゝ事に就ては言ふまでも無らう、歐米諸國は言ふに及ばず、我日本に於てもこの種の家庭が圓滿にいつた例は殆むどない。

◎古き革袋に新しき酒を盛る、破裂に了らざるものは殆むど稀である、破裂せざる迄も、之を破綻せしめざらしむるの勞苦は一通でない、了りまで忠實に之を修覆し、覺束なく天命を保持し得るとするも、世間は之を德として更に新しき革袋を以て之れに酬ひやうとはせぬ。

◎妙齡花の時代を、斯して老者に仕ふに勞苦の爲めに失ふて仕舞ひ、若寡婦として泣く／＼世の暗黑面を辿つて居る女子も世には尠くないのである、斯の如き女子の一生ほど悲慘なるものはない。

◎再び繰返さしめよ、夫たるべきものは常に年長者たるべし、而も其間の相違は決して十歲より多くを超ゆべからず、斯して初めて適當なる家庭を作ることが出

來るのである。

朝鮮婦人

木村睡虎

世に朝鮮の事情を紹介せる書類は乏しからず、而かも專ら朝鮮婦人に就て其風俗習慣性行等に關し其實際を紹介せるものなし、余や久しく朝鮮內地に在り朝鮮人の敎育事業に從事したりしが曾て窃かに以爲、凡そ未開人を導くには女子敎育より先なるはなしと、是に於て種々考究して其端緖を得んと勉めしが元來此國は彼の男女七歲にして席を同ふせすその敎を頑守し七八歲の幼兒と雖も女兒は一切男子に接せしめず、況んや外國人に於てをや、將た況んや余が如き獨身者に於てをや、是に於て余又以爲、吾れ獨身なることそ幸ひなれ先づ朝鮮婦人を娶りて妻となし之れを充分敎育して女敎師を作らんにはと、而して遂に之を斷行せり、而して其目的は見事失敗に終れり、即ち余が當初の目的は失敗に歸し、妻は破鏡の嘆に終りしと雖ども、而かも之れが爲め余は朝鮮通の多く知らざる實驗を齎し得たり、則ち從來世に暗黑秘密とせられたる朝鮮婦人の如何なるものなるかを會得し、且つ諸種の材料を收め得たり、爰に於て余は今余が實驗し得たる所によりて聊か朝鮮婦人を本國の女子諸君に紹介せんと欲す、蓋し亦た以て他山の石となるべきものならん。

（一）その敎育

朝鮮の女子は全く無敎育なり、彼の妓生等を除きては殆んど彼の國のいろはとも云ふべき諺文すらも知るもの稀れなり。否な寧ろ之を知るを以て却て耻とせり、何となれば諺文を知れるは曾て妓生たりしを證すべければなり。尤も極めて上流の貴族社會に於ては婦人にして稀れに詩文を能くするものありと云ふ。蓋し無敎育なるも無理ならず、何となれば之れが敎育の機關なければなり。若し夫れ男兒に至つては村落到る處に村夫子の私塾を開けるあり。都會地には公立小學校の設

けあり、就て多少の敎育を受くるの便ありと雖ども、獨り女子に至りては、至親を除くの外は一切男子に接するを得ず、又輕々しく室外に出るを得ず、故に假令學問の志ありと雖ども敎育を受ることは頗る困難なるのみならず、且つ一般社會が女子の敎育を以て寧ろ無用とせるがごとし、唯近來京城に一の女學校の設立せせらるゝあり、人口一千萬餘を有する堂々たる獨立の國にして、將た曾て文學技術を我が日本に紹介したる舊邦古國にして、女子敎育の機關只だ此一つある而已ならず又其在學せるものの數も僅々五六十名に過ぎずとは眞に憐れむべき限りといふべし、余は頃日歸朝の途次豊前小倉に立寄り、市中を散策して圖らず高等小學校の前に至り、一群の女生徒が襷掛にて躰操せるを見、彼の國の憐れむべき有樣を思合せて轉た感涙に堪へざりき、嗚呼本國の女子諸君、韓國五百萬の婦女は學問の何たることを夢にだも解せるものなきなり、彼等は全くの無敎育なり、故に道理の何ものたることを解するの能力なし、此文盲なる女子にして人の妻となり母となる、焉んぞ能く賢良淑德の子女を得べけんや、一國を擧て蠢爾たる愚夫愚婦を以て充たす亦た怪しむに足らざるなり。

（二）妓生學校

余が久しく住みたりし平壤は廿七八年戰役に於て大戰ありし有名の地にして平安南道觀察府の在る所、箕子が封ぜられし二千年前の舊都にして今も京城に亞ぐの大都會たり、我が國にて云はゞ京都とも稱すべき土地なるが、我が京都が美人の本場と稱せらるゝと同く平壤も亦た彼國に於ける美人の本場にして亦妓生の巢窟と稱せらるゝ處なり。扨此處には公立小家校二三ヶ所ありて不完全ながらも日本小學校の課程に摸して讀書算術、習字、地理、歴史抔授け居れるが、是皆男生にして女生徒は一人もあらざるなり、又其内にて最も盛んなる學校にて在籍生徒三十名あれど出席生は十數名に過ぎざるなり、然るに之れに反して盛大なるは彼の妓生學校なり、妓生學校とは即ち妓生を養成する爲め歌舞を敎授する所にして此學校に生徒として通ふ者一校各

百餘名あり、彼の公立小學校は無月謝なるにも拘はらず生徒の數僅かに三十名に充たざるに、妓生學校は多くの月謝を貪りて猶ほ且つ此盛大を見る、余等は屢々之に向つて奇異の感を催ふしたりき。而して何が故に妓生學校は斯くも盛んなるか曰く他なし下等社會に於ける婦女の最大出世は官妓となるに在り、元來此國は官尊民卑の風最も甚だしきが故に平民にして郡守觀察使等に直接面會して談話するが如きは到底出來ざる事にして恰も我が國舊時の大名が百姓町人に於けるが如し、然るに獨り此官妓に至ては觀察府郡衙等に出入し得る事自由にして朝夕高官に馴れ親しみ、一たび其寵を得るに於ては三寸の紅舌を以て郡守觀察使の心を左右し得るに至る、左れば若し妓生にして其親戚故舊者中、官に願ひの筋あるか將た訴訟事等ある場合には賄賂を用ゐずして容易に其目的を達し得べきなり、而して尙ほ運よく宮中に仕へて國王の寵に與らんか所謂玉の輿に乘るの身分となる敢て難きにあらず、左れば此妓生なる者は常に美衣を着け珠玉を飾り、出るには必らず腰輿に乘じ傲然として四民に誇る、彼の人つ妻となりて一室內に閉ち込められ終歲天日を見るの機なき不自由の境涯に投ぜんよりは、寧ろ妓生となりて世に誇るの勝れるに如かず、妓生學校の盛なる亦た不思議とするに足らざるを知らん、讀者よ、諸君若し一たび平壤に遊び、大同門を入りて狹隘且つ汚穢なる街衢を縱橫瞥見せんか、家屋に不相當なる美衣を纏ひ、髮を二つに分けて後ろに結び、額を四角に拔き上げ、顏に紅粉を施したる最と愛らしき十一二歲の童女が三々五々徘徊せるを見ん、是れぞ所謂未來の官妓にして妓生學校の生徒なり、此愛らしき童女は、女の操の何ものたるを知らず、只だ玉輿に乘り珠玉を纏ひて殿中に逍徉する未來の好運を夢みるのみ、而かも其榮華は十五六歲より廿一二に至る僅か四五年の間のみ、廿一二を過ぎれば最早妓生たるの資格なく、漢語の所謂「カルボ」と稱する下等淫賣者に投ずるの外なきなり、如何に風俗の腐敗せる朝鮮なればとて、一たび妓生たりしものを正妻とするものはあらざるなり、余が妻たりし婦人も

亦た嘗て妓生たらんと欲して十歳より十三歳まで妓生學校に入り、多くの費用を投じたりしが、軈て妓群に投ぜんとするに際し、恰も日清戰爭に會し、世は刈菰と亂れにければ、其目的を達するの機會を失し、遂に人の妻とはなりしなり、而かも彼れの父母及び彼れ自身は之を以て終生の憾みとせり、何となれば、妓群に投じて四五年も稼げば千二千の金を得る敢て難きにあらざるに、人の妻として賚りたる代金は僅かに百圓に充たざりければなり、

（三）人身の賣買

人身の賣買と云ふことは我が國に於ても嘗て行はれ、娼妓の自由廢業抔云ふ騷ぎもありしと聞きしが、朝鮮に於ける人身の賣買は一種風變りにして日本に行はれたりしが如き藝娼妓とせんが爲めにあらず、人の妻とせんが爲めなり、上流社會を除き、中以下の社會に於て妻を迎へんとするには、必らずや若干の金ヶ投じて之を買はざる可らず、而して其價の高下は其の婦人の容貌の醜美よりは寧ろその年齡の多少に因れり、即ち年齡の少き程其の價も亦た高く年を取るに隨ひ又婚を累ぬるに從ひ、價は漸次下るなり、此國に於ては一般に早婚行はれ男兒にして、十一二歳に至れば必らず妻を定めて、許婚を爲す、而して其妻たる者は概して夫よりは二三若しくは四五の年上なるを常とせり、左れば女兒にして十二三歳以上にして許婚若しくは既婚者ならざるはなく、十五六歳にして早や寡婦となるものなきにあらず、日本にて嫁盛りと稱する、十七八歳の女子にして初婚者たるものは殆んど稀なり、左れば女兒にして十二三歳の初婚者なれば其價概ね二百圓乃至三百圓を要す、余の如き最初十一二歳の女少を養ふて教育せんと欲し朝鮮人の知れる者に賴み置きしに一人の少女あり、年齡十二、容顏花の如く且つ才智あり以て貴下の望に適すべしと其價を問へば則ち曰く。二百圓と是れ妻とするにあらず、養女とするなり而かも猶二百圓を投ずるにあらざれば得る能はず、而して女子にして十七八歳ともなれば最早婚期を過ぎたる者にして百圓乃至五十圓にて買受くるを得べし、左れば、婦人は幾歲

になりても無代價にては娶る能はず、余が下人に四十歳ばかりの男あり、彼れ此頃妻を迎へたり、年齢三十有六、病身にして一見幽靈の如く而かも二人の連子あり是れすら猶ほ代價七圓を投じたりと云へり、偖て一旦買取りたる以上は、其妻の父母等に對しては何等の義務なきかと云ふに然らず、父母等は其賣りて得たる金の有る間は之れにて暮せど其金の盡きるや直ちに聟の家に來りて座食するを常とす、聟たる者亦た其妻の父母を養ふを以て名譽とはせるなり、故に朝鮮にては男兒を生めば之れに妻を買ひ與ふるの損ありと雖ども女子を生めば一の財産を生み出したるに同じ、實に奇怪の風習にして人倫の何たる

妓生の正裝



を解せざるに似たり、左れど之れが爲め離婚は寡きが如し、何となれば、妻にして自から離婚せんとせば身の代金を償却せざる可らず、夫にして妻を離別する場合には妻の身の代金は出し損となる、何れにしても損失なるが故に容易に離婚せざるなり、而して貧窮者に至りては妻を買ふの資金を得ざるが故に終生獨身を以て終る者も亦た尠なからず、男子にして未婚者は加冠する能はず、幾歳になりても總角と稱し、一人並に伍する能はざるなり、余が知れる韓人に二人の娘を有せる者ありき、長女は既に他に賣りて一人の子供あり、次女は十二歳ばかりなりけるが其次女も亦た若干の價にて他に賣拂ひしが彼れは窃

かに二人の娘と語合ひ子までなしたる娘までも引きさらひて遁走し遁走先にて再び之を他に賣却し又若干の金を得たりと云へり、子女を賣るの事既に奇、而して猶ほ之を奪去りて二重販賣を行ふに至りては言語同斷の次第ならずや、朝鮮人の言ふ所によれば此國にても以前は娘を賣る抔と云ふ惡風なかりしも、國風漸く衰へて道德地を拂ふに至りて斯る習俗となりしとぞ。

(四)婚姻の儀式

妻を娶るに金錢を以て買ふ以上は牛馬と異ならざるが故に婚姻の儀式抔あるべくも思れざれど實際に於ては決して然らずして隨分繁雜の作法あり、繁雜猶ほ忍ぶべしと雖ども之れが爲めに莫大の費用を要し上流社會に至ては數千圓を擲つものあり、以下身分相應に多くの費用を要するを以て妻を娶るが爲め身代を傾くるの類其例敢て乏しからざるが如し、余の如きは一切日本風なりと稱し極めて失費寡く且つ簡略の方法にて押通したりと雖ども、其父母親戚故舊等は頗る不平を唱へて止まざりき、總て此國の風習として冠婚葬祭とも悉く虛禮虛儀に流れて無用の時間と無用の費用を投ぜざるはなき也、

(未完)

愛と嫉妬

上村左川

嫉妬心なるものを廣義に解せば、必らずしも愛より起因する怨嗟の情に非ず、人の能を猜み人の榮を羨み、汎て他者の美を爲すを忌むの念亦皆之を嫉妬と定義し得べし、是等猜忌の念は愛情より起る嫉妬心とは其性質を異にせる者あり、尤愛情より起るものにも種々あり、親子同胞の間若しくは朋友の間にも往々にして此種の嫉妬心の發作を見ざるに非ず、然れども吾人が茲に論ぜんとすれば、如上の意義に於ける情緒に非ずして、男女間に於ける戀愛の反映として來り所謂客氣なるものを指す、由來東洋流の倫理に於ては、此嫉妬心は婦德の大なる缺陷たりき、女大學の『七去』の中には此性格を以て其一に數へぬ、即ち嫉妬心あるは、婦女の

人格として下劣に、最も耻づべき性情にして、此心深きに於ては其配偶者より離別を敢てするも頗ぶる至當の理由として承認せられぬ、されば婦にして若し根本的嫉妬の情を有せざりし場合は、即ち婦德の或一義に於て圓滿なる資格たるを得たり、然れども斯の如き標準は果して人間倫理の眞意義を得たるものと云ふを得べきか、嫉妬の情を以て不德といふべくば何が故に不德なるか吾人を以て觀れば男女間に於ける嫉妬の情は、最も清純なる人情の根基より來る者にして、之有るとの獨り人格を下ぐるのみならず、本來此情を有せずといふ者あらば寧ろ之を以て缺陷を有する者となさん、夫れ嫉妬は純愛の反映なり、嫉妬の情無き所に其處に愛情なく、愛情の行く所則ち嫉妬之に伴なふ、熱愛は我愛人として我の外或他の人を愛せしむるを寬容せんにはあまりに狹量なり、嫉妬心の大小は其人の愛情の深淺と正比例す、省言すれば愛情即嫉妬なり、此故に輕薄の愛は勢輕薄の嫉妬を生じ、濃厚の愛は勢ひ濃厚の嫉妬を生まざる能はず、されば此情を殺さんと欲せば寧ろ始めより愛情を殺すに如かず、如何となれば愛情の火なき所に嫉妬の炎有るべきの理なければなり、勿論嫉妬するものは單獨に發作する情緒に非ず、愛情の損辱に對する正當なる憤懣に外ならず、我愛人の我に愛を專らにせざること嫉妬の起る唯一の條件たり、若我愛人にして我に愛を專にせば嫉妬の波は終に其痕を現はさず、愛の懐はさなから浩蕩なる春の海の如けんのみ、從來嫉妬心なるものを强ちに不德としたるは、即ち我愛人をして他者を愛せしむるを寬容せよといふに同じ、是戀愛の眞趣を無視し清純溫藹なるべき男女間をして却つて乾燥無味に歸せしめんと欲するのみ、殊に婦女の妬心をのみ責めて其源泉たるべき行爲を寬假せるは奇なり、婦人の嫉妬が惡德ならば、之を制せんには其源泉たるべき男子の行爲に重き制止をなすことの寧ろ捷徑たるを見ずや。



由來支那流の倫理は男女間に於ける愛の眞義を甚だ輕卒に解義したるの觀あり、夫婦を形成する上にも戀愛を無視して殆んど機械的に兩性を結合して義務的に其道なるものを行はしめんとするものゝ如し、勿論夫婦の相愛は之を推奬したるには相違なしと雖、そは其愛たる婚後に於て生せざる可らず、即ち夫は其婦たるものを愛せよ、婦は其夫たるものに從順なれといふに在りて、戀愛の自然とは較意義を異にせり、略言すれば愛して婚せよに非ずして婚して愛せよなり、情交の投否は殆んど偶然に俟たざるべからず、而して婦なる者に向つては唯其妬心を悪み、殆んど妬心なるものは婦が一樣に其夫に對して先天的に有せる悪徳なるかの如くに見做せり、是愛情を無視したるより起る、元來嫉妬は……吾人をして再説せしめよ……單獨の性情に非ずして愛慕の反映なるが故に愛に伴なうて生滅す、愛の在らざる所何人も嫉妬の情を生ずることなし、嫉妬心の有無若くは深淺は其人の固有性よりも寧ろ多く其境遇に原因す



玆に一樣の資性を有する二婦ありとせよ、甲は心中些の愛慕の意なき人に嫁したるが故に夫に如何なる行爲あるも更に嫉妬の心の生ずることなく、乙は眞に愛慕せる人に嫁したるが爲めに、夫の愛を濫にしたる際に嫉妬の情ありといふが如きは、人情の自然に於て往々に起り得べきの事たり此場合に於て東洋流倫理の標準に照せば、前者は少くも婦徳の或一義に於ては圓滿なる人たるを得るも、後者は之に反せるものとならん、是人情を無視したる制裁に非ずして何ぞ、双方齊しき熱情（即ち他者の變心に際せば盛なる嫉妬心を生ずべき）を以て愛し、而して嫉妬心の發作を見るべき境遇無くして過ぐる夫婦あらば是最も自然たる最も圓滿なる情交といふを得べし、而して嫉妬は此間に終に其形跡を現はさずして已まんのみ、若し我同穴の友が我の外他を愛するも些の嫉妬の情無しと云はゞ、是やがて愛なきなり、斯の如く

ば假令家庭に事無しとするも是猶死水の沈靜の如きのみ、活動せる流水の風波を揚げざる平穩に非ず、其交情や乾燥枯淡到底温情の掬すべき琴瑟の交と云ふに足らず。

支那流倫理の標準より見たる夫婦の意義は、主として子孫繼續の爲めなり、「後なき」を以て不孝の大なるものと爲せるを見ても知るべし、即ち子なき場合に於ては、男子は畜妾を爲すも非倫とは思惟せられざる程なりき、殊に嫉妬を婦人の不德と認むる以上は、是れ暗に男子は多くの婦を愛するを許せるものにして、婦は之を平然默過することが美德たりき、否夫の甚だしき亂行は之を諫むるの責婦に在りしとは雖、そは愛情より起る怨訴とは無關係なる即ち嫉妬氣を離れたる或種の態度に出でざるべからず、若し怨嫉の心に出でなば是直ちに「七去」中の一資格たりき、斯の如く婦の嫉妬心には高き批難を下すにも拘らず、男子の嫉妬の情は更に制止を加へざるが如き形あるは、嫉妬の情は婦女の特性にして男子には本來之無きものと見做したるが、抑男子には嫉妬の情を寛假したるか、若し後者とせば、假りに嫉妬の情を不德のものと爲すも、猶不公平の制裁と云はざるべからず、又前者なりとせば、其人情に暗きや論を俟たず、畢竟嫉妬の情は男女の別あるべきものにあらず、兩性は戀愛を分け前するが如く又齊しく嫉妬を分け前す、唯其關係に於て從來婦は殆んど夫の奴隷にして後者は擅に前者の行動を處置し得たるが故に、其情を發すべき場合少きを得たるのみ、そは兎もあれ、嫉妬の情の愛の反映たることを見ずして、強ちに人の弱點と見做したるは自然に背きたる偏見と云はざるべからず。



嫉妬心の深淺は主として其人に對して動く愛の度に比

例すと雖も、勿論人の天性の上に此の情の濃淡なきにあらざらん、然れどもそはやがて其人に固有せる愛情の濃淡の上の問題のみ、即ち根本的に嫉妬心の薄き人あらば、是汎べての愛心の薄き人なり、自然是等の人は其親に對し其子に對し又は其同胞に對しても愛情の度は一様に薄かるべきなり。

以上は勿論嫉妬心なるものゝ性質に就いて論ぜるのみ此情の發作より來る結果の必らずしも喜ぶべきものに非るや論なし、願ふは男女間に此情の發作を誘ふべき原因たるべき行爲なからんことに在り、又愛は往々にして誤認と邪推を誘起し易し、時と場合に依り嫉妬の情を制御することも人間克己の美徳たるや疑ひを容れず、吾人は唯從來の習俗が強ちに此可憐なる純潔なる人情の發動を卑しみ、此情性其物を以て一家の平和を破るべき條件なるが如く見做せるを否む、凡そ人間の情性中男女間の愛の如く濃厚にして熱實なるはあらず、戀愛の失望は、殊に少壯に於て、往々に死を意味したり、されば、之が反映として起る嫉妬心の內攻しては無限の憂愁となり、外發しては多くの慘禍を釀しぬ、而して不倫なるは之を誘起せる行爲に在りて、嫉妬心の罪に非ざるなり、世上往々婦にして其嫉妬を犧牲にせば幸に一家事なかるを得たるも、之を抑へざりしが爲めに種々の災害を釀したる場合あるを見て、直ちに一家の平和の破壞を婦人の嫉妬心に歸せんとするは、餘りに粗雜にして淺膚の見なり、斯の如きは放火者を許して火災の責を火に歸するが如し、要するに嫉妬の情は　又は寧ろ我愛者が他者を愛せば嫉妬せんとする深き愛情は、一家の平和と夫婦の幸福の上に主要なる條件なり、夫婦の相互が斯の如き情を以て投合せば嫉妬心の結果は其間に現はるゝ場合を生ずると無かるべし、如何となれば愛に滿足せる懷は到底其愛人より他の者を愛し、又は他の者の愛を受くるの餘地なければなり、若し夫れ嫉妬心なるもの、根本的絕滅を欲せば、互ひに愛慕の意なき兩性を夫婦となすに若かず、斯の如くせば嫉妬の情は更に生ぜざるべきと同時に不倫の亂行は往々にして之れより生じ來らんの

み。

社會と家庭

日東生

社會と家庭とは、猶ほ車の双輪の如く、互に離るべからざる關係があります、家庭が善良であれば、社會も從つて善良なるべく、家庭が善良でなければ、社會も從つて善良なる能はず、善良なる家庭を基礎として造れたる社會には、善良ならざる社會なく、善良ならざる家庭を基礎として造れたる社會には、善良なる社會なし、されば、家庭は社會風紀の源泉にして、家庭の善不善は、施ひて社會の狀態に影響を及ぼすことが少くないものであります。

家庭とは何ぞや、極めて簡單に且つ平易に説明すれば、家庭とは、即ち血族關係の密切なる人々を以て、成立せられたる家族生活の範圍をいふのであります　少しく理屈ぽくいへば、「家庭」なる抽象的名稱は、その家族生活の所在を指していふ用語でありませうが、家庭は家族を以て組成せらるゝものであるから、家族たる人は家庭の主躰となりて、一個の生活範圍を形成するのであります、さて家庭の原躰たるべき家族は、いかにして發生せしか、之れは社會の狀態を歴史的に研究すれば、略ぼ知ることが出來ます、社會の幼稚なる時代、即ち原始時代にありては、家族の組織も甚だ簡單で、且つ不完全なりしは疑はれざる事實であります、當時の社會にありては、自然的天性の要求に基きて、男女結合の干係は造られ、男女の干係は夫婦を成立し、夫婦は子女を生み、斯くて漸次人類の社會に蕃殖するに從ひ、血族團結の觀念は養成せられ、遂に家族の發生を見るに至りしものである、されば、家族の發生するや、固より人類自然の情愛に基き、即ち感情一致に由るでありませうけれど、尙ほその外に、人は元來利權を爭ふ性質があれば、生存の必要上、即ち衣食物の獲得、爭鬪の防禦等に協同力を用ゐざれば、同血族の生存を保ち能はぬのが、確かに一原因となりて、血族團躰の結成を促がし

たものでありませう、此の如くして家族は萠芽を社會に生じたものであり　それに未開蒙昧の民人の頭腦には合理的の意思の存在を認めざれば、當代の民人には、完全なる家族生活の望むべからざるは明かな事であります、然るにその後年代の推移と共に、社會の狀態も進化するや、一般民人の天性は發展し、思想は進步して、社會の生活狀態も變化しました、即ち劣等なる生活狀態より、漸次高等なる生活狀態に移り、人間の生活は、單に物質的の快樂のみならず、更らに精神上の快樂をも重んずるに至りました結果、家族生活も、物的生活より心的生活を加味するに至り家庭も完全に近づき來たのであります、而して社會なるものは、家族の後に生じたるもので、即ち社會は家族を基礎として形成せられたものでありますが、またその發達及び進化を見れば、社會と家族は終始連關して離れざるものであります、されば、社會てふ大集合躰を、近世の學者の云ふが如く、一種の有機躰に比喩せば、家族はその一部分にして、即ち集合躰の分子たる性質のものであります。



家庭は、その性質上、人の自然的生活をなすべき所であります、他の社會的小團躰の如く、生存競爭の機關にもあらず、また營利的の團結にもあらず、只人間自然の必要に基きて、家族團欒の快樂を眞目的とするものであります、されば、家庭は、社會のあらゆる團躰中、最も靜穩に且つ溫暖なる團躰でありまして、之れを大なる社會の上より見れば、家庭も宛然たる小社會を形成するものであります、この小社會たるや、社會の殺風景なる生存界を脫離し、人生に於ける慰安と快樂を得べき天國であります、人は勞苦にのみ耐ゆるものにあらず、必らず一方に於ては、家人の溫かなる情愛に接觸し、その疲勞を休むるの所がなければなりません、而してこの生存競爭に疲れたる戰士が、身を横たへて憩ふの地は何處ぞ、神の信仰の如き理想上のことは姑く措き、現實的に慰

安と快樂を供給せらるゝは、之れを家庭に望まずして何處にか求めん、されば、家庭は人の生活上最も無かるべからざるものであります。

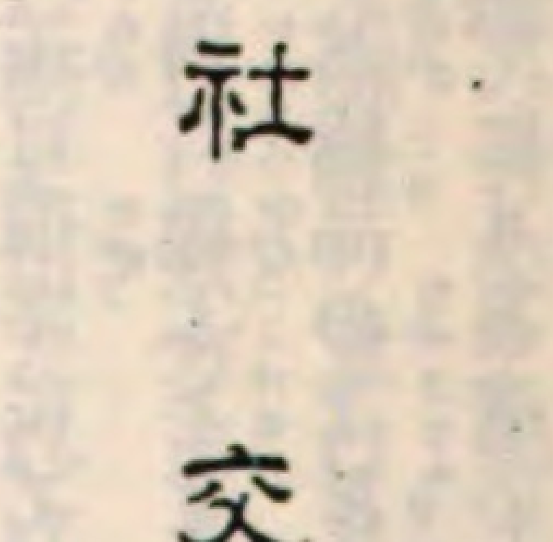
道義は廢頽せり、社會は腐敗したりとは、近時世上を警むるの聲であります、いかにも、現今の時代を見れば、物質上のことは非常に進歩し、殆んど物質の花を以て世を飾るといふも不可なけれど、之れに反して、精神的否道義のことは、甚だ衰頽して居る、人倫は紊だれ正義の光り薄きは、實に今日の社會の狀態であります、されば、近來社會を憂ふるの士は、社會の改善せざるべからざるを説くに至りました、之れは時世を救ふ方法としては、決して冷々に看過するでありませんけれども、此等の人の唱ふる論を聞けば、多くは最近世に行はるゝ社會政策の如きものであります、いま之れを平たくいへば、社會といふ團躰に對して、施さんとする積極的方法に過ぎないもので、多くは抽象的理論に流がれ、その實行の好結果を奏し難いものであります、たとへば、社會を觀察するに、大量測定の方法に由りて、以て其社會の病的又は健全を判知し、若し病的社會と認むるときは、之れに相應の治療を施すが如き、極めてよき理論なれども、その實行の方法は頗る難づかしい、國家の權力を應用して、治療の方法を施設せば兎も角も、單に少數なる社會學者の熱心なる言論、または薄弱なる社會の制裁位にては、その實効を現すことが難いのであります、大なる社會を改善するは容易の事業でない、病的社會を救治するは、個人の疾病を治するが如きものでない、されば、いま此の不健全なる病的社會を救正するには、消極的の方法を以てするのが、極めて穩當ならんと考へる、即ち社會を改善せんとせば、先づ家庭より改善せしむる方法であります、家庭は社會の基礎である、尨大なる社會は、無數の眇たる家庭より成るものであるから、この二者は密切の關係がありまして、家庭が改善せらるれば、社會は自ら改善せらるべく、家庭が改善せられざれば、社會は遂に改善せられぬものである、故に社會を改善せんと欲せば、先づ以て家庭を改善するの方法を講ずるは、急務であらうと思

ひます。

新世紀は、社會問題の時代であるから、我國將來の社會狀態でも、此に大いに變化して、混沌たる現象を顯はすに至るべきは、いまより之れを豫想されます、貧富の懸隔は益々甚だしく、正義の制裁は薄弱となり、表面の狀態は、人文燦然として其外形を飾るも、裏面の狀態を探ぐれば、精神的文明の退歩せるかを疑はしむるに至るであらうと思ひます、此の如き時代に當りて、その社會的弊風を矯正するの道は、先づ社會を組織する個人を改善せざるべからず、個人の改善とは即ち個人の心意の改善である、而して個人の心意は家族生活によりて涵養せらる、されば、社會の根原は家庭にあるから、社會の改善は、家庭より根本的改善の方法を施さねばならぬことゝ信じます



社交



交際の心得

翠香女史

交際あれば從つて進物贈答の事なき能はず近頃音物廢止論を主張する人ありとは聞けどそは云べくして行はれ難き事なるべし昔より我朝民間の習慣を思ふに先年始の年だまを始として三月三日の菱の餅、女兒初節句の祝として桃柳の花雛人形白酒雛菓子の類を贈答して五月五日は男兒の初節句を祝ひて飾粽柏餅軍人形幟旗馬印鯉の吹貫等を以てし七月七日の乞巧奠には願糸を始め種々樣々の物を献じ九月九日は後の雛に重陽の菊の酒或は庭園の愛花を贈る以上を五節句の祝儀と稱したり此餘にも二季(盆暮)の附屆とて中元(七月十五日)には刺鯖魴等に素麵を添て縁家に贈り年末

は歳暮ノ祝儀とて鯛鮭鰹鰤の類の鹽物を取遣せしも物價高直になりしより大方砂糖と成たるもをかし昔は砂糖に納豆は寺院より檀家への贈物なりし也叉暑中見舞としては氷砂糖水仙粽葛菓子の類すべて雪氷など凉しき名の附たる物、扇團扇を添なとし寒氣見舞には玉子折を専とし鴨温飩早善哉何にでも食して暖まるべき品を撰びたりし今も暑寒の見舞はすれども凉しかるべく暖まるべきなど注意する人なきが如し事の故を忘れたりと云べし猶此外にも春秋彼岸の志と稱して種々の精進物の贈答あり六月一日の嘉祥の祝氷餅とて搔餅を取はやすは雲上の氷室御節のまねび事十月玄猪の萩ノ餅是等は皆年中行事に載る處老人は誰とて知らざる者もなけれど明治の今日は五節句嘉祥亥猪等悉く廢せられて唯二季暑寒と臨時の出産移住開店結婚昇級年賀及遭難病氣葬祭等のみ依然として行はるゝは交際の人情として止べからざる事なるべし今日なき事は知らでも事を缺ざれば省きていはず現在の事のみに付て若き婦人達に注意せむ先一月の年玉といへるは元來は年玉に非ず年賜とかくが本字なるを玉もたまとよむが故に其昔何人か借て玉と書たりけむを字畫少くてかくに便利なるより人皆是に倣へる成るべしそはとまれかくまれ其年賜といふ事は年の始に賜ばると云意にて何物にても上たる方より下へ惠み賜はるを稱し御年賜とぞ云なる然れば下より上へ献上するは勿論たとへ同輩といふとも我より他へ贈るを賜はるとは决していはれぬ言なるを世は押なべて心つかずして只習慣のまゝにおとしだまと號し品の包紙にも手狀の文にもかき甚敷は御ねんぎよくと字音にさへ云なるは餘りに沙汰の限りなり字音に云たくは年賜とか嘉儀とかいへひねりて書たくば御としほぎ叉は何とぞ附かで只壽といふ一字をかきてもよかるべし他より貰ひるを謝するには御年賜下されといふべし先を敬ふなればよしとにかくに年たまとは玉は假字にて年頭に賜はる物を稱して云敬語なりと心得違ふことなし

○人に物ヶ贈るは其物品のよきよりも志の厚きを以て主眼とす世の諺にも長者の萬燈より貧女の一燈と

云言あり古は人情深くして至誠より出で物品を贈りしも今の人は事繁多にして交際廣ければ從而贈答も數多くなる故に又やらねばならぬと舌打爲ながら義理一篇に外見の立派にして其價の少しにて而も廉なるべき品を撰む故に商人も又其意を迎へて桶箱等の底を高くし葢を厚くして表面の三分の一にも足らざる程の物を詰込て割合に御恰好なりと薦む正直にいはゞ詐僞に比しくまことに沙汰の限りなれども既に是尋常一樣の事となりて諸方にても敢て怪しまず怒る者もなき浮薄の情態知るべきのみ昔人の志厚かりし例をいはゞ女兒輩の翫弄ふ百人一首の中なる孝光天皇の御製にても知られたり至尊の御事を申さむは掛巻も畏けれとも此天皇は仁明帝第三の皇子にて御諱を時康と稱し奉り御齡五十に及ばせ給ふ迄も唯の親王にて御勢力もなく微々としておはしましたりけるが時の攝政基經が年賀の事ありし時の權門なれは滿朝の人々我劣らじと祝物善美を盡して贈りたりけむ此親王も何をがなと思召たりしかども元より詫しき御身なりしかば萬御心に任せがたくて御手づから野邊の若菜を摘ませ給ひて此御製を添て贈らせ給ひし也大御歌の意は君が爲に賀せんと思ふに承知の如き我身なれは致方なしせめて若菜なりとも摘て贈らんとて春の野に出たれば折しも生憎と雪ふり出で衣にかゝれり然れども折角思ひ立たる志はかへじと思ひはげみて雪を打拂ひ〳〵からうして是だけ摘取たれは我衣手に雪は降つ〳〵して誠にはや寒かりしかく困却しつゝも君の賀を祝たさに摘たる志を請て下されよと仰つかはされし也此忝き御志の深厚に基經深く感泣して陽成院の御位を遜れ給ふに當り基經此親王を迎へ奉りて五十八代の帝位に即奉りぬ至誠の人心を感動する事斯の如し是に限らず昔はすべて人に物を贈るとては其品の得難かりし爲に心を盡しゝ由をいひて贈を定とせりそは中昔の物語文などをよく讀たる人は自然知らむ今の心をもていへば大ソゥ恩に着せたる口上の如く聞なさるべけれど全く然にあらずかく心を盡したりと其志の厚きを申贈る也然るを今は反對にして實は骨を折て態々買求たる品にても人に

贈るには麁品粗末ながらなど云て是を卑下するを禮とすもし昔の心にていはゝ麁品と知りながら他へ贈るとは失敬也とやいはむ是は時康親王の御事の如く志は深けれども物事心に任せざる人の其物品の麁なるをわびて我力に及はさる由を謝したるより轉して十分の品までも粗品麁末といはではならぬ事のやうに成たるなるべしかゝる事何の上にも多ければ數百年來習慣と成果たる今にして我獨り古風に反さむとすとも企及ふべきに非されば是非なく時に從ふとも其元を知りて餘りなる轉變の弊に墮入らざれは可也

○凡進物は甚しき上手下拙あり工妙にすればさまでの物を費さずして大に先方の歡心を買得べきも考案拙けれは餘程の金錢をかけて態々買求たる品にても先方の氣に入らず用ゐ方なしと貰ながら不足をいひ從にも立たぬ品の爲に返禮せねばならぬなどゝ譏らるゝ事ありされは先方の意を計る事甚だ六か敷が如くなれど少しく注意すれば又爲難き事にもあらず人と交際するに其談話に心を留てたとへ浮世の雜談にてもウカと聞かぬ様にすれば其人の主義の如何好む處嫌ふ處大略は知るるべし又其宅を訪問すれば其生活の程度妻子家族の情態も探り知る事を得べし外見を飾る人は一兩度にては知りがたき事もあれど親しく交はれば其うちに悟らるゝものなり扨進物をなすにたとへば主人公の歡心を買むとならば其人の意に適ふべき品又所謂嚊々天下にて主公よりも細君に勢力ある家ならば内君の好む處を探り或は子女あらば其兒等に必用なるべき反物手輕ならば學校用具幼兒には玩弄物菓子類もよかるべし經濟家ならば鰹節玉子又は皿鉢等厨中の用に供すべき品を贈るがよしとにかく我好惡を捨て先方の意に適ふを撰ぶが得策なり翠香が知れる人にて北海道より昆布を澤山に到來せしが東京にては從來昆布は水に合はさる故にやあらむ鹿角菜紫蘇昆布荒和布とて海草はすべて無味物にかぞへて賞翫せず中にも昆布は其つかひ法をさへ知らずして是を水に久しく漬おきて引上げぬら〱するを氣味惡しとして箆をかけて洗ひおとしなどすかくては肝腎の昆布の甘味鹽氣を全く失ひ眞の脫體

と成て後鰹節砂糖にて味を附たりとていかでか甘味こ
とあらんや加之土地の水海菜を煮るに適せずたとへ
水に漬たり洗たり爲ずとも煮ても和らかにならずして
眞の美味出難し東京にして昆布を煮るには先雨水を淸
き器に受貯へて是にて煮れば京坂地方にて煮ると同樣
になる扨昆布は水に漬ず洗もせず其儘にてよき程に切
て煮るもし晴天つゞきて雨水を得られぬ時には曹達を
少し斗入れて煎れば暫時にて和らかに成也扨箸にかけ
て鉢へ引上底に沈澱したる沙を水こしにかけて取去り
改て其汁中に昆布を戻し入て醤油をさし加減すべき也
（雨水に非され眞の美味はいです曹達は只和らかになるのみ）予此煮法を發明せしかば其細君
に教授したりしかば成程うまく出來たりとて今迄詰ら
ぬ物を多く貰て厄介なり場處塞なりと思ひしもお蔭に
依て日々の惣菜にも至極よき物にて始て昆布の味を
知り得たりと幾度も謝禮をいはれたりしはよかりしも
度に猶可笑しきは自己がよき事を知り得たりと思へる
まゝに折しも越前の敦賀より來れる客の歸國するに臨
み國へのみやげにとて此昆布を分與して其煮法の受賣

を喋々して贈りけり越前敦賀は北國第一の湊にして北
海道の未だ開けず蝦夷といひし昔より其國產物を引受
て昆布は就中有名の品なるに猶敦賀の地にて是を種々
製作して花昆布あり菓子昆布あり皆箱詰として諸國へ
積出だす昆布の黒人なる敦賀人に自己が珍らしと思へ
るまゝに誇り顔に贈りしこそ可笑けれ其人我許へも
立寄りて有がたき御志とは是れをこそいはめと笑話
せられたり是等は下町商家の細君にて只衣服の流行に
遅れず演劇の替る毎に見はづさぬを以て婦人第一の
勤なるが如く心得新聞をだにろくに見ず日本橋京橋兩
區の外無下に世間の事情を知らざるよりかゝる失策
も出づるなり婦女も交際を廣く爲べき今日猶ほかゝる
細君下町邊には多きが如し交際を廣くせんとする人は
今更專門家に附て學問するには及ばず日々の新聞雜誌
に心をとめて小說つゞき物ばかりみる事なく日々の出
來事政事界の批評より時の相場附廣告欄に至る迄克注
意して記憶しおけば交際談話に不都合の事なくひけを
とる事なかるべし且又家事經濟の足りにもなる實に新

聞は文明の利器なる哉

○遠方への進物は同地の如く訪問する事もなければ其內情が知り難し只其土地になく珍しからむ品を考へ或は何々を求め呉よなど依賴さるゝ事あらば夫を熨斗付にして贈るもよし昔より進物に付て面白き狂歌あり

一は金二は反物よ三は紙肴や菓子は呉ぬよりまし

何人の作なるか知らねど克く皮肉をうがちたる哉上は王侯貴人より下は乞食非人に至る迄金錢のいらざる人はなしたとへ十錢五錢のはした錢にても用ゐ方なしといふ事なし誠に一は金なる哉殊に遠方への進物金にしくはなかるべし然るを此金を贈るをいやしき事と心得失敬なるが如く思ふはいかなる事ぞ日本の昔漢學流行して彼清貧を樂むなど云腐儒輩の負惜みを主張せし名殘と金錢を扱へば汚るとて手をだも觸ざりし武士片氣の猶失やらぬにやあらむ天下の通寳たる金錢を贈る何の失敬と云由あらむや又是を受たりとて何の憚る處ぞ然れども是を失敬と思ふ人世に在る限は我は憚らずとするも人の失敬とするを如何せん　（つゞく）

流行

內裡雛

彌生といへど陰暦よりいへばまだ正月の中頃に過ぎずよろづ新らしきを祝ふ雛祭りは既にかざり收められたらん。まことの季節はこれからにして花の三月にはまだ聊か間もありぬべし。桃も咲かず土筆も芽出さず、餅草も萠へず、菜の花も色づかねばあはれ雛の節句も風情うすかるべし。まことに實用には陽暦を取るに利ありといへども四季折り〳〵の儀式、娛樂には陰暦に據らんと風物に協ひて趣きありといふべし。されば都會の地は別段として田舍地方別けても山村水廓の地はこよみの如何にかゝわらず今も猶諸事舊を守りて節句はなべて月令によるがごとし。扨て本年十軒店雛市の摸樣を聞くに、まづは好景氣にて相場は手間賃の

騰貴せし爲め昨年よりは二割五分の高價なり、尤も其の店々に依つて直段に差あると勿論なるも、古金尺物十五人揃(但し親王二、宮女三、五人囃子、隨神二、衛士三)百五十圓、同繻珍十五人揃ひ(同斷)九十五圓、金緞子十五人揃 五十五圓、同古金五寸物十五人揃ひ九十五圓、繻珍同六十五圓、並金純子同 三十八圓、古金三寸物十五人揃ひ七十圓、繻珍五十五圓並物二十八圓、ケシ物三寸と直段變らず、其他浮世物、高砂小鍛冶、道灌、小町等上十八圓より十三圓位まで二人立次物八圓位まで、掛物は絹地の押繪十五人立にて十五圓、紙地八圓位なりし。

令嬢向春衣裳

▲上着 縮緬の大形の小紋染め是に一尺五寸より八寸位の高さ白上げ江戸褄の大摸樣是に淡彩を加ふるも又妙なるべし。其摸樣には上前の上位に疋田入鶯一羽下前には夢想窓に疋田入光琳梅ひよろり一二本「三枚共八十圓位)小紋の曙染も亦ひとしほ風情あり。其摸樣は花鳥、山水好による△帶は黑地繻珍丸帶摸樣は金銀通し千羽鶴の大摸樣(八十圓位)納戸地の蝦夷錦(六十圓位)錆茶地金糸入嵯峨の琴の音(四十圓位)其の次の令嬢向としては▲上着下着とも紋御召三枚襲、紋は白糸の須賀縫或は織縫に變り褄△胴は絹板〆、裏は紅絹(六十圓位)近來は友褄(即ち無垢)ものぼつ〱流行せり。△長襦袢 友染縮緬鹿の子入大さや形△帶繻珍織厚板織 摸樣は雲隱れの縞入摸樣(八十圓位)黑地金銀通し波に土車(六十圓位)(三井吳服店)

新流行の初衣

◉男兒の初衣として近頃最も流行いたしまするもの丶中で高尚なる好みを申しますればまづ黑羽二重の五ッ紋で紋の大きさが鯨九分 腰熨斗目摸樣で千羽鶴とか松竹梅の光琳なぞで」切り白茶地、翁格子に鎌倉摸樣か武具の手遊など總て活潑なる摸樣を付けて袖口附紐

もやはり同じ摸樣で下着二枚は白茶羽二重の無垢とし三枚壹と襲の仕立上りの代が——三十五圓より四十圓

扨て其の次きとなれば

▲黒斜子の五ッ紋で摸樣なし下着二枚は古代更紗の斜子で紐は淺黃縮緬、袖口淺黃繻子、裏は三枚とも勝色絹と致して此の壹襲の仕立上りの代——二十八圓より三十三圓位です。

▲地伴胴紅木綿にて袖半衿淺黃縮緬とし仕立上りの代二圓半位なり。

◉扨又女兒初衣として濱縮緬の五ッ紋で、色は紅懸鼠、薄牡丹、櫻、鼠なぞて高裾の曙摸樣とし下色は薄き肉色最もうつりよし高尙なる摸樣は源氏の遊宴幕が高樓の殿上亦は光琳の松竹梅なぞで友仙染の寄り金の縫ひ入れ引返しとし、袖下にも摸樣付け友紐の友袖口にて下着二枚は緋紋縮緬のやはり引返しで胴裏は三枚とも本紅絹を付け一襲仕立上りの代——三十八圓より四十五圓位です、以上初衣の出來上り寸法は丈け二尺五寸袖一尺正寸で其の裁ち方は何れも別衽裁であります。

▲地伴紅木綿にて袖半衿緋縮緬とし仕立上りの代——二圓半より三圓位なり(東京大丸吳服店)

進物用品物直段

△食料品　長崎産のカラスミは一腹入を折に入れて代價一圓位輿津鯛五枚入一籠六七十錢雲丹は北越又は對州産にて大瓶三十五錢小瓶二十錢五島鰑十枚一杷一圓より一圓五十錢紀州産の木葉鰈は笹入にして二十錢より五十錢明石鯛の粕漬及び味噌漬は樽入にして七八十錢より二圓まで鮭の子の粕漬は五十錢より一圓まで魚煎餅は罐入四五十錢笹入にして二十錢より三十錢小魚の酢漬三十五錢より五十錢越前産牡丹海老は笹入にして五十錢このわたは樽入にて四十錢以上種々あり鮎の粕漬は一樽一圓内外奈良漬は一樽五十錢より二圓千枚漬は一樽四十錢より種々あり

娯樂



雛祭り

昨日今日、外山の雪も消へがてに見ゆるに、早くも雛の祭りは來にけり。軒端の梅が香、まだあせやらぬ間に、桃の節句とはなりぬ。いでや其の祝ぎに、雛祭りの故事、その一ふしをば、かい摘んで記して見ばや。

そも〳〵姫君孃達の、雛を弄び給ふるの故事は、いつの頃より始まりけるものにや、ものゝ本などにも、この事明らかに記せしものなければ、定かには知りがたかれども、第六十一代の帝、朱雀天皇承平の年頃にかゝれたる文にも、雛のことなど、見ゆと云へば、ふるく其の昔しより、ありける事と思はれたり。

さは云へども、今の如くに、三月の三日と定まりたる日に、祭るにはあらで、いつとはなしに、女の童どもの、弄びけるものにて、其の雛も今の如くに、家毎に有りしにはあらずとなり。

さらば今の如くに、三月三日を祭り日とせしは、いつの代よりの事なるかと云ふに、こも又舊き史などの缺けたる故にや、夫れと定かに知るよしなきも、第百三代の帝、後土御門天皇の御宇に、ものされたる歌の中に(誰なりしか、今はその名を記憶せざるも)、此のことの記しあるを見ば、その頃よりしてならんか。

さて夫れより、世は戰國の時代となりける故にや、絶へて此の事を、記されしものなければ、民間にまで一般に、行はるゝ樣になりにしは、近く德川の時代なりとかや。

ふるき昔しに、女の童どもの、弄びし其の雛の形狀は、いまの如くに、あでやかになりしにはあらで、圓き棒の、その長さ一尺あまりなるに、黒き糸と、五色の糸とを卷きて、丸き臺の上にのせたる、そのまゝなりしと云ふ。

その黒き糸は、黒き髮の毛の心にて、五色の糸は、十二一重の襟の處なるべし、この黒き糸も、上のところ迄

巻き付けしものを、女雛とし、中程まで巻きたるものをば、男雛とせり。

さて其の後方には、厚紙に鶴龜とか、さては松竹梅などの如き、縁起のよき繪を、彩色してかきしを、丸く折りて、立、置きしと云ふ、こは其の衣服の心なるべしとなり。

徳川も元録の年頃までは、たゞ座中に敷物として、その上に列べて、祭りしものを、いつの程よりか、壇を設くることゝせり、草餅を供ふるも、古き昔しの頃までは、母子草と云へるを餅にまぜて、餅につきたりと云ふこれは親子共に、いく久しく健かであれかしとの、縁起なりと云へど、いつしか香よき今の蓬草と代りけり。

さるにても、此の雛祭りこそ、女子が一代のつとめとなして、つとめはげむべき、家政のその手初じめとしぬ云ふべきものなれば、吾は我が最も敬愛なる、幼き姫君孃達と共に、いよ〳〵此の祭事の隆盛に趣かんことをば祈るものなれ。

あはれ今や、吹く風暖かに、桃には少し早けれども、梅が香や柳の眉も、見頃も見頃なるとき、うつくしき床の間に、去年の雛かざりて、白酒を供へ、蛤を盛り赤飯を供へて、客人招き、友ゞち往來するは、さてもたのしく、また清らかなる遊びになん。（木村小舟）

鮒つり

春の水やう〳〵ぬるみ來り、藻の中に潜みし鯉鮒なんど餌をあさりて游ぎ出づる頃となれば岸邊の柳も之をさし覗きて靜かに絲を垂れ〳〵とす況して世に釣ずきといはるゝ輩は此の暖かなる日を終日家にくすぶりて果んと思ひも寄らず、己がじゝ竿と餌箱とを引抱て先づ志ざす方へ赴き夫より田圃中の畔道をそこことなく迷ひ暮らす例とすれど昨今此面々の集る場所は利根川筋の眞木屋河岸、今井、長島邊、又中川筋の木下川、宮下、逆井、醤油屋河岸、新川入口、又大川筋は千住大橋下の筏の間より紡績會社裏手の邊りにて四五歳の鮒を多く釣り得て歸るよしなり、尤も小松川筋南葛飾平井近傍の

堀地は未だ季節早く本月下旬より四月の頃に至らば日和だによくば餌もて魚籠を充たす事容易なるべし。

へ佛國の蝸牛料理　日本人などにはチト胸の惡き話なれども佛國人は蝸牛を非常なる珍味とし又た最も滋養あるものと信じ百分中の十七は窒素質を含んで居るゆえ滋養の點に於ては牡蠣と同一であるとの說さへありそれゆゑ巴里人の之を嗜むとは驚くべき程にて一ヶ年の需用高は凡そ三十萬斤に達する、此の蝸牛の產出地は重に田舍で各所に蝸牛園の設あり園內には數萬の蝸牛を放養し飼育上には種々の方法があつて香氣を高くせんとすれば香氣のある草を與へるなど手數を要すれど其利益は中々莫大なものでヂジヨン地方の某蝸牛園では一ヶ年の收入七千フランに達すと又た瑞西地方にも廣大な蝸牛園があるといふ

才媛詞藻

第二回懸賞文披露

和歌

選評　佐々木信綱先生

天賞

春興　　伊賀國府中村　服部かつみ子

なりはひにいとまなき身も咲花の
　春は一日を野べにくらしつ

地賞

同　　小石川區柳町廿五　淺井雅子

春の野にすみれつはなとあくかれて
　こてふににたるわかこゝろかな

入賞

同　島取市立川町一丁目　澤よし子

菅の根の長き春日を門にたちて
柳の糸をくゝり見るかな

天賞

幼稚園　大和高市郡高取町　武田ことみ子

あたゝかき教の庭のちござくら
咲出む花の春をしぞ思ふ

地賞

同　神戸市中山手通五丁目　青木京子

あゆむさへたど／＼しけの幼子も
わけこそのぼれふみの山口

入賞

同　山口縣立高等女學校　草賀きくの

師の君のなすがまに／＼いとしくも
めぐしみどりに風車うたふ

秀逸

春興　磐城　内山ふさ子

牛ひきて歸る小路の朧夜に
しづ心なく梅の花ちる

同　神田　佐々木慶子

かるたとり花見つみ草汐干狩り
春のあそびの多くもあるかな

同　尾張　大島禎子

思ふどちさそひさそはれけふもまた
花より花の春や尋ねん

同　長門　梅田そめ子

くるゝまで花を見しかなかへるさは
かすめる月をみちづれにして

同　淺草　大羽里子

花は咲き木々には鳥の唄ふなり
山にや行かん野にや遊ばん

同　三重　龜井爲登子

思ふどち櫻かざしてあそぶ日は
なほ春のひもみじかかりけり

同　尾張　村瀬胤子

すみれつみつはなぬきつゝこゝかしこ
こゝろをさなくあそぶ野邊哉

同　相摸　尾崎嘉子

あくがれてそことも知らず今日も又
春の一日を野邊にくらしつ

同　山梨　守屋すが子

都人うかれて歸る花かげを
見るもうかるゝ心地こそすれ

同　松本　島田治代

春の野は耳さへ目さへひまもなし
鳥も歌ひて花も笑ひて

同　大和　萬喜よね子

花のかげに歌おもひをればいつしかと
くれ行く空に雲鳥なくなり

同　四谷　平塚壽子

春の野に若菜つみつゝ歌うたひ
あそへる今日は暮すも有なん

同　本郷　平井千代子

手折りたる花を惜しともおもひてや
わかゆく跡を蝶の追ふらむ

同　神田　平山いね子

花咲さけは文よむひまもなかりけり
昨日は上野今日は小金井

同　牛込　備後國子

思ふとち道行くたにもたのしきに
右に左にさくら咲くなり

同　德島　山下たかの子

飛ふ蝶のあと追ひゆきて春の野に
すみれつみつゝ遊び暮しぬ

同　大阪　柳谷涙子

花とりの色音にあきてかへりらし
門の旅に月そかすめる

同　千葉　亘理かね子

はらからと打ちつれ立ちて春の野に
若菜つむ身の心地よきかな

同　下野　田村やす子

うちむれてあそふ少女のふりそでの
なかき春日を野邊にくらしつ

同　岡山　新谷美穗子

子らは皆すみれなく野に遊ぶなり
われも言葉の花やつまゝし

同　備前　小山黍子

彼方には胡蝶追ひつゝ此方には
すみれ摘つゝ遊ぶ野へかな
同　大阪　天野近尾子

身ひとつのたらぬばかりに春の日は
遊ばむと思ふことぞおほかる
同　信州　小岩井佐吾子

□夜に地に滿つ梅の影ふみて
月に歌ふぞ樂しかりける
幼稚園　神戸　佐伯りやう子

はくそはの母も及ばぬみめぐみを
うけつゝそゞろ幼子のむれ
同　同　井上きく子

行末のいろかゆかしも園の内に
きそひて匂ふ梅の初花
同　武藏　保谷てい子

咲きぬれば色も香もあるなでしこの
めさしやしなる園にそおるける
同　岡山　根岸かう子

いわけなき心に植うる敎へ草
仇なゝ花咲かぬ園かな
同　靜岡　平野よし子

をさな子は學びの庭の八千草は
いつれ劣らぬ色にさくらん
同　長崎　芦塚よし子

むつかる子笑ふ子泣く子師の君の
心やりこそ思ひやらるれ
同　日本橋　蘆野たる子

敎へ草しげき御世なりみどり子も
ふたばなからにものなひして
同　赤坂　中はる子

この園に生ひたつ花のみどり見や
高きかをりを世にしめすらん
同　山口　梶間ひさ子

うなゐ子が文よむ聲のもれ出て丶
ゆく人あしのよどみけるかな
同　石川　永山豐子

□を守りいへををさむる心も
この花園ににほひ初むらん
同　京都　木村賀津子

をさな子のまはらぬ舌の君が代を
うたふも御代の恵みなりけり
同　大阪　酒井みよ子

うなゐ子のうちつどひたるこの園よ
つみてふものは露もあらじな
同　芝　鹿野はな子

天堂はいつこと人の問ふあらば
我は答へん幼稚園の中
同　大阪　岡本匡子

さま〲に咲き匂ひたるなでしこの
その生ひさきそたのしかりける
同　下野　沼部林子

たらちねのひざをはなれてうなゐ子か
敎の園に遊ぶやさしさ
同　備前　重松竹子

うつしうゑし園のなでしこ女郎花
いつれか色のさきまさるらん
同　小石川　池田壽子

いつくしむひゝなは女にあつけおき
敎の庭に稚子は通へり

竹柏園歌がたり（一）

佐々木信綱

歌の道に立ち入りてより、未だ日數も淺き人々の爲めにくさ〲の事どもをつき〲書き記さんとす。

歌は感情を本とするがゆゑに、人々の悲しき時、あるは嬉しき時、はた美しき景色に向ひたらん折、心に浮びいづるまゝを詠み出づるものなり。されば其時其折につけて詠みいでたらんには事たるべきも、平素に其心がけなければ、今よき景色に向ひても、盜人を見て繩をなふが如く、急場の間にはあはぬなるべし。されぱこそ歌を習はんとするものは、先づ題を出し、それによりて練習し置くの必要は出來しなれ。題詠は歌をして衰へしめし基と近き世の人のいひしは、げにさる事なれど、初學の間は題によりて詠み習ふをよしとす。さて己達の後に題詠を廢せんかた進歩の近道なるべし。又平素萬事に心がけ、深くなすべき事も必要にて、古への歌人は、鳥の一聲鳴くも木葉の一葉落つるにも心とめて歌の材料とは爲しゝなりけり。かく世の中の森羅萬象に心とめなば、其内にものなれば、道歩む時おろそかには過ぎ行くべからは必ずよき材料は得らるゝず。又これと同時に、古人の歌集歌論もよく讀み味ひて其趣きを知ることこそ必要なれ。歌集に撰集と家集との二樣あり。撰集とは多くの人々の中より善き歌を選び集めたるもの、家

集とは一箇人の詠みいてたる私集をいふ。されば選集には善き歌の數多を裁りたれど、其人の風躰を知らんとするには家集に若くは無し。さて此家集を讀むに、古代より始めて近世に至るか、又は近世より遡りて古代に至るかといふに、何れにても同じ事にはあれど、先づ近世の讀み易くわき易きものより始めて、漸くに上世の耳遠く解し難きものに及ぼさん方を宜しとす。さては近世の家集の中より、諸孃が詠歌の則とすべきものをえり出でて示さんとてす。

新體詩

甲賞

月影

東京青山南町　亞鈴子

あはれゆかしき月影よ
なれがくすしき靈光は
幾代の人にあらたなる
いのちみたまを與へけん

うき事しらぬさち人が
清歌妙舞のさかほがひ
つきせぬ興をたすけては
わらふやなれが面もちは

世に捨てられて世をすてゝ
紅涙しげき薄命の
さちなき人の友として
泣くなとなれはさめ〳〵と

汝に萬斛のなみだあり
汝の千萬のゑまひあり
汝が同情のあるあひだ
永劫人にいのちあり

結末の句力ありてよし

乙賞

やなぎかげ

東京　四　婦

春とは名のみ夜ふけては、
風もさむきに少女子よ。

何をたのみてたゞ一人
月のおぼろを浴びて立つ。
父をまつ身か母まつか、
鬢もみだれて薄ごろも。
いな〳〵待つは母ならず、
いな〳〵待つは父ならず。
鬢をあげんに母なき身、
衣を增さんに父なき身。
たのむはひとり弟よ、
それも病に眼はしひて。
よひ〳〵人の身にすがり、
ほそ手にらさぐ揉療治。
情もふかき少女子の、
宵々待つは戀ならず。
歸りを告ぐる笛の音に、
乙女は瞳こらすなり。
かたみに寄りし姉弟、
かへるはいづこ柳影。

評　可憐なるはらからをうつし出たる筆つきはた可憐なり

丙賞

馬士

赤間關市豐前田町　福田よし

なかれ志づけき黑川の　岸のすみれもほゝ笑みて
おいつおはれつ菜の花の　陰にかくれしてふ〳〵は
そよとふきくる春風に　小歌のふしもおもしろく
手綱ゆるめてゆく馬士の　家はいづこと見かへれば
あかき桃咲くをかのへに　小きわら屋のほの見えて
犬のとほぼえ鶏のこゑ　聞ゆるかたやそれならん

評　うらゝかなる春日田園の景みるが如し但第一節の蝶々はのどゝる所なく第三節の遠ほえの句もおだやかならず作者の再考をまつ

秀逸

浮世

鳥取市立川町一丁目　澤よし子

月に不斷の光なく　花に不斷の香なし
祇園精舍の鐘のこゑ　沙羅双樹の花の色
何れはかなき人の世と　さとるとすれど今更に
さとり難きは此世かな

花の顔月の眉　楊太眞のそれならで
毛嬙西施も耻づるべう　思はれたりし其人も
あはれや今日はあずして　北邙山一片の
煙となりてうせにけり

瑪瑙の柱るりの床　陶朱の富のそれをさへ
かゝる迄にはあらぬべう　思はれたりし其人も
あはれや今日はあずして　かつ結びては且きゆる
水泡となりて消えにけり

浮世の夢かそもや又　夢の浮世かそもや又
胡蝶の夢かそもや又　夢の胡蝶かそもや又
何れはかなき人の世と　さとすれど今更に
さとり難きは此世かな

評　着想わろしさにはあられど祇園精舍云々花の顔云々いひふりこさふりたる句をかきたるは拙事

文章

甲賞

吾家の猫の事を記す

東京神田駿河臺　平田うのえ

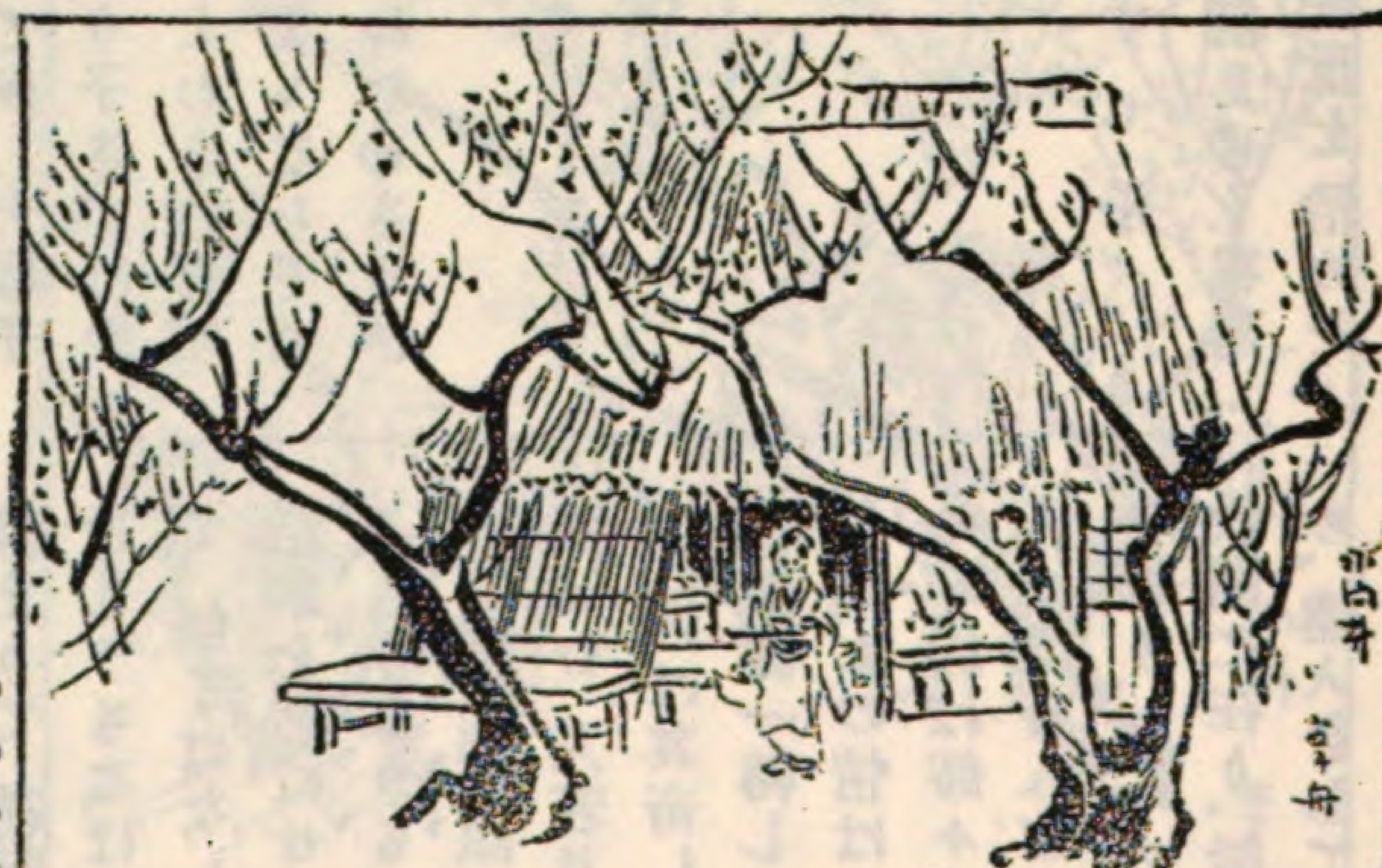
我家に飼へるけものに犬と猫とあり犬はフリーと呼ばれてうつくしき濃茶色のめ犬なり犬も猫も去年春生れたりければ幼きふるまひ多かり猫は名をくりとておいらしき黒と白とのを猫なり此くりといふ猫又世の小猫が如くたはむれて人笑はすることつねなり、あるときは南側の暖き椽に目や鼻や口や髯や足や一所にまとめ毛のたぶ／＼としたるにかくして心地よく眠る小猫よいかなる夢か見るらんこれもうれしき眠に夜の勞忘れたるらしきフリーの何ものに驚けるにや小さき己が家を馳せ出でゝわん／＼と吠えたり猫は驚きさ

めぬ彼はくり〳〵としたるかわゆき眼を見張り髯も耳もぴんと立ち背は岡の如く丸く〳〵高みてにらまへたりフッーは又我を恐れてのわざとは知らず小さき我友どちと思ふにあらむかけ來りて椽側の端より鼻ふう〳〵と嬉ばしきいきするにくりは益々恐れをなして大なる柱のかげに身をかくし猶も大敵や來るとちゞみあがりて目ばかりきよろきよろとする樣他愛もなくや、

あるは此頃やうやう幼稚園に通ふやうなりし季の弟の猫に袋かぶしやるにあとしざりしてしりうてども中々に前に得進まぬを見て面白しと紅葉のやうなる諸手打ちならしてはやすいとつみなしや、

あるときは朝に新聞ひらきみ居ればいつの頃にかゐけん机の下よりやはらかなるちぴ足いだして其片をちよろちよろとたはむる又いじらしや、

あるはいづちよりか歸りつらんいま拭きたらんばかりの板の間に泥の足あと印したる雪の上ならましかばいかにうつくしき梅の花ならむをこれは又きたなくや



あるときは鏡とりいでゝ寫しやればいとけゞんなる面して種々に姿かへて見るはては足までめぐるに彼方もあげたり遂にはきみ惡くてや鏡を遠ざくはなれて猶こはごはに見ゐるたとふるにものなくかわゆの猫や

あるはかまどの埋火はやも消えぬるに身の冷たさ覺えけん白き所は黑く黑き所は灰色に毛はそめなされてニアヲ〳〵となくあはれに膝にのぼしやればまた暖かき眠むさぼるもいとほしや、

あるときはごむ毬紙まるめてなどなげやればころ〳〵とまろび行くが否や疊に爪とぎすまし尻尾ひよこひよことうごめかし時をはかりて飛燕の如く馳けよりて毬も己もころばりてひとりもてあそぶは無邪氣なりや、

（三）

あるは客待ち顔なる新座敷のきぬふとんに案内もなくて猫の小さき御客樣のすはり給ひかのざら〳〵とせじ舌もて澤々しき毛皮をみがきいるつらにくゝてそが冷たき鼻先ひたゝかにたゝきやれば苦し

げなるくさみなすおもしろき兄君の逃れんとする小猫きつう捕へて再び三たびなしつゝくるはあまりにむごかる事なりや、

かうやうに猫も幼ければをかしきこといと多し犬張子に罪なき夢を守らしてすや〳〵眠るみどり子さては犬ころの雑巾の古きにもや引きつ引かれつよわきは打ちまろびておきもやらずつよきも足の運びまゝならで力あまりて已にころばるなど皆幼くてこそかわゆさもひときはまさりしか

評　清少のおもしろき筆を弄せる翁丸命婦の昔がたりさはやうかはりておもしろきふしあり今少し筆つかひの進みたらましかば

乙賞

夜

東京青山南町六丁目二十三番地　鈴木すゝ子

暉は落ちて西の空に殘れる餘紅の漸く消えゆく程萬象はやがて薄墨色に染められて、夜こそ此世を治めそむるなれ、そのまとへる烏羽玉の闇の衣を、大珠小珠とり〳〵に麗しく飾りなしたるは、月と星なり、晝の光の強くして遍く至らぬ隈もなきに比べて、いと弱く幽かなるは夜の光なり夜の命はこのはかなき神秘の色にぞ籠りたる、夜の姿はさながら尊き高僧のそれにも似たり、人これに接すれば、さわぎたる心の浪ものどかに靜まりて、彷彿として平なること湖面の如くあやしうけしうもなほ淋しくあはれなる漣のさら〳〵とゆらぎて、何とはなしに冥想の境に入らむ、暗黒は一切肉身の活動を憩はせて、心神のそれをのみ止むればなり、幸なるも幸なきも、貧しきも富めるも、おしなべておのづから悲觀に打傾き、達人は更に一歩を進めて大觀の域に達せむ、人若月と星とを仰ぎて、神秘の夜の命に觸れむか、人は其奇しき命を皷吹せられて、靜中動あり、心界の波瀾一轉して高く、消極より積極となり、彼を思ひ是を思ふの情は綿々として盡きもやらず、人間心裡微妙の琴線は錚々鳴りて聲をなすに至らむ、爰に於てか、詩人は泣て人生の歸趣を歌ひ、哲人は觀じて宇宙の眞諦を悟り、閨中の孤婦は聲を呑で歔欷し、征夫夢驚て思は故園に在り、微妙なるかな夜の力、常人をして悲觀せしめ、達人をして大觀せしむ、この不可思議なる使命の外に、夜は猶人を眠に誘ふといふいと重き使命をこそ持ちたれ、人眠れば五蘊全滅ぶと共に、魂は神の靈と一つになりて、終日の辛勞は泡沫と消えて、新しき生命の泉

はいつしか注がる、かくて紅顏は衰へて白髮と革り形容すべて枯槁すれば、靈獨天に歸り、人は永久の夜にこそ入るなれ、かくて夜は人生を調和し、無限の敎訓と無限の慰籍とを與へ長へに惠の雨を濺ぎて已む時ぞなき、若かの照日の影の幾劫の後にか薄らぎゆきて、地は氷りて天は晴れ、紅謝し綠凋み、世は再混沌のさまにかへらば、これ夜の晝を滅し盡し、時に外ならで夜はとこはに動がず王者の位に在らむ、げにこの世にとりて、夜は始なり又終なり、くすしきは夜の姿なるかな、

評 散文させむよりは詩にうたはんにふさはしき材なるへし また女の文さしてはやゝこち／＼しきあさあるか難さす



丙賞

春風

下野宇都宮 山里ゆき子

吹くをしもなき春風にさそはれて、そこはかとなくさまよひ出づ。うら／＼と匂へる夕日を背に、里川のほとり、青柳のもと、駒つなぎて打眠れる翁あり。駒も宛ら眠れるが如く、下もえそめし若草しづかに食みつゝ、時々翁の袂にうなだれかゝる。如何なるみやび男ぞ駒の鞍にさしそへたる櫻の一枝、こぼるゝまでに咲きみだれたり。みどりの糸にすがりて、打ち眠れる黃の蝶一羽、美しき香や夢にいりけむ、俄に驚きたちてその枝にまひうつりぬ。何處よりか來りつらむ。白き蝶また一羽、合ひもせず、離れもせず、互にもつれ／＼て狂ひしが、頓て翁の眠れる顏にたはむれそめぬ。折しもあれ、一きは強う春風の、柳の糸をよりかけつゝ、駒の鬣ふくよと見れば、花ははら／＼と夕日にはえてみだれちりぬ。名殘をしげに二羽の蝶、ちりゆく方に逐ひつ、逐はれつ、翁の夢も今さめぬ。あはれ春風情ありしやなしや。おのれまた樂しき夢のさめたらむ如き心地して立ちさりぬ。霞の外に至れるころ、駒もすさむか聲狂ひてきこゆ。

起もやらぬを南の窓の少しあきたるひまよりふくともなき朝東風のえならぬ香をさと吹きいれたればやをら起き出で見わたすにかなたに見ゆる岡のへの雪は殘少なく消えうせていづくの里もなべて花鳥の色香ゆかしくうちかすみつゝ春の光のみちわたるにもやうされほころびそむる梅を見ばやと思ひつゝ友よびかはす鶯のこゑをしるべにたゞひとりそこはかとなく歩みゆくになつかしき香のせしかば何やらんとかたへの丘を見あぐるに二株三株ある梅の消のこんの雪にまがひて咲き出でたるなりけりたつねこしかひありていとうれしさのまさりつるになん

評　松屋文集などにありげなる筆つかひなり今少し新らしきふしもまじへばや

秀逸

待鶯

島根縣高等女學校　大達喜志子

軒端の梅も折り知り顏に、ほころびそめて、得ならぬ香滿ちぬれど、なほなにとなう物たらぬ心地のすなるは彼のなつかしき、初音のそはぬ故なるべしと、朝な夕なに、待てとも〳〵、更に其音づれなきは、まだ、谷の戸の雪の消えやらぬに、世の春を知らずやありなむ。あはれ春風よ、この得ならぬ花の香を、さそひ行きて、彼の、鶯を驚かしてよ。

評　めづらしきふしはなけれどやすらかなり

秀逸

梅花を贈る

三重縣飯南郡松阪町字本町　龜井志萬子

遠山はまだ雪けにさえ侍れど庭の梅花南によれる方は早笑ひそめ申候あまりかをりのなつかしう侍れば一枝折りて進らせ候あはれ清き御文机のほとりに挿み給は

秀逸

梅を探る

兵庫縣實業學校内　濱綾子

年立ちかへるあしたよりまつ待たるゝ物はかの初音のみかはきつゝ宿らん花のさかぬ限りはなほふる年のやうにて物たらぬ心地こそすれ春のならひにいきたなく

ば此上なき花の面目にこそなほ一首の御歌御もらしたまはらば鶯の初音にもまして嬉しうなんあなかしこ

評　簡にして意をつくせり書牘文の要をえつるものといつべし

女學世界の發刊を喜びて

いさを

治まる御代のかしこさは學の海いやひろう文のはやしいやしげうなりゆけど女が徳をつみ智を磨くべき境はなほいとせまく都遠き片山里にすむ少女等は學ぶに地なく就くに師なきをかこつらめど日頃本意なく思ひ渡りつるにこたび女學世界といふ文卷のすりいだされしこそうれしけれあはれこの世界よ徳を養ひ道を修むべきことどもをはじめとし智をつみ識をひろむべき學の術ならひて行を正すべきむかし人の傳記さてはたちぬひ調理などの女が日々のつとめにいたるまで殘るかたなう集められ殊になべていたりふかき君たちの世のため女を益せんとて心をこめて物せられしなればこをよまむ人さながら直ちに師の敎を仰ぐがごと心に得ぬふしもなく自から品高う行うるはしうはたまことの力さへつきぬべしされば此の世界の千巻八千巻數をかさねていよ／＼ひろうなりもてゆき津々浦々のあまが子も手をたづさへて遊ばんときよ女が學のわざもいよ／＼ひらけゆくらんとこそは

千葉萬紅

◉忍び草

松山市　寺田照子

わらは故郷を出て母君姉君と共に兄君に伴はれ出雲國松江といふ所に移り住しはいまより三年餘りの昔とはなりぬ此地は都を遠く隔てし田舎なれば萬目なれぬ事ども多くいと珍らしう覺えて自ら故郷の事は忘れがちに成しもやま／＼なるまゝに住なれし故郷の事かにかくと思ひ出られいと懷し

同し學びの庭にありし友のたれかれよりの音つれも始の程は絕間なかりしも一年あまり過きぬればいつしかうとく成りつゝいまはたゞ年始の外はまれとなりぬあはれかくもはかなくなるものかな

或春の夕つかた端近ういてゝ暮ゆく前栽の影色をながめつゝをる折しも雁の聲の聞ゆる空をあふぎ見ればあまた打つれてあなたをさして歸りゆきしあはれいつはり多き世の中に時をたがへずうるはしき花の春をも餘所に見捨て常世の國に歸りゆく雁ぞいと懷しき

いつしか春もふけて若葉涼しう見ゆる夏の首めつかたゆくりなくも兄君上の命にて伊豫國松山といふところに轉任したまふ事と成りて亦皆々伴はれて來りしは早一年あまり過きぬれとまた昨日今日の心地せられ春雨しめやかにふりし夜半のつれ／＼に學さりいだし姉君にならいし小車の

曲をまらへつゝふとをさなき時の忍ばる

三ケ月のほのかにさし出たる夕つかた花園をそゞろありきしたりしにふと吹來りし風にさそはれて一ひら二ひらわらはの袖の上にこほれたる何となう心うらさしよ或る夕つかたに文机にかゝりつゝ物認め終りてかたひぢつきしまゝひるまのつかれにやはしたなくもうたゝ寐してありしに明しまゝなる窓より一陣の風さとわがをもてに吹たるに驚されてふと目をさませば誰か持ち來りしか懷かしき故郷の友よりの玉章にぞありしそゝろに故郷の事とも忍ばれてなむ

何事も過ぎ越し方ぞ戀しきあはれいつかは故郷に歸るよすがのあらむ

◉徒然草を讀みて

下野　波流小女

軒に音づるゝ春雨のいとしづかなる夕、なすべき業もなうつれ／＼なるまゝ、書架かいさぐりて求め出したるは、並ケ岡の法師の、かゝるをり／＼心にうつりし由なしごとを、かいつけゝりといふなる徒然草になん。いでや心やらんよすがにとて、讀みもて行けば、文のすぐれて妙なるはいふべきにもあらず、竹の園生のやんごとなき御有さまより、男女の上はさらなり、月雪のながめ、有職故實のたしなみ、はては家ゐのさま、衣服飮食の細やかなるあたりまで、描きいでゝもらすことなし。ことに塵の世の中のはかなきを說き、名利をはなれて悟道に入るべきをさとせるあたりはむれと力をこめられし如く、又、心にくき人のすみかをうらやみ、四季をり／＼のけしきを述べしくだりなどは一きわ筆の跡の匂ふを覺えてなん。

そも、今の世の書、數あれど、趣すくなくて、二度と繙かまほしう思ふは、いと稀なるを、刋拙と亂れけん上つ世に成れる、この徒然草よ、いかなれば、繙くまゝに興いよ／＼深く、幾度讀むもたえて飽くことを覺えぬにやあらん。まことにこれ法師が眞如の月の曇りなく、岩間もる清水の濁りなき心の誠をうつし出せればにやあらん。

あはれこの貴き書よ、事がらは以てその上の風俗人情もうかゞふべく、信學、儒數、佛教の助ともなりなん。又その古雅に陷らず、柔弱に流れず、閑雅一家をなせる非凡の才筆は、永く文作らんものゝ鏡とならんを、誰かはよしなし事と見あなどるものあらんや。と思へるまゝをかいつくる程に夜やふけにけむ、我がせこが衣はる雨の木傳ふ音はいよ／＼しめやかなり。

◉窓のあした

鳥取市立川町一丁目　澤よし子

そこゝの垣根にあまた殘んの雪を見ゆれどもさすがに心ゆく計なるは春の景色なるらんかし遠山のあたりは朝霞につゝまれて見えぬも心ゆかしくをちこちの家々よりは朝餉たく煙にやすら／＼と立ちのぼる見ゆ折柄そよ／＼と吹き來る風の寒きも何となう春の光を含みたらん樣にてしばしは心なくてありぬやがて右手の堤の方にて人ごゑするにふりむきて見やれば夫婦にもやまだうら若き男と女とが荷車引き行くなりけりそが上に積める雜木はやがてわれ等が夕餉のしろとなるべしなぞとあらぬ事まで打念じつゝそが後べを見送るにやがては遠く霞につゝまれて見へずなりぬ折りしも向ひの藪の中よりうら若き聲して鶯のなき出でしは人く／＼と云ふにはあらで我を呼ぶ樣な心地するも心ゆく朝なりけり

　言とはん深山の春のしつけさをやよ鶯よしばし來てなけ

されど何地行きけんきこえずなりぬさても夜あけてより程遠くなりぬるに日いずる事のをそさよなど一人ごつ程に霞は早や消えそめて鎮守の森

の小さき鳥居も見へ來ぬるに東の空の赤くなり來つるは最早日の出も近かるなる可し見かへれは遠山の霞も今はまたく消へ去りてましろくなりてつもれる雪の見ゆるにそゞろに寒うおぼえぬやがて旭子のうら〳〵さのぼり來て野も山も家も又一色の色まして見ゆるに垣根に生ひ出でし若草のよべの露のかゞやきてきら〳〵さ玉ころがしたらん樣なるもをかしやがては勝手の方よりばた〳〵さ音し出でぬるに弟の大聲に叫ぶ聲のうちまじりてきこえ

評　題目はよろしかきざまはあまりになげやりなり今少し心さめてかき給へ又假字の誤り多し心したまへ

◎花を惜しむ

神奈川縣橘樹郡生見尾村鶴見　木山喜美子

けふは、終日雨ふりて、いたつらにながめくらししを、宵すぐる頃より風さへはげしうふきいでゝ、まさうつ音いさすさまし。あはれ庭のさくらも、きのふけふ、やゝにほひそめぬるを、この雨風にいかがはあらん、なさけなきことにもあるかな。なさつぶやきつゝねられぬまゝに、思ひつゞくれば、やがて庭鳥のこゑきこえて、夜もあけにけり、なほ、雨風やまず、さくらの梢をみれば、花は色もあせ、香も消えて、名殘りなく散りはてにけり。この花のさかりにならむころには、したしき人々つさへて、いさゝか遊びせんさちぎりをきたるも、今はかひなし。げに、うつせみの世の中なりや。さるはかきれの雪消えはてゝ、わか草のもえいづる頃より、いつしかさ、まち遠にのみ覺えて、かく氣色たちぬるを、關風うちつゝきて、ちらしぬるこそ、くちをしけれ。むかしのふみにも、心あはたゝしう打ち過ぎぬ。なさあるは、かゝるありさまをやいひしならむ、ひさたひはさかえ、一度は衰るは、よのならはしなりさ、きゝしかさ、いさあわぬことに覺えて、かくなむ。

◎冬の夜

神戸市兵庫港町貳丁目四拾五番　福永りつ子

春さしいへど松ふく風もいさつよく空は今にもゆきかあられかふりやしつらんほどに一面灰をまきしやうにたゞらるゝばかりに庭のそめ〳〵たるもみぢ葉もこのつれなき嵐に誘はれやり水のすみへさ流れよるもあわれ窓もる風の身をきるばかりなるに白うなりたる埋火かきおこす折しもたが家にや炭うちくだく音の聞ゆるもまた哀なり夜やふかさば風にや犯されんにさくいればやさ例よりは早くよるのものかつぎあたりもしづかに松ふく風のはるかあなたに聞ゆる折しもたが子なるらん飄簞山戀の辻占さ風に送られてさてはこの夜寒にあたたかき母の情のふすまをもかつぎあへず人のゆきゝもさだえ犬の遠吠のみきこゆるこのさびしき里をひさりよびつゝゆくぞあゝ哀れいで我もあがないてをさめの爲に今宵のこがれやまさんかしさやをらふしどをぬけいでゝ見れはかゞやき渡る月はすさまじく門をよこぎる小川の水はさえたる月の玉をくだきて板橋には早霜の花をゝきてものすごきことさいはん方なし小さき子よそれあがなはんさよびしにやがて近づくみれば十歳位さおぼゆる女の子のやれしつゞれに身をまさひかみさへはら〳〵さ小さき肩にふりかゝりこれをさいだす手をみればあはれにも寒さのためかやさころ〴〵にはれ上り血のあささへありあまりのいさほしさに藥をあたへなどしつ親ある子やさたづれしに否さよ我は不幸にも親の顏さへしらぬもの姉さ二人に世を過す姉なる人に常にきく我やうみけんそのさきにこの世をのがれしさきゝつれさ言葉すくなに打かたり早くもあゆみをうつすに暫しまちれあすの夜も又こよかひてさらさんに犬なさにちかづきれ心してゆきそさいふうちにかな

たはいやしつゝ月をふんでしき/\飄蕭山巒の辻占といふ聲さへも氷るばかりなるに哀れさはいやまして涙さしぐむ折しも夜ふくる風のたゞならず覺ゆるにからうじてれやにいりぬあゝこのあたゝかきかぞいろのかがりなき恵にあふ身にすらもなほも望は胸の一すみにさまよひつるを今のなさめにかへりみ幸なき人を思ひおこすに共によしなき望はたちはてしなき思あるかぞいろのみ膝のもとに仕へまつるこそと永き年月都の友を慕ひしの學にとの望も今宵のさえたる月に洗ひさられてみ膝の本にと新らしき一筋の光をかのなさめにあひて始めてみとめぬいで物縫ふいとまにはしをりの文をひもときて牛の歩みのおそくとも正しき道におりたちてしづかにゆかれ文の山路を

しづみゆく入さへ世さへこの夜半をかなしき壁にいづちゆくらん折しも遠音に聞ゆるは峯のあらしか松風か琴のしらべに耳をかたぶけてきくは「さむしろの曲」失望のふちに泣く人がひとりうらみを糸にはらすにや哀れさても思ひおこすはこぞの秋色づきしもみぢ葉と共に散にし君をたゞ忍ばるゝ昔なりけり

なき友のれむりし床やひえぬらんつゝみてかくを松の落葉よ

◉汐干狩

鳥取市立川町一丁目　澤よし子

一年父君の保養にかこつけて一家こぞりて程遠からぬ海水浴塲にものせし事ありけり妾等のとまりしはたしか柳やとかになほへぬ、さすがに田舎の習ひとてよろずまめまめしくいと親切にとりなしくるゝに心うれしくて一日二日は只夢かとのみ打すごしぬ或日の事なりけり主婦の今は汐干にて侍るに如何にやと云ひしに妾は初めての事なれど何となうおかしふ思ひてさらばゆかんと云ふに主婦は心ささくも十五六計りのげんき氣なる男の子を案内にとて付そへくれぬ妾は手早く身仕度して弟と共に主婦の渡しくるゝ小さき籠さけて出たちつやがて渦邊に至りぬれば實にも可笑しき眺なりけり昨日迄は海神の棲處とも思へし邊りは今は打くるひし浪の影だになくそこゝには異様にまがりくれりたる石の浪はし氣にたちつ弟の目ざとくも走りよりて岩につける鮑かきなど取り來て見するもをかし沖邊はるかに見渡せばめざしぬらすなとは云ふ可くもあらぬはるかあなたにかすかに白浪の打よする見ゆおちこちには早あまたの人々むらがり出でゝあさる有様のはふ様に見ゆるもおかしくそが籠には巳に玉や貝やみちつるならむあかぬ眺めにしばし立ちぬるを弟の早く/\とせきたつるものから心なくも誘はるゝまゝに從ひ行けば何にかあらん足にてふみつけし氣味わるさにあと驚きてふりむき見れば實にもをかしかりけり子にもやあんいと小さき河豚の水にはなれて苦しみ居たるを妾がふみしなりけりあしき事してけりと思ふ內供の子供の走りよりて籠にとり入れんとするにぷと腹ふくらしてをこり顏なるもいみじうをかしかりけりそれより三人かたみに笑ひさゞめきながら取入るゝ程にもはや二時計もすぎぬらんとをぼしき頃には三人の籠にはあふるゝ計にめずらしき物のみちみちたれば妾は父母もまちわび給ひぬらんに早くもちかへりて喜ばせまいらせんとて否と云ふ弟をばしいて誘ひ歸りしは早入日もま近くて苫屋の煙の風なきものからますぐに二條三條立のぼる頃なりけり

◉冬夜の母

佐藤德子

雪げの風のすきもれて寒さは眼にしみ渡り堪えがたき冬の夜半あわれ頑是の乳のみ見は如何に寒さや覺えぬらんやよいとし子よと夜もすがらいねもやらずおのが身の寒さもうちわすれ乳をふくませ布の子うち着せ母

親の厚きなさけのありがたき世に子をもてるたらちれの親のこころは皆ひとつ露の間もわが子の事のみわすれ得ず六とせ七とせ打すぎて學の園にかよわせてと末のすゑまで樂しみておゝしそだつる親こころげにみめぐみの程こそうれしけれ古き言の葉に子をもつて知る親の恩と宜なる事になん

◉雪のゆふべ

信濃國東筑摩
松本町大名丁　浅川秋子

あだし野の露きゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住みはつる習ひならば、いかにものゝあはれもなからん。げに此世に生れしものゝ、死ぬる時なくてやは。さるを日影まつ間の末の露の身はのこりて、葉隱の本のしづくの消えうせぬるこそ、いと〳〵かなしき事のきはみなれ。去年の末つ方、我はいとしき弟を失ひてより、心の闇にくれまどひてか、何事も手につかず、唯おのが部屋にのみうづくまりてありけるが、此頃に至りて心すこしくのどまるやうなりゆけば、折々は皆人のまとゐせる埋火のほとりにもはい出でぬ。

今よいは雪さへふりしきりて、心何となふ晴れ〳〵せざるに隣室にて父上の笑はせ給ふ御こゑ聞えければ、何ならんと障子引きあくるに、兄上も共に居て何事をか語らせ給ふ。今迄は唯の一度も顔に笑味をだに浮ばせ給はざりし父上の何故かくは笑はせ給ふらん。何事をか語らせ給ふと兄上に問へば、否とよ、いたく笑ふ程のことにもなけれど何故とほどに恐ろしかりしかと、昨夜の事ども語らいて笑ひぬ、とのたまへば、さりとはよべ如何なる事の侍りしかと伺へば、おゝなれは知らざりしか。昨日は弟の命日なれば墓とはらしにもがなと寺に行きしに、山陸の方になれば雪はまだとけやらで道いと悪しくともすれば傍を流るゝ清水に落ちんとし、一足ごとに心おきして行きしかば、思ひしよりも手間どれて、寺に着きし時はゝや夕暮近くなりぬ。墓の前に座しなほあるものしてうせにし後の事ども打ち語らふ中に日は全く入りて歸途のおぼつかなければ住持の進めによりて寺の片隅に宿りぬ。さはれ家にては年老い給へる父母のいま歸りこんと待ちわび給ふらんと思へば心おちいで村に行く人もがな、ことづてやせんと思へど山近くの事とて人かげだに見へず、さぞや案じ給ふらん、何とて我は卑怯にもこゝに宿りし事のはづかしさよ、と思ひめぐらせどせんすべなく、已むなく小坊ののべくれたる夜具かぶりぬ。ふと目さむれば、風そよ〳〵と吹き來り枕邊の燈火あはや消えなむとする折しも庭なる竹に積れる雪の堪へえでか、さらさらと音して落ち來るに打ち驚き、何事なるかと耳そばだつれば、風の唐紙に當りてごと〳〵と音せしに人や來ると疑ひいそぎ夜具引きかぶりしも猶何なるかと隙より恐る〳〵のぞき見るに何の音だになし。幽靈なるか、否此世に化物などのあるべきことはりなし、とひとり打ち消しつゝもなほ心何んとなうとゞろきて目ふたがんともせず。忽ち隣室にばた〳〵と鼠のかけいだしたるときは靈も失せ魂も去り、夢中にて傍なる押入に飛び込みしに計らずもくもの爲にかゝりて膽を冷やし、如何なさんと思ふ折りしも寺の傍なる賤が伏屋のとり時をつげしかばいとうれしく、いそぎ臥床を出でぬ、と長き話し語り給ひし時はをかしきやうおほへしも、常より心つよく膽も大なりと友の人々にいひもてはやされたる兄上の今宵は何とてかくひきやうにてあり給ひしかと思へば、あはれいやまして覺えず涙頰をつたひぬ。

◉都の友に

肥前　筑紫女

うら〱と霞わたれる野山のけしきに百鳥のもゝとさへつりの聲も心地よけなる頃しも思ひのこすこともなくおはしますらんとおしはかりたてまつるもみなつかしうなんとてはこそのやよひの花の頃袂を別ちまゐらせては同し雲井はなかむれど月のかつらをたおらんとひろよなう學のわざにいそしみ給ふらんなどつく〲思ひめぐらせは數ならぬ身のまゝならぬ世をかこちうら山しくもかなしくもさま〲なり扨は例のくた〲しきこゝともに取まぎれて心ならずも日をふるほどに菅の根のねもごろなる御せうそこ給はりたらめの心地してうれしともうれしう繰返し侍りぬさては申いでんも殊更めきたることとながらはしめてたいめ給はりしよりあるかながにもあやしきまで心のかよひあたことにもまめことにもむつれなりきて春のあした花のかけにさまよひしも秋の夕虫の音たつれけんときのふけふとおほゆるにはや四年のあなたになりぬるか取り返すものにもがなやと打ひとりこたるゝもかつはあやしまことやとの學の窻にありし時ちかひしことは身をこにしてもとつかのまも思ひ忘るゝことはなかりしをうきことのみさま〲にてひたりみぎりに苦しき身となりしより忘草にと新聞雜誌なとまさゝりてなくとめ侍りぬそれにつけてもおもひめくらせば身はあまさかる鄙にありなから都の御方にのめてたきことゝもを承るはこよなきさちとおもひなくとみ侍りて今よりは何事をか心にかけ侍らん只花の錦を故郷によそほひ給はん春を手を折りてまつよりたけきことは侍らしかしなほ大せつの御身自ら御いとひのほど祈り上げ奉つるになんあにかしこ

◉亡　友

豐前國京都郡
豐　津　村　岩田てい子

かれてよりかりそめならぬ御病とはきくものから猶御齢の盛りなるをたのみとりともやがてはと一すぢに思ひ入りてありつるにゆくりもなく篤しくなりぬとくこよとのことによろづを打ち捨てゝ御枕のほとりに行きし時はあはれあてなりし御面は色あせて早も目をとざしたまひし後なりけり

父なる君はなくて母なる人のみいと心許なげに居たまへるが先のほどより御身をまちわたりぬ早くとて已のれ來しむれ告げたまへば僅に眼をひらきたまひぬされどそれと見わけたまはん樣にもおぼえねばたへがたくて僻りをも忘れつとよりつ音をたてゝ御手をとれど答はなくてあなかなしありし日頃のあたゝかみはうせたるにかすけきひゞきのいと低くつたはるのみ

四園の人皆寂として つく息の音のみたかし

今はかぎりなりけりと思ふに胸のみとゞろきて御面打ちまもる眼もかすみとゞめあえぬ涙はかひなく袖に包みかねつ

まだ咲きそめぬ梅花に先だちて末はるかなる花は遙に其の夜半にちりね

芳紀漸く十七おのれには二つの姉上なり

年久しく交りを辱ふせしにはあられども東の京にありしが同じきとて何事もへたてなく語りたまひぬればなつかしくてたゞ姉君と計りたのみ奉りしをこれよりは彼此世を異にして何事もむなしきゆめのあとゝ化し去りし事こそかへすゞ悲しき事の極みなれや

いとせめてかたみの御筆のあとたまひし小箱など取り出で見ればまさ〲と其のかみのありし事ともまさ〲と湧き出つ忘れては御名をもよばんとするぞあいなきややがて新らしき卒塔婆の下に安らけくねむりたまひし朝手向けせんとてとひまつれば母なる君のいといたうやつれたまへる御すがたを見ぬとゝれたる生花つゆ重げなるも心ありての業にやそゞろにさしぐまるゝは例のとゞめあえぬ涙になむ

◉春の曉

伊勢國宇治山田町中之切横地方　鎮東國子

一痕の殘月は烟の如く淡くして、西の方御城の杜の松枝をすべり下りむとす。遠き東の雲の色は紫となりまたほんのりと紅色にかはり、この夜の間の安定をこし方行方を夢むなるべき。その紫其の紅は延ゐて西山上一痕の月を蹴おとして行方知らず沒らしめ、夜のねむりを貪りなりし木々の花草々の卉はたちまちに驚きさめ已がまに〳〵薫香を競ひ出で、塒にねむれる百鳥は吾こそ先驅と其の嬌舌を弄して花卉にたはふれ、その間をぬひ去り縫ひ來り夜の暗黑を破りて、この世にねむれるよろづのものを夢を驚す、その聲其の音ほがらにきこえ、里の小川邊に並べる松瞬の下路ほのぐらるゝよべ行き交ひし里の夫等か足の痕ほのかに見えて其の梢をこゑて飛ぶ鳥の行手やいづこ。西山麓間垣低き邸二三見えつ隱れつはては犬走り子兒走庭の花蔭に戯ふるゝ、金烏の神は東の松杉の間にほのめき眩まんばかり、この靜けき夜の闇を破りはては人のさはき、人ゑらぎ、怒り、悲みともなりてまたく其雜閙塵埃にからまるゝさまともなり行く前、このしづけきまさる夜を守り玉ひし小さき神は雲の臺の内に歸り去に玉ひ、雲は走り湧き出でゝ花の香を羽翼につゝみ、早く風は小篠を吹き清凉瀨々鏡の如き水上をかすめ朝の淸き天女の賜をうけふきて、一陣冷き息と共に花の馥郁たる香をもたらし去るげにうれしきこの春の曙ぞも。

夕立

豊前國京都郡豊津村　岩田てい子

あすよりは梅雨なりといふことさゝしは何日前にかありけんてりにてりはたりにはたりし其の日頃生ひ出で居る早苗の色は赤くさる人の顏は青かりつれど藍色の天は曇りだになければみ空を仰ぎつゝ嘆聲をもらしにし人やそも幾人なりしぞ

一月計りをへたるけふ午後俄然西方に山の如き雲出でぬ暫くにして其の足は早みぬ風の音は氣色ばみぬ草の葉木の梢南に北に靡きわたりて遠方にひびくおどろ〳〵しき音物凄しすは干したる物をといふほどもなく落ち來る二滴三滴顏にあたりゐりに入る今更に驚かれてかれをもこれをもと思ふま遲し肺然として來たる雨颯然として起るしぶき北の雨戸閉づるひまだになし

先つ方まで梢になきし蟬のこゑはたと計りにとまりて軒の玉水自からの調いと急なり

暫くにして雨やみ雲はるれば一天拭ふが如く草木の新綠美しくかへり葉末に滴る露を玉かと問ひつ稚子外に出でぬこゑも朗らかになき出でたる蟬をさらんとてにや

◉寒梅

群馬縣師範學校　原澤義子

庭の木の葉は落ちはてゝ、只のこれるは、吳竹、松杉の類のみ、雪はまばらに足引の山をくゝり、氷はたきを、白金の糸により、朝なあさなおく霜は、ゆきとばかりしげく、夜ことにすさぶ山下しの、寒さいみじく、肌もさかるゝ心地して、山寺の鐘さへこほりてひびくなり。いつの間にほころびにけむ、今朝は垣根の梅が枝、やう〳〵白う見ゆるほどになりたり。蒸氣の氷れるにか、上枝下枝のきらひなく、ひたかゝりにかゝりて、朝日にかゞやきたる樣、さながら白金の針を、所もなく立てたるごと見ゆ。木の下行く川水の、岸べの枯草に玉なす氷もてるが、白妙に匂

へる梅、のうつるなりけり。日影漸くあたゝかに、枝のつらゝもとけさり、香はあふれて鼻つくばかりしげく、此處に杖ひく人もあり。足を止むる人もあり。鶯ならぬ雀さへ、花がくれに、囀るなり。夕日斜に落ちて、雪ふりそむれば、枝もたわゝに、香も埋るゝばかりなり。雀のねぐらへかへるにか、とびたつことに、ゆきの落つるに、あはれ花の散るにかと、靜まりたる心もなし。冴え渡る月の夜に、雪のひかりの照りそひて、花は雪にまがひて分かれども、香のみはしるくにほふなり。作らぬ枝ぶりゆかしく、戸の間もりくるともしびのかげ、ゆきにうつりて、一入をかし。宿の主人もいねがてに、木の下かげに、たゝずめり。かばかりの梅が枝に、鶯のなきたらばとおぼゆ。

萬の草木芽をひそめ、枯れたることきさまなるに、此の花のみは、手足もたゆるゝばかり寒きに、ひとり踏の花に先たちて咲く、其勢のたくましき、其姿のけだかき、何ものかこれに並ふものあらむや、さればにや、ますら男子も、みやびをも、翁も、乙女もめづるなり。あはれ、女子にして、此花に等しからましかば、何れの事かならざらん、如何なることか遂げざらむ、人としてあらまほしきは、此の花の心にこそ。

◎友に雑誌を贈る

神戸中山手通七丁目三十一ノ九十四　橋本光子

雪に堪へ霜を忍ひし梅の花咲き初め申候あなた様には御變りもなう御勉強あそはされ候よし御目出度ぞんし上げまゐらせ候次に私事家事の都合により先月の末つ方山手の學校を退そき唯今は專ら裁縫にふけり居り候それがため書見なとは少しもいたさず折々新聞やら雑誌なとを散見する位のことに候ことにこのほど博文館より出版仕候女學世界と申す雑誌を購讀いたし候ところまことに面白く婦女子の世に處しゆく道を始め家庭の修め方は素より女の龜鑑となるべき人の傳記あり技藝欄あり學術欄あり社交欄あり又文苑欄には世の才媛方の投書を揭げられたる等何つれも私共を益すること鮮なからざるやう感し申候就ては面白き有益の雑誌あらは早速通知いたすやう御話これあり候間この雑誌こそ御すゝめ申したき文と思ひ出て候まゝその後の御不沙汰御詫かた／＼御知らせ申上候あら／＼かしく

追て最近發兌の分第二號別册の通り御送り申上候まゝ御熟覽下されたく候

◎梅　　いさを

すきまもるあさかぜのえんにかをりくるがゆかしうてまど押しあくればのきばの梅のみつふたつ笑ひそめたるなりけり、そのにほひのこゝろことなる、其すがたのすが／＼しきはさらにもいはず、ふるゆきにもたはまず、さむきかぜにもをられず、もゝのはなにさきだちて匂ひ出でたるみさをのたかさはげに似るものなしやと、いよ／＼あうよなうてうちながむるほど、朝日のかげのうら／＼とさしそへたるまたいはんかたなくて

◎初春　　三重　なにがし

昨日今日はいづる日影うらゝかにあたりの景色何となう春めきたり笑ひそめたる軒端の梅はいと清う打かをるに谷間をいでし鶯のまだうら若き聲にて彼方此方に枝うつりしつゝ鳴けるこそいひしらずなつかしけれと

ろは垣根になびく青柳の下にはつかにもえいでし小草のわかみどりあらそひがほなるもなつかしきや見渡せば四方の山々名殘なう雪消えていつしか空長閑に匂ふ霞に遠きも近きもおしなべておぼろなり野べには紙鳶あげに餘念なき男の子等そよ／＼とふく春風にたもとふかせて若菜つむ少女など愛らしとも愛らしあはれ四季折々樂しき事は數多あれど樂しみのつきずしてなほ野に山にあるは海邊にもろ／＼の花鳥の色音汐干狩などのたのみ多き此春のはじめ程心のびらかに樂しき時はあらずなん

◉雪の朝

大阪高麗橋五丁目　宮地あや

衾にさゆる寒さのたへがたくてふと目さむれば夜は已にあけぬめり戸おしあけてながむるにいつ積りけるにやそのふは一面に白銀をしき冬がれし木々の梢に六つの花さきみちて春のながめにもまさるけしきいひしらずなつかしきにいにしへの人の簾をかゝげしもかゝる時にやとゆかしくなら

◉所思を述ぶ

いさを

「人生婦人の身となること勿れ百年の苦樂他人による」と實に女子ばかり世にはかなきはあらざるべしされどこれ畢竟女子には何等の觀念なく何等の辨識なく空々寂々只人にのみ依賴して年月を過すの故のみさらば獨立獨行萬業男子に傚はんか否これ其やむなきの時に於てのみなすべきの事にしていかで女子の天職を全ふしたるものといふを得ん只よく精神を修養して一定の見識を保ちよく勉學して智力をみがき其常時に於ては父母を安んじ所夫をたすけ子を戒め一旦不慮の事にあたりては自活して孤兒を敎育し其節操を完ふして所夫を辱しめず以てよく家名を持すべし此の如き女子ならんには萬難に遇ふもよく之を排し不屈不撓以て其本分たる重任を果たすを得ん豈終生の苦樂人にのみよることをなさんやたゞ一定の見識なきに於ては男子と雖ども異ならざるのみ

◉梅花を贈る文

信濃國小諸町　吉澤せん子

文して申進じ候其後は御無音に打過ぎ候處御すこやかに御學びの道に御勵みなされ候御事と祝上候さて御岳淺間山の雪は去年のまゝ殘り居候へどもおひ／＼寒さもうすらぎ日にまし長閑に覺え候さる故にや我宿のまがきの梅も枝を交へて紅の如く雪の如く咲はころび人待顏なるも來て見る人もなく只谷の戸出でたる鶯の妙なる調のみ一人もてはやさんも惜きと存られ候まゝ紅白一枝を手折て御文机へ參らせ候間御勉學の御餘興にもと御留め下さらばこよなく嬉く存じ候猶御高意にも相叶へ候はゞ玉詠一首を給り度所居候明日は幸ひ日曜に候まゝ妹子樣御同道御入被下候はゞへだてなき友二三を集ひ樹下に筵を設け木傳ふ鶯の聲は琴を和し昔の人をまねきて歌合など致し花見の宴を心行ばかり樂しく相催しなば園の花も今一しほの香をまし候はんと存じ只管待入候かしこ

◉勸學する人に送る文

神奈川郡橘樹郡
生見尾村鶴見　木山喜美子

日頃は殊の外なる寒さにて凌がたく候へ共いよ／＼御きげんよく入らせられ目出度存じ上げ次に私方一同無事に暮し居り候程に御安心下され度

候払て日毎に開けゆくまゝに物事改まりて婦女子も皆學校に就きて書を讀み字を學び無能に成長せざる樣に成り行候事と存じ候これ皆盛世の御恩澤にて最もありがたき御事に御座候さて仄かに承り候へばあなた樣には近頃非常の御勉强にて明けくれ怠らずほたるの光窓のみゆきもたゞならずさぞなたのもし君が行末好果を結び名聲を御流しなされ終には御兩親樣の名までも御あらはせらるゝに至るべき事と存じ候都て女子の至らざる者は學問の一を知り得れば自ら慢ずる心をいだし學業の進歩にさはりを生じ知らず／＼高ぶりて人を卑むるに至る者なれ共あなた樣には御性質さとくおはしませばかゝるいやしき事もなく誠に上なき嬉しき事にて尙此上共御志をへんぜず御勉强なさるゝやう祈り上候かしこ

品川沖の網船遊び

東濃可兒區池田村
諏訪尋常補習生　長瀬一三

東京朝日新聞社員中島市三郎氏は予が父と共に上京せるを幸ひに品川沖に網船の豪遊を試むべく勸めらる

父は出立の時刻やら遊びの手順やら船までの順路やら何やら角やら問合はすとて中島氏の宅に行かる予も伴はる父は中島氏と予は氏の妻たつよ樣と色々の話に時移り殊に氏は濃茶ずきとて予にも數椀を强ひられ予は終に其茶に醉ひしにや宿に歸りて床に入るも睡られず左に右に輾返りし或は夜具を面に被ふて見たり或は打伏し或は仰むき時鐘は十二より一二三と撃ち去り撃ち來り僅かに四時のみ其音を聞落せるのみ父は例の高鼾なり六時は中島氏と約せる時にて女中は已に煙草盆など運び出しぬ父と共に中島氏に抵れば尙喫飯中なりき六時はすぎて卅分相携へて芝の増上寺前に出しが八時前とて門は尙閉されぬ二代將軍の靈屋のみは其門開けり入りて拜する程に雨は霏々として降り來れり船は如何あらんなどつぶやきながら門側に佇む程に雨は小止になれりし故金杉の網屋に抵れば大待兼て予等を迎へぬ

船人の霽るべしといへるに力を得て船には入りしが時刻既に後れて潮退ける故に糊の如き泥は船を粘して船人は非常に骨折れり船は地方の川船位にて中には客の衣裳などいるゝ櫃と網を繕ふ糸針など入るゝ箱の外醬油酢味噌芥子砂糖鹽などの割烹に要するもの備れり予の爲には茶菓まで注意されたり

船人は一艘に二人漁する時一人は網一人は櫓をとる船は金杉の橋下をすぎ製鐵所と瓦斯會社との間より海に出で德川氏の築ける臺場邊に向て漕ぎ行く朝日新聞や時事新報は廣告を兼てにやあらん此等の船人に印付を賜るが予等の船のは固より朝日新聞の絆纏なりき

魚の集れる所は定るが予等は臺場の西北端より其以南にて予等より先に在しは十二艘予等より小一時おくれて一艘來り合せて十四艘となれり客は豪農商より記者官吏等多く案内知らぬ田舍ものは七八圓の費を貪らるゝもありといふ晝夜に分ちて晝は日出より日沒迄とするもの大抵は三四時頃に歸るもの多し魚の種類は時と日によりて異なれども予等の日にはせいごさッばなど多かりき量も一定ならで時には船にて煮るにも足らぬとありとぞ予が網船にて最も壯快を感ぜしは其網を投る時にて例へば予等の日の如く十四艘なれば七艘づゝ分れて方一町許を左右より追寄す網を持つものは其間に整へて艫に立つ櫓を押すものは程を計りて聲をかけ近づく八九間となるや網は各三四坪を覆ふて一齊に投らる網に漏れし魚は跳り揚る數尺迴れんとして却て船に入るとあり舳なる櫓手は快速に船を網上に一轉し而して各船の位置も爰に換らる靜に上ぐる網に予等の船は一回に七八十尾を獲しとあり潑剌甲板の生簀に投ぜらる壯絶快絶遠望には投網を快とし船中には跳魚を喜ぶ拙き筆には其情盡し難し

生簀は船底に方三四尺の箱を作り栓ありて自由に海水をひき其孔には金網ありて魚の逃るを防げども水は新陳代謝するなり概して午前は獲ると多く午后は少しといふ回を重ぬる程に予は漸く倦み殊に昨夜の疲れに何時の間か予は父の膝を枕に華胥にいりぬ船人は客の好みに任せて膾を作り天麩羅となし我は赤貝鹽燒き客ば飽く迄腹に滿すなり呼醒されし頃ば已に割烹の最中にて時は正午を稍過ぎぬ父に扶けられて眠りを海水を洗へば朝の雨雲はとく晴れて爽風水を吹て金波を湧し横濱より來れる滊船は海を蹴て銀塊を碎く山陰にのみ育てる予等には見るとして驚かれざるものなし

午後三時船を返す獲れる魚は皆予等のものなり徑一尺五寸深さ四寸程の盤三杯に盛り來る非常の豊漁なりしといふ車を貸して中島氏に送り予等は芝浦の某といへる海水の湯に入り鐵道馬車にて新橋に抵り緩歩中島氏に着けばたつよ樣は早くも種々に料理して待たれける時に午後六時半なりき斯る遊びも慣れし都の人々は左程にもなかるべきが初ての者にはは忘れられぬ樂みなりしまゝ今思しつゝ記して紀念とはなしぬ

◉紅梅に水仙をそへて送る

高知市高等小學校　竹村　義

ゆきげのさむさにて、埋火のもとさりがたきに、庭には紅梅の此霜にもさらされて、操たがへす、蕾まちがほなるはいといさまし、又池のかたほらの水仙も、はやさきそめぬ、けに此花はやさしうたをやかなる美人のすがたに似合ひて、優に見らる、人もかくありたき事になむ侍れば、梅に水仙を添へて御覧ぜさせ侍る、こは口さがなう聞へさすべからぬをすさびて、卑なき草木に笑はれぬべくこそ、かしこ

◉水

相模國足柄郡吉濱　石田ヨシ

水能く船を浮べ又能く船を覆すと蓋し一利の有るところは必竟一害の伏するところにして千事萬物皆此數に漏るゝをなし唯其利を取つて其害を防がんのみ水や散しては雲となり霞となる集つては雨となり雪となる忽にして虚空を彩り忽にして虚空を蓋ふは雲の力ならずや嬌鶯壁を弄ぶの時模糊として山を粧ふは霞の力ならずや雨となつては能く國土を潤ほし雪となつては能く汚土を銀に化す滔々たる溪水は洋々たる大海に注いで盡くる時を知らず集つては散し散しては集る集散其宜しきを得て吾人を利するものは夫れ水か

◉賞梅詞

美濃大垣田町　樋口たんど

花とし云へば、あまたありて、愛すべき、ものもまた多し、さはいへ、人の異るより又愛する花も殊なるぞかし、昔し、唐國の陶淵明とかが云へる人は、いさゝ、菊をめで君子の風ありといひ、わが國の菅公は梅をこよなうめで給ひ、已が園に植ゑて此生の友とせり、あはれや、公の配流の身となり梅の別れの悲しく覺ゆるまゝに

こち吹かば香ひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ

と一首の歌をよまれしとか嗚呼、妾も又公と等しく梅を愛す、そは如何と云ふに、梅や嚴冬の候をへて春立つと云ふばかりなるに、獨りよろづの花に先ちて花を開くにあらずや、あゝ之れ聖人君子の風ありとなす菅公のこれを愛で給ふや、げに理りあり

懸賞文募集

本誌には初號以來『才媛詞藻』の欄を設け、毎月一回賞を懸けて海内才媛の詞章を募集す、是れ方今の才媛文學を奬勵せんと欲するの趣旨に出づ、其の選評者は何れも國文學界の泰山北斗とも稱すべき大家先生也、海内の名媛乞ふ其の美感佳想に成れる玉作を投寄して新世紀に於ける才媛詞壇を飾られんことを

●國文（一行廿四字詰五十行以下）　●小説（一行廿四字詰百五十行以下）
●普通文（一行廿四字詰五十行以下）　●新躰詩（七五調二十句位）
●消息文（一行廿四字詰五十行以下）

右各種の投稿題はいづれも寄稿者の隨意たるべし但し政治的時事論に渉らざると、亦小説は可成優美なるを佳とす（〆切毎月十五日限）

優等者懸賞品（今回の分）

甲賞　圖書切符金壹圓
乙賞　圖書切符金七十錢
丙賞　圖書切符金五十錢
秀逸（三品）　薄賞を呈す

和歌兼題

四月分　雲雀　汽車（〆切三月十五日）
五月分　月前郭公　展覽會（〆切四月十五日）
（天地人三名を選び懸賞文に掲げし賞品の乙以下を呈す）

投稿規程

一、本書は女子の手に成れる投稿を歡迎す
一、投書の種類は文章（文躰は國文及普通文に限る）詩歌（新躰詩及短歌今樣の類）小説は優美にして卑猥ならざるもの等とす
一、投書の期日は規定なきも懸賞文は所定に依る
一、投書の用紙は半紙二ッ折（和歌は端書に限る）半面十行一行二十四字詰にて文字は正楷に限る
一、投書は各種類を別紙に認め匿名を欲するものと雖とも必ず其姓名住所を記載するを要す
一、投書の送附は博文館編輯局宛にて封筒の表面に『女學世界原稿』と記載すること
一、投書は採否に拘らず一切返戻せざるものとす

社會的見聞の材料として、左記各項の範圍に就て普く江湖諸君の寄稿を募る
▲家庭及び地方風俗に關する雜聞　▲古今東西の兒童に關する譚話　▲各地方に於ける婦女子社界の狀態　▲孝女節婦の美談佳話　▲其他本誌の參考となる者

學事

跡見女學校

巍然空に聳ゆるかと思ふ傳通院を右手に見たる小石川掃除町の一角に、餘り壯觀ならざるも何んとなく清楚なる西洋館あり、最も長き創立の歷史を有せる女學校として、明治の才媛跡見花蹊女史の主宰せらるゝ學校として、殊には歐化主義の女學校多き裡に於て別に一異彩を放てる日本主義の女學校として、其名聲江湖に高き跡見女學校は即ち是れなり、

記者一日同校參觀に赴く、到れば幹事某氏に導かれて日本風の一室に入り茶菓の饗應を受けつゝ本校創立の歷史及び本校に於ける女子敎育の主義を聞く、抑も本校は明治八年神田猿樂町に創立せしもの。當時我國上下共に西洋の文物制度を採用するに汲々として、一も二も彼れの風習に摸倣するを以て最大の得意となし歐化主義は一瀉千里の勢ひを以て我れに入れり、依て當時の女學校を見れば公私共に皆な歐化主義にして其結果我國固有の優美にして從順なる女風を見る能はざるの觀あり、花蹊女史之を觀て慨嘆措かず斯くては今後敎育ある子女の多くは所謂お轉婆とならん、此際日本純粹の主義に依り女子を薰陶せざるべからずとて神田に一小女學校を創立せり幸に世上同感の士に乏からずして子女の敎育を托せらるゝ日に多く狹隘なる校舍は之を容る能はざるに至りしを以て遂に明治二十二年に現今の地に新築移轉せり、當時此地一帶は殆ど田野とも云ふべき程にして學校の四邊には人家を見ず頗る寂寥寧ろ清閑なりしに今や賑殷の一市區となりたり云々と、軈て導かれて校舍を參觀せり、聞く現今の生徒は三百四十餘名にして通學生二百九十名に上り、寄宿生又九十餘名あり、尙ほ此他に入學を申込める者五十餘名あるも校舍狹隘にして容るゝ能はざるなり。

◎本校の主義方針即ち校が女子敎育に對する骨髓眼目とする處ろは校の主宰者たる花蹊女史の理想たる「女子の敎育は單に技藝を敎ふるにあらずして婦德、養成にあり」といふに基き優美にして貞烈なる本邦婦人の特質を發揮するにありされば女子は初めより多くの事柄を知るよりも寧ろまづ其の修身齊家の根元たる精神を確乎にすべく敎養し而して後ち一家の主婦として各々其の分に應じて爲すべき諸般の藝能を修めしむべし

といふにありて其の修身齊家の婦德を養ふには經書に據らざるべからずとなし、聖經賢傳を以て女子薰陶の一利器となすにありと、思ふに方今の如く智育熾んにして往々婦德の敎養を缺ぐが如き時勢に當つては本校の主義の如き、蓋し一異彩とすべし尙ほ本校は其の創立の年所の久しきと、其の家庭的連絡の密なることを以て卒業生と學校との關係深く姉が曾て同校に學びしを以てその妹も又入學を得たしといふあり若くは創立の當時に入學せし生徒の如きは嫁して既に子女あり、母の學びし所なるを以て其子女は是非入學を得たしとか云へる狀態にして、殆と生徒募集の廣告を爲せることなきなりと、以て同校の生徒を薰陶するの一般を知るべし同校が其敎育に最も力を盡す所は國語、漢文、裁縫、抹茶、繪書の諸科にありて殊に裁縫は婦人家に居るの任務中最も重きものとなして敎ふ現今の華族女學校の創立せるゝまでは上流の子女は皆な同校に學びしもの從つて今日も上流の子女多しと云ふ。

日本女子大學校

二十世紀女學の興隆に伴ふて設立されたる日本女子大學校は昨年九月より校舍の建築に着手し爾來工事は着々として進捗し、豫定の通り來る四月より開校する事となせなり。

本校の方針

本校は數年前成瀨仁藏氏の主唱に成り府下の貴顯富豪並びに關西地方富豪有志家の贊成を得て十餘萬圓の寄附金と三井家より寄附せし五千四百餘坪の校地とに依り設立せしものにして其の方針とする處ろは過去に鑑み現在に照らし又大に將來に慮り、爰に女子を人とし、婦人とし、國民としての三方面より敎育するの方針を執り、本邦女子の心身の能力と日進月歩の社會の狀態とに適合せる一定の高等敎育を授け其の地位と實力とを高め能く社會の進步推移に順應して女子たる者の天分を盡すに足るの素養を與へんことを期するといふにあり而して其方法とする處ろは專ら開發主義の敎育を施し智情意體の四育は勿論何等の科目を問はず凡て生徒自から硏究し動作するの能力習慣を養ひ女生の通患として漫に他人の思想動作を摸倣し單に敎師の講義說明に依賴するの弊なからしめんことを期す、殊に德育に於ては自奮自修の精神を喚起し他の命令指揮を待たずとも進んで各自の職分を盡すの良習慣を養成せしめんと欲するありと。而

して本校の組織は概畧左のごとし

日本女子大學校
- 本校
  - 本科（修業年限三ヶ年）
    - 家政學部
    - 文學部
      - 國文學部
      - 英文學部
      - 佛文學部
    - 敎育部
      - 文科
      - 理科
    - 體育部
    - 音樂部
    - 美術部
    - 理科部
  - 研究科 修業年限三ヶ年以內
- 附屬
  - 普通
    - 幼稚園
    - 小學校……全六ヶ年
    - 高等女學校……全五ヶ年
  - 專門
    - 工藝部
    - 商業部
    - ……全三ヶ年

位置及寮舎

本校は東京市小石川目白臺の欝蒼たる樹林の裡に在て地高く水清く空氣新鮮にして最も衛生に適するのみならず遠く市街の熱沓を離れ閑靜にして舊跡勝地に富み極めて勉學に適す加ふるに僅に數丁を隔てゝ目白停車塲（音羽も近設）あり通學にも亦便なりとす又本校は殊に寮生の薫陶に重きを置くが故に家族制度の寮舎を設けその構造装飾より生徒の監護訓練に至るまで凡て實際の家庭に做ひ校長敎員を校內に住居せしめ寮監と共に生徒の父母兄姉に代て監督の任に當らしめ生徒をして自奮自修の精神を以て家族同樣の共同生活を營み共に歡樂悲哀を頒ち言語動作より洒掃炊事に至るまで凡て善良なる家庭に在ると同一の良習を養はしめんと期するものゝ如し。

日本女子大學校規則

第一章　總則

第一條　目的　本校は本邦の女子に適實なる高等の學藝を授け能く日進の社會に順應して其職務を完ふするの淑女たり良妻賢母たるべき者を養成する所とす

第二條　名稱　本校は日本女子大學校と稱す

第三條　位置　本校は東京市小石川區高田豊川町に置く

第四條　附屬學校　本校に附屬高等女校附屬小學校附屬幼稚園並に簡易專門諸學校を附設す

但し初學年度には附屬高等女學校のみを附設し漸次に増設するものとす

第二章　學科科目修業年限

第五條　學科　學科を分て本科及研究科とす

第六條 學部 本科を分て家政部、文學部、教育部、體育部、美術部、音樂部、理化部とす

但し初學年度には本科の家政文學の兩學部を設置し時宜に應して他の部及研究科に及するものとす

第七條 科目家政部及文學部の科目は左の如し

第一 家政部の科目

▲必修科目 倫理及社會學、心理及教育、生理及衛生、經濟及法規、應用理化、家政及藝術、体操

▲選修科目 國文、漢文、英語、佛語、歷史、美學、哲學及哲學史、教授法、音樂、圖畫

第二 文學部を分て國文學部英文學部の二種とす

一國文學部の科目

▲必修科目 倫理及社會學、心理及教育、國文、漢文、哲學及哲學史、歷史、体操

▲選修科目 倫理、生理及衛生、應用理化、家政及藝術、英語、佛語、經濟及法規、教授法、音樂、圖畫

一英學部の科目

▲必修科目 倫理及社會學、心理及教育、英語、國文、美學、哲學及哲學史、歷史、体操

▲選修科目 佛語、生理及衛生、漢文、應用理化、家政及藝術、教授法、音樂、圖畫

第八條 修業年限 本校各學部の修業年限の拾短期を三ヶ年とし生徒の事情に依り在學計限を延長することを得但研究科の修業年限は三ヶ年以內とす

第三章 學年學期休日

第九條 學年 學年は四月一日に始り翌年三月三十一日に終る

第十條 學期 學年を分て左の三學期とす

第一學期 四月十日より七月十日に至る

第二學期 九月十一日より十二月廿四日に至る

第三學期 一月八日より三月三十一日に至る

第十一條 定期休業 は左の如し

夏季休業 七月十一日より九月十日に至る

冬季休業 十二月廿五日より一月七日に至る

春季休業 四月一日より仝月九日に至る

第十二條 定日休業 は左の如し

日曜日、秋季皇靈祭、神嘗祭、天長節、新嘗祭、孝明天皇祭、紀元節、春季皇靈祭、皇后陛下御誕辰、本校創立紀念日

第四章 學科課程授業時間

第十三條 學科課程

第一 家政部

▲倫理及社會學 （實踐倫理倫理學、實踐社會學）

▲心理及教育 （心理學、教育學、保育學、家庭教育、兒童研究、童話研究）

▲生理及衛生 （生理學、衛生學、家庭衛生、婦人衛生、社會衛生、看病學）

▲應用理化 （家庭應用理化、食品化學）

▲家政及藝術（衣、食、住、社交、女禮、家庭美術、園藝）

▲經濟及法規 （經濟學、家庭、經濟、帝國憲法、民法及諸法規）

▲体操 （普通体操、遊戲体操、教育体操、容儀体操）

第二 國文學部

▲倫理及社會學 （實踐倫理學、倫理學、實踐社會學）
▲心理及教育 （心理學、教育學、保育學、家庭教育、兒童研究、童話研究）
▲國文 （散文美文講讀、作文作歌、文典、修辭學、文學史）
▲漢文 （經書史文講讀）
▲美學 （美學一斑）
▲哲學及哲學史 （哲學總論、東西哲學史）
▲歷史 （國史）
▲体操 （普通体操、遊戲体操、敎育体操、容儀体操）

第三　英文學部

▲倫理及社會學 （實踐倫理、倫理學、實踐社會學）
▲心理及敎育 （心理學、敎育學、 體育學、 家庭敎育、 兒童研究童話研究）
▲英語 （散文美文講讀、作文、文典、修辭學、文學史）
▲國文 （講讀、文法）
▲美學 （美學一班）
▲哲學及哲學史 （哲學總論、東西哲學史）
▲歷史 （外國史）
▲体操 （普通体操、遊戲体操、敎育体操、容儀体操）

第十四條　敎授時間　敎授時間は各學部を通して必修科を二十一時間さし選修科を七時間さし都合二十八時間さす

第十五條　時間配當　各學部の時間配當は別表の如し

家政部學科課程及時間表

科目學年	授業時間	第一學年	授業時間	第二學年	授業時間	第三學年
倫理及社會學	二	實踐倫理	二	倫理學	一	實踐社會學
心理及教育	二	心理學 敎育學	二	敎育學 保育學	三	家庭敎育 兒童研究 童話研究
生理衛生	二	生理學 衛生學	二	婦人衛生 家庭衛生	二	看病學 社會衛生
應用理化	四	家庭應用理化學 食品化學	二	仝上 食品化學		
家政及藝術	八	衣食住 女禮等	八	衣、食、住 社交等	一〇	衣、食、住 家庭美術 園藝等
經濟法規			二	經濟學 家庭經濟	二	帝國憲法 民法及諸法規
體操	三	普通體操、遊戲體操 敎育體操、容儀體操	三	仝上	三	仝上
計	二		二		二	

國文學部學科課程及時間表

科目學年	授業時間	第一學年	授業時間	第二學年	授業時間	第三學年
倫理及社會學	二	實踐倫理	二	倫理學	一	實踐社會學
心理及教育	二	心理學 敎育學	四	敎育學 保育學	三	家庭敎育 兒童研究 童話研究
國文	一〇	散文美文講讀文典、作文作歌	一〇	仝上修辭學 作文作歌	二	散文美文講讀文學史作文作歌
漢文	二	經書史文講讀	二	仝上	二	仝上
美學					一	美學一斑

哲學及哲學史	一	哲學概論	一	哲學史		
歷史	一	國史	一	仝上		
體操	三	普通體操、遊戲體操 教育體操、容儀體操	三	仝上	三	仝上
計	二		二		二	

英文學部學科課程及時間表

科目學年	授業時間	第一學年	授業時間	第二學年	授業時間	第三學年
倫理及社會學	二	實踐倫理	二	倫理學	一	實踐社會學
心理及教育	二	心理學 教育學	二	教育學 保育學	三	家庭教育兒童研究 童話研究
英語	一〇	散文美文講讀作文文典	一〇	仝上 修辭學作文	三	仝上 文學史、作文
國文	二	散文美文講讀文法	二	仝上	一	仝上
美學						美學一班
哲學及哲學史	一	哲學概論及哲學史	一	哲學史		
歷史	一	西洋史	一	西洋史		
體操	三	普通体操、遊戲体操 教育体操、容儀体操	三	仝上	三	仝上
計	二		三		三	

第五章　及落　卒業

第十六條　及落、生徒の及落は各科目平常の成績により教員會議の議決を以て之を評定す

第十七條　卒業　生徒の卒業は各科目平常の成績と卒業論文とを參照し教員會議の議決を以て之を評定す

第十八條　卒業證書　本科卒業の者には本科卒業證書を授與す

第六章　入學　在學

第十九條　定期入學　定期入學は毎學年の始め一回とす

第二十條　臨時入學　生徒に缺員ある時は試驗の上臨時入學を許可すべし

第二十一條　無試驗入學　身体健全品行方正にして左の資格あるものは無試驗にて入學を許可す

一本校附屬高等女學校卒業生

一修業年限五ヶ年の官公私立高等女學校の卒業生

一本校附屬高等女學校と同等以上にして本校と特別の關係ある女學校の卒業生

但し修業年限四ヶ年以下の高等女學校卒業生は學力査定の上本校附屬高等女學校の相當級に編入し卒業の上無試驗にて入學を許可する も英語科目を課せさる高等女學校の卒業生若くは英語の學力不充分なる者は英語專修の後にあらされば英文學部に入學するを得す

第二十二條　入學試驗　入學試驗の程度は本校附屬高等女學校卒業生の學力に準す

第二十三條　入學書式(略す)

第二十四條　在學證書　入學の許可を得たる者は左の書式に從ひ在學證書を差出すへし(書式略す)

第二十五條　保證人の資格　保證人は丁年以上にして東京市内に一家を立て被保證生徒の監督をなし同人の身分に關し一切の事柄か責を負ひ得べき者たるを要す

但し郡部在住者と雖も本校の見込により保證人たることを承認すへし

第二十六條　代理保證人　保證人長く旅行する時は豫め相當の代理保證人を定め本校へ屆出へし

第二十七條　保證人の變更　保證人の死去又は轉住の節は直に第二十五條の資格を有する人を以て之に代へ改めて在學證書を差出すへし

第七章　退學　休學

第二十八條　退學の命令　品行不良なるか若くは學力不足なるか又は體質多病にして充分の訓戒奬勵を加ふるも到底成業の見込なしと認定する時は退學を命す

第二十九條　退學願　退學せんと欲するものは保證人連署して其理由を認めたる退學願書を差出し校長の許可を得へし

第三十條　休學願　生徒の疾病其他止を得さる事故の爲め三ケ月以上修學し能はすと認むる時は豫め其許可を得て一學年以内の休學をなすことを得

第三十一條　休學解除　休學期限内と雖も休學の事故止む時は休學を解除し原級に復せしむ

第八章　特待生

第三十二條　特待生　本校本科第二年級以上の正科生にして品行善良なるか又は學力優等なる者は前學年の成績に依り教員會議の議を經て特待生となし次學年度の授業料を免除することあるへし

第九章　選科生

第三十三條　入學　各學部の一科目又は數科目を選修せんと欲する者あるときは教授上に差支なき場合に限り選科生として入學を許可す

第三十四條　入學の資格　選科生は年齡十七年以上にして選ぶ所の科目の學力を査定し該科目を修むるに堪ふると認めたる者に限り之を許す

但し第二十一條の無試驗入學を有する者は此制にあらす

第三十五條　證明書　選科生にして所選科目を正當に學習したる者には望により證明書を授與すへし

第三十六條　諸規則　特に選科生の爲に設定せるものは勿論其他本校の諸規則は之を選科生にも適用するものとす

第三十七條　入學願　選科生として入學せんと欲するものは左の書式に從ひ入學願書を差出すへし(書式略す)

第十章　科外講演

第三十八條　目的　科外講演は正科學習の參考補缺に供せんが爲に開設するものとす

第三十九條　回數　科外講演は毎月數回臨時に之を開設する者とす

第四十條　講師　專門の大家を聘して科外講師に囑托するのみならす臨時諸名家の出演を乞ふことあるへし

第四十一條　聽講者　本校の生徒たると校外者たるとを問はす凡て科外講演に出席せんと欲する有志者を以て聽講者とす

第四十二條　聽講料　聽講者たらんと欲する者は聽講料を前納せしむることあるへし

但聽講料は講演の長短に依て規定すへし

第四十三條　聽講券　聽講者は必す聽講券を携帶すへきものとす

第十一章　學費

第四十四條　受驗料　入學志願者は左の規定に從ひ受驗料を入學願書に添へて納むへし

但既納受驗料は何等の事情あるも返附せす

一定期受驗入學者　金一圓
一臨時受驗入學者　金一圓五十錢

第四十五條　入學料　入學の許可を得たる者は入學料金貳圓を在學證書に添へて納むべし

第四十六條　授業料　授業料は壹學年金貳十七圓五十錢とし一ヶ月金貳圓五十錢の割合にて毎學期の初め五日以内に分納すべし

但事情に依り毎月初めに分納することを許可することあるべし

第四十七條　校費　校費は壹ヶ月金五十錢の割合にて毎學期の初めに前納すへし

第四十八條　樂器演習をなす者は所定の使用料を納むべし

◉生徒の心得

本校の生徒たる者の本領は自己の品性智能を啓發するに在ることを明白に悟り善學の二字を念々忘るゝことなく常に左の條々を恪守實踐すべきなり

一教育　勅語の聖旨を奉體すべきは勿論固く本校教育の趣旨を服膺し校規を遵守し師友を敬愛し自ら治め自ら制して遊逸華奢に陷らす己を重んし人を尊び溫順恭謙にして學に誇らず信義禮節を守て輕浮に流れす志操を鞏固にし氣品を高潔にし以て貞淑の美德を涵養せんことを務むべし

一學を修め藝を習ふには勉めて自ら觀察研究し自ら思考判斷するの習慣を養ひ女生徒の通患として只管教師の說明と著者の意見とのみに依賴するの弊に陷ることなく博識多能ならんよりは寧ろ事物の眞相關係を辨知し藝術の原則妙理を會得するの知力を開發錬磨し他日卒業の後と雖も萬般の事物に接して永く效力を有し應用自在ならんことを期すべし

一一家の主婦たる重任を負へる女子にして羸弱多病なる時は一身一家の不幸は云ふも更なり餘累を子孫に遺し社會を害毒するの恐あれば各自の體質に應して適宜の運動體操をなし衣服飲食より讀書睡眠に至るまで凡て衛生の道を守り身體の强健ならんことを務むへし

雜報

◉福澤翁の遠逝

明治年代の偉人にして曠世の活儒たる福澤諭吉翁は去二月三日午後十時を以て遂に遠逝せられたり。是れ實に日本國民一般の悼惜し措く能はざる所なるべし。翁や夙に西洋文明の新主義を唱導し、學校を開きて學生を教養陶冶し、著書新聞を以て社會の人心を誘導啓發し以て明治年間文化の一半を開進化育せられたり。其の間始終一貫奉持せられたるは獨立自尊の主義にして、翁は啻に之を口にするのみならず又自ら實踐躬行して家を脩め、世に處したれば其人品の高尙と家庭の清潔とは世の均しく景慕する所たり。其日本婦人論及日本男子論は翁が從來日本の家庭及び其の男女夫婦の關係に就て根底より切論されたるものにて古來會社組織の上より殆んど度外視されたる日本婦人の爲めに深厚なる同情を表し切實なる辯護を加へて其の權利を認識し日本婦人をして社會上の地位を保たしめたる其の功績に對しては日本の婦女子たるもの宜しく感銘す

べきの事なりとす、翁が去三十一年腦溢血の大患に罹らるゝや畏くも天皇、皇后兩陛下並びに皇太子殿下は御見舞を賜はり、又昨年五月東宮御慶事あるや、我が皇室は翁が多年の功勞を嘉稱せられて金五萬圓を下賜せられ尋で本年一月二十五日大患再發せるや又兩陛下兩殿下の御慰問を辱ふせられたり。されども天命如何ともすべからず、遂に二月三日を以て溘焉遠逝せられたり、享年六十八歳、大觀院獨立自尊居士と戒名す葬式の日追送の人萬を以て數へ、途上送觀の士女堵のごとし、翁の畧傳左のごとし。

翁の父は豐前中津藩の士百助翁にして母は同藩士橋本氏の長女順子、同胞五人にして翁は其季子なり、天保五年十二月十一日を以て大阪堂島中津藩の倉屋敷に生る、三歳の時、父歿したれば母氏に從ひ郷里中津に歸り十四ヵ歳にして漢書を郷里の學者白石政人に學び安政元年二十一歳にして長崎に赴き荷蘭通詞某に就て蘭書の讀法を受け翌二年更に大阪に出でて緒方洪庵翁の塾に入る三年九月長兄歿し翁歸藩して生家を繼ぐ同年十一月再び大阪に出でゝ緒方の塾に學び是より專心蘭書を研究す安政九年十月二十五歳にして初めて江戸に來り鐵砲洲中津藩の中屋敷に塾舍を設け藩の子弟を教授し兼れて自ら英書を修む、是を慶應義塾の基とす、萬延元年正月幕府の軍艦咸臨丸に搭じて亞米利加に赴き、五月浦賀に歸着す、幾許もなくして幕府の外國方飜譯掛となる、文久元年春幕府又使節を歐洲各國に派遣するの事あり翁其職を以て一行に加はり、佛、英、荷、普、露、葡等の諸國を巡歷して日新文明の盛況を實見し同四年冬歸着す慶應三年後亞米利加に行く同年冬塾を鐵砲洲より新錢座に移し、塾舍を新築して初めて慶應義塾と稱す、明治十五年に至りて時事新報を創立す、翁は生來藩の吏事に與らず幕府に入りて横文飜譯を司りたれども絶へて政務に關せしとなし平常著譯する處の書前後合して五十部、百五冊大抵福澤全集の中に收む明治三十一年九月二十六日俄然腦出血症を發し程なく癒へたれども身體稍々舊の如くならず三十四年一月二十五日再び同症に罹り治療の甲斐なく越へて二月三日終に死去す夫人名を錦子といひ同藩士土岐氏の三女、四男五女を生む。

●伊藤圭介翁の逝去

近代に於ける我國博物學者の鼻祖ともいふべき伊藤圭介翁は今や九十九歳の高齡を以て遂に世を去れり。翁や夙に植物學を修めて我國學者の最も卓絶せる中に數へらるゝのみならず、鎖國の舊時代に在りてすら既に其の名を海外に馳せ世界の科學社會に識らるゝに至り明治の新時代に入りても仙鶴の齡を以て其の嗜好を改めず、研鑽大に斯界に貢獻する處ありしが如き邦人の最も誇稱し、尊珍する處ろなりしなり、翁は享和三年正月二十七日尾張國名古屋呉服町に生る、父西山玄道氏は醫を以て業とし、傍ら本草を學びしが、翁も又父に從ひて儒學を修め醫術を習ふの傍ら本草を學び又藩の藥

園看守にして植物金石の學に精通せる水谷助六に就て研究し先輩同好の士と近國の山野を遍歴して珍奇の草木鑛物を採拾し、文政四年京都に赴きて藤林泰助の門に蘭學を修め、又日本新文明の啓發に大功ある蘭人シーボルトが文政九年時の將軍に謁せんとして長崎より江戸に上るや翁は熱田驛に於てシーボルトに會せり、此時翁の年齢僅かに二十四、而かも其の造詣既に深かりしとはシーボルト後日の著書中に之を記したるにても知るべし。次で翁は長崎に赴きシーボルトの植物園に於て刻苦研究をなせり當時有名なる蘭學者高野長英亦シーボルトの塾に在りて學生中に傑出せりと。長崎に遊ぶと半歳にしてシーボルトの果園を辭し、九州及山陽道を經て行く〳〵植物を採集して名古屋に歸れり、翁の足跡既に國中重要の部分に遍く、重要の植物略々集め盡したり、

以上は翁が壯年學習時代に於ける經歴の一斑にして其後藩の蘭學敎授となり、奥醫師となり、天保八年の飢饉に際し草木八十種の品目と調理法を略記し「救荒食物便覽」と題して印刷し普く諸方に配布し次で海警の連りに至るや自から三百目加農砲を鑄造して藩侯に献じたるとあり、又文久三年虎剌病流行に際して「暴瀉病手當素人心得書」を編述して世上に頒布せり寔に翁の生涯は純粹なる學者の生涯なり故に維新の大波瀾も幸にして翁の身邊に大なる影響を及ぼさざりしなり。明治三年新政府に召されて大學出仕を命ぜられ斯くて翁は古稀の老齢を以て文部省出仕となり、博物專務大學理學部員外部敎授となり轉じて小石川植物園擔任となり、十四年東京大學敎授となり、又博覽會の審査官に任ぜられ、二十一年學位制發布と共に理學博士を授けられたり。著す所、日本產物志十一冊、日本植物圖說、小石川植物園草木目錄五冊、其他隨時の小品文頗る多し。

●英女皇の御臨終

あゝ七十年の間、大英國、愛蘭、印度、加奈陀、濠洲を統治し玉ひて、君德四海に洽き英國ヴヰクトリヤ大女皇には去る一月廿二日午後六時四十五分を以て崩御あらせられぬ

今や將に幽明界を異にせられんとする悲境に近づきぬ、王位繼續者たるウエールス親王の御來着何ぞ遲き、御最愛の皇太孫ヨーク公は如何にせし、遙々呼び寄せられたる御孫の獨帝はまだ倫敦に着し玉はざるか、侍醫

等は崩去の當日、獨逸皇帝を倫敦に出迎へられたる皇太子及ヨーク、コンノート二公の御着到までは、いかにもして女皇御臨終の期を延ばさばやと、三鞭、ブランチーなどを用ひて、衰餘の神經を刺激し、僅かに其知覺を維持したり、此時此際御側に侍りし人々の心中には、一刻も實に千秋の想ありしなるべし、

暫くして皇室廻遊船アルベルトの船躰は、遙にソーレントの海面に現はれぬ、船はポーツマウスより皇太子の一行及び獨逸皇帝を搭載し、全速力もて進行し來れるなり、午前十一時二十分離宮下の埠頭に着するや、岸上迎ふる者堵の如く、衆眼均しく獨帝に注ぐ、哀れ獨逸帝國の大元首にして、歐洲の中原に覇權を振はんとし玉ふウ井ルヘルム二世陛下も、今日は祖母の臨終を見屆けん爲め一個の孫の資格を以て來り給へるなり、御容裝は何等の威儀なく黑地のフロックコートに黑無地のズボン、中山帽の御出立にて全く一個の市人なりし、既にして一行上陸馬車にて離宮に向ふ、沿道觀者肅然として只だ帽を脱し默禮するのみ、一行の離宮に入るや、女皇は尚ほ僅に御知覺あり、侍臣低聲に獨帝の來着を言上せしに、女皇には俄かに御元氣を回復し玉ひ、手眞似もて帝を見んとの意を示めされぬ、是に於て獨逸皇帝は靜々と御病室に入り、女皇の御枕邊に立たせ給へり、此瞬間歐洲大陸の盟主なし、北歐の覇王なし、只だ哀別離苦の感慨に撃たれたる一個のウ井ルヘルムあるのみ、女皇は最も微かに何事をか語り玉ひしが、流石に雄々しき帝も、胸塞がり口乾き、一言を發するに由なく、伯林出發の砌り太后(女皇の長女)の御別辭を委托せられしも、是さへ女皇に告げ參らす能はず、只だ愁然として少時女皇の龍顏を瞠め居玉ふのみ、畢竟聲なきは聲あるに勝る、帝は終に默せしまゝ御病蓐を辭し去り玉へり、午後六時卅分といふに、女皇は最愛の兒孫に圍繞せられ、眠るが如く崩れ玉ふ、此日朝來雲暗澹として風荒く、滿島の風物凄凉たりしが、夕方には雲散り風なぎて、蒼穹宛かも拭ふが如くなりし。

●和蘭女皇の御婚儀

和蘭國女皇ウイルヘルミ陛下には、去月七日を以て獨逸聯邦メクレンブルグのヘンリ殿下と御婚儀遊ばさるゝ筈なり、右に付き本邦在留同國人は、此大婚奉祝の紀念となるべき物品を献納せんと、委員を設けて協議の末、宮内省御用達にして、明治十七年當時の本邦駐劄同國公使デルボット氏の命に依り、陛下の玩具數十種を

調進せし緣故ある下谷區池の端仲町玉寶堂飯塚伊兵衞をして、一對の花瓶を製作せしむるとに決し、出來次第遞送する筈なるが、此花瓶は玉寶堂主の新意匠に成れる純銀ノ打出しにして、其表裏兩面には和蘭人の尊崇する婚姻の神の像を始め、數多の花類を金剛石ルビー眞珠ヒ一金等の象眼入にて彫刻し、又白金にて和蘭國より我國に至る航路を示し、其兩極端に日蘭兩國を金剛石にて盛上げ、種々の意匠を以て兩國和親の敦厚なると、和蘭皇室の繁榮我皇室の如くならんを祈るの意を表せしが如きは、最も意匠の妙を盡せし處にして、外に委員は女皇へ獻納せん爲め、同堂をして我上中下三流の婚儀用器具雛形及び女性の服裝幷頭髮裝飾品たる帶止、簪、笄、箱セコ其他一切に和蘭國の玉章を附せしものを調製せしめつゝある由、因みに記す陛下は來年二十二歳にして皇配たるヘンリー殿下は二十六歳なりと

◉女子大學の入學志願者

來る四月より開始する日本女子大學校は近來學生募集の公告をなせるに、入學志願者は頗る多く、去月九日までの申込數は國文學科は十二名、家政學科は六十名にして、孰れも募集豫定額（五十名）に超過するに至り、尙ほ續々增加の見込あるを以て當局者は已むを得ず無試驗入學資格あるものゝ外、競爭試驗に附するの外なかるべしなど、評議し居れり、但し英文學科のみは、割合に志望者少なく今尙ほ三十餘名に過ぎず、申込期限迄に漸く滿員に達する位ならんか、是れ割合に學科の高尙なるが故なれば或は該科入學志望者の爲め特に一二年位の豫備科を設くるの議もありと、因みに記す附屬高等女學校の方は今尙ほ志願者漸く豫定（三百名）の半數を超えたる位なりと云ふ

◉女子職業學校の榮譽

神田一つ橋なる共立女子職業學校にては舊臘北條侍從が畏き邊りの仰せを奉じて臨校せられ、生徒の製作品を叡覽に供し奉るべき旨傳へられたるに依り、去月十二日刺繡、裁縫、造花、押畵等各科の製品百四十五點を侍從職まで差出したる內、四十五點だけ御留置に相成りたりと承る、洵に同校の榮譽此上なきことゝいふべし

◉二大學校の設置案

過般來風聞ありし九州及東北に各大學校を設置すべし

どの案は目下文部省より大藏省に廻送して之れが經費に關して交渉中なるが同經費は今後十箇年の繼續費となし合計約四萬圓の中百萬圓は其關係地方の寄附金に依るとの計算にて結局國庫より支出すべき金額は十箇年間に約三百萬圓に過ぎず大藏省にても何とか支出の方法を講ぜんとて概畧其の取調も整備したる由なれば不日閣議に上るならんと云ふ

●上野東照宮の献畫式

狩野住吉兩派の畫家山名貫義在原重壽の兩氏發起となり舊時德川家御繪所の例に倣ひ毎年一月上野東照宮神殿へ献畫する事に同派中申合せ廿五名の畫家は繪本に揮毫の上去月三日午後一時上野東照宮社務所に打揃ひ舊家筋なる狩野忠信氏初め順次神前に奉献して拜禮の後一同神酒を戴き此式を了し夫より社務所に集まりて協議し爾來年々二月の初日曜を以て献畫の事を行ふに決定し歸途住吉派の畫家十三名は上野の護國院なる住吉如慶始め歷代の墓碑に參詣して散會したる由尙ほ献畫の人名等左の如くなり

東梔	松原佐久	宗于	高取熊太
枯木鳩	狩野忠信	松に鷹	狩野友信
山水	荒木探令	高砂	吉屋靜國
梅に鶯	高田耕告	梅に鳩	狩野探岳
松に旭	山名貫義	梅に旭	在原重壽
催馬樂	大坪正義	松に鶴	山本壽和
月下吹笛	樋口氏實	俊成郷意	岡崎義春
寒鳥	津端道彦	壽老人	松平玉眞女
諫皷鳥	狩野壽子	翁	伊東古仙
梅	用瀬淸子	瀧	平林探溟
人物	三井古溪	勿來の關	花田義方
梅竹	竹内勝每	旭波	前田貫槃
牛	陶山種文		

新刊寄書

衛生唱歌(三島通良著)	東京	集笑堂
女鑑(第二百廿二號)	仝	國光社
家庭(第二號)	京都	佛教婦人會
女子の友(第八十三號)	東京	東洋社
をんな(第一號)	仝	大日本女學會
女學講義(第十六號)	仝	同社
九重の筆(皇太后殿下の御聖德)	仝	博報堂
國文學(第二十六號)	仝	國文學雜誌社
彰善會誌(第三十五號)	仝	彰善會

四號豫告

「論說」には、三輪田眞佐子女史の斬新有益なる女子敎育談を掲載し、「講義」は、鹽井、大町、久保三文學士の講義の續稿を載せ、「傳記」には鹽井雨子の和氣の廣虫、中内蝶二の佛蘭西革命時代の女傑、依田學海先生の筆に成れる本朝名媛の評傳、「地理」には、喜田文學士の簡明平易にして趣味多き名所古蹟談の續篇「學術」には、藤堂氏の柳と櫻、岡田みつ子の理化に關する談話、後閑菊野女史の斬新なる家政上の意見等最も見るべく「家庭」には棚橋絢子の家庭敎育談、其他衛生裁縫料理等に關する有益なる事項、「技藝」には、本號の續稿の外に洋畫指南を新載すべく、「小說」には、學海居士の菜摘川の續篇にして、趣味津々たる好文字なり、「雑錄」には、奥村五百子刀自の韓國婦人敎育談、石澤文學士の英國女皇、三宅花圃の夜半の埋火等、其外各欄に於ては、有益且つ趣味ある好材料を竭む、讀者乞ふ次編を待て、

毎月一回五日發行

價定表

		郵稅
一册（紙數二百八頁）	金二十錢	
四册（三ヶ月分）	前金七十五錢	
八册（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢	一册
十六册（一ヶ年分）	前金二圓八十錢	二錢

内 定刊數……十二册 増刊四回…三、六、九、十一月價格同一

廣告料

	二十四字詰一行	半頁卌二行	一頁六十四行
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十三錢	十三圓七十六錢	割引二十七圓
二等	三十五錢	十一圓二十錢	割引二十二圓
三等	三十錢	九圓六十錢	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
●總目錄御入用の方は二錢劵相添へ申込あれ。

明治三十四年三月五日發行 第一卷第三號

編輯人 松原岩五郎
發行人 大橋新太郎
印刷人 石川金太郎
印刷所 株式會社秀英舍 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

電話本局 三百三番 千十八番 二千六百二十番

少年讀本

文學大家執筆

既刊目次

1 再版 高島秋帆 福地櫻痴君著 (年方畫)
2 白河樂翁公 中邨秋香君著 (永洗畫)
3 河井繼之助 戸川殘花君著 (半古畫)
4 三條實美公 依田學海君著 (蔚谷畫)
5 曲亭馬琴 饗庭篁村君著 (觀山畫)
6 井伊掃部頭 巖谷小波君著 (沖斎畫)
7 山田長政 遲塚麗水君著 (春汀畫)
8 錢屋五兵衞 桐生悠々君著 (永洗畫)
9 春日局 [illegible]君著 (春汀畫)
10 水戸烈公 野口[illegible]君著 (大觀畫)
11 桐野利秋 春山鐵峰君著 (一泉堂畫)
12 藤田東湖 大和田健樹君著 (不折畫)
13 伊能忠敬 幸田露伴君著 (永洗畫)
14 新井白石 武島羽衣君著 (敬中畫)
15 水野越州 中村桂軒君著 (永興畫)
16 池大雅 田山花袋君著 (觀山畫)
17 木内宗吾 松原廿三階堂君著 (春汀畫)
18 西鄕隆盛 川崎紫山君著 (年方畫)
19 阪本龍馬 坂崎紫瀾君著 (年方畫)
20 横井小楠 大野洒竹君著 (不折畫)
21 貝原益軒 石原笠堂君著 (春汀畫)
22 渡邊華山 渡邊霞亭君著 (年峰畫)
23 中濱萬次郎 石井研堂君著 (耕漢畫)
24 近衞忠凞公 勢多章之君著 (不折畫)
25 間宮倫宗 文學士 笹川臨風君著 (古洞畫)
26 周布政之助 堺枯川君著 (松亭畫)
27 荻生徂徠 内田魯庵君著 (華舟畫)
28 松平伊豆 森山吐虹君著 (華邨畫)
29 中江藤樹 國府犀東君著 (古洞畫)
30 島津齊彬 春山鶴峰君著 (弘光畫)
31 高野長英 干河岸貫一君著 (古洞畫)

全部五十册
每月一回發行

洋裝菊判美本
有名畫伯插繪

正價
●一册金拾參錢●六册金七拾錢●拾貳册金壹圓卅錢●廿四册金貳圓五拾錢●郵稅壹册四錢

發兌元 博文館

(戊の一)

婦女必要

☞博文館發行圖書數萬卷此中に就て女子諸君の必讀を要する者最も多し今其一端を摘載して江湖賢媛諸彥に告ぐ請ふ多少に關せず御愛購あらんことを

著者	書名	正價	郵稅
醫學士三島通良君著	學校衛生學	正價金七拾五錢	郵稅金八錢
下田歌子女史著	家政學	正價金六拾錢	郵稅金拾貳錢
下田歌子女史著	家事要訣	正價金三拾五錢	郵稅金六錢
下田歌子女史著	婦女家庭訓	正價金三拾五錢	郵稅金六錢
下田歌子女史著	母親の心得	正價金三拾五錢	郵稅金六錢
醫學士三島通良君著	はゝのつとめ	正價金七拾五錢	郵稅金拾錢
寒澤振作君著	家政の栞	正價金貳拾錢	郵稅金六錢
岸上操君著	家政案內	正價金貳拾錢	郵稅金六錢
坪谷善四郎君著	家政整理法	正價金拾五錢	郵稅金六錢
三浦智之君著	實用家事經濟學	正價金貳拾錢	郵稅金四錢
石井治兵衛君著	日本料理法大全	正價金貳圓	目方四百匁
藤本藤蔭君著	實用料理法	正價金貳拾錢	郵稅金六錢
下田歌子女史著	料理手引草	正價金三拾五錢	郵稅金六錢

(其の二)

華族女學校學監正五位下田歌子女史述

九版

家政學

全二冊洋裝美本　正價金六拾錢　郵稅拾二錢

目次

◎緒言◎家事經濟◎衣服○衣服の撰定附布帛の名稱○衣服の取扱○禮式服裝○裁縫と編物○機織○紡績○養蠶◎飲食○食品の撰定○飲料の撰定◎本邦料理◎飯の炊法○麵類の製法○煮炙の法○鮓の製法○漬物の製法○味噌の製法◎西洋料理○肉羹汁、醬液の製法○煮炙の法○食物貯藏法○料理總則◎住居○住居の規定○住居の構造○住居の掃除○室内の裝飾○移轉○火災盜難○風災水害及び震災○家具什器○器物書類の保存及び取扱ひ○器具、書類の賃借◎禮法○一般の禮○賓客に對する禮○賓主の禮及び吉凶◎裝飾◎音翰◎贈品◎看病法◎婢僕の使役

家政は女子必須の學術なり、而して未だ嘗て好書のあるなし、吾儕常に以て遺憾とす、下田先生多年華族女學校の學監として家政學の教授を主る、今や本書を著はし、凡そ家政に關する事物細大洩らすことなく、倘ほ數多の挿畵を加へて其理解を助けしむ、本書は實に師範學校、高等女學校等家事科の教科書として無双の好書ならん、弊館幸に之れが發兌の榮を得たり、世の教育に從事する士女は速に一讀せずむばあらず、

三浦智之君著

實用家事經濟學

附　家内心得隨筆

全壹册　洋裝袖珍　正價金廿錢　郵稅四錢

●一家經濟學の學問上に於ける地位●一家經濟學の定義●物件と働力との關係●一家經濟上戶主の地位并夫妻の關係●收入●收入の種類●支出●支出の種類●收支に關する餘論●收入に關す〻法則●豫備金の必要●貯金の方法●一家の豫算并に收支に關する始期終期●收支に關する帳簿●土地●家屋●衣服●飲食物●器具器械●廢物利用●起業論●一家に要する帳簿●保險の必要●物價豫知論●一家經濟上須要の書籍其他の事項●一家經濟上家人の守るべき諸德●交際の程度を論ず（附記）●郵便稅●郵便爲替料●電信料●電信符號●爲替取扱休業日●萬國郵便料●小包郵便料●地租●所得稅●炊飯の事●赤飯の事●麥飯の事●味噌の製●酒は命の敵なり白樂天の詩●烟草は身の敵なり●傳染病●三府に於ける三市の人口●五港に於ける人口●賢人の遺華●茶の事●烟草の事●衛生節儉に關する古人の金言●五官の事●兩便の事●人躰の温度●滋養原質とは何ぞや●小兒病の種類

坪谷善四郎君著

家政整理法

全壹册　定價金拾五錢　郵稅六錢

家政整理の任は家の大小と人の貧富に論なく主婦たる者の最とも大切なる務なり金錢の出納を愼しまざれば生計の出入相償はず况して餘裕を貯蓄し益々家運の繁榮を望むを得べからず家内の取締り正しからざれば内には一家の和順を缺き風儀紊れて幸福を減殺し外には世間の交際に當を得ずして公衆の擯斥を免かれず之を要するに成るべく少なき經費を以て成るべく多くの幸福を求め一家の規律を嚴かにして恩威並び施こし内外の幸福を進むるを家政整理の主眼とす本書の之を說くと最とも親切なり

博文館發兌

（戊の四）

婦女必讀

再版

明治才媛美譚

全壹冊

洋装總クロース金字入
美本紙數六百頁畫入
正價金五拾錢
郵税八錢

明治才媛美譚は、猶ほ百花園の如し、清痩梅の如きもの、艶麗櫻の如きもの、濃麗牡丹の如きもの、嬌紅海棠の如きもの、芳姿芙蓉の如きもの、幽香菊花の如きもの、皆收めて卷中に在り。然れども本書の取る所は、姿色にあらずして、徳操に在り。妙齢の令嬢にして、父母に孝なる、兄弟に友なる、朋友に信なる、婢僕に慈なる、而して才學の卓絶、智識の俊邁なる、尚くも婦女の龜鑑たるに足るべきものを擇びて之を取る、女子は必ず讀まざるべからず、女子を有し女子を教育するものは必ず讀まざるべからず、家庭の讀本蓋し之れより善きは無けん。

華族女學校學監下田歌子女史題詠
三輪田眞佐子女史序文中島徳一君著
《訂正三版》

新撰小學校禮式

全壹冊洋装
正價廿五錢
郵税六錢

世の開明に進み時の文化に伴ふて淑女、令風改善の域に進まざる可らず、今や中島氏本書を著はして婦女家庭の要缺たる禮式を新選し洽く女教の軌範を網羅せり、且つ文章平易流暢にして幼兒と雖も能く讀了せられ、挿畫又た本文を補ふて周密詳密なれば、貴姫令嬢は素より家庭には缺くべからざる讀書なり。

本書要目

○家庭の敎　○女禮式　○立禮作法
○應禮作法　○進退作法　○諸品取扱樣
○婚姻の部　○新撰禮式　○新舊結物
○新舊包物折方
○水引結びよう俯向の圖

讀賣新聞記者鈴木光次郎君編

第六版

明治閨秀美譚

全壹冊袖珍　正價金拾貳錢　郵税四錢

浸潤膚受の力は實に驚く可きものありて存す。古來哲人傑士の、其母より受くる感化の大なるは、史傳之を示して炳焉たり。婦人は實に社會の潛勢力、賢母良妻の家に裨補する所誠に測る可らざるものなり。本書は明治閨秀の言行實録にして、實に社會の龜鑑たり。

博文館發兌

（戊の五）

俳諧文庫

▲第壹編……芭蕉全集……永機、露人校
▲第貳參編……芭蕉以前俳諧集……洒竹校
▲第四編……其角全集……永機、露人校
▲第五編……許六全集……洒竹校
▲第六編……也有全集……知十校
▲第七編……嵐雪全集……雀志校
▲第八編……支考全集……永機、雀志校
▲第九編……蕉門十哲集……鳴雪校
▲第拾編……元祿名家句集……洒竹校
▲第拾壹編……一茶大江丸全集……知十校

第廿三編
俳諧類題句集 後編
尾崎紅葉君校訂（三月上旬發行）
全壹冊洋裝菊判寫眞入　正價廿五錢
紙數三百廿餘頁（口繪入）　郵稅六錢

▲第拾貳編……蕪村曉臺全集……洒竹校
▲第拾參編……俳諧論集……小波校
▲第拾四編……素堂鬼貫全集……洒竹校
▲第拾五編……續俳諧論集……小波校
▲第拾六編……俳諧句合全集……竹冷校
▲第拾七編……蓼太全集……[illegible]、雀志校
▲第拾八編……俳諧珍本集……野洒竹校
▲第拾九編……俳諧文集……小波校
▲第廿編……俳諧逸話全集……四丁校
▲第廿一編……付合作法全集……松宇校
▲第廿二編……俳諧類題句集（上）……紅葉校

定價（前金）
◎壹冊金貳拾五錢◎
六冊金壹圓參拾五錢
◎郵稅壹冊に付八錢

是れ斯道新派の大家尾崎紅葉先生の校正せられたる處のもの、先生が新警なる詩眼は巧みなる古今の名句を選集して金聲玉振あり、實に是れ俳諧初學者の好指南車なり、且つ例に依て口繪として芭蕉立圃嵐雪風兆貞室去來其角等の眞蹟を寫眞銅版として挿入したれば錦上更らに花を添ふ

體裁（菊判）
洋製美本◎石版彩色表紙◎紙數壹冊三百餘頁◎寫眞銅版口繪入

全部廿四冊　每月壹回發行

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（皮 六）

博文館發行全書類最近出版表

全書名	新編書目	装釘	正價	郵税
帝國百科全書	56 無機化學	全壹冊 洋裝	上製五拾錢 並製三拾五錢	拾錢 八錢
通俗百科全書	20 通俗動物學	全壹冊 洋裝	三拾錢	八錢
日用百科全書	50 諸藝指南	全壹冊 洋裝	二拾錢	六錢
少年讀本	32 林子平	全壹冊 洋裝	拾三錢	四錢
世界歷史譚	21 シエクスピーア	全壹冊 洋裝	拾三錢	四錢
世界お伽噺	23 狐の裁判(下)	全壹冊 洋裝	七錢	貳錢
讀帝國文庫	31 常山紀談	全冊 洋裝背皮	六拾錢	拾六錢
俳諧文庫	24 俳諧紀行文集	全壹冊 洋裝	貳拾五錢	八錢
圍碁全書	3 圍碁定石	全壹冊 洋裝	拾五錢	四錢
警察監獄全書	2 司法警察手續法	全壹冊 洋裝	上製九拾五錢 並製四拾錢	拾錢 八錢
理科十二ヶ月	3 花の錦	全壹冊 洋裝	拾錢	貳錢
家庭文庫	50 家庭教育	全壹冊 洋裝	三拾五錢	六錢

(貳の七)

博文館發行全書類定價表

注文規定

●御注文ハ一切前金ノ規定ニ付必ズ御送金ノ𛀁の前金相切レタルトキハ直チニ送本ヲ止ム
●郵便爲替ハ「東京郵便本局渡リ」ニテ御拂込ノ𛀁」
●郵劵代用ハ一割增

書名	全部冊數	壹冊紙數	壹冊定價	六冊代金	拾二冊前金	壹冊郵税	發行回數
帝國百科全書	壹百冊洋裝	菊判三百二十頁	(並)廿五錢 (上)五拾錢	貳圓八拾錢	三圓八拾錢 五圓四拾錢	拾錢 八錢	每月貳回
通俗百科全書	五拾冊洋裝	菊判三百二十頁	(十九編迄)廿五錢 (二十編以下)卅錢	壹圓四拾錢 壹圓七十錢	貳圓七拾錢 三圓三拾錢	八錢	每月壹回
日用百科全書	五拾冊洋裝	菊判貳百五十頁	貳拾錢	壹圓拾錢	貳圓十五錢	六錢	每月壹回
少年讀本	五拾冊洋裝	菊判百三拾頁	拾參錢	七拾錢	壹圓三拾錢	四錢	每月壹回
世界歴史譚	廿四冊洋裝	菊判百三十頁	拾參錢	七拾錢	壹圓三拾錢	四錢	每月壹回
世界お伽噺	廿四冊洋裝	菊判八十頁	七錢	四拾錢	七拾八錢	二錢	每月壹回
世界冒險譚	廿四冊洋裝	四六判二百四十頁	參拾錢	壹圓七拾錢	三圓三拾五錢	六錢	每月壹回
續帝國文庫	五拾冊洋裝	四六判壹千六頁	六拾錢	參圓五拾錢	六圓九拾錢	拾六錢	每月壹回
俳諧文庫	廿四冊洋裝	菊判三百二十頁	廿五錢	壹圓四拾五錢	貳圓六拾錢	八錢	每月壹回
圍碁全書	六冊洋裝	四六判八十頁	拾五錢	八十七錢		四錢	隔月壹回
幼年讀本	廿四冊洋裝	菊判百四十頁	拾五錢	八十五錢	壹圓六拾錢	四錢	每月壹回
理科十二ヶ月	十二冊洋裝	菊判八十余頁	拾錢	五拾五錢	壹圓拾錢	四錢	每月壹回
警察監獄全書	六冊洋裝	菊判三百余頁	(並)四拾錢 (上)五拾五錢	貳圓貳拾錢 三圓三拾錢		八錢 拾錢	每月壹回

(戊の八)

兒童諸君の好友

日本全國
兒童遊戲法

我邦の兒童が遊戲を爲すは其方法多種ありて全國略ぼ其方法を同ふすれども尚ほ各地に特殊の遊戲行はれつゝあるもの少なからず、今全國古來の兒童の遊戲を大集して三冊に纏め尚便利の爲め數多の圖畫を挿入して容易に其戲法を了解せしむるなり、少年少女の體育を盛ならしめざるべからざる今日一本を求めて全國兒童の遊戲を實驗あれば妙なるべし。

大田才次郎君編

全國兒童遊戲法

（全部製本既成）



上卷 東京 京都 大阪 三都遊戲

中卷 東海道 東山道 地方遊戲

下卷 五畿内 山陽道 南海道 北海道 山陰道 北陸道 西海道（以上各道遊戲）

全部三冊
洋裝菊判
正價一冊
金五拾錢
郵稅四錢



發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（定價金貳拾錢）

No. 3

（東京株式會社秀英舍印刷）